

# 豊 後 府 内 19

中世大友府内町跡第 96・99 次調査区

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(10)

2 0 1 5

大分県教育庁埋蔵文化財センター







中世大友府内町跡第 96 次調査（東から）



## 序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部大分土木事務所の依頼を受けて実施した高架側道建設工事に伴う中世大友府内町跡第96次・99次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市は、戦国時代には「府内」と呼ばれ、アジアはもとよりヨーロッパまで知られた国際貿易都市でした。また、キリスト教関係の施設も建設され、キリスト教布教の拠点としての役割も担っていました。

今回の調査区は、大友館東側の御所小路町・上市町周辺と府内町西端のダイウス堂推定地です。中国・朝鮮・東南アジアからもたらされた陶磁器を含む多数の遺物とともに、道路跡、井戸跡、建物跡、土坑などを確認し、中世府内町に関する新たな知見を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、学術資料として広く活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至る間に多大なご支援とご協力をいただいた関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成27年3月27日

大分県教育庁埋蔵文化財センター  
所 長 松 村 洋 一

# 例 言

- 1 本書は、平成 24 年度に実施した中世大友府内町跡第 96 次調査（大分市錦町）及び中世大友府内町跡第 99 次調査（大分市顕徳町）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は高架側道錦町線・高架側道顕徳町線の建設に伴い、大分県土木建築部大分土木事務所の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施した。
- 3 中世大友府内町跡第 96 次調査は(株)パスコに、中世大友府内町跡第 99 次調査は(株)島田組に各々発掘調査の支援委託を行った。
- 4 報告書作成に伴う諸作業については、大分県教育庁埋蔵文化財センター職員が担当したほか、(株)九州文化財総合研究所に整理作業の委託を行った。
- 5 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田ビワノ門 1977）において保管している。
- 6 本書で使用する方位はいずれも座標北である。測地基準には中世大友府内町跡における過去の調査との連続性を考慮し日本測地系を使用している。
- 7 本書で使用する遺構略号は、以下のとおりである。  
SD：溝 SK：土坑 SE：井戸 SF：街路 SP：柱穴及び小穴 SX：その他の遺構
- 8 本書で使用した出土遺物の分類については、以下の文献による。  
**青花** 小野正敏「15～16 世紀の染付碗・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』No.2 1982 年）  
**青磁** 上田秀雄「14～16 世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982 年）  
**白磁** 森田 勉「14～16 世紀の白磁の分類について」（『貿易陶磁研究』No.2 1982 年）  
**備前焼** 乗岡 実「中世備前焼甕（壺）の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」  
（『第 3 回中近世備前焼研究会資料付第 1 回・第 2 回研究資料』所収 2000 年）  
**中国南部産焼締陶器鉢**  
吉田 寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」（『貿易陶磁研究』No.28 2003 年）  
**京都系土師器及び土師質土器**  
塩地潤一「九州出土の京都系土師器皿」（『中近世土器の基礎研究』XIV 1999 年）  
坂本嘉弘「中世大友府内町跡出土の土師質土器編年」  
（『豊後府内 2』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第 2 集 2005 年）
- 9 本書の執筆は、以下のとおりである。  
後藤一重 第 1 章・第 2 章・第 4 章  
吉田 寛 第 3 章  
丸山真史（奈良文化財研究所客員研究員） 第 5 章
- 10 本書の編集は、後藤一重・吉田寛が行った。



# 目次

巻頭図版  
序文  
例言

第1章	はじめに(後藤)	1
第2章	遺跡の立地と環境(後藤)	4
第3章	中世大友府内町跡第96次調査(吉田)	11
第4章	中世大友府内町跡第99次調査(後藤)	159
第5章	中世大友府内町跡から出土した動物遺存体(丸山)	197

遺物一覧表	205
写真図版	227

報告書抄録	269
-------	-----

## 挿 図 目 次

第1図	中世大友府内町跡位置図	2
第2図	中世大友府内町跡発掘調査状況	3
第3図	中世大友府内町跡と周辺の遺跡	5
第4図	府内古図と街路名称の設定	7
第5図	中世大友府内町跡出土土師質土器編年図	10
第6図	中世大友府内町跡第96次調査区位置図	11
第7図	中世大友府内町跡第96次調査全体図	12
第8図	区域1土層模式図	14
第9図	中世大友府内町跡第96次調査区域1遺構配置図(上層遺構群)	16
第10図	中世大友府内町跡第96次調査区域1遺構配置図(下層遺構群)	17
第11図	区域1A南壁土層図	18
第12図	区域1B南壁土層図	19
第13図	SD222実測図	20
第14図	SF530実測図	21
第15図	SF530出土遺物	22
第16図	SD400出土遺物	22
第17図	SX387(焼土層)出土遺物	23
第18図	SK388・SK508・SK509実測図	24
第19図	SK388・SK508・SK509出土遺物①	25
第20図	SK509出土遺物②	26
第21図	SK529実測図	27
第22図	SK529出土遺物	27
第23図	SK297・SK300実測図	28
第24図	SK297・SK300出土遺物①	28
第25図	SK300出土遺物②	29
第26図	SK305実測図	29
第27図	SK305出土遺物	30
第28図	SK347実測図	30
第29図	SK347出土遺物	30
第30図	SK369A・SK369B実測図	31
第31図	SK369A・SK369B出土遺物	32
第32図	SK404実測図	33
第33図	SK404出土遺物	33
第34図	SK524・SK525出土遺物	33
第35図	SK567実測図	34
第36図	SK567出土遺物	34
第37図	SK241実測図	35
第38図	SK241出土遺物	35
第39図	SK253実測図	35
第40図	SK253出土遺物	35
第41図	SK275・SK311実測図	36
第42図	SK314・SK315実測図	37
第43図	SK314出土遺物	37
第44図	SK356実測図	37
第45図	SK371実測図	38
第46図	SK371出土遺物	38
第47図	SK399実測図	39
第48図	SK399出土遺物	39
第49図	SK405実測図	40
第50図	SK405出土遺物	40
第51図	SK406実測図	40
第52図	SK406出土遺物	40
第53図	SE240・SE353実測図	41
第54図	SE240出土遺物①	42
第55図	SE240出土遺物②	43
第56図	SE359実測図	44
第57図	SE359出土遺物	44
第58図	SE507出土遺物	45
第59図	SD235出土遺物	45
第60図	SD236出土遺物	46
第61図	SD561出土遺物	46
第62図	SD360実測図	47
第63図	SD360出土遺物	47
第64図	SD361・SD362・SX237実測図	48
第65図	SD361・SD362・SX237出土遺物	48
第66図	SX310実測図	49
第67図	SX310出土遺物①	51
第68図	SX310出土遺物②	52
第69図	SX310出土遺物③	53
第70図	SX310出土遺物④	54
第71図	SX310出土遺物⑤	55
第72図	SX310出土遺物⑥	56
第73図	SX310出土遺物⑦	57
第74図	SX310出土遺物⑧	58
第75図	SX310出土遺物⑨	59
第76図	SX310出土遺物⑩	60
第77図	SX310出土遺物⑪	61
第78図	SX310出土遺物⑫	62
第79図	SX310出土遺物⑬	63
第80図	SX310出土遺物⑭	64
第81図	SX310出土遺物⑮	65
第82図	SX370出土遺物	66
第83図	SX402出土遺物	67
第84図	区域1柱穴出土遺物	68
第85図	SX390実測図	69
第86図	SX390出土遺物	69
第87図	区域1・遺構に伴わない遺物①	71
第88図	区域1・遺構に伴わない遺物②	72
第89図	区域1・遺構に伴わない遺物③	73
第90図	SD327A・SD327Bと出土遺物	74
第91図	区域2(上市町ほか)土層模式図	76
第92図	中世大友府内町跡第96次調査区域2遺構配置図①(第1・2面)	77・78
第93図	中世大友府内町跡第96次調査区域2遺構配置図②(第3・4面)	79・80
第94図	区域2南壁土層図	81・82
第95図	第1南北街路SF070土層実測図	84
第96図	第1南北街路SF070の変遷	85
第97図	SK092・SK093・SK094実測図	86
第98図	SF070出土遺物①	87
第99図	SF070出土遺物②	88
第100図	SX001出土遺物	89
第101図	SD009出土遺物	89
第102図	SK005出土遺物①	91

第103図	SK005出土遺物②	92	第178図	区域2・遺構に伴わない遺物 (第1南北街路より東①)	137
第104図	SK005出土遺物③	93	第179図	区域2・遺構に伴わない遺物 (第1南北街路より東②)	138
第105図	SK005出土遺物④	94	第180図	区域2・遺構に伴わない遺物 (第1南北街路より東③)	139
第106図	SK005出土遺物⑤	95	第181図	区域2・遺構に伴わない遺物 (第1南北街路より西①)	140
第107図	SK005出土遺物⑥	96	第182図	区域2・遺構に伴わない遺物 (第1南北街路より西②)	141
第108図	SK013実測図	97	第183図	区域2・遺構に伴わない遺物 (第1南北街路より西③)	142
第109図	SK014実測図	97	第184図	区域2・遺構に伴わない遺物 (第1南北街路より西④)	143
第110図	SK013出土遺物	97	第185図	区域2・遺構に伴わない遺物 (第1南北街路より西⑤)	144
第111図	SK255出土遺物	98	第186図	区域2・遺構に伴わない遺物 (第1南北街路より西⑥)	145
第112図	SX006実測図	98	第187図	区域2・遺構に伴わない遺物 (御所小路付近)	145
第113図	SX007・SX008実測図	99	第188図	区域2・遺構に伴わない遺物(その他)	146
第114図	SX007・SX008出土遺物	99	第189図	区域1(御所小路町)の遺構変遷	148
第115図	SX022実測図	99	第190図	中世大友府内町跡第96次調査区と周辺の 既調査区①(主要遺構のみ)	151・152
第116図	SX022出土遺物	100	第191図	中世大友府内町跡第96次調査区と 周辺の既調査区②(主要遺構のみ)	153・154
第117図	SX027・SX032・SX033実測図	101	第192図	中世大友府内町跡第96次調査区と 周辺の既調査区③(主要遺構のみ)	155・156
第118図	SX032・SX027出土遺物①	102	第193図	中世大友府内町跡第96次調査区と 周辺の既調査区④(主要遺構のみ)	157・158
第119図	SX027出土遺物②	103	第194図	中世大友府内町跡第99次調査区位置図	159
第120図	SD110・SD018出土遺物	103	第195図	中世大友府内町跡第99次調査 調査区北壁土層実測図	160
第121図	SD209出土遺物	104	第196図	// 近代遺構配置図	161
第122図	SD232出土遺物	104	第197図	// SD001出土遺物	162
第123図	SK019出土遺物	105	第198図	// SX005実測図	162
第124図	SK020出土遺物	105	第199図	// 近世遺構配置図	163
第125図	SK021出土遺物	105	第200図	// SX005出土遺物	164
第126図	SK045実測図	106	第201図	// SD004出土遺物	164
第127図	SK045出土遺物	106	第202図	// SD016・SD017実測図	166
第128図	SK046出土遺物	107	第203図	// SD006・SK009実測図	167
第129図	SK047実測図	107	第204図	// SD007出土遺物	168
第130図	SK047出土遺物	108	第205図	// SD006出土遺物(1)	168
第131図	SK049実測図	108	第206図	// SD006出土遺物(2)	168
第132図	SK145実測図	109	第207図	// SF024・SK026・SK036実測図	170
第133図	SK145出土遺物	109	第208図	// 中世遺構配置図	171
第134図	SK170実測図	109	第209図	// SK026土層実測図	172
第135図	SK183出土遺物①	110	第210図	// SK026出土遺物(1)	172
第136図	SK183出土遺物②	111	第211図	// SK026出土遺物(2)	173
第137図	SK183出土遺物③	112	第212図	// SX008出土遺物	173
第138図	SK183出土遺物④	113	第213図	// SD023・SF024・SK039実測図	174
第139図	SK183出土遺物⑤	113	第214図	// SX008・SD023・SF024土層実測図	174
第140図	SK184出土遺物	114	第215図	// SF024出土遺物(1)	175
第141図	SK202出土遺物①	114	第216図	// SF024出土遺物(2)	176
第142図	SK202出土遺物②	115	第217図	// SD023土層実測図	178
第143図	SK205出土遺物	115	第218図	// SD023実測図	179
第144図	SK206出土遺物	115	第219図	// SD023出土遺物	180
第145図	SK210実測図	116	第220図	// SD025土層実測図	181
第146図	SK210出土遺物	116	第221図	// SD025-1実測図	182
第147図	SK213出土遺物	116	第222図	// SD025出土遺物(1)	184
第148図	SK214出土遺物	117	第223図	// SD025出土遺物(2)	185
第149図	SK217出土遺物	117	第224図	// SD025出土遺物(3)	185
第150図	SK218出土遺物①	117	第225図	// 古代・古墳時代遺構配置図	186
第151図	SK218出土遺物②	118	第226図	// SK031・SK032実測図	187
第152図	SX025実測図	118	第227図	// III層出土遺物	188
第153図	SX025出土遺物	119	第228図	// SK037実測図	189
第154図	SX015実測図	119	第229図	// SK037出土遺物	189
第155図	SX015出土遺物	120	第230図	// SK038実測図	190
第156図	SX016実測図	120	第231図	// SK038出土遺物	191
第157図	SX016出土遺物	120	第232図	// その他の遺物(1)	192
第158図	区域2柱穴出土遺物	121	第233図	// その他の遺物(2)	193
第159図	調査区南壁土層図(部分)	122	第234図	// その他の遺物(3)	194
第160図	第1南北街路より下層で検出された溝	123	第235図	中世大友府内町跡第99次調査区周辺の地籍界と 道路遺構	195
第161図	SD590出土遺物	124			
第162図	SD095出土遺物	124			
第163図	SD091・SD146出土遺物	125			
第164図	SD123出土遺物	125			
第165図	SD119出土遺物①	126			
第166図	SD119出土遺物②	127			
第167図	SD174出土遺物①	128			
第168図	SD174出土遺物②	129			
第169図	SD174出土遺物③	130			
第170図	SD174出土遺物④	131			
第171図	SD174出土遺物⑤	132			
第172図	SD220実測図	133			
第173図	SD220出土遺物	133			
第174図	SK215出土遺物	134			
第175図	SK233実測図	134			
第176図	SK233出土遺物	134			
第177図	SB234実測図	135			

## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

大分市の位置する東北九州地域は、瀬戸内海に面している関係から、人や物資の九州側の玄関口としての役割を担ってきた。その中心である大分市は、古代には豊後国の国府が置かれ、以後中世、近世、近代を通して、豊後国・大分県の政治・経済の中核として発展してきた。大分市街地は、近世幕藩体制期の城下町を基盤にしている。戦後は、昭和30年代に新産業都市の指定を受け、大規模な埋め立てによる工場用地が造成され、企業進出が行われた。高度経済成長の波にもり、大分市の発展は著しく、旧市街地から郊外に向け開発の波は瞬く間に広がった。

このような中、大分市内の交通体系の整備は大きく遅れをとり、自動車の急激な普及から、大分市内では朝夕に交通渋滞が頻繁におきるようになった。交通渋滞の大きな原因のひとつが、大分市内を東西に横断するJR日豊本線・久大線・豊肥線の踏切にあった。そこで、大分県は大分市と連携し、『大分駅周辺総合整備事業』を計画し、大分駅とその周辺地域の整備計画を立案した。このうち「大分駅付近連続立体交差事業」は、JR日豊本線等の鉄道敷を高架化することにより、大分市街地の南北の一体的な発展と踏切の遮断による交通渋滞解消を目的としたものである。

大分駅付近連続  
立体交差事業

しかし、工事対象地区内には中世大友府内町跡、東田室遺跡などの周知遺跡が存在することから、大分県教育委員会は県土木建築部と協議を行い、工事に先立ち順次調査を実施した。調査により、中世府内町が良好な状態で残存することが判明し、大きな成果をあげることができた。調査成果の詳細については、既に刊行されている発掘調査報告書を参照いただきたい（『豊後府内1』2005、『豊後府内3』2006、『豊後府内5』2006、『豊後府内6』2007、『豊後府内10』2008、『東田室遺跡』2008）。

「大分駅付近連続立体交差事業」の本格着工は平成14年度からで、平成20年8月24日にはJR豊肥線・久大線、平成24年3月17日にはJR日豊本線の各高架化が完了し、大分駅周辺の高架事業が完成した。この間、春日陸橋や大道陸橋の撤去などの難工事が相次いだ。大分駅高架化という大分市民の悲願が達成されることとなった。

踏切撤去

高架側道

さらに、「大分駅付近連続立体交差事業」の主要工事の終了見通しがついた平成23年度には、高架化に伴う側道工事や踏切撤去工事の実施について、県土木建築部から新たな協議があった。このうち、踏切の撤去については、線路敷部分が現道より蒲鉾状にかさ上げされていることから、撤去に伴う掘削はあまり深くなく、遺構面まで達しないものであった。そのため、踏切撤去工事については、事前の確認調査や立会調査を行ったが、本調査の実施にはいたらなかった。しかし、日豊本線高架部北側に沿って設置される側道工事である「高架側道錦町線」と「高架側道顕徳町線」については、中世遺構の存在が想定された。「高架側道錦町線」部分では、既に一部が府内町跡第16次調査として平成13年度に調査が行われていた。また、「高架側道顕徳町線」についても、近接地で平成13・14年度に府内町跡第10次調査が実施され、キリシタン墓が確認されていた。そのため、県教育委員会は、両地区が本調査の必要性を有する地区であるとの認識にたち、工事と埋蔵文化財発掘調査の円滑な実施に向けて、県土木建築部と協議を重ねた。その結果、高架側道錦町線部分を府内町跡第96次調査として、高架側道顕徳町線部分を府内町跡第99次調査として、各々平成24年度に本調査を実施した。

府内町跡96次  
府内町跡99次

その後、両遺跡は平成25年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて整理作業を実施し、平成26年度に報告書刊行にいった。



第2節 調査組織の構成

○調査指導者

- 後藤宗俊 別府大学名誉教授
- 小野正敏 大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事
- 坂井秀弥 奈良大学教授
- 松井 章 奈良文化財研究所客員研究員

○平成24年度（役職名は平成24年度当時）

- 山口博文 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
- 宮内克己 同 次長
- 後藤一重 同 大型事業班参事（総括）【中世大友府内町跡第99次調査担当】
- 吉田 寛 同 大型事業班主幹 【中世大友府内町跡第96次調査担当】

○平成25年度（役職名は平成25年度当時）

- 宮内克己 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
- 小林昭彦 同 次長兼一般事業班参事（総括）
- 後藤一重 同 大型事業班参事（総括）【中世大友府内町跡第99次整理担当】
- 吉田 寛 同 大型事業班主幹 【中世大友府内町跡第96次整理担当】

○平成26年度（役職名は平成26年当時）

- 松村洋一 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長
- 後藤一重 同 次長兼県事業班参事（総括）  
【中世大友府内町跡第99次報告書担当】
- 吉田 寛 同 受託事業班主幹 【中世大友府内町跡第96次報告書担当】



第1図 中世大友府内町跡位置図





第2図 中世大友府内町跡発掘調査状況(番号は調査回数 70・74・81・90・100・102・103・105・106・109回は地図範囲外) 2015年3月現在

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

大分川 中世大友府内町跡は、大分川左岸に展開する狭義の大分平野に所在する。遺跡は大分川沿いに形成された自然堤防上を中心に、南北に長く伸びており、その規模は南北約2km、東西約0.7kmである。現在、遺跡の北端から別府湾まで約2kmであるが、戦国時代は遺跡のすぐ北まで海になっていたと思われる。すなわち、中世府内町は大分川河口に展開した中世都市で、北側が別府湾に、東側が大分川に各々面することから水運にも恵まれた立地環境にあったことが分かる。

上野丘陵 遺跡の位置する平野の南側には、標高30～40mの上野丘陵が横たわり、丘陵はそのまま西に続き標高628mの高崎山にいたる。遺跡が立地する自然堤防の現在の標高は、大分川河口に近い遺跡北部で4m、上流の南部で約6mである。また、遺跡の西側については、旧地形の観察や試掘調査などの結果から、低湿地が広がっていたと考えられる。現在の市街地中心部付近は、大分川と住吉川に挟まれた地域である。旧地形を観察すると、古い河道がいくつも確認でき、小河川が網目状に展開する三角州的な地形であったことが分かる。流路と自然堤防が混在するなか、遺跡は自然堤防上に立地したものである。

低湿地 中世大友府内町跡が立地する自然堤防は、上部が粘質土層であるが、下部は砂層が厚く堆積している。地点により異なるが、下層の砂層からは縄文時代晩期や弥生・古墳時代の遺物が出土することから、自然堤防形成の時期を概ね推定することができる。

### 第2節 歴史的環境

縄文時代 周辺における縄文時代の状況を見ると、中世大友府内町跡の西方に位置する大道遺跡群から散発的ではあるが遺物の出土が確認できる。縄文時代中期の阿高式・船元式、後期の小池原上層式・鐘崎式・北久根山式などで、いずれも新しい遺構に混入するかたちで出土している。上野丘陵裾部に縄文時代の集落が散在していた可能性が考えられる。

弥生・古墳時代 弥生・古墳時代については、上野丘陵上に立地する上野遺跡群で、弥生時代中期末～後期初に比定される環濠集落跡などが確認されている。中世大友府内町跡の西方に位置する大道遺跡群では、弥生時代後期～古墳時代前期を中心とした遺構・遺物が見られる。弥生時代後期には井戸跡や土坑が、また古墳時代前期は大量の土師器が廃棄された溝が検出されている。古墳時代中期～後期になると遺構が少なくなり、わずかに竪穴建物跡などがみられるのみである。また、中世大友府内町跡

若宮八幡宮遺跡 に隣接する若宮八幡宮遺跡では、5世紀末から6世紀にかけての竪穴建物跡が14基検出されている。このうち3基の竪穴建物跡から、多量の未製品を含む石製玉類と素材の剥片、工具類が出土している。玉類製作工房を含む集落として注目される。さらに、若宮八幡宮遺跡では竪穴建物跡のほかに16棟の掘立柱建物跡が確認されており、竪穴建物から掘立柱建物への変遷が指摘されている。大臣塚古墳 墳墓については、大分平野における首長墓のひとつと考えられている大臣塚古墳がある。古墳は上野丘陵の東端に位置し、大分川河口部を一望することができる。周辺の調査から円筒埴輪を有することが確認されている。

古代 古代に関連するものとして、上野丘陵の南側には「古国府」の地名が残るが、政庁本体は未だ特定されていない。しかし、上野丘陵上には上野廃寺や竜王畑遺跡などの古代遺跡が見られる。上野廃寺は版築による基壇が検出されており、基壇上では礎石建物跡が確認されている。時期的には8

上野廃寺 7～9世紀代に比定され、百濟系軒丸瓦や豊後国分寺と同範の軒平瓦が出土している。竜王畑遺跡では、7～10世紀に及ぶ遺物と伴に掘立柱建物跡などが検出されている。整然と配置された建物に加え築地塀に伴うと考えられている溝もあることから、官衙に関連する遺跡として注目を集めている。





- |            |            |          |            |
|------------|------------|----------|------------|
| 1 中世大友府内町跡 | 2 大友氏館跡    | 3 旧万寿寺跡  | 4 勢家遺跡     |
| 5 東田室遺跡    | 6 府内城・府内町跡 | 7 大道条里跡  | 8 大道遺跡群    |
| 9 南金池遺跡    | 10 上野町遺跡   | 11 顕徳町遺跡 | 12 若宮八幡宮遺跡 |
| 13 上野遺跡群   | 14 上野廃寺    | 15 上ノ原館跡 | 16 大臣塚古墳   |
| 17 竜王畑遺跡   | 18 元町石仏    | 19 岩屋寺石仏 | 20 伽藍石仏    |
| 21 岩屋寺遺跡   | 22 古国府遺跡群  | 23 亀甲山古墳 | 24 古宮古墳    |
| 25 千人塚古墳   | 26 弘法穴古墳   | 27 永興遺跡  |            |

第3図 中世大友府内町跡と周辺の遺跡



南金池遺跡  
上野町遺跡  
大道遺跡群

る。具体的には国司館の一部であった可能性が想定されている。平野部の古代の遺跡としては、中世大友府内跡の西側に位置する南金池遺跡、上野町遺跡、大道遺跡群がある。南金池遺跡では8世紀末～9世紀初頭の井戸跡や土坑が検出されている。土坑からは焼塩壺が多量に出土し、注目を集めた。文書資料によれば、古代末～中世初頭にこの付近には「塩濱」が存在したようである。南金池遺跡の焼塩壺は、古代の製塩業との関連を強く窺わせるもので、付近の景観や土地利用について示唆的な資料となっている。上野町遺跡は南金池遺跡に隣接しており、8世紀後半から9世紀後半の遺物が出土している。遺物には、中国長沙窯系黄釉褐彩水注片のほか、墨書土器や円面硯などがみられる。これらは、一般集落ではみることのできない遺物であることから、遺跡の性格が注目されるところであるが、小範囲のため遺構については定かではない。大道遺跡群では、8世紀末～9世紀前半の遺構・遺物が確認されている。遺構のうち、北西－南東方向に直線的に伸びる大溝は、その規模や形状に加え水流痕跡が認められることから、水路としての機能が考えられている。一部では、大溝に繋がるように南と北に向かい道路状遺構が確認されている。掘立柱建物跡群は大溝に沿い2カ所にみられ、両方とも大溝の北側に位置する。遺物には、中国越州窯青磁、奈良三彩、緑釉陶器、硯、石帯、刻書土器など、官衙クラスのものが見られる。遺跡の性格は断定できないが、官衙に関連する可能性が高い。

中世  
守護所

中世になると、13世紀中頃に大友氏が守護として入部したという。しかし、その段階の守護所がどこにあったのか、現時点では特定できていない。現在調査が進められている中世大友府内町跡では14世紀以降の遺構しか確認されていない。上野丘陵上や上野丘陵南の古国府地区も含め、検討が必要であろう。

除国

大友氏は、文禄2年(1593年)に朝鮮出兵の際の失態から、豊臣秀吉により豊後国から除国される。豊後国は蔵入地となり、豊臣系の大名により分割支配される。府内には、慶長2年(1597年)に福原直高が入部し、これまでの大分川沿いの自然堤防から離れた地に、府内城の築城を開始する。これに伴い中世府内の町も府内城周辺に移転することとなる。関ヶ原の戦いの後に江戸幕府が開かれると、府内には慶長6年(1601年)に竹中重利が入部する。入部と同時に府内城と城下町の建設を再開し、慶長13年(1608年)頃までには一応の完成をみたようである。その後府内には、寛永11年(1634年)に日根野氏が、万治元年(1658年)には大給松平氏が入部し、幕末までいたる。日根野氏は大分川中流域から取水して総延長15kmに及ぶ水路を整備した。これは初瀬井路と呼ばれ、現在もなお大分川下流域の水田を広範囲にわたり潤している。上野丘陵南側の大分平野は、この初瀬井路により本格的に水田化されたものと考えられる。

初瀬井路

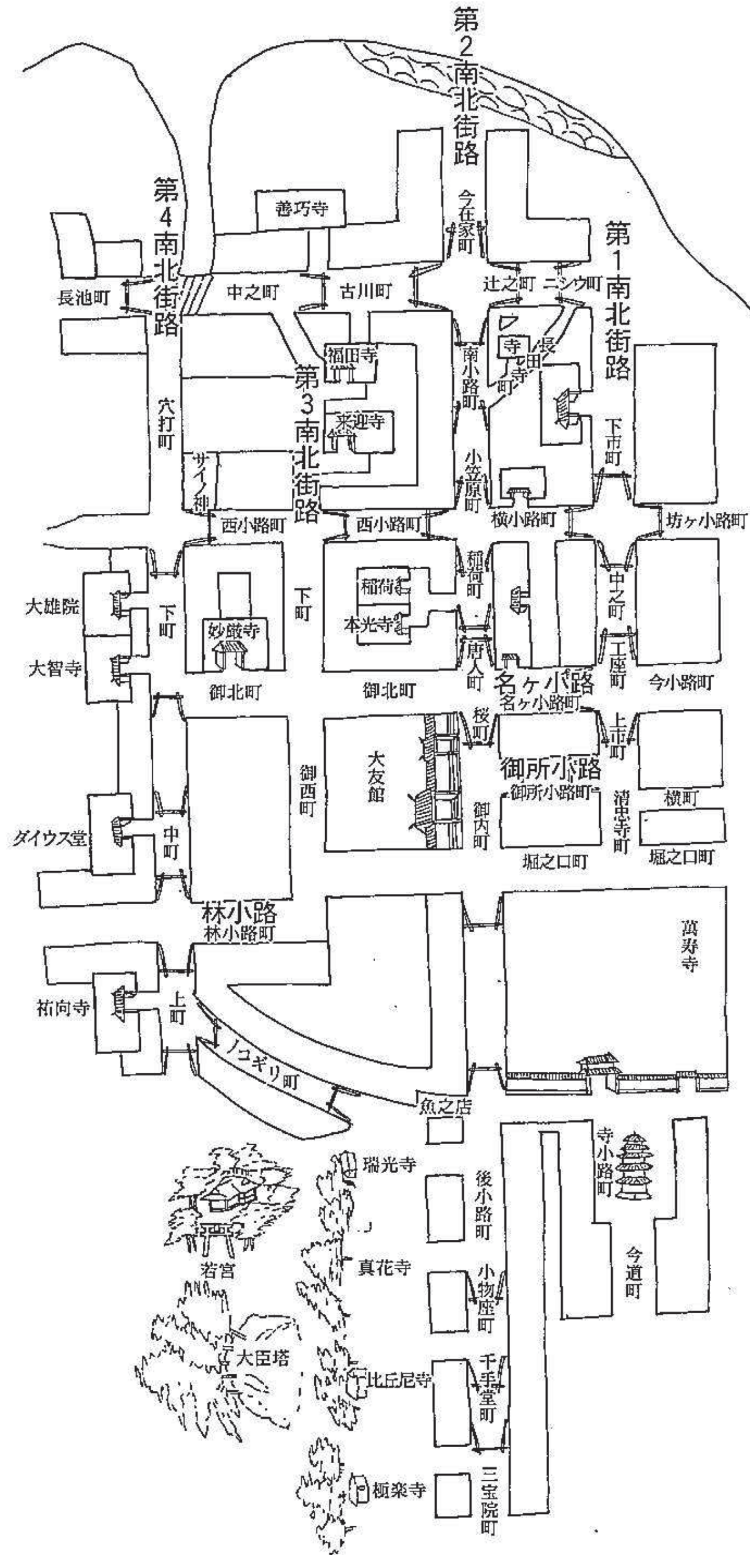
### 第3節 豊後府内の調査と「府内古図」

豊後府内における埋蔵文化財発掘調査は、大分県教育委員会と大分市教育委員会により実施されている。現在、中世府内町全体の遺跡名称は「中世大友府内町跡」となっているが、さらにその中に「大友氏館跡」や「旧万寿寺跡」があるため、大分県教育委員会と大分市教育委員会は協議を行い、調査箇所ごとに発掘調査着手順に調査次数を重ねることとした。平成27年3月現在、「中世大友府内町跡」が第109次、「大友氏館跡」が第31次、「旧万寿寺跡」が第9次となっている。その結果、大分市中心部近くの市街地に中世府内町が良好な状態で埋没していることが判明した。遺跡の主体は14～16世紀の約300年間で、大友氏館や万寿寺を中心に街路が整えられ、町屋が展開する状況が明らかになりつつある。しかし、府内町全体に加え、大友氏館跡や旧万寿寺跡等の中心的施設の個別詳細な変遷過程などは、未だ明確でない部分も多く、毎年の調査による新たな成果の積み上げに期するところである。

戦国時代に豊後の中心であった府内を描いた「府内古図」がある。現在 12 枚が確認されているが、これらは A 類、B 類、C 類の 3 種類に分類されている。成立年代は寛永 13 年（1634）を遡らないと考えられている。各古図には様々な文字情報がみられるが、その量や内容には差異がみられる。傾向として、新しくなるほど文字情報が増すようで、概ね A 類→B 類→C 類の順で成立したと考えられている。各古図には 4 本の南北街路と、5 本の東西街路が描かれている。しかし、街路の名称については各古図に全く記載がない。このため、近年の調査・研究に伴い様々な仮称が冠されてきた。

しかし、報告書作成にあたり、街路名の統一を図る必要性が生じた。南北街路 4 本については、大分川側から「第 1 南北街路」、「第 2 南北街路」、「第 3 南北街路」、「第 4 南北街路」とした。街路の呼称は、ルイス・フロイスの『日本史』や宣教師達の書簡及び年報の訳文が府内の道路を街路と記述していることと、都市内の道路という意味においてこのように使用する。

また、東西方向については、古図の町名記載に御所小路町や名ヶ小路町などのように道路名を含むものがみられる。そのため、これらについては「御所小路」、「名ヶ小路」とした。



第4図 府内古図と街路名称の設定(府内古図A類をトレースし一部改変)

第2章 遺跡の立地と環境

第1表 中世大友府内町跡発掘調査一覧①

平成27年2月現在

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	調査面積(m <sup>2</sup> )	報告書刊行	報告書名	調査内容
府内町跡1次	大分市教委	平成8・9年度	区画整理移転事業	横小路町	620	平成16年3月	大友府内7	幅約10mの道路
府内町跡2次	大分市教委	平成8・9年度	区画整理移転事業	横小路町	200	平成16年3月	大友府内7	
府内町跡3次	大分市教委	平成9年度	区画整理移転事業	横小路町	160	平成15年3月	大友府内5	10基の備前焼の甕蔵
府内町跡4次	大分市教委	平成10年度	マンション建設	上市町	330	平成14年3月	大友府内4	名ヶ小路の街路の一部
府内町跡5次	大分県教委	平成11～13年度	JR日豊・豊肥線高架	林小路町	4,200	平成17年3月	豊後府内1	御蔵場北側の道路？
府内町跡6次	大分市教委	平成11年度	JA葬祭場	寺小路町・万寿寺	1,600			万寿寺の南限の堀？
府内町跡7次	大分県教委	平成12・13年度	JR日豊・豊肥線高架	清忠寺町	2,000	平成18年3月	豊後府内3	第1南北街路・屋敷墓
府内町跡8次	大分県教委	平成12年度	JR日豊・豊肥線高架	柳町・館の南側	2,000	平成17年3月	豊後府内1	15世紀の溝・土塁
府内町跡9次	大分県教委	平成12・13年度	国道10号拡幅	御所小路町	970	平成17年3月	豊後府内2・4・3	御所小路の街路
府内町跡10次	大分県教委	平成13・14年度	JR日豊・豊肥線高架	上町・祐向寺	2,000	平成19年3月	豊後府内6	キリシタン墓
府内町跡11次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	称名寺	700	平成25年3月	豊後府内17-1	称名寺の西側の堀
府内町跡12次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友館・桜町・名ヶ小路町	700	平成18年3月	豊後府内4-1	大友館の東北隅・礎石建物
府内町跡13次	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	御内町	800	平成17年3月	豊後府内2	ヴェロニカメダイ出土
府内町跡14次	大分市教委	平成13年度	マンション建設	唐人町	104	平成15年3月	大友府内6	井戸
府内町跡15次	大分市教委	平成13年度	スーパー建設	桜町	472	平成15年3月	大友府内3	
府内町跡16次	大分県教委	平成13年度	JR日豊・豊肥線高架	上市町	500	平成18年3月	豊後府内2	短冊形地割の町屋
府内町跡17次	大分市教委	平成14年度	ポンプ場建設	横町・清忠寺	1,697	平成19年3月	大友府内10	横町の街路・鍛冶屋跡
府内町跡18次西	大分県教委	平成13年度	国道10号拡幅	大友館・街路	450	平成18年3月	豊後府内4-2	大友館と第2南北街路
府内町跡18次東	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	桜町	700	平成18年3月	豊後府内4-2	大友館の東側の町屋
府内町跡19次	大分市教委	平成13年度	国庫補助 範囲確認	柳町？	106			陶製井筒の井戸
府内町跡20次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	万寿寺	2,100	平成19年3月	豊後府内7	礎盤建物・北境の堀
府内町跡21次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	堀之口町	700	平成17年3月	豊後府内2	府内型メダイ出土
府内町跡22次	大分県教委	平成14年度	国道10号拡幅	桜町・御所小路町	600	平成18年3月	豊後府内4-3	第2南北街路
府内町跡23次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺	1,623			
府内町跡24次	大分市教委	平成14年度	国庫補助 範囲確認	万寿寺	58			万寿寺の塔の確認
府内町跡25次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	ノコギリ町	58	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-2次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	祐向寺	271	平成18年3月	大友府内9	16世紀代の掘立柱建物群
府内町跡25-3次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上町	18	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-4次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	上町	8	平成19年3月	大友府内9	16世紀後半の道路状遺構
府内町跡25-5次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	町外	270	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-6次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	上町	300	平成18年3月	大友府内8	
府内町跡25-7次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	上町	110	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-8次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	上町	75	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-9次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	上町	27	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡25-10次	大分市教委	平成18年度	市道拡幅	上町	125	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡26次	大分市教委	平成15年度	市道拡幅	中町・デウス堂付近	230	平成18年3月	大友府内8	
府内町跡26-2次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	中町・デウス堂付近	150	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡26-3次	大分市教委	平成18年度	市道拡幅	中町・デウス堂付近	350	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡27-1次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	妙蔵寺	200	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-2次	大分市教委	平成16年度	市道拡幅	御北町	40	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-3次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	下町・妙蔵寺	105	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-4次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	妙蔵寺	32	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-5次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	妙蔵寺	19	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-6次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	妙蔵寺	8	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-7次	大分市教委	平成17年度	市道拡幅	妙蔵寺・御北町	41	平成19年3月	大友府内9	
府内町跡27-8次	大分市教委	平成18年度	市道拡幅	御西町	220	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡27-9次	大分市教委	平成18年度	市道拡幅	中町	81	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡28次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	桜町	480	平成18年3月	豊後府内4-2	大友館の東側の町屋
府内町跡29次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	万寿寺	1,000	平成21年3月	豊後府内12	万寿寺内の区画溝
府内町跡30次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	後小路町	700	平成22年3月	豊後府内14	14世紀代の町屋
府内町跡31次	大分県教委	平成15年度	JR久大線高架	瑞光寺	500	平成17年3月	豊後府内5	蔀池跡
府内町跡32次	大分市教委	平成15・16年度	個人・市道拡幅	中町・デウス堂付近	237	平成18年3月	大友府内8	
府内町跡33次	大分市教委	平成15年度	国庫補助 範囲確認	府内の南限付近	880			15・16世紀後半の大溝
府内町跡33-2次	大分市教委	平成16年度	個人住宅	府内の南限付近	450			
府内町跡34次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	万寿寺	700	平成20年3月	豊後府内8	万寿寺西側境の堀・礎石建物
府内町跡35次	大分県教委	平成15年度	国道10号拡幅	万寿寺	500	平成21年3月	豊後府内12	井戸・瓦多数
府内町跡36次	大分県教委	平成15年度	庄原佐野線	魚ノ店・ノコギリ町	850	平成20年3月	豊後府内9	町屋跡・井戸
府内町跡37次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	御蔵場	37			
府内町跡38次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	御所小路町	210			推定御所小路跡・南北大溝
府内町跡39次	大分市教委	平成15年度	アパート建設	中町	15	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡40次	大分県教委	平成16年度	JR日豊・豊肥線高架	御内町	170	平成20年3月	豊後府内10	溝
府内町跡41次	大分県教委	平成16年度	庄原佐野線	魚ノ店・ノコギリ町	3,400	平成22年3月	豊後府内16-1	御蔵場の周辺の街路と町屋
府内町跡42次	大分県教委	平成16年度	国道10号拡幅	万寿寺	150	平成21年3月	豊後府内12	万壽寺跡
府内町跡43次	大分県教委	平成16年度	国道10号拡幅	万寿寺	400	平成20年3月	豊後府内8	萬寿寺西側境の堀・礎石建物
府内町跡44次	大分市教委	平成16年度	アパート建設	御西町	100			
府内町跡44-2次	大分市教委	平成16年度	範囲確認	御西町	20			
府内町跡45次	大分市教委	平成16年度	アパート建設	中町・コレジオ堂付近	250	平成20年3月	大友府内12	
府内町跡46次	大分市教委	平成16年度	駐車場建設	万寿寺	90			
府内町跡47次	大分市教委	平成16年度	店舗建設・範囲確認	称名寺	35			
府内町跡48次	大分県教委	平成16年度	国道10号拡幅 工業用水管	名ヶ小路	70	平成18年3月	豊後府内4-1	名ヶ小路
府内町跡49次	大分県教委	平成16年度	国道10号拡幅 工業用水管	柳町・街路	76	平成22年3月	豊後府内15	
府内町跡50次	大分市教委	平成16年度	個人住宅 浄化槽	ノコギリ町・街路	2			御蔵場の西側の街路と側溝



第2表 中世大友府内町跡発掘調査一覧②

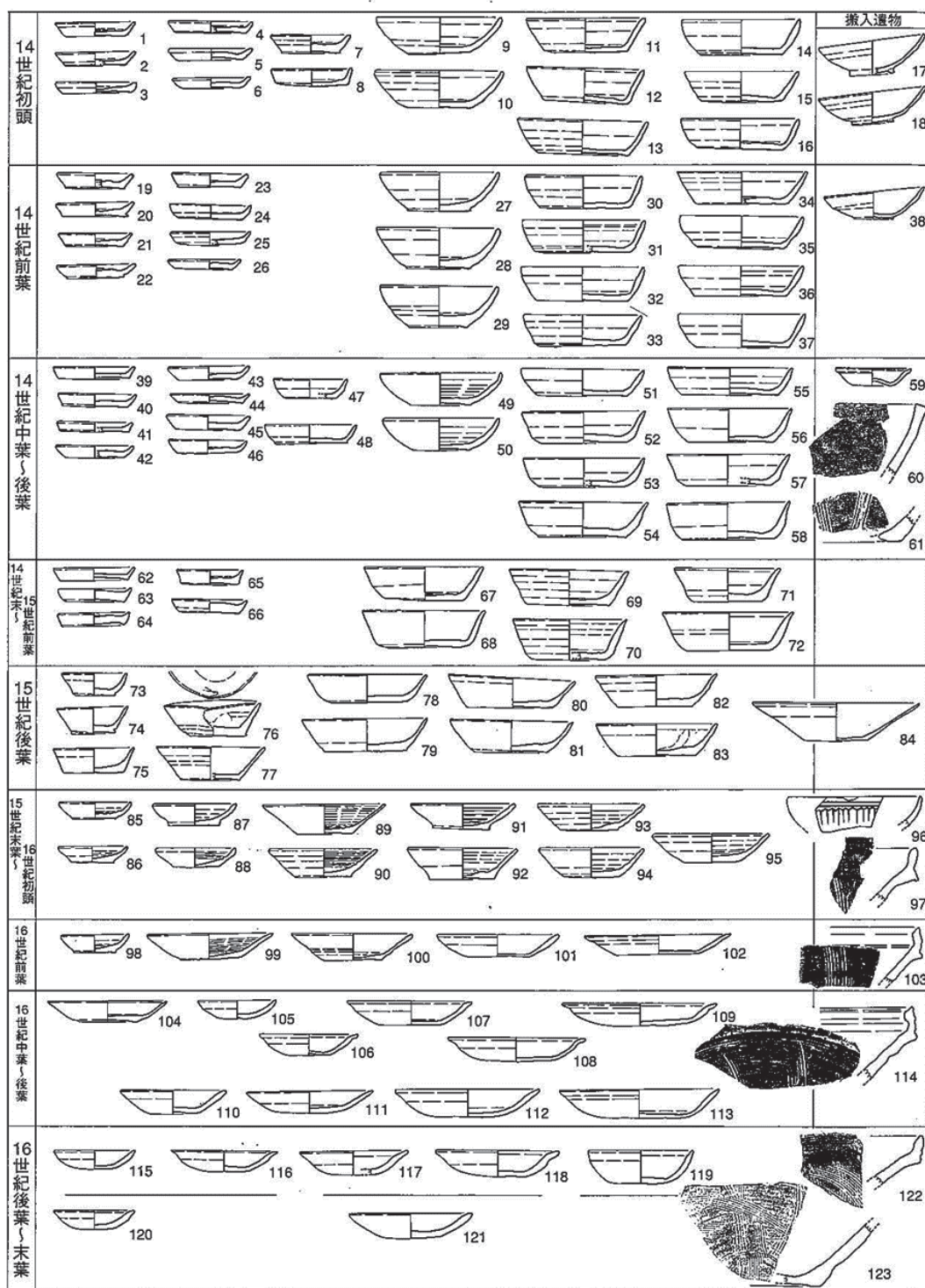
平成27年2月現在

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	調査面積(m)	報告書刊行	報告書名	調査内容
府内町跡51次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北街路・御内町・万寿寺	4,600	平成22年3月	豊後府内15	万寿寺西北隅・大友館東南隅
府内町跡52次	大分県教委	平成17年度	国道10号拡幅	第2南北街路・大友氏館跡	600	平成22年3月	豊後府内15	第2南北街路・大友館の東部
府内町跡53次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀	192	平成21年3月	大友府内13	
府内町跡54次	大分市教委	平成17年度	浄化槽	称名寺の東	7			
府内町跡55次	大分県教委	平成17年度	庄原佐野線	御蔵場	320	平成20年3月	豊後府内9	地下蔵?
府内町跡56次	大分市教委	平成17年度	国庫補助 範囲確認	御西町	76			
府内町跡57次	大分市教委	平成17年度	市下水道	名ヶ小路町	190	平成21年3月	大友府内13	
府内町跡58次	大分市教委	平成17年度	アパート建設	御所小路町	210			
府内町跡59次	大分市教委	平成17年度	市下水道	桜町	9	平成21年3月	大友府内13	
府内町跡60次	大分市教委	平成17年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀	156	平成21年3月	大友府内13	
府内町跡61次	大分県教委	平成17年度	J R久大線高架	瑞光寺	240	平成20年3月	豊後府内11	
府内町跡62次	大分市教委	平成17年度	確認調査	第1南北街路	48			街路跡
府内町跡63次	大分市教委	平成18年度	確認調査	御西町	90			
府内町跡64次	大分市教委	平成17年度	アパート建設	御西町	153			
府内町跡65次	大分市教委	平成17年度	確認調査	御西町	9			
府内町跡66次	大分市教委	平成17・18年度	確認調査	御西町・大友館	48			
府内町跡67次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	桜町・御所小路町	300	平成22年3月	豊後府内15	
府内町跡68次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	万寿寺	400	平成21年3月	豊後府内12	
府内町跡69次	大分県教委	平成18年度	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店・ノコギリ町	1,741	平成22年3月	豊後府内16-2	街路跡・井戸・町屋
府内町跡70次	大分市教委	平成18年度	市下水道工事	来迎寺	30			
府内町跡71次	大分県教委	平成18年度	JR久大線高架	瑞光寺	900	平成21年3月	豊後府内13	
府内町跡72次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	称名寺	300	平成25年3月	豊後府内17-1	名ヶ小路・称名寺堀
府内町跡73次	大分市教委	平成18年度	桜ヶ丘雨水幹線	万寿寺西側の堀	329	平成21年3月	大友府内13	
府内町跡74次	大分市教委	平成18年度	民間共同住宅建築	大雄院の北側	395	平成19年3月	大友府内11	
府内町跡75次	大分県教委	平成18年度	庄原佐野線	御蔵場・魚ノ店	870	平成22年3月	豊後府内16-3	第2南北街路・一括埋納
府内町跡76次	大分県教委	平成18年度	国道10号拡幅	称名寺	100	平成25年3月	豊後府内17-1	称名寺境内
府内町跡77次	大分県教委	平成19年度	庄原佐野線	御蔵場・ノコギリ町	1,210	平成22年3月	豊後府内16-4	街路跡
府内町跡78次	大分県教委	平成19年度	国道10号拡幅	第2南北街路	100	平成22年3月	豊後府内15	
府内町跡79次	大分県教委	平成19年度	国道10号拡幅	第2南北街路	70	平成22年3月	豊後府内15	
府内町跡80次	大分県教委	平成19年度	国道10号拡幅	称名寺	870	平成25年3月	豊後府内17-1	第2南北街路・称名寺跡
府内町跡81次	大分市教委	平成19年度	民間共同住宅建築	中之町付近	400	平成21年3月	大友府内14	溝状遺構・井戸
府内町跡82次	大分市教委	平成20年度	個人住宅(確認)	名ヶ小路町	61			街路跡
府内町跡83次	大分市教委	平成20年度	民間(店舗建設)	今道町	533	平成22年3月	大友府内15	第1南北街路跡
府内町跡84次	大分市教委	平成20年度	民間(病院関連)	中之町	36	平成22年3月	大友府内16	
府内町跡85次	大分市教委	平成21年度	民間(店舗建設)	中町	38			
府内町跡86次	大分市教委	平成21年度	国庫補助(範囲確認)	御蔵場	1,910			街路・溝・井戸・廃棄土坑
府内町跡87次	大分市教委	平成21年度	庄原佐野線関連	塔跡?・寺小路町跡	1,604	平成23年3月	大友府内17	
府内町跡88次	大分県教委	平成22年度	国道10号拡幅	称名寺跡	1,150	平成25年3月	豊後府内17-2	堀・凝灰岩製暗渠
府内町跡89次	大分市教委	平成22年度	国庫補助(範囲確認)	御蔵場・柳町	939			井戸・溝・土坑・掘立柱建物
府内町跡90次	大分市教委	平成22年度	民間開発	ニシウ町・辻之町	46			溝・土坑・集石
府内町跡91次	大分県教委	平成22年度	国道10号拡幅	桜町・第2南北街路	240	平成25年3月	豊後府内18	街路・溝
府内町跡92次	大分県教委	平成22年度	国道10号拡幅	桜町・第2南北街路	644	平成25年3月	豊後府内18	街路・溝
府内町跡93次	大分県教委	平成24年度	国道10号拡幅	第2南北街路	93	平成25年3月	豊後府内18	街路・溝
府内町跡94次	大分市教委	平成22年度	個人住宅(範囲確認)	横小路町	69			井戸・土坑
府内町跡95次	大分県教委	平成23年度	国道10号拡幅	称名寺跡	182	平成25年3月	豊後府内17-2	井戸・土坑・溝
府内町跡96次	大分県教委	平成24年度	JR高架側道	御所小路町・上市町	927	平成27年3月	豊後府内19	
府内町跡97-1次	大分市教委	平成24年度	病院移転地	寺小路町	5,880			街路沿いの両側町屋・分銅
府内町跡98次	大分市教委	平成24年度	個人住宅	長国寺町南	119			
府内町跡99次	大分県教委	平成24年度	JR高架側道	ダイウス堂西側	385	平成27年3月	豊後府内19	府内から西に出る街路
府内町跡100次	大分市教委	平成24年度	個人住宅	来迎寺東側	40			
府内町跡101次	大分市教委	平成25年度	民間開発	寺廻町・片端町	762			
府内町跡102次	大分市教委	平成25年度	民間開発	穴打町	19			
府内町跡103次	大分市教委	平成25年度	市道改良	真宗寺付近	434	平成25年3月	大友府内18	
府内町跡104次	大分市教委	平成25年度	民間開発	魚之店	857	平成25年3月	大友府内19	
府内町跡105次	大分市教委	平成25年度	市道改良	今在家町・辻之町	1,927			
府内町跡106次	大分市教委	平成26年度	市道改良	今在家町				
府内町跡107次	大分市教委	平成26年度	民間開発	柳町	74			
府内町跡108次	大分市教委	平成26年度	民間開発	下町	434			
府内町跡109次	大分市教委	平成26年度	市道改良	南小路町				

第3表 旧万寿寺跡発掘調査一覧

平成27年2月現在

調査次数	調査機関	調査年度	事業名	調査場所	調査面積(m)	報告書刊行	報告書名	調査内容
旧万寿寺跡1次	大分市教委	平成17年度	国庫補助(範囲確認)		388			瓦溜め・溝・大型土坑
旧万寿寺跡2次	大分市教委	平成18年度	国庫補助(範囲確認)	堀之口町	270			道路状遺構・堀跡
旧万寿寺跡3次	大分市教委	平成18年度	国庫補助(範囲確認)		365			掘立柱建物跡・井戸
旧万寿寺跡4次	大分市教委	平成19年度	国庫補助(範囲確認)		240			大規模整地跡・連続土坑
旧万寿寺跡5次	大分市教委	平成20年度	国庫補助(範囲確認)		185			大規模整地跡・溝
旧万寿寺跡6次	大分県教委	平成23年度	庄の原佐野線	万寿寺西部	1,411			瓦溜め・溝・鬼瓦
旧万寿寺跡7次	大分県教委	平成24年度	庄の原佐野線	万寿寺西部	670			墓・銅銭一括出土遺構
旧万寿寺跡8次	大分県教委	平成26年度	庄の原佐野線	万寿寺西部	1,040			礎石が廃棄された溝
旧万寿寺跡9次	大分県教委	平成26年度	庄の原佐野線	万寿寺東部	493			古代の溝



1～18(府内町跡35次 S-017) 19～38(府内町跡30次 S-115) 39～61(府内町跡30次 S-109) 62～72(府内町跡20次 AS-1505)  
 73～84(大友氏館跡1次 S-008) 85・87・91(府内町跡5次 B SK-245) 86・93(府内町跡5次 B SK-134)  
 88・89・92・96(府内町跡5次 B SD-251) 90・94(府内町跡5次 B SK-230) 95・97(府内町跡5次 B SK-234)  
 98・99・102(府内町跡5次 A SD-153下層) 100・101(府内町跡5次 B SK-121) 103(府内町跡5次 B SK-206)  
 104・114(府内町跡5次 B SD-222) 105～109(府内町跡5次 B SD-105) 110～113(府内町跡5次 B SK-106)  
 115・117・118(府内町跡4次 S-160) 116・119(大友氏館跡1次池Ⅲ期) 120～123(府内町跡4次 S-64)

第5図 中世大友府内町跡出土土師質土器編年図



## 第3章 中世大友府内町跡第96次調査

### 第1節 調査の概要

#### 1. 調査区の概要と調査の推移

大分駅付近  
連続立体  
交差事業

調査期間  
平成24年  
(2012)  
5月17日～  
平成25年  
(2013)  
1月30日

調査面積  
927㎡

本章で報告する中世大友府内町跡第96次調査は、大分駅付近連続立体交差事業に伴い大分県土木建築部大分駅周辺総合整備事務所からの委託を受けて実施したもので、平成24年(2012)5月17日から平成25年(2013)1月30日の約8ヶ月半の期間、発掘調査を行った。発掘調査面積は927㎡である。

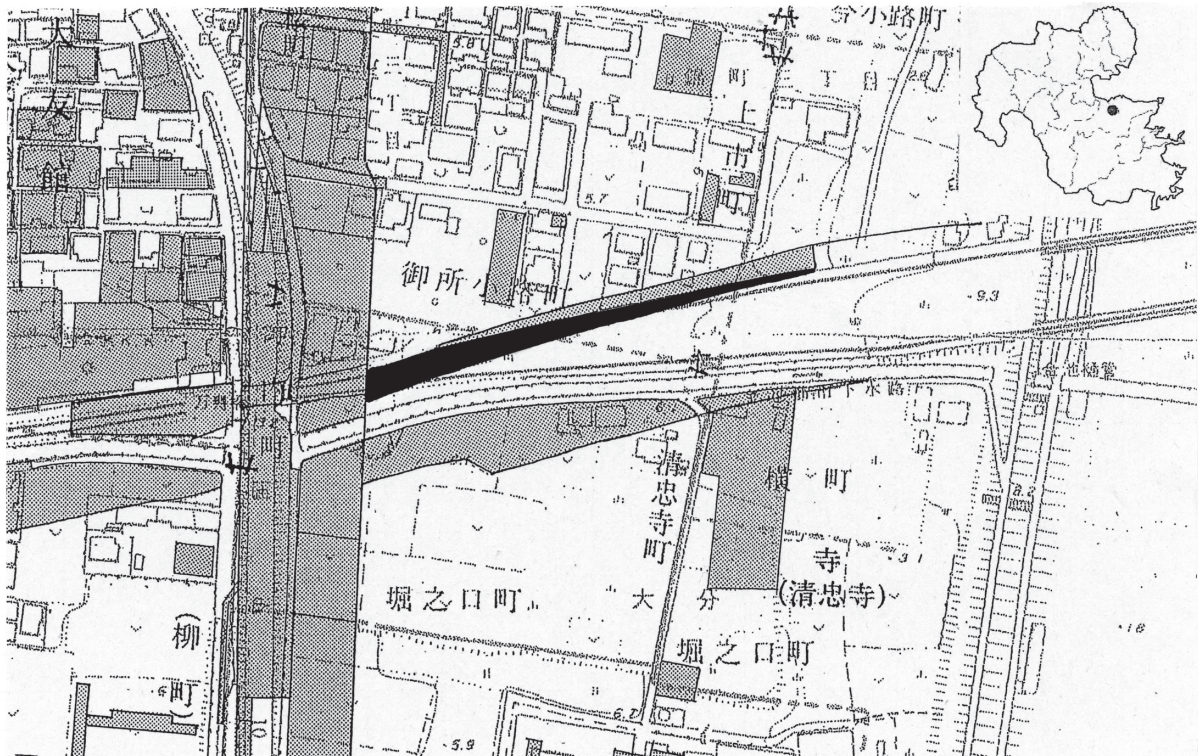
本調査区は大分県大分市錦町3丁目に位置し、北側に隣接する地点では平成13年度(2001)に第16次調査(発掘調査面積約500㎡)が実施されている(第6図)。第16次調査は当時のJR日豊線軌道敷きの北側に隣接する地点に位置し、大分駅付近連続立体交差事業の完了後は、新規の軌道敷き(高架)に併行する側道が建設される予定地であった。第16次調査終了後、JR日豊線の高架工事が進展し、高架となった新規の鉄道敷きがほぼ完成すると、第16次調査実施時に鉄道のレールが敷かれていた旧軌道敷きの地点と側道建設予定地の一部が未調査区として残っていた。第96次調査はこの未調査区の地点が発掘調査の対象となった。

旧日本  
座標系

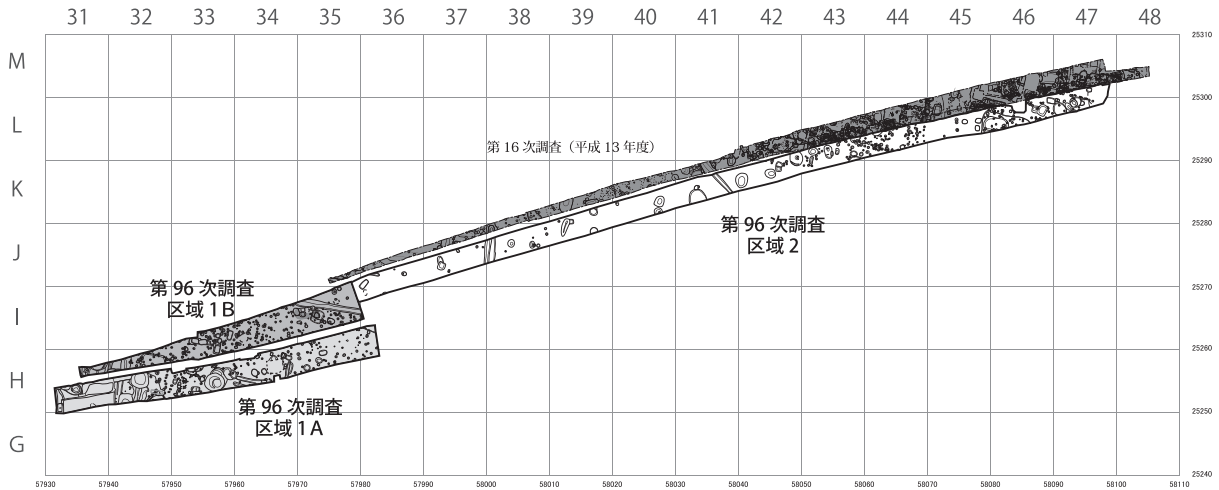
区域1  
区域2

上記のような事情から、第96次調査の発掘調査区は幅約3.5～10m、長さ約170mを測る東西に細長いものとなり、JRの高架工事と協議を行いながら実施した。調査区には旧日本座標系を使用した10m四方のグリットを組み、グリットの呼称は第16次調査で使用されていた名称に合わせた。また、高架工事との兼ね合いから、西側のH31～I36区の調査区を「区域1」、東側のI35～M47区までを「区域2」と呼称することにした(第7図)。

当初の計画では発掘期間の前半期間を国道10号線に近い地点(「区域1」)の調査にあて、区域1の終了後に第16次調査の南側に位置する旧軌道敷き地点(「区域2」)の調査を実施する予定であった。ところが、調査着手の直前になって、高架工事との兼ね合いから「区域2」の調査を先行



第6図 中世大友府内町跡第96次調査区位置図



第7図 中世大友府内町跡第96次調査全体図(1/1,200)

区域1A  
区域1B

発掘調査の  
推移

して行うことになり、発掘調査が終了次第、東側から調査区を分割して、順次工事側に引き渡すことになった。また、「区域1」の調査では、工事用車両の通行スペースを確保するため、調査区を南側（「区域1A」とする）と北側（「区域1B」とする）に分割して行うことになった（第7図）。

以上のように、高架工事との調整から調査区の切り返しや工事への引き渡しを行うことになった上、雨天などの影響から、発掘調査期間は当初の終了予定より若干の延長を余儀なくされたが、高架工事の行程には影響を与えることなく、発掘調査を終了することができた。

発掘調査の推移を以下に記しておく。まず、区域2全体の表土剥ぎを平成24年（2012）5月17日から実施し、21日には発掘作業員を投入して本格的な発掘作業を開始した。上記のような事情で、発掘調査の人力による掘削作業は区域2の東側から着手し、8月10日に第1回目の空中写真を撮影した。8月20日にはL45～M47区までの遺構の完掘や記録作業を終え、当該地点を工事に引き渡した。8月16日からは台風や雨天等で区域2の西半分に入流した土を再び重機で取り除き、当該部分の遺構掘り下げに着手した。9月12日に2回目の空撮を実施した後、翌13日には実測作業などを終え、区域2全体を工事に引き渡した。続いて、9月18日からは区域1Aの表土剥ぎに着手。9月19日から11月22日まで包含層の掘削・遺構の掘り下げなどを行い、調査期間中の10月26日に3回目の空撮を実施した。11月26日からは区域1Bの表土剥ぎに着手。11月27日から平成25年（2013）1月23日まで発掘調査を行った。調査期間中の12月19日には4回目の空撮を実施。そして、埋め戻しや事務所などの撤去を含め、平成25年1月30日にはすべての現場作業を終了した。

発掘調査の期間中、区域2では複数面にわたる路面を確認した「第1南北街路」や柱穴群、貝類の廃棄に使用された土坑、14～15世紀代に遡る溝や堀などが調査され、銅製紅皿や水晶玉など注目すべき遺物の出土もあった。また、区域1では「御所小路」と推定される道路遺構や天正14年（1586）の焼土層や火災処理遺構、火災によって被熱した壁土、京都系土師器が大量に廃棄された落ち込み遺構、15世紀代に遡る堀などが調査され、分銅・土製独楽・掛仏（千手観音）などの注目すべき出土遺物も認められた。



## 第2節 遺構と遺物

### 1. 区域1（御所小路・御所小路町）の調査

#### （1）遺構の概要と基本層序

前節で記したとおり、区域1は中世大友府内町跡第96次調査の調査区西側に相当し、グリット番号H31～I36区の地点に位置する。工事中のスペースを確保するために、「区域1A」とした南半部、「区域1B」とした北半部に分割して調査したことも前述のとおりである。区域1Aの調査を終え区域1Bの表土剥ぎを行う際には、区域1Aとの境界部分が崩壊する危険を避けるため、区域1Aと区域1Bとの間に幅1.0～1.5m前後の空間が生じてしまったが、作業の安全性を重視して当該空間については発掘調査を実施していない。

区域1の地点は、府内古図および1987年刊行の『大分市史』収録の「戦国時代府内復元図」によると、御所小路町付近に相当する。

御所小路町

上層遺構群

表土剥ぎと包含層の掘り下げによって、まず、標高5.1m付近に「上層遺構群」（第9図）とした遺構面が広がっていることを確認した。当該遺構面には15世紀末葉から16世紀末葉の遺構が構築されており、部分的にはあるが、これら一部の遺構を覆うように焼土層が広がっている。この焼土層の広がりにはI34区からI35区にかけて認められ、特にI35区の一部では顕著な堆積がみられた（焼土層SX387）。この焼土層SX387は出土遺物や堆積状況から、天正14年（1586）の豊薩戦争時の焼土層と推定される。この焼土層の下位から上層遺構群が検出され、上層遺構群には細かくみると15世紀末葉から16世紀前葉・16世紀前葉から中葉・16世紀後葉から末葉の3時期に細別される遺構が構築されている。

天正14年  
(1586)  
焼土層SX387

16世紀後葉から末葉の時期には、豊後府内の東西道路のひとつである御所小路とそれに直行する方向に並ぶ柱穴群、それに加えて井戸・小型の溝・方形堅穴遺構・廃棄土坑・天正14年火災に伴う火災処理遺構などがある。遺構の状況に加えて、出土遺物に分銅などが認められることから、町屋（町場）の空間として利用されていたことがわかる。

16世紀前葉から中葉の時期には、H31区で大量の土器（カワラケ）廃棄遺構がみられる。このような遺構の存在は、当該地点が町屋ではなく、武家地の空間に取り込まれていたことを示唆する可能性がある。さらに、15世紀末葉から16世紀前葉の時期には、墓である可能性が考えられる土坑が複数構築されていた。

なお、上層遺構群の遺構面は西に行くほど傾斜する（標高が低くなる）傾向をみせており、H32区付近では検出標高が4.8m前後となる。

下層遺構群

上層遺構群の遺構面から約30cm下の標高4.8m付近には、「下層遺構群」（第10図）とした遺構面が広がっている。上層遺構群と下層遺構群の間に堆積する土層はすべて人為的な整地層であるが、層中に少量の炭化物や微量の焼土粒などが含まれているだけで、出土遺物には土器小片などが少量認められるのみである。当該遺構面には、堀SD372A・372Bなどが構築されている。SD372Bの南側には土塁状の積土遺構が存在した可能性があり、これらは居住に関わる区画遺構（例えば、連立方形館群の堀？）であったと推定される。下層遺構群の遺構面下には、薄く堆積する整地層が一部に認められるが、遺構の大半は地山と思われる黄褐色粘質土上面で検出した。薄く堆積する整地層からも遺物はほとんど出土していない。

砂礫層  
縄文時代晩期  
から古墳時代  
の遺物を含む

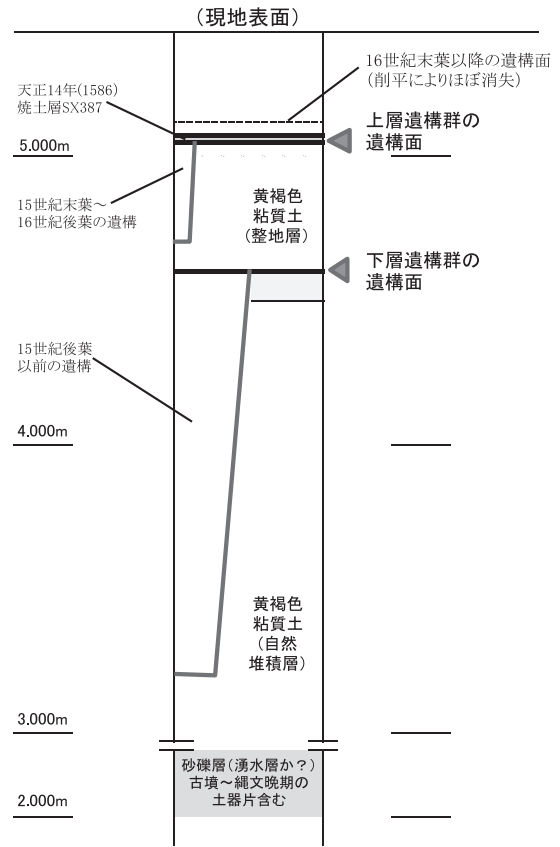
また、上層遺構群に属する井戸SE240やSE353の壁面での観察から、地山と思われる黄褐色粘質土は約1.5mほど堆積しており、その下位に砂や砂利で構成される砂礫層が堆積していることが確認できる。黄褐色粘質土以下は人為的な整地層ではなく、自然堆積土と推定している。井戸の底面がこの砂礫層を掘り抜いていることから、中世段階では当該層付近から湧水があった可能性が高い<sup>(1)</sup>。また、この砂礫層からは縄文時代晩期から古墳時代までの遺物が出土することがある。第

96次調査でも井戸SE353の掘り下げ中に、当該土層に包含されていたと推定される縄文時代晩期の突帯文土器（第55図122）の破片が出土した。これらの縄文時代から古墳時代の遺物の大半は、ローリングを受けており、遺物の角が取れているようなものが多いようである。

さらに、区域1Aの調査区東壁土層（第14図参照）の観察によって、焼土層や上層遺構群に対応する面の上位にも若干の整地層の堆積が認められる地点があり、本来は16世紀末葉以降の遺構面が存在した可能性が考えられる。しかしながら、区域1の調査では、当該時期以降の遺構としては御所小路と推定されるSF530の上位に堆積した整地層のみであり、16世紀末葉以降の遺構はその大半が削平などにより、発掘調査着手以前に消失した可能性が高い。

以上、区域1での基本層序をまとめると、右記のようになる（第8図）。

基本層序のまとめ



第8図 区域1土層模式図

- 上層遺構群の遺構面の上位に位置する16世紀末葉以降の遺構（大半が削平により消失）。
- 標高5.1m付近に広がる15世紀末葉から16世紀前葉の遺構面・「上層遺構群」とする。
- 標高4.8m付近に広がる15世紀後葉以前の遺構面・「下層遺構群」とする。
- 標高2.0～2.2m付近に堆積する砂礫層（縄文時代晩期から古墳時代の土器片を含む）。

上記のように、区域1の調査では3面程度の遺構面を確認したことになるが、b・cの「上層遺構群」・「下層遺構群」の遺構詳細を詳細な掘り下げと記録の対象とし、aについては壁面による確認に留まっている。また、dの砂礫層については面的な調査を行っていない。

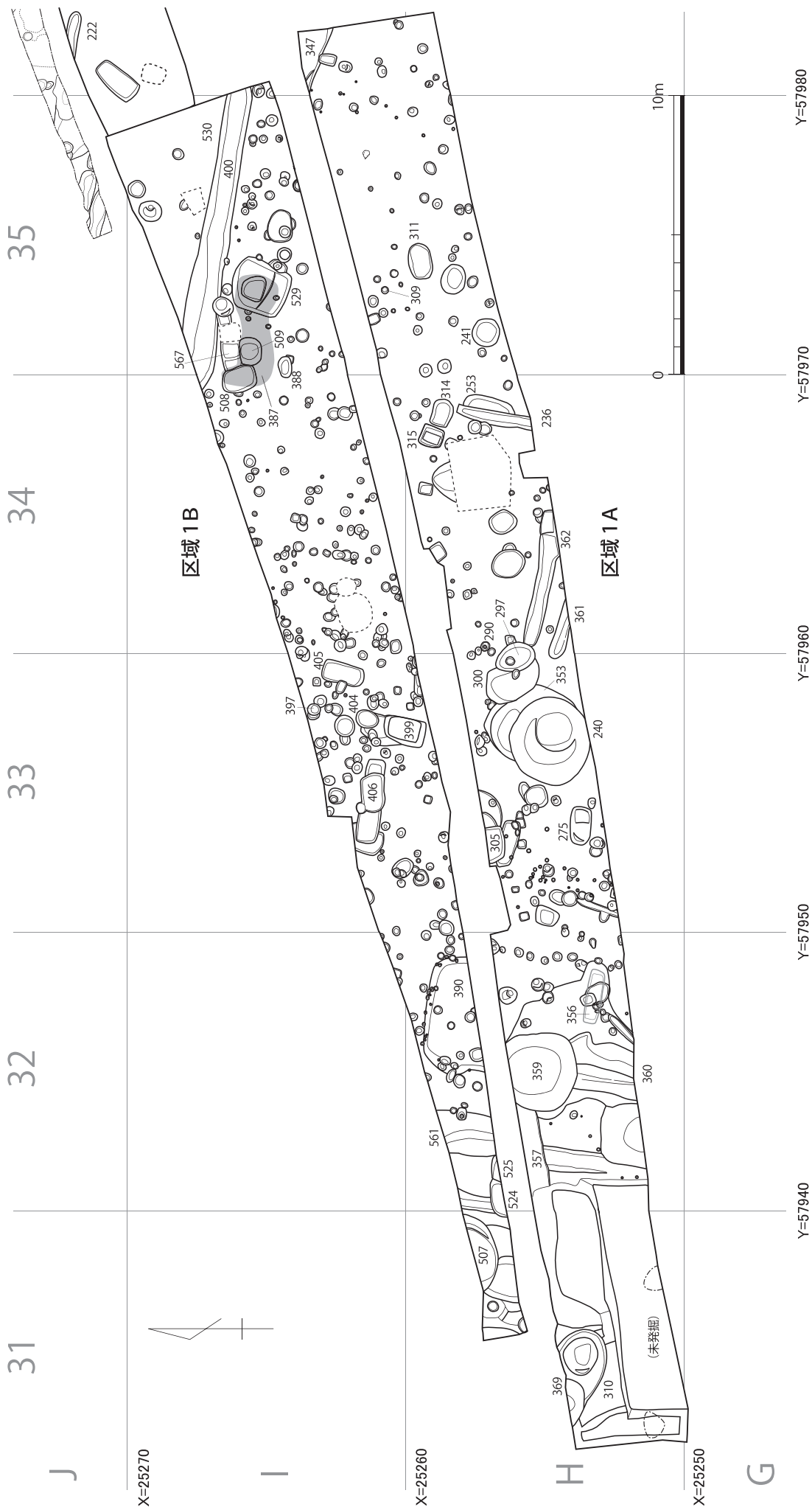
次項では、区域1で検出した遺構や出土した遺物の詳細について報告を行う。

註(1) 現在では地下水位が下がっているためか、夏期の調査では砂礫層から湧水が認められることが多いのに対し、冬期の調査では湧水がほとんどない。従って、井戸等を発掘調査する場合、夏の期間では湧水が認められるため、埋土の掘り下げに困難を伴うことが多いが、冬になると湧水が少なくなるため、掘り下げに手間がかかることが少なくなる。

第1表 中世大友府内町跡第96次調査遺構一覧表(区域1)

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置		遺構の時期	特記事項	掲載頁
SD222	S222	溝	区域2	J36区	16世紀後葉～末葉	御所小路北側溝?	20
SD235	S235	溝	区域1A	H31区	江戸時代(18世紀後半)	図面未掲載	45
SD236	S236	溝	区域1A	H34区	16世紀後葉～末葉		45
SX237	S237	遺物集中部	区域1A	H34区	15世紀末葉～16世紀前葉	SD362上面の遺物集中部	48
SE240	S240	井戸	区域1A	H33区	16世紀後葉～末葉		41
SK241	S241	土坑	区域1A	H35区	16世紀前葉～中葉	埋桶遺構・墓?	34
SP242	S242	柱穴	区域1A	H35区	16世紀後葉～末葉	完形の京都系土師器出土	68
SK253	S253	土坑	区域1A	H34区	15世紀末葉～16世紀前葉	墓?	35
SK275	S275	土坑	区域1A	H33区		墓?	36
SP290	S290	柱穴	区域1A	H34区	16世紀後葉～末葉	埋土および柱痕跡に焼土を多く含む	68
SK297	S297	土坑	区域1A	H33・H34区	15世紀末葉～16世紀前葉	SK300と同一遺構	27
SK300	S300	土坑	区域1A	H33・H34区	15世紀末葉～16世紀前葉	SK297と同一遺構、魚骨片出土	27
SK305	S305	土坑	区域1A	H33・H34区	16世紀後葉～末葉		29
SP309	S309	柱穴	区域1A	I35区	16世紀末葉～17世紀初頭	柱痕跡に焼土を多量に含む	68
SX310	S310	大型落ち込み遺構	区域1A	H31・H32区	16世紀前葉～中葉		49
SK311	S311	土坑	区域1A	H35区	不明		36
SK314	S314	土坑	区域1A	H34区	不明	墓?	36
SK315	S315	土坑	区域1A	H34区	不明	墓?	36
SP338	S338	柱穴	区域1A	H32区	不明		68
SP340	S340	柱穴	区域1A	H32区	不明	土師器小壺(8～9世紀)底部の大型破片が混入	68
SD341	S341	溝	区域1A	H31区	江戸時代(18世紀後半)	図面未掲載	45
SK347	S347	土坑	区域1A	I36区	15世紀末葉～16世紀前葉		30
SE353	S353	井戸	区域1A	H33区	15世紀末葉～16世紀前葉		41
SK356	S356	土坑	区域1A	H32区	15世紀末葉～16世紀前葉	墓?	37
SD357	S357	溝	区域1A	H32区	16世紀前葉～中葉	SD561と同一遺構・動物遺存体出土	46
SE359	S359	井戸	区域1A	H32区	16世紀前葉～中葉		44
SD360	S360	溝	区域1A	H32区	16世紀前葉～中葉		47
SD361	S361	溝	区域1A	H34区	15世紀末葉～16世紀前葉		48
SD362	S362	溝	区域1A	H34区	15世紀末葉～16世紀前葉		48
SK369A・B	S369	土坑	区域1A	H31区	16世紀後葉～末葉		31
SX370	S370	遺物集中部	区域1A	H31区	16世紀前葉～中葉		65
SK371	S371	土坑	区域1A	H33区	15世紀末葉～16世紀前葉	墓?	38
SD372A	S372A	溝(堀)	区域1A	H34区	15世紀代		73
SD372B	S372B	溝(堀)	区域1A	H33～H34区	15世紀代		73
SP386	S386	柱穴	区域1B	I34区	16世紀後葉～末葉	埋土に焼土を多く含む、分銅出土	68
SX387	S387	焼土層	区域1B	I34・I35区	16世紀後葉～末葉	天正14年(1586)焼土層	22
SK388	S388	土坑	区域1B	I34・I35区	16世紀後葉～末葉	火災処理土坑	22
SX390	S390	方形竪穴遺構	区域1B	H32区	16世紀後葉～末葉		69
SP397	S397	柱穴	区域1B	I33区	不明	礎盤石(柱穴内礎石)あり	69
SK399	S399	土坑	区域1B	H33・I33区	16世紀前葉～中葉	墓?	38
SD400	S400	道路側溝	区域1B	I35区	16世紀後葉～末葉	御所小路の南側溝	20
SX402	S402	遺物集中部	区域1B	H32区	16世紀前葉～中葉		67
SK404	S404	土坑	区域1B	I33区	不明	砥石2点(結晶片岩製)出土	33
SK405	S405	土坑	区域1B	I33区	16世紀前葉～中葉	墓?	38
SK406	S406	土坑	区域1B	I33区	15世紀末葉～16世紀前葉	墓?	40
SP408	S408	柱穴	区域1B	H31区	不明		68
SP409	S409	柱穴	区域1B	I34区	16世紀後葉～末葉		68
SE507	S507	井戸	区域1B	H31区	16世紀後葉～末葉		45
SK508	S508	土坑	区域1B	I34・I35区	16世紀後葉～末葉	火災処理土坑	22
SK509	S509	土坑	区域1B	I35区	16世紀後葉～末葉	火災処理土坑	22
SK524	S524	土坑	区域1B	H32区	16世紀後葉～末葉		33
SK525	S525	土坑	区域1B	H31・H32区	16世紀前葉～中葉		33
SK529	S529	土坑	区域1B	I35区	16世紀後葉～末葉	動物遺存体出土	26
SF530	S530	道路	区域1B	I35区	16世紀後葉～17世紀初頭	御所小路・土器細片を道路形成層に混入する	20
SD561	S561	溝	区域1B	H32区	16世紀前葉～中葉	SD357と同一遺構	46
SK562	SK562	土坑	区域1B	H33区	不明		75
SK567	S567	土坑	区域1B	H35区	16世紀末葉以前		34
SK570	S570	土坑	区域1B	H33区	不明		75

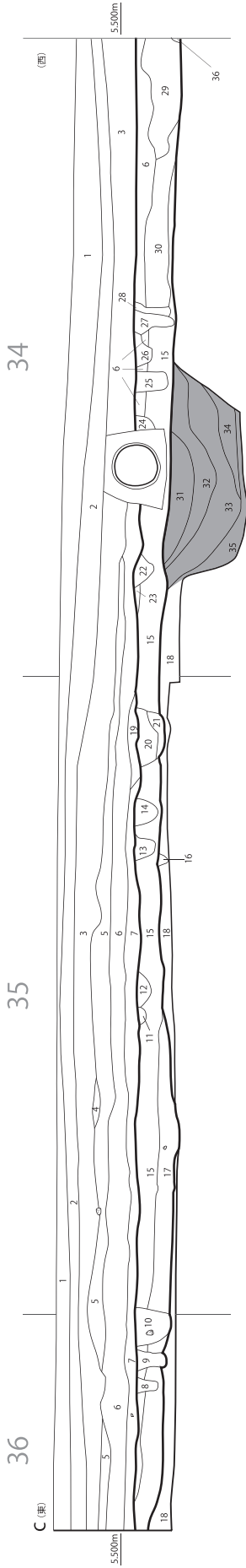
\* 網掛けは下層遺構群の遺構、他は上層遺構群の遺構



第9図 中世大友府内町跡第96次調査区域1 遺構配置図(上層遺構群)(1/200)

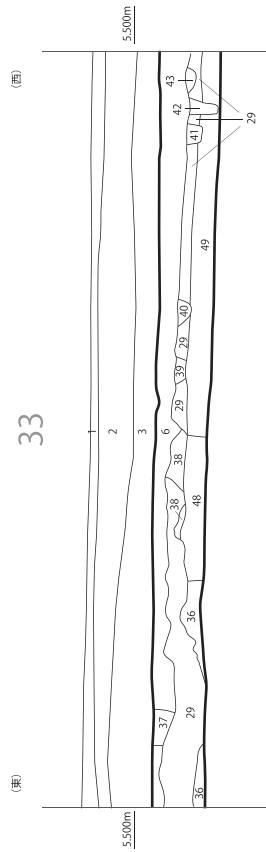


第10図 中世大友府内町跡第96次調査区域1 遺構配置図(下層遺構群)(1/200)

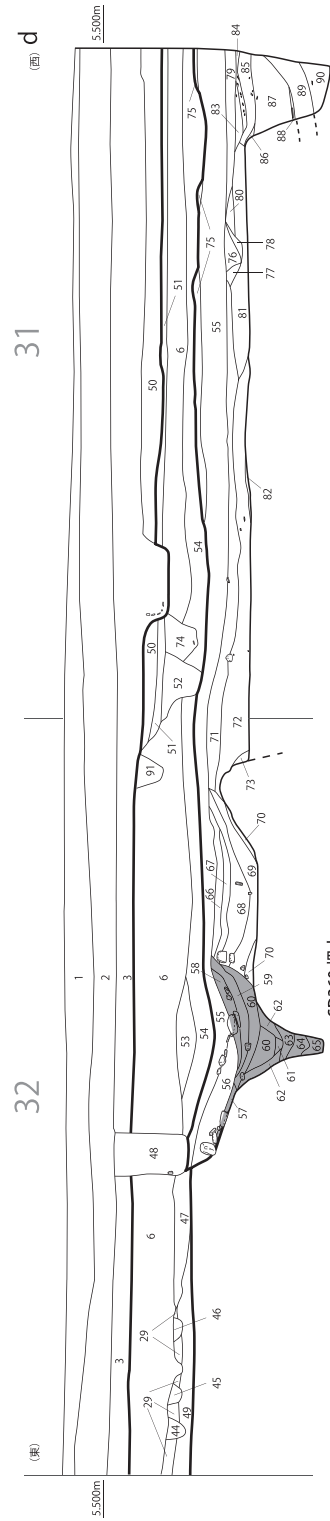


SD372A 埋土

- 1~3 近年の造成土・旧表土
- 4 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 5 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 6 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 7 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 8 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 9 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 10 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 11 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 12 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 13 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 14 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 15 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 16 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 17 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 18 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 19 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 20 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 21 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 22 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 23 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 24 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 25 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 26 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 27 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 28 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- 29 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 30 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 31 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 32 灰土, 灰, 砂粒 (少量) を含む。
- 33 灰土, 灰, 粘土ブロック, 砂粒 (少量) を含む。
- 34 灰土, 灰を含む。
- 35 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 36 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 37 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 38 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- 39 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 40 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 41 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 42 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 43 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 44 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 45 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 46 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 47 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- 48 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 49 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 50 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 51 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 52 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- 53 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 54 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 55 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 56 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 57 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 58 灰土, 灰 (大量) を含む。
- 59 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 60 灰土, 灰, 粘土ブロックを含む。
- 61 灰土, 灰, 粘土ブロック, 砂層 (少量) を含む。
- 62 灰土, 灰, 粘土ブロックを含む。
- 63 灰土, 灰, 粘土ブロック, 砂層 (少量) を含む。
- 64 灰土, 灰, 粘土ブロック, 砂層 (少量) を含む。
- 65 灰土, 灰, 粘土ブロック (大量) を含む。
- \* 31~35 SD360 の埋土
- \* 57~65 SD372B の埋土
- 66 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 67 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 68 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 69 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 70 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 71 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 72 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 73 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 74 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 75 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 76 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 77 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 78 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 79 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 80 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 81 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 82 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 83 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 84 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 85 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 86 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 87 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 88 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 89 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- 90 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- 91 暗褐色土 (Hue10YR3/3)

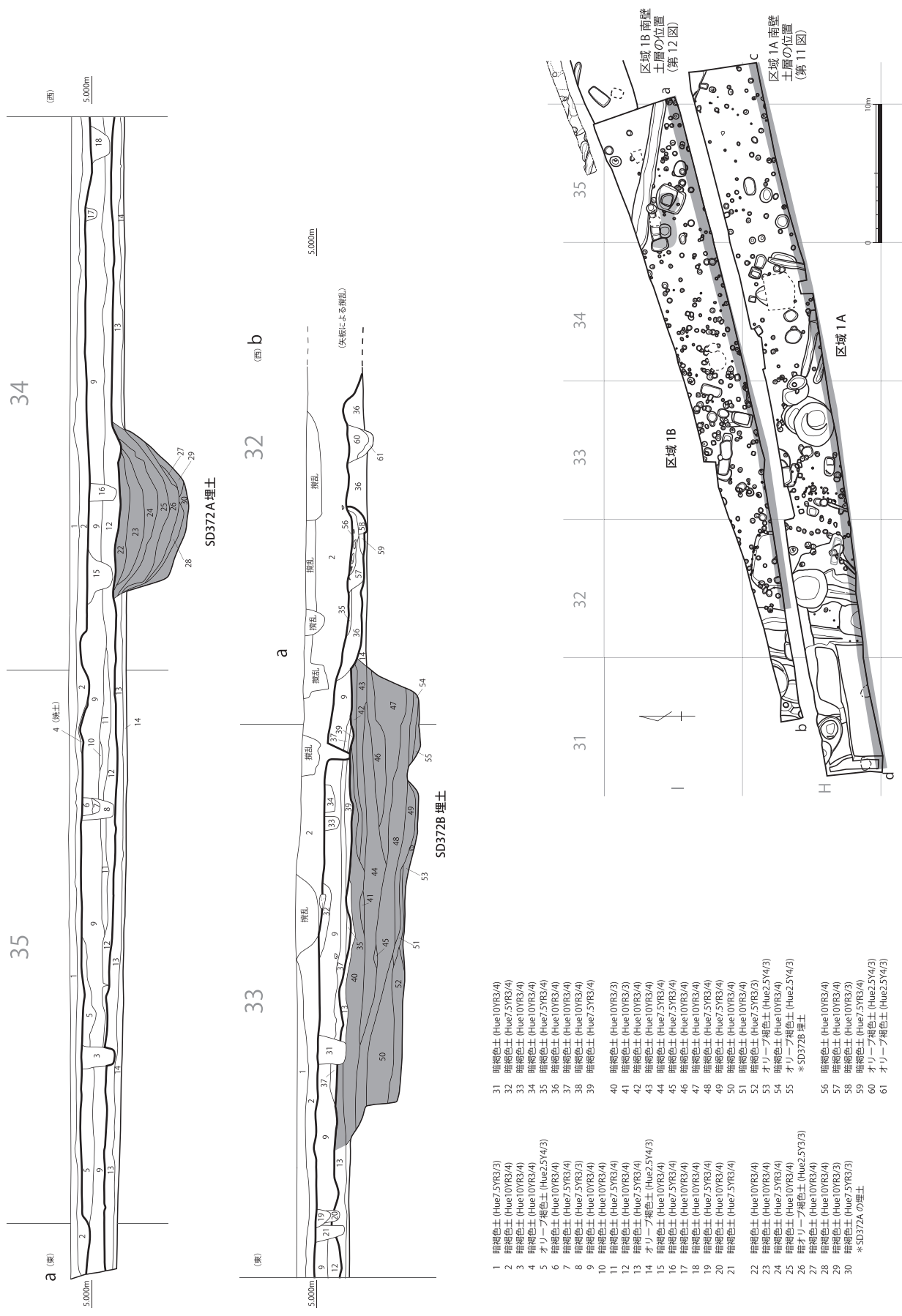


SD360 埋土



第11図 区域1A南壁土層図(1/100)





第12図 区域1B南壁土層図(1/100)

- 1 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 3 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 4 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 5 オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3)
- 6 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 7 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- 8 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- 9 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 10 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 11 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 12 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 13 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 14 オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3)
- 15 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 16 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 17 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 18 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 19 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 20 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 21 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 22 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 23 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 24 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 25 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 26 オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3)
- 27 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 28 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 29 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 30 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- \*SD372Aの埋土
- 31 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 32 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 33 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 34 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 35 オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3)
- 36 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 37 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 38 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 39 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 40 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 41 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 42 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 43 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 44 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 45 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 46 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 47 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 48 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 49 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 50 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 51 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)
- 52 オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3)
- 53 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 54 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 55 オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3)
- \*SD372Bの埋土
- 56 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 57 暗褐色土 (Hue10YR3/4)
- 58 暗褐色土 (Hue10YR3/3)
- 59 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)
- 60 オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3)
- 61 オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3)

(2) 上層遺構群 (15世紀末葉～16世紀末葉以降)

① 御所小路と道路側溝

SF530・SD400・SD222

I35区で検出された道路遺構とそれに伴う道路側溝である(第14図)。

「御所小路」

土器細片を混入

道路形成層の厚みが薄い

SF530は検出された位置関係から、豊後府内における東西道路のひとつである「御所小路」と判断される道路遺構である。土層断面(a-b間)の観察によると、厚さ数cm程度の粘質土を版築状に積み上げた状態が認められた。確認できる層の単位は4単位程度で、道路形成に伴う層群の厚みはすべて合わせても10cm程度である。また、層中には土器の細片が意図的に混入されていることが観察された。a-b間の土層断面は近年の工事等により、上面が削平を受けていたが、調査区東壁土層(c-d間)では比較的に道路形成土層の残りが良いことがわかった。当該部分でもa-b間断面と同様に厚さ数cm程度の粘質土の堆積が認められたが、その上位に10cm程度の粘質土と5cm程度の砂質土が堆積していた。砂質土はそれほど硬化はしていなかったが、当該土層の上面が路面として使用されていた時期があったと想定される。さらに、この砂質土の上位にも粘質土が堆積していた。これらの土層群は、後述する道路側溝SD400の上面に堆積しており、道路側溝が完全に埋没した後も道路が継続使用されていたことがうかがわれる。近年の削平を考慮するにしても、豊後府内における他の道路遺構と比較して、道路形成層の厚みが極めて薄く、このことが当該遺構の特徴のひとつとして掲げられよう。

SD400は御所小路の南側溝と推定される溝である。幅0.9～1.1m、深さ40cmで、長さ11mが確認されたが、東西ともさらに調査区外に伸びる。埋土中からは、陶磁器類や土錘等が出土した。

SD222(第13図)は区域2のJ36区で検出された遺構であるが、記述の都合上、本項目で報告する。その位置関係から、御所小路北側溝と推定される遺構である。規模は長さ1.7m、幅0/45m、深さ20cmで、東端部は途切れているが、西側は調査区外に伸びる。内部からは礫が数個出土したが、遺物は土器小片が出土したのみである。

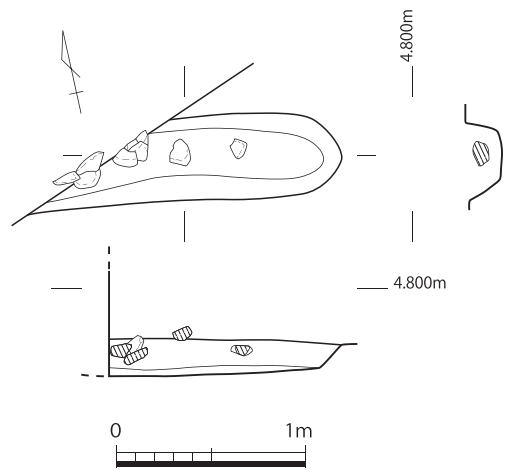
その他、中世大友府内町第7次調査(平成12・13年度調査)で報告されている東西方向に伸びる溝状の土坑も、その位置関係から御所小路の側溝であった可能性がある。

以上の遺構の時期については、SD400が出土遺物の様相から16世紀末葉に比定される。SD400によって切られているSF530の道路形成層はそれ以前の構築となるが、16世紀末葉をそれほど遡るものではないと思われる。調査区東壁土層(c-d間)で確認された道路形成層については、時期を知る手掛かりとなる遺物は出土していないが、SD400などを完全にパックしていることなどから、16世紀末葉から17初頭頃に比定して大過のないところであろう。

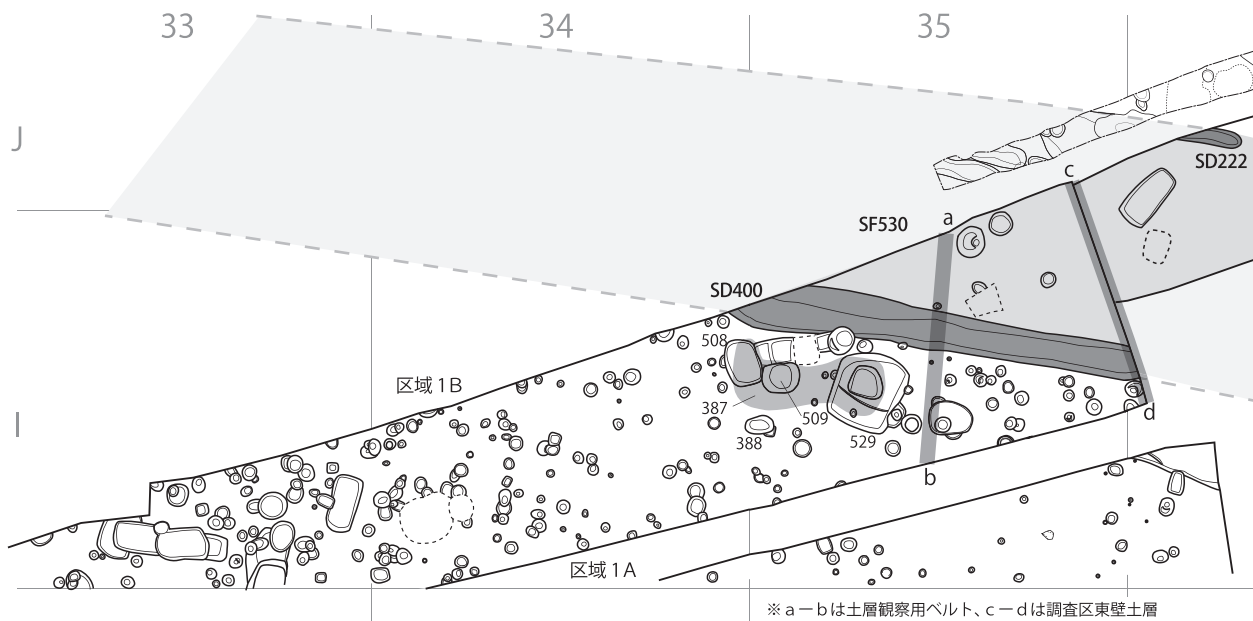
以上により、16世紀末葉のSF530(御所小路)はその南北に側溝を伴い、土器細片を道路形成層に混入させるといった特徴をもつ道路遺構であったが、16世紀末葉から17世紀初頭になると側溝を完全に埋め、道路幅員をやや広くして上面に砂を敷くなどの特徴がみられる道路遺構に変遷することが判明した(第14図下段)。

上記の遺構からの出土遺物は、第15～16図に示した。

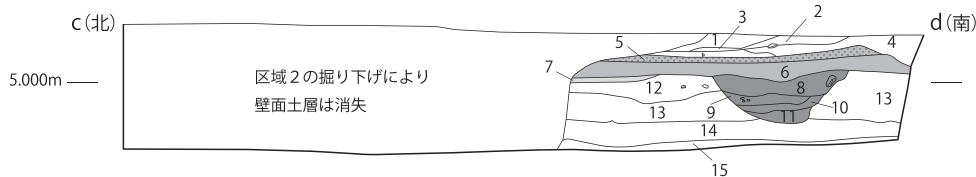
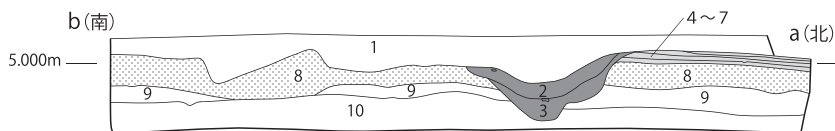
第15図1はSF530からの出土遺物で、管状土錘である。図示可能な遺物としては、これ1点に留まる。



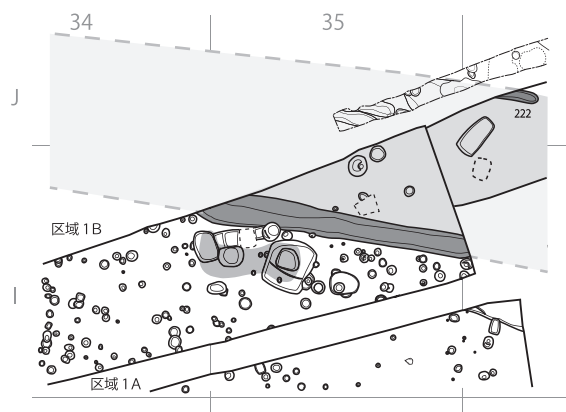
第13図 SD222実測図(1/40)



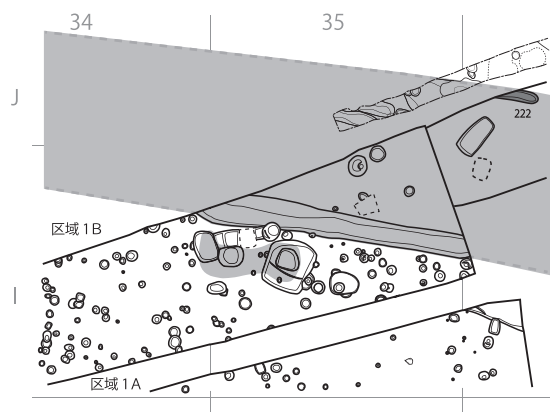
- 1 暗褐色土
- 2・3 暗褐色土 (SD400 埋土)
- 4~7 暗褐色土 (SF530 の形成土)
- 8 オリーブ褐色土 (下層に比べ砂質が強い)
- 9 オリーブ褐色土
- 10 オリーブ褐色土 (自然堆積土か? 遺物なし)



- 1~6 天正14年以降の道路形成層か?  
\* 5は砂質土
- 7 暗褐色土、SF530形成層
- 8~11 SD400の埋土
- 12 灰オリーブ褐色土
- 13 暗褐色土
- 14 暗オリーブ褐色土 (遺物極めて少量)
- 15 オリーブ褐色土 (自然堆積層か? 遺物なし)



**16世紀末葉**  
 道路側溝SD400を伴う道路遺構。  
 道路遺構の初源は16世紀末葉を遡らない?  
 土器細片を道路形成層に混入させる。

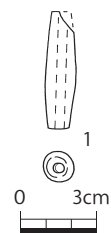


**16世紀末葉~17世紀初頭(?)**  
 側溝SD400を埋めて、幅員がやや広がっている。  
 上に砂を敷いている部位が認められる。  
 道路形成層中からは遺物が出土しなかった。

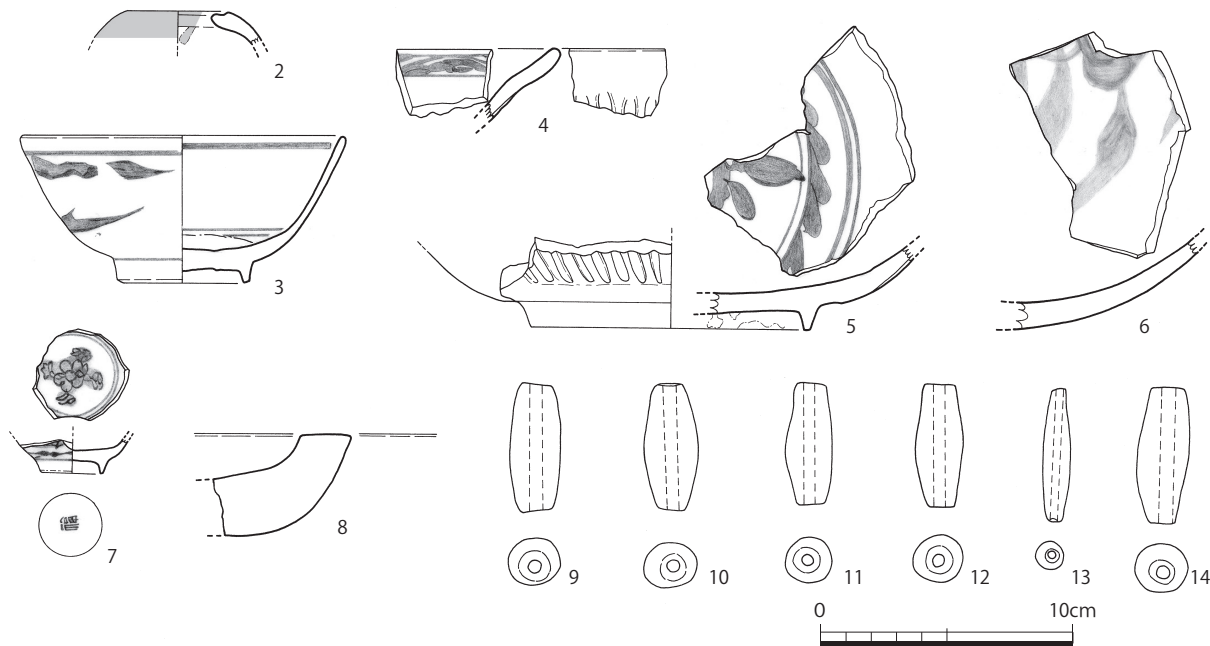
第14図 SF530実測図(1/200、1/300、土層図は1/60)

華南三彩  
水注？

第16図はSD400からの出土遺物である。2は華南三彩の口縁部破片で、外面と口縁部内面に緑釉を施し、内面は露胎となる。口縁端部には小型の蓋を置くための段を設けている。器種は不明であるが、水注の類であろうか。3～6は漳州窯系青花で、3は碗、4～6は皿である。4・5は外面に鏤文を有し、口縁部が屈曲する鏝皿である。7は景德鎮系青花小杯で、外底部に「福」字の銘款が認められる。8は和泉砂岩に類する石材を用いた茶臼の鏝部、9～14は管状土錘である。



第15図 SF530  
出土遺物 (1/3)



第16図 SD400出土遺物 (1/3)

②土坑など

SX387・SK388・SK508・SK509

壁土塊

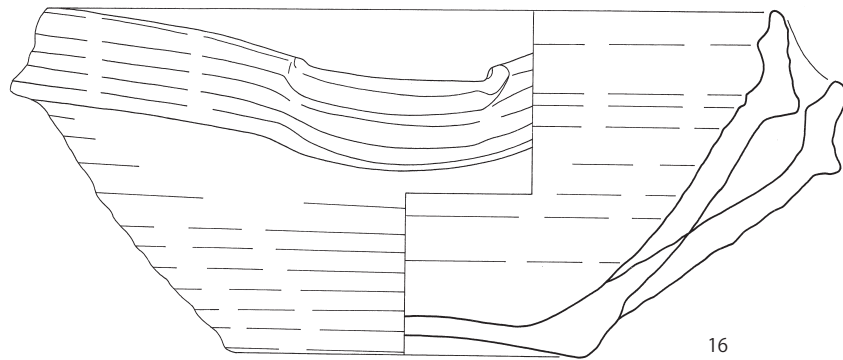
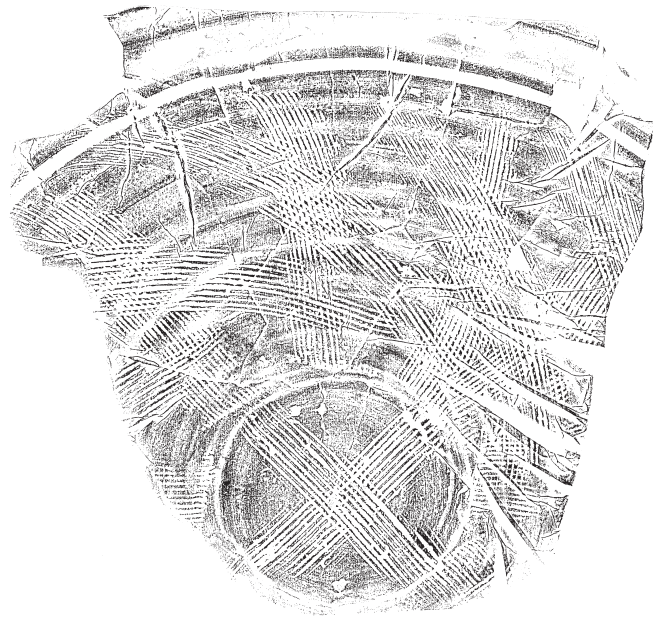
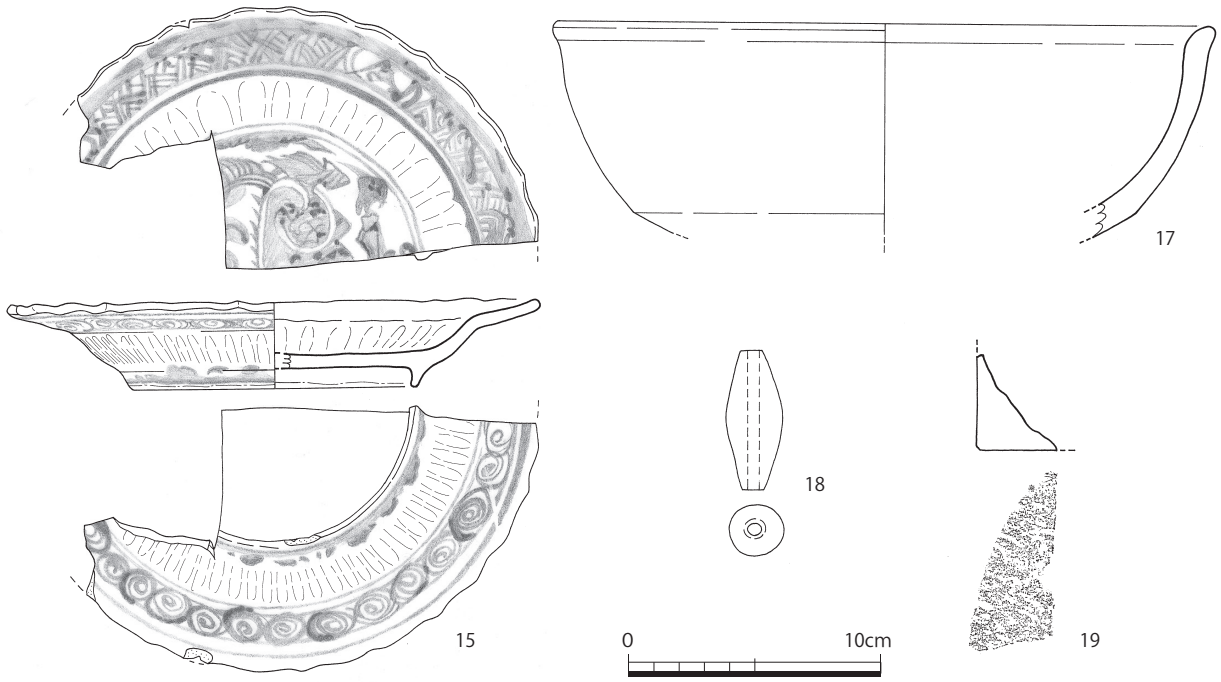
天正14年  
(1586)  
焼土層

SX387はI34～I35区で検出された焼土層で、後述するSK508とSK509、およびSK529の上面を覆うように分布している（写真図版4・位置については第14図参照）。焼土層の南西付近からは長さ45cm、幅30cm、厚さ5cm前後を測る壁土塊も出土している。遺構の状況や出土遺物から、SX387は天正14年（1586）の島津侵攻時に形成された焼土層である可能性が高い。

出土遺物は第17図で示した。15は景德鎮系青花皿で、小野分類F群青花皿（鏝皿）に分類される製品である。16は備前焼播鉢で、内面の播目は放射状播目と斜め播目が交差する形態となる。近世1期の製品である。17は瓦質土器鉢、18は土錘である。19は茶臼の上臼の破片で、和泉砂岩に類似した石材が使用されている。

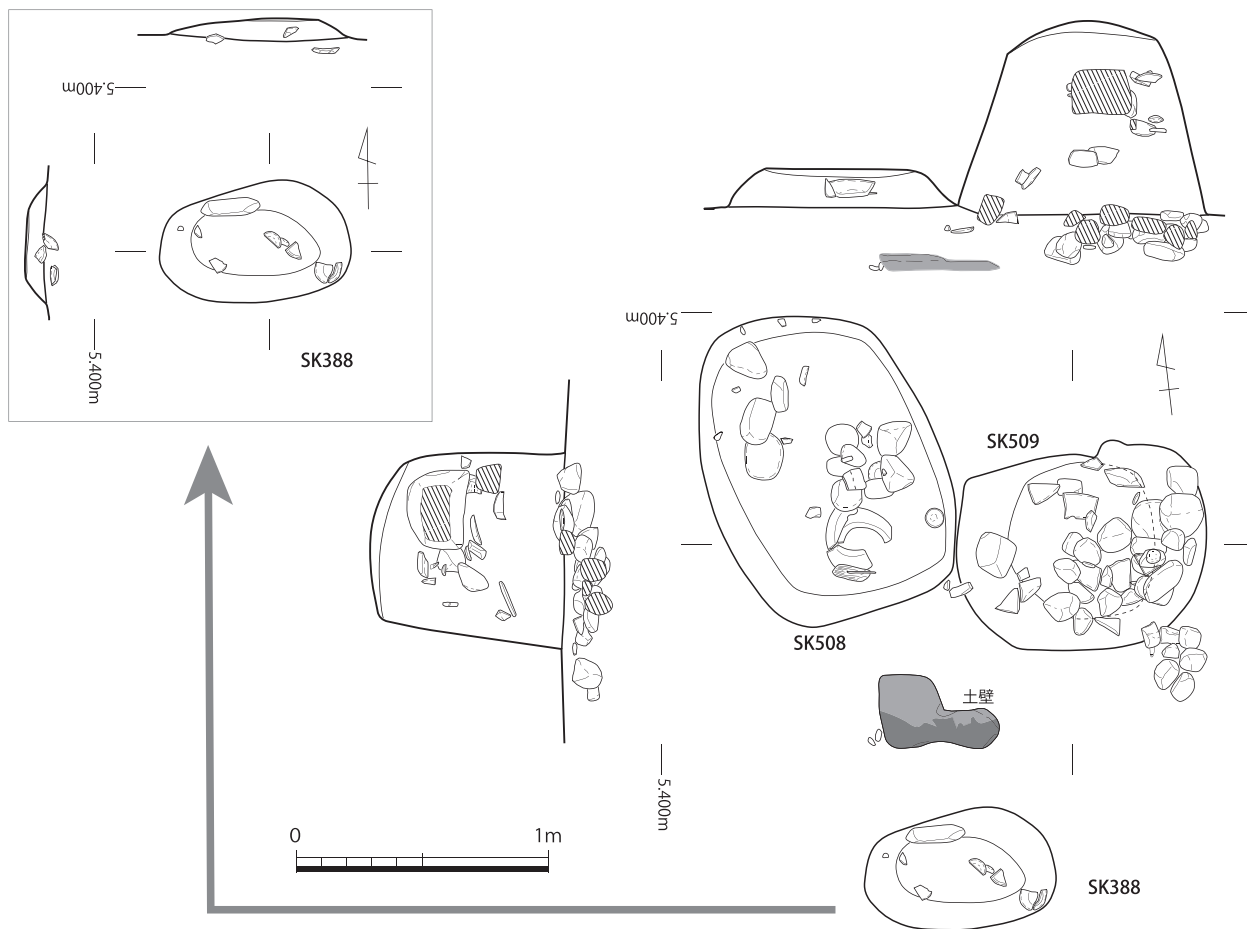
SK388（第18図）はI35区で検出された土坑で、その規模は長さ0.75m、幅0.46m、深さ8cmを測る。焼土層SX387に隣接する場所に位置しており、土坑の埋土にも多量の焼土塊が含まれている。土坑内部からは、京都系土師器や陶磁器片、礫などが少量出土した。

第19図20・21はSX387からの出土遺物である。いずれも京都系土師器皿で、21については内外面にススの付着が著しく、灯明皿として使用されたことがわかる。



第17図 SX387(焼土層)出土遺物(1/3)





第18図 SK388・SK508・SK509実測図(1/30)

SK508 (第 18 図) は I34 ~ I35 区で検出された土坑で、その規模は長さ 1.20 m、幅 0.92 m、深さ 17cm を測る。上面に焼土層 SX387 が分布し、埋土中には多量の焼土が含まれていた。土坑内部からは、焼土塊などとともに礫や土器類・土錘などが出土した。

第 19 図 22 ~ 26 は SX387 からの出土遺物である。22 ~ 24 は京都系土師器である。25・26 は瓦質土器鉢で、特に 25 については内外面に顕著なミガキが残る。27・28 は土錘である。

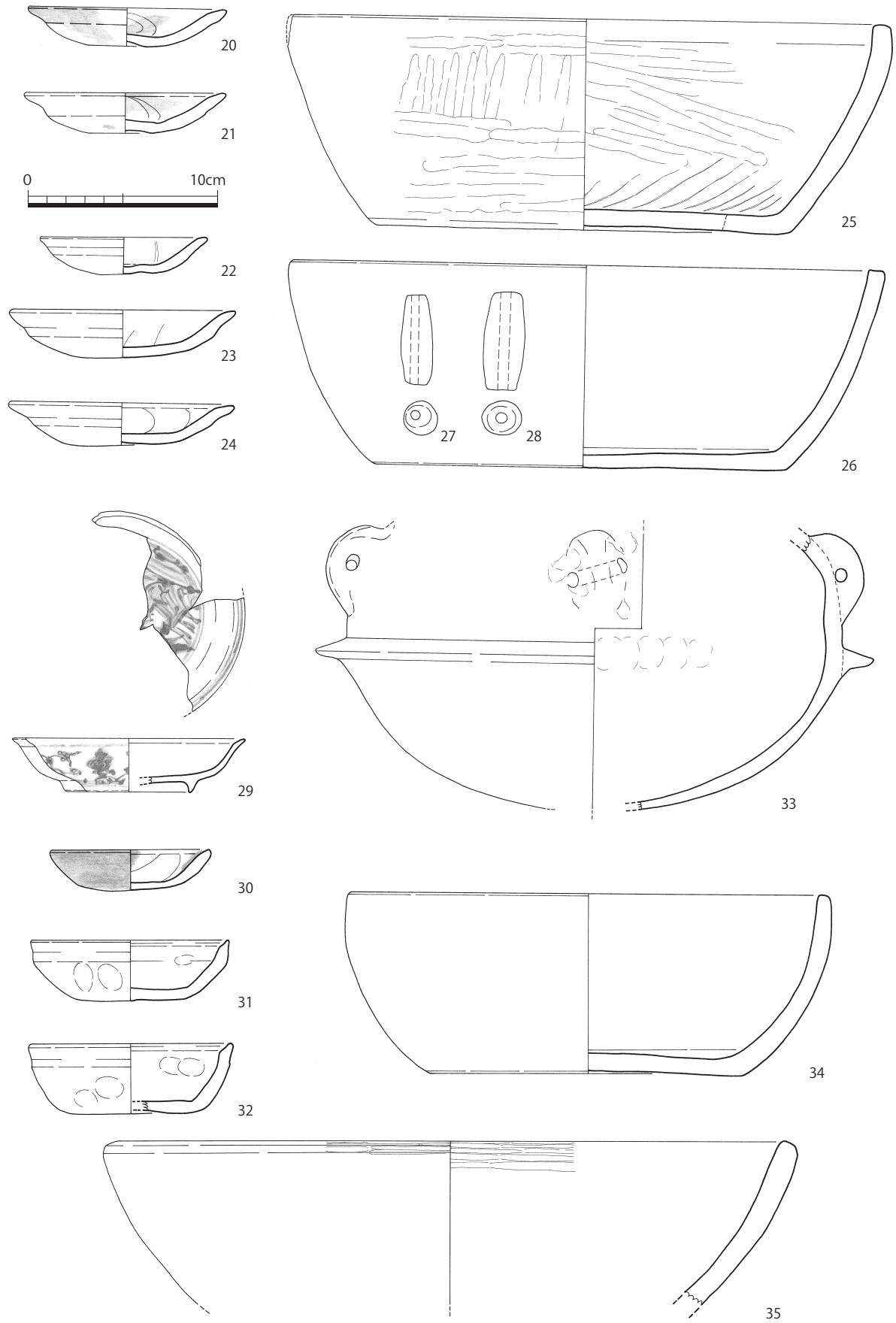
土錘が多い

SK509 (第 18 図) は I35 区で検出された土坑で、SK508 に隣接した場所で検出された。その規模は長さ 1.0 m、幅 0.78 m、深さ 78cm である。埋土中には焼土が多量に含まれており、土坑上面からは拳大から頭大の多量の礫が堆積していた。礫は埋土中の焼土を多く含む層より上位で出土している。出土遺物には土器・陶磁器類、石臼、土錘などがあり、土錘が 19 個とやや数が多いことが注目される。

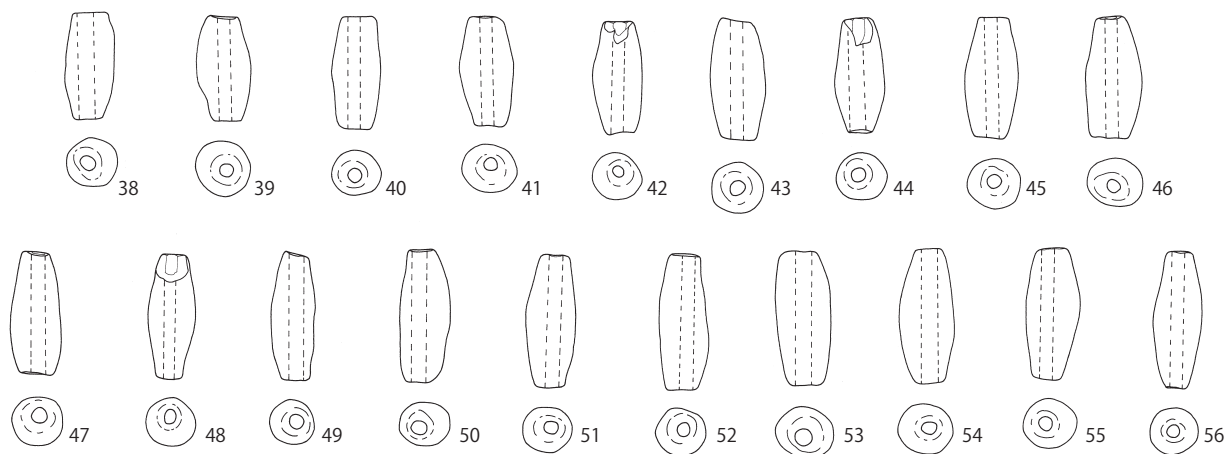
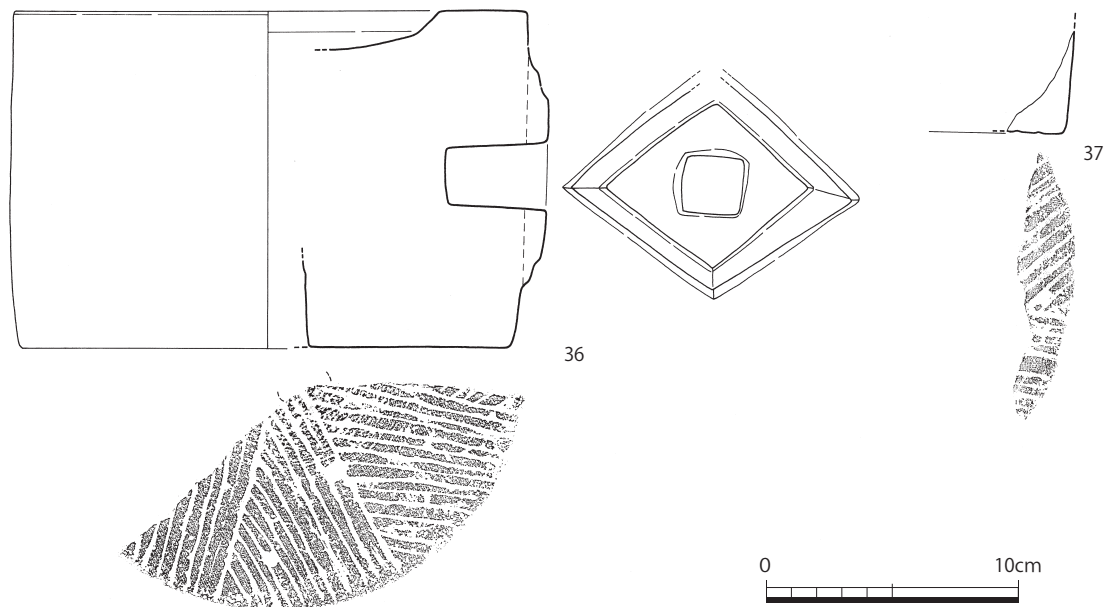
第 19・20 図 29 ~ 56 は SX387 からの出土遺物である。29 は景德鎮系青花皿で、小野分類 B 1 群青花皿である。30 ~ 32 京都系土師器で、30 は皿、31・32 は深手の坏である。30 は口縁部内面と外面にススが付着している。33 ~ 35 は瓦質土器で、33 は羽釜、34・35 は鉢である。36・37 は茶臼の上臼で、36 には把手の挿入口が残存している。38 ~ 56 は土錘である。

火災処理土坑

以上のように、SK388・SK508・SK509 の 3 つの土坑は、埋土に多量の焼土や焼土塊を含むことや出土遺物の年代観から、天正 14 年 (1586) の火災に伴う火災処理土坑と推定される。



第19図 SK388・SK508・SK509出土遺物①(1/3) 20・21 SK388, 22~26 SK508, 29~35 SK509



第20図 SK509出土遺物②(1/3)

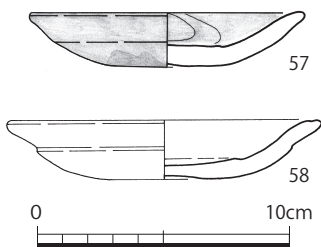
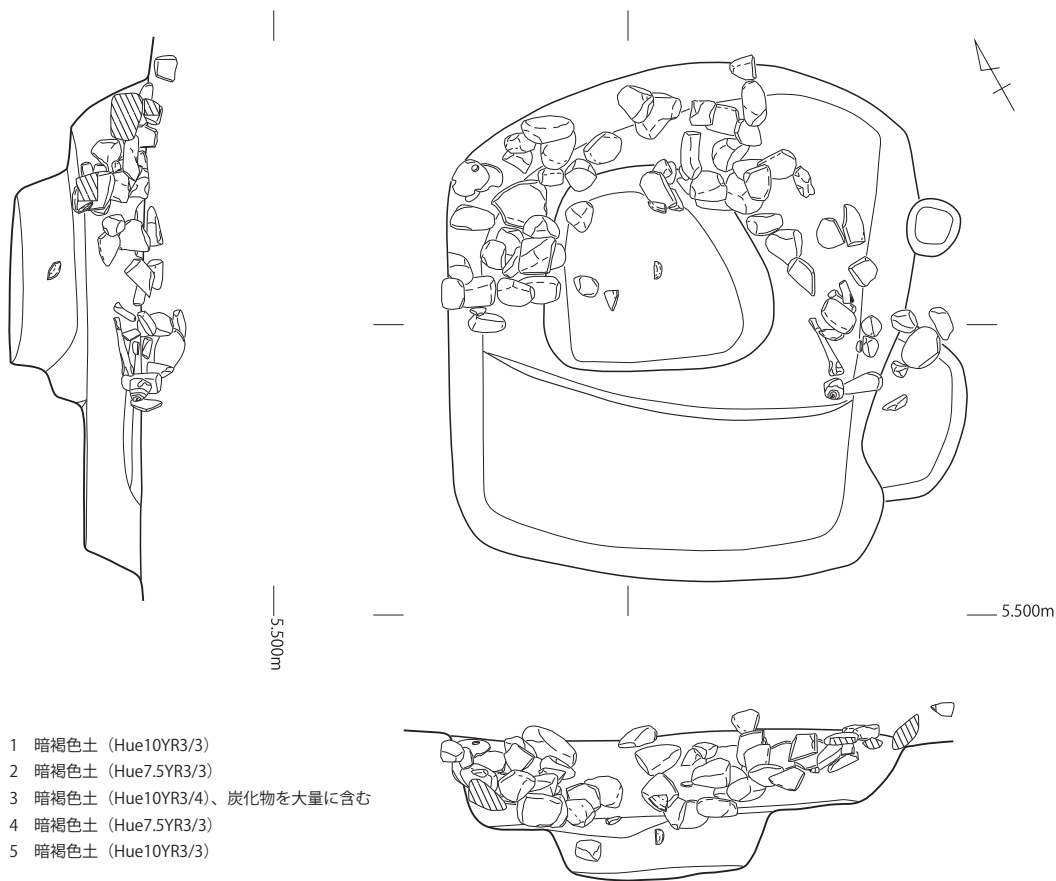
SK529

SK529 (第21図)はI35区で検出された土坑で、その規模は長さ2.05m、幅1.85m、深さ60cmである。完掘状況をみると、底部は2段ないし3段に掘り込まれており、加えて東側には別の遺構が切り合っている状況が観察された。上面の一部は焼土層SX387に覆われており、埋土上位からは礫が多数出土した。SK509(第18図)では土坑上面を覆う礫の下位に焼土が堆積していたが、SK529の場合は土坑上面が完全に焼土層に覆われており、礫は焼土の下位から出土している。出土遺物には土器・陶磁器類があり、また礫が分布するレベルからは骨や貝なども出土している。16世紀末葉に比定される廃棄土坑と思われる。

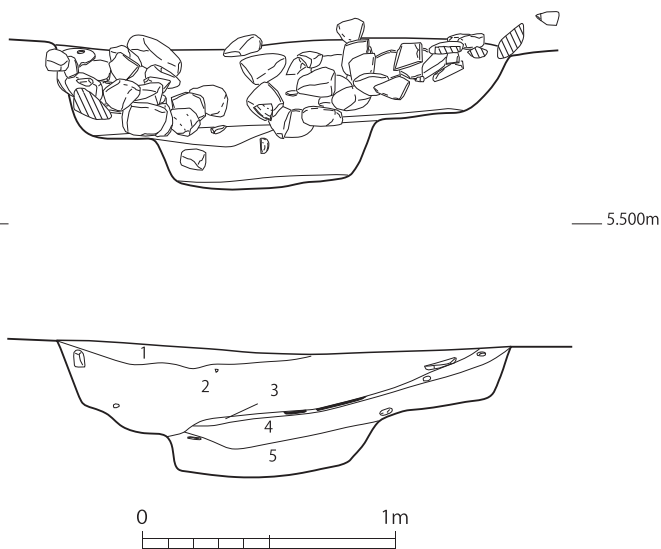
焼土と礫の関係  
骨・貝の出土  
廃棄土坑

出土遺物は第22図で提示した。57・58は京都系土師器の皿である。その他、遺物の状況が脆弱であるため、実測図を提示できていないが、底部に3個の貫通孔を設ける器種不明の瓦質土器の製品がある。





第22図 SK529出土遺物(1/3)



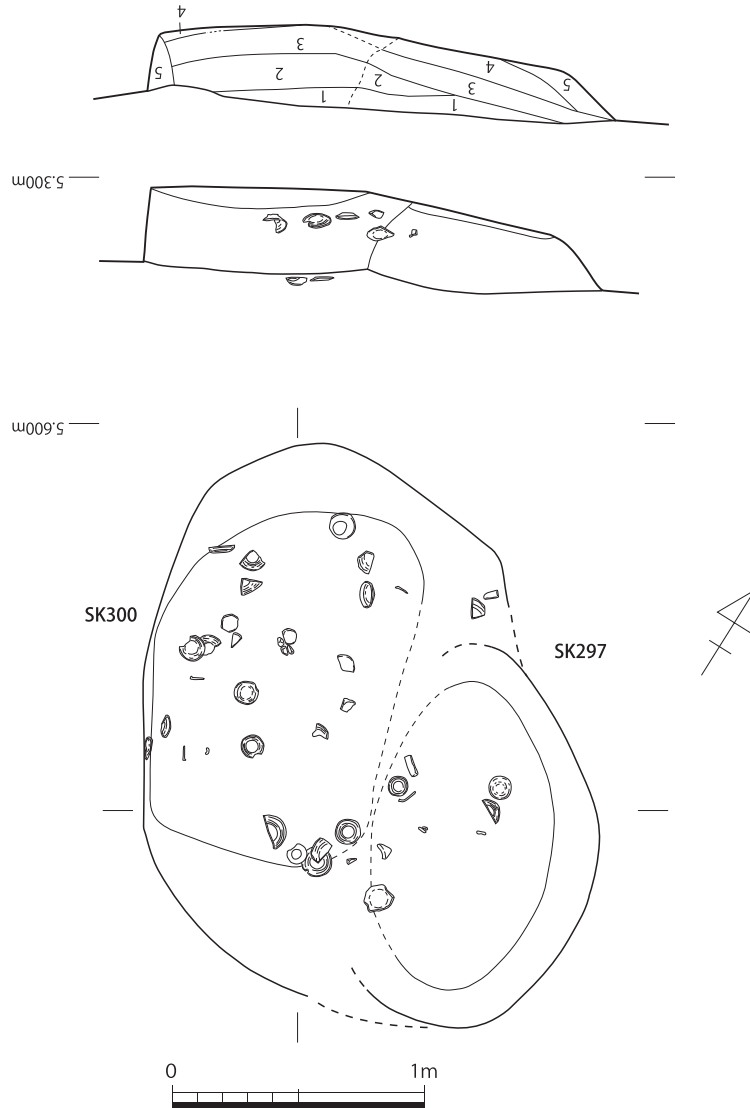
第21図 SK529実測図(1/30)

SK297・SK300

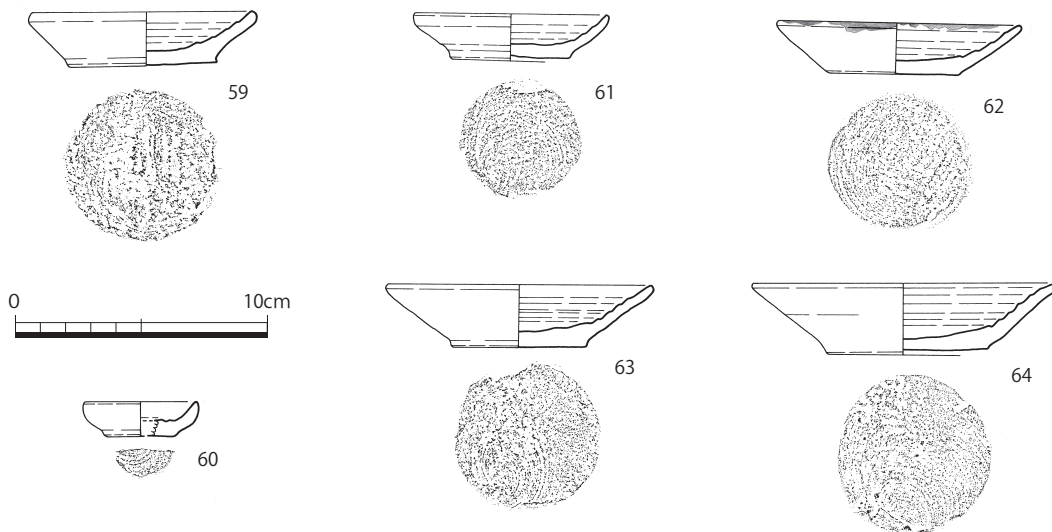
SK297・SK300 (第23図)はH33・H34区で検出された土坑である。検出当初は埋土のわずかな色調や性状の変化を重視して、切り合い関係にある2基の土坑と判断していた。しかしながら、完掘状況からみると、出土遺物が全く同時期のものであり、遺物の出土状況や堆積した土層などからも両者を別々の遺構と判別できなかったことから、最終的には2つの土坑を同一遺構と判断した。埋土には灰や炭化物を含む層と含まない層が交互に堆積していた。出土遺物にはロクロ目土師器・鉄器片(釘?)などが認められ、灰層中からは魚骨の小片も出土している。廃棄土坑と推定されるが、出土したロクロ目土師器には完形品や大型破片が多く、単なるゴミ坑とは考えがたい。ロクロ目土師器皿にはススが付着しているものは少数で、その大半は食器(「カワラケ」として使用された後に廃棄されているようだ。埋土に炭・灰などを多く含み、小片ながらも動物遺存体が出土

炭・灰を含む  
魚骨の出土  
カワラケ  
廃棄土坑?

- 1 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4)  
粘質土層, しまりあり。  
焼土, 炭, 石 (1~2cm 程) を含む。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/4)  
粘質土層, しまりあり。  
焼土, 炭, 砂粒 (少量) を含む。
- 3 暗オリーブ褐色土 (Hue2.5Y3/3)  
粘質土層 (粘質強), しまりあり。  
焼土, 炭, 粘土ブロック, 石 (1~2cm 程) を含む。
- 4 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)  
粘質土層, しまりあり。  
焼土 (大量), 炭 (大量) を含む。
- 5 暗褐色土 (Hue10YR3/3)  
粘質土層, しまりあり。  
焼土, 炭, 粘土ブロックを含む。



第23図 SK297・SK300実測図(1/30)



第24図 SK297・SK300出土遺物①(1/3)

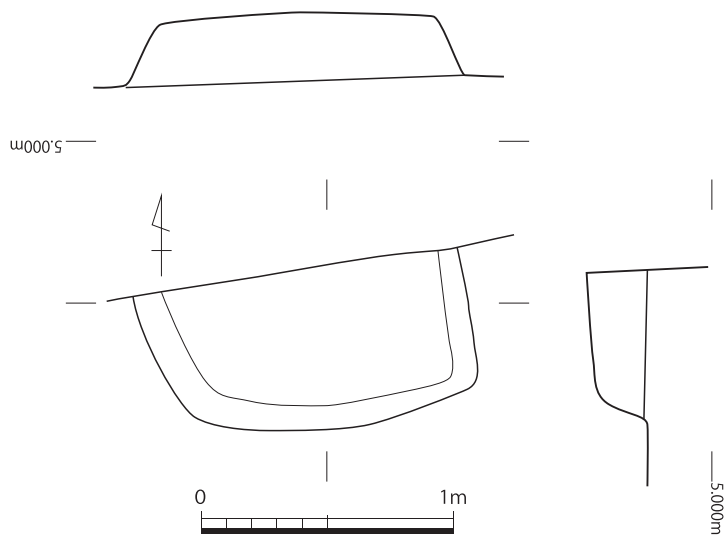
していることも、他の土坑と異なる。以上のことから、当該土坑は宴会などで使用された「カワラケ」をまとめて廃棄した遺構であろうか。出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。

第24・25図はSK297・SK300の出土遺物で、いずれもロクロ目土師器である。60～71がSK300、59がSK297からの出土遺物として取り上げた。60は口径が小さい小皿となり、他は通常のサイズの皿である。胎土について着目すると、色調が赤褐色を呈するもの(59～64)と淡黄褐色を呈するもの(65～71)の2者が存在していることが注意される。他に銅銭の破片が出土しているが、錆出が著しいため、図示していない。

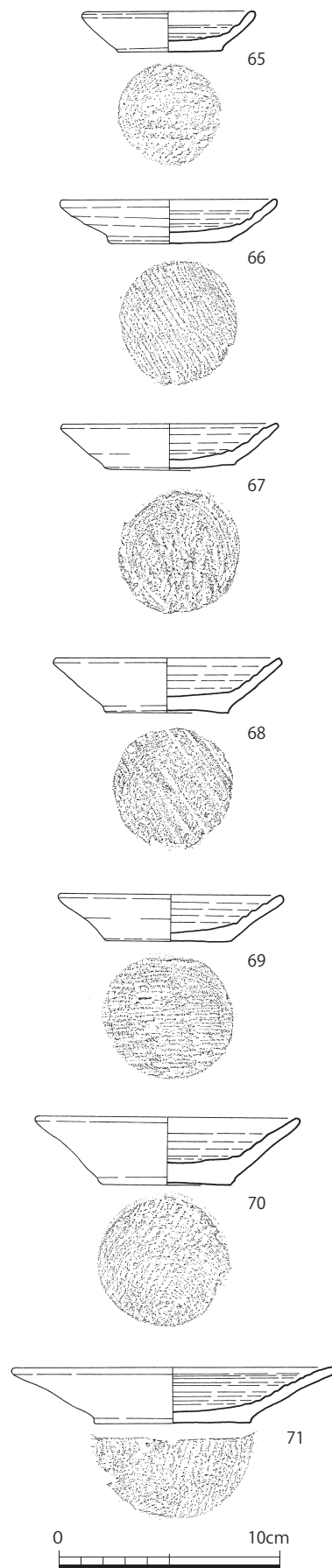
色調に  
2種類あり

### SK305

SK305(第26図)はH33区に位置する土坑で、その規模は長さ1.3m、幅0.7以上m、深さ20cmである。遺構の北側は未調査の部分に伸びている。15世紀末葉から16世紀初頭の土坑SK371を切って構築されており、また下層遺構群に属するSK1213およびSK1214はSK305の下位で検出されている。出土遺物は少ないが、埋土中から備前焼播鉢の口縁部などが出土した。遺構の切り合い関係や出土遺物から、16世紀後葉から末葉に比定される廃棄土坑であろう。

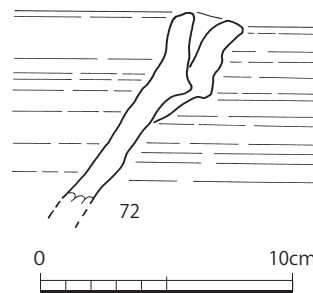


第26図 SK305実測図(1/30)



第25図 SK300出土遺物②(1/3)

第27図72で示した遺物は、備前焼播鉢の口縁部である。その形態から、中世6期から近世1期に分類される。残存部分の内面には播目が認められない。



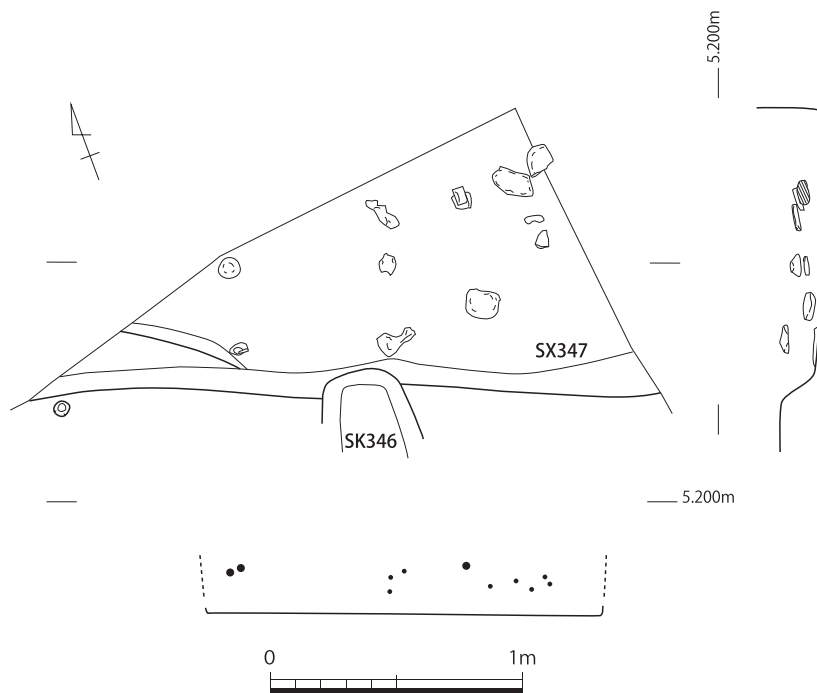
第27図 SK305出土遺物(1/3)

**SK347**

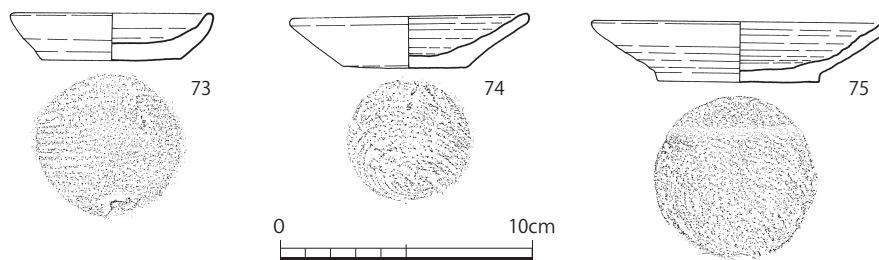
SK347(第28図)はI36区で検出された土坑で、その規模は長さ2.5m以上、幅1.1m以上、深さ11cmを測る。北側と東側は調査区外に伸び、遺構の平面形態や詳細な規模は不明である。さらに、遺構南辺の一部を時期不明の土坑SK348によって切られている。埋土中には焼土粒を多く含み、土器片も一定量が出土した。出土遺物の年代観から遺構の年代は15世紀末葉から16世紀初頭に比定されるが、その全容を検出できなかったこともあり、遺構の性格は不明である。

埋土に  
焼土粒を  
多く含む

第29図73～74はSK347からの出土遺物で、ロクロ目土師器の皿である。胎土はいずれも赤褐色を呈する。

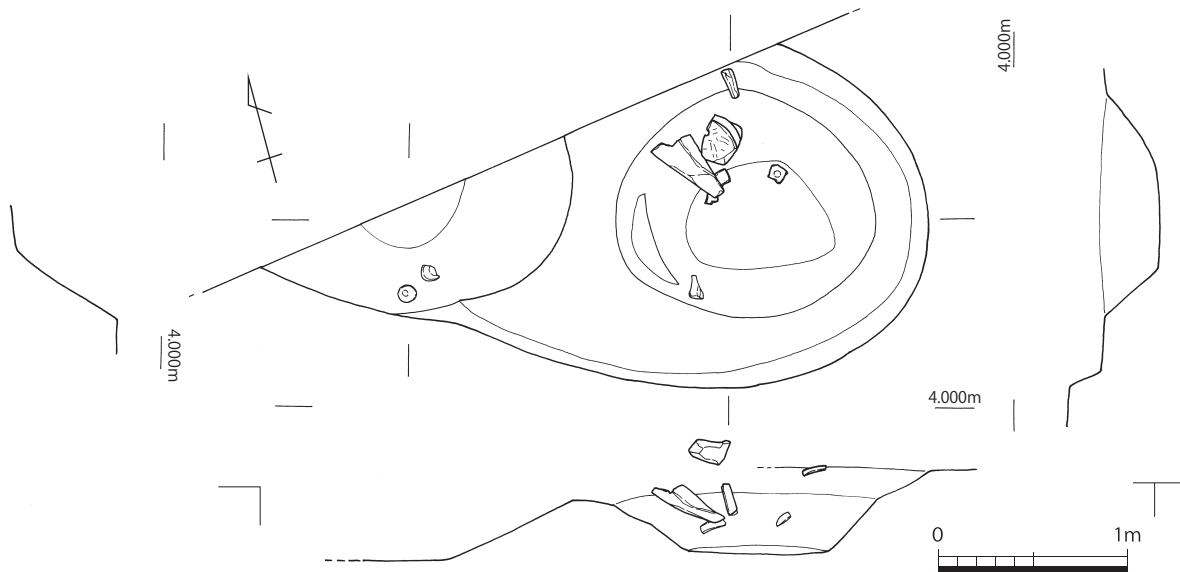


第28図 SK347実測図(1/30)



第29図 SK347出土遺物(1/3)





第30図 SK369A・SK369B実測図(1/40)

**SK369A・SK369B**

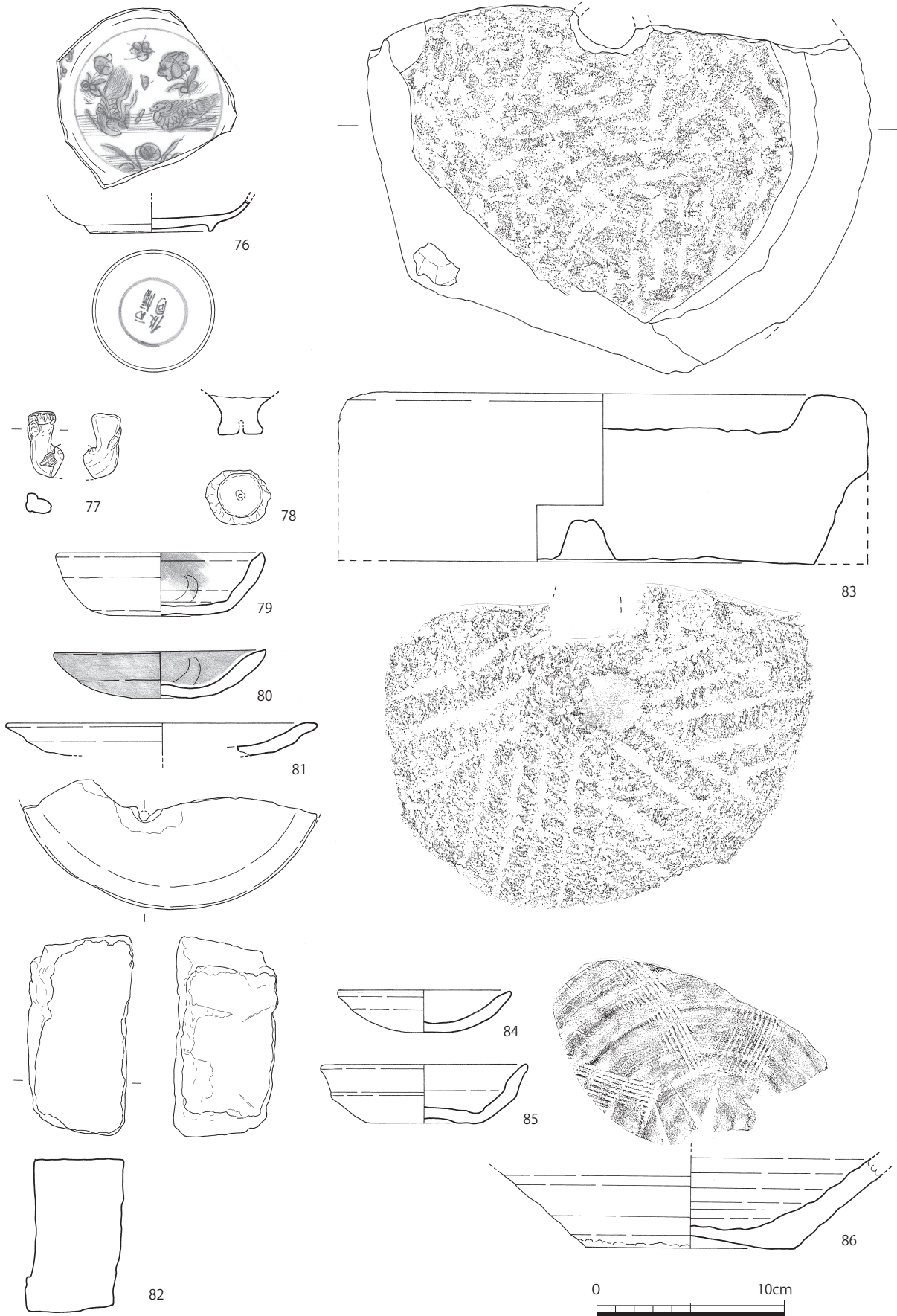
動物遺存体  
 廃棄土坑

SK369A・SK369B（第30図）は切り合い関係にある土坑で、H31区で検出された。後述する大型落ち込み遺構SX310（16世紀前葉～中葉）が完全に埋没した後の遺構上面を切り込んで構築している。遺構の構築順序を確認しておく、SX310→SK369A→SK369Bとなる。SK369Aの平面形態は略楕円形で、中央部は一段低く掘り込まれている。その規模は長さ3.15m、幅1.85m、深さ45cmを測る。埋土中より、礫や土器・陶磁器類・石臼などのほかに、動物遺存体なども出土した。また、注目すべき遺物としては白磁獅子形燭台の破片がある。遺構の性格は廃棄土坑であろう。SK369Bの平面形態は略楕円形で、北側は調査区外に伸びる。その規模は長さ1.6m以上、幅1.1m以上、深さ40cmを測る。埋土中から土器類や備前焼播鉢などが出土した。これも遺構の性格は廃棄土坑であろう。遺構の切り合い関係や出土遺物の年代観から、SK369A・SK369Bの構築年代は16世紀末葉に比定される。

白磁獅子形置物

第31図76～83はSK369Aの出土遺物である。76は中国景德鎮系青花で、小野分類のE群青花皿に分類される製品である。外底部には一重圏線内に「万福収同」の銘款が描かれる。77は中国産の白磁で、獅子形置物の「腕」に相当する部位であろう。78は瓦質土器香炉の脚部と推定されるもので、底部に板などに固定するための小孔が認められる。79～81は京都系土師器で、79は深手の坏、80・81は皿である。なお、81の底部には貫通孔が認められる。82は砂岩質の岩石を素材とする砥石、83は安山岩を素材とする石臼である。

84～86はSK369Bの出土遺物である。84・85は京都系土師器で、84は皿、85は深手の坏である。86は備前焼播鉢の底部で、内面の播目が放射状播目のみであることから、中世6期の製品と思われる。



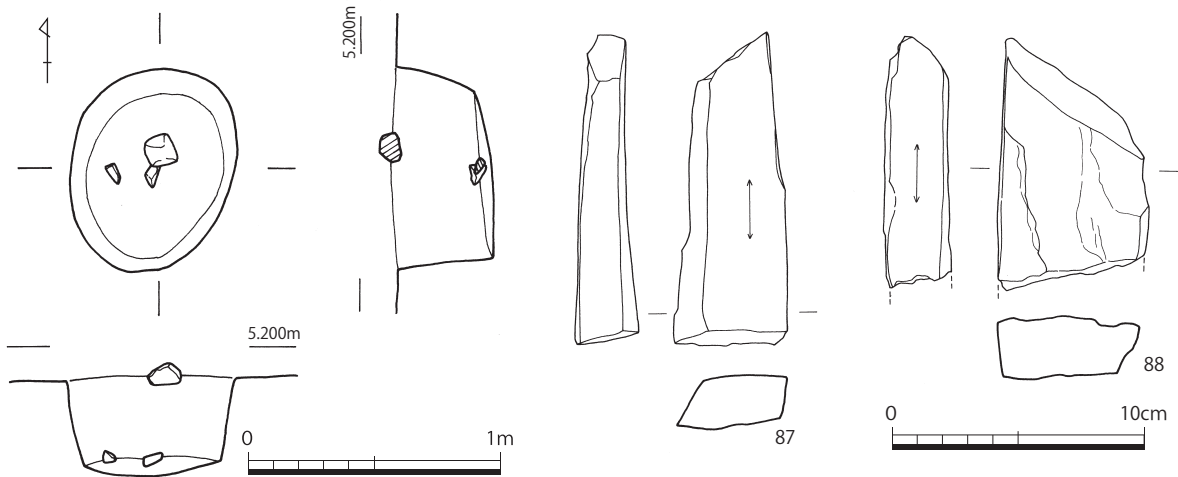
第31図 SK369A・SK369B出土遺物(1/3)

SK404

SK404 (第32図) はI33区に位置する土坑である。平面形態は略楕円形状を呈し、その規模は長さ0.8m、幅0.6m、深さ40cmを測る。下層遺構群のひとつである土坑SK1378の上位で検出された。土坑埋土は単一の暗褐色土であったが、埋土上位から拳大の礫、埋土下位から結晶片岩製の砥石が2個体出土した。礫や砥石以外の遺物は認められない。出土遺物が僅少なこともあり、遺構の性格や詳細な時期は不明である。

結晶片岩製  
砥石2点が  
出土

第33図87・88はSK404からの出土遺物で、結晶片岩を素材とする砥石である。結晶片岩を粗割りした略台形状の石片が使用されている。

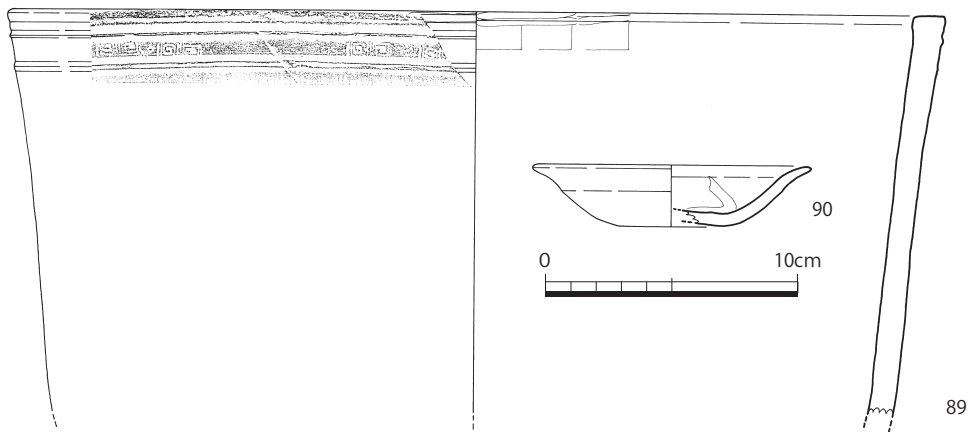


第32図 SK404実測図(1/30)

第33図 SK404出土遺物(1/3)

SK524・SK525

SK524・SK525 (写真図版6) は切り合い関係にある2基の土坑で、H31・H32区に位置する。遺構の構築順序はSK525 → SK524である。SK524は平面形態が不整形で、その規模は長さ1.0m、幅0.28m、深さ15cmである。出土遺物の年代観から、16世紀末葉の廃棄土坑である。第34図89はSK524からの出土遺物で、瓦質土器火鉢である。口縁部外面に低い2条の突帯をめぐらし、突帯間に二連雷文の刻印を押捺する。16世紀末葉の豊後府内を中心に分布する在地系の瓦質土器であることが知られている。SK525は平面形態が半楕円形を呈し、その規模は長さ1.28m、幅0.48m、深さ15cmである。この遺構も、出土遺物の年代から、16世紀前葉から中葉の廃棄土坑であろう。90はSK525からの出土遺物で、京都系土師器の皿である。器壁がやや薄いことから古相を呈するタイプで、その製作年代は16世紀前葉から中葉に比定される。



第34図 SK524・SK525出土遺物(1/3)

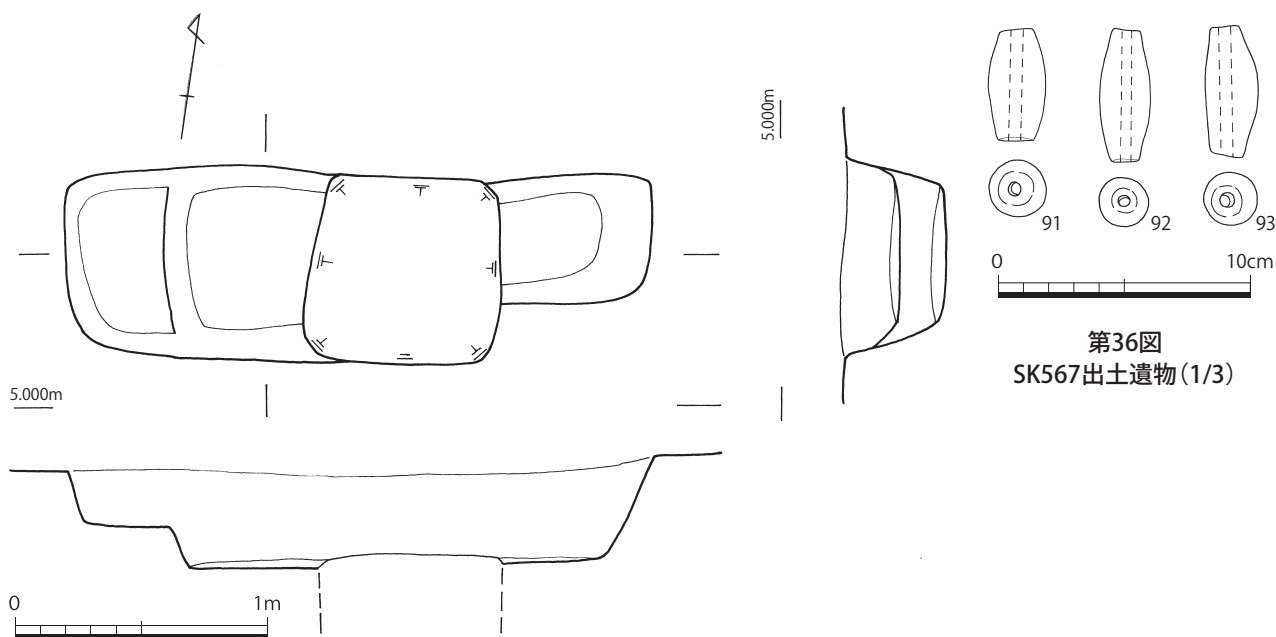


SK567

SK567 (第35図) はI35区で検出された土坑である。16世紀末葉の火災処理土坑SK508およびSK509と切り合い関係を有し、これらの遺構に切られている。遺構の平面形態は略長方形で、底部が2段掘り。その規模は長さ0.94 m以上、幅0.8 mである。土坑の底面は2段掘りとなり、深さはそれぞれ20 cmと40 cmである。遺構の東側は攪乱(近年の電柱跡?)によって破壊されている。埋土からは土錘と土器片が少量出土した。底部が2段掘りとなるなど、土坑の形態がやや特異であるが、その性格を明らかにすることはできなかった。遺構の年代は不明であるが、切り合い関係から、その構築年代は16世紀末葉以前に比定できる。

性格不明

第36図91~93はSK525からの出土遺物で、管状土錘である。図示可能な遺物は、これ以外認められない。



第35図 SK567実測図(1/30)

第36図 SK567出土遺物(1/3)

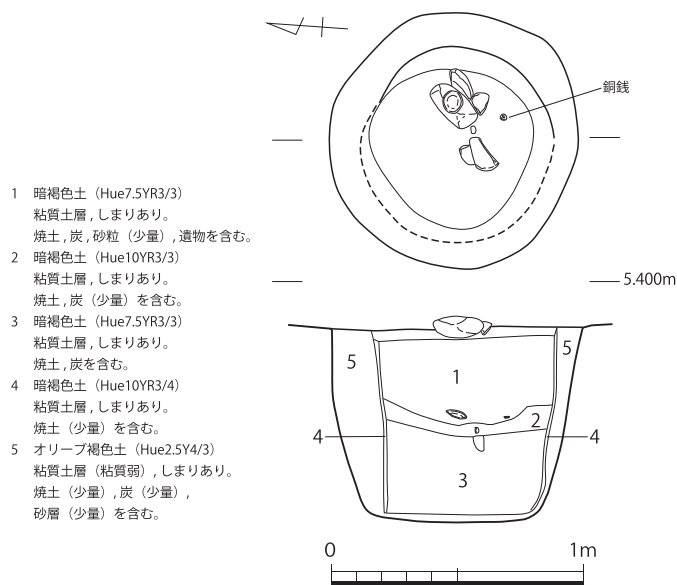
SK241

SK241 (第37図) はH35区で検出された土坑である。遺構の平面形態は略円形であり、その内側にさらにもう一重の円形プランを呈する土色の変化を認めることができた。そのため遺構を半截し、土層断面を検討したところ、本遺構は「桶」と思われる木製品を埋設した土坑(埋桶遺構)であることが想定された。桶の大きさは径約0.7 m、高さ約0.7 mで、桶そのものは残存していなかったが、土層断面や土壌と接する部位にわずかながら木質の痕跡を認めることができた。桶を埋めた土坑の規模は径0.98 m、深さ76 cmである。桶の内部で、埋土中位付近のレベルからは、京都系土師器皿と銅銭が出土した。その他、埋土中から釘や青磁の破片なども出土している。埋土上面からは礫が少数出土した。遺構や出土遺物の状況から、SK241は桶を使用した墓である可能性があるが、人骨等は確認できなかった。出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は16世紀前葉から中葉に比定される。

埋桶遺構

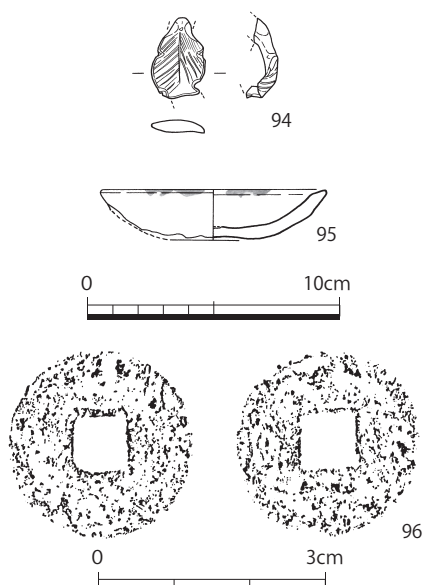
墓?

第38図はSK241からの出土遺物である。94は青磁の製品で、葉を象った部位の破片である。中国産と推定しておく。95は京都系土師器の皿で、器壁がやや薄いことから古相を呈するタイプのものである。96は銅銭で、初铸造年が1038年の北宋銭「皇宋通寶」である。その他、鉄釘と思われる鉄器片が出土しているが、図示していない。



- 1 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)  
粘質土層, しまりあり。  
焼土, 炭, 砂粒 (少量), 遺物を含む。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3)  
粘質土層, しまりあり。  
焼土, 炭 (少量) を含む。
- 3 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3)  
粘質土層, しまりあり。  
焼土, 炭を含む。
- 4 暗褐色土 (Hue10YR3/4)  
粘質土層, しまりあり。  
焼土 (少量) を含む。
- 5 オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3)  
粘質土層 (粘質弱), しまりあり。  
焼土 (少量), 炭 (少量),  
砂層 (少量) を含む。

第37図 SK241実測図(1/30)



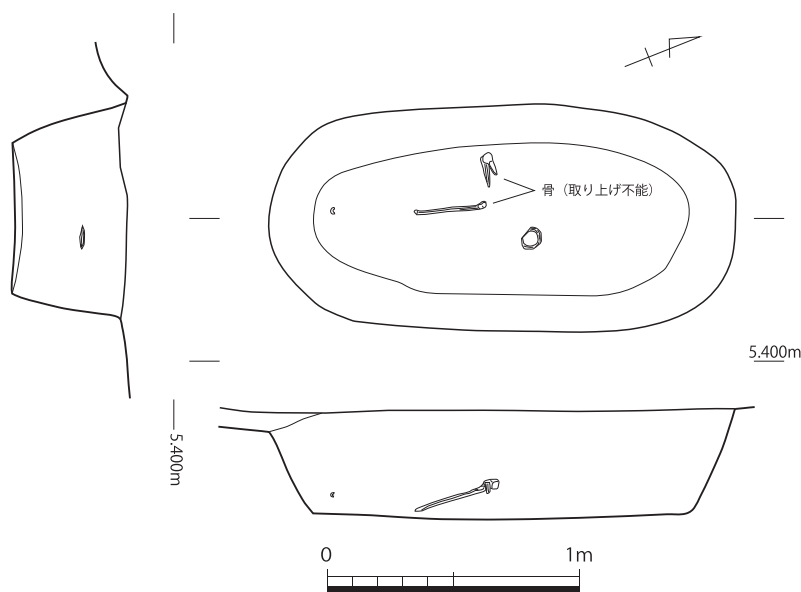
第38図 SK241出土遺物(1/3, 1/1)

SK253

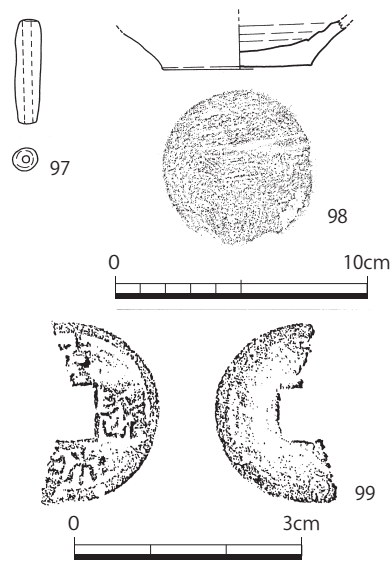
SK253 (第39図) はH34区で検出された土坑である。16世紀末葉の溝SD236に切られており、遺構の構築順序はSK253→SD236となる。遺構の平面形態は略楕円形を呈し、規模は長さ1.85m、幅0.88m、深さ42cmである。埋土の下位からロクロ目土師器の破片、銅銭片、土錘、骨などが出土した。骨は残存状況が悪く、非常に脆弱であり、取り上げは不可能であった。従って、骨の同定はできていない。廃棄土坑と推定されるが、骨が出土していることから墓である可能性も考えられる。

墓?

遺構の切り合い関係や出土遺物から、遺構の年代は15世紀末葉から16世紀初頭に比定される。第40図はSK253からの出土遺物である。97は土錘、98はロクロ目土師器の皿である。99は銅銭で、初鑄造年が1111年の北宋銭「政和通寶」である。



第39図 SK253実測図(1/30)



第40図 SK253出土遺物(1/3, 1/1)

**SK275**

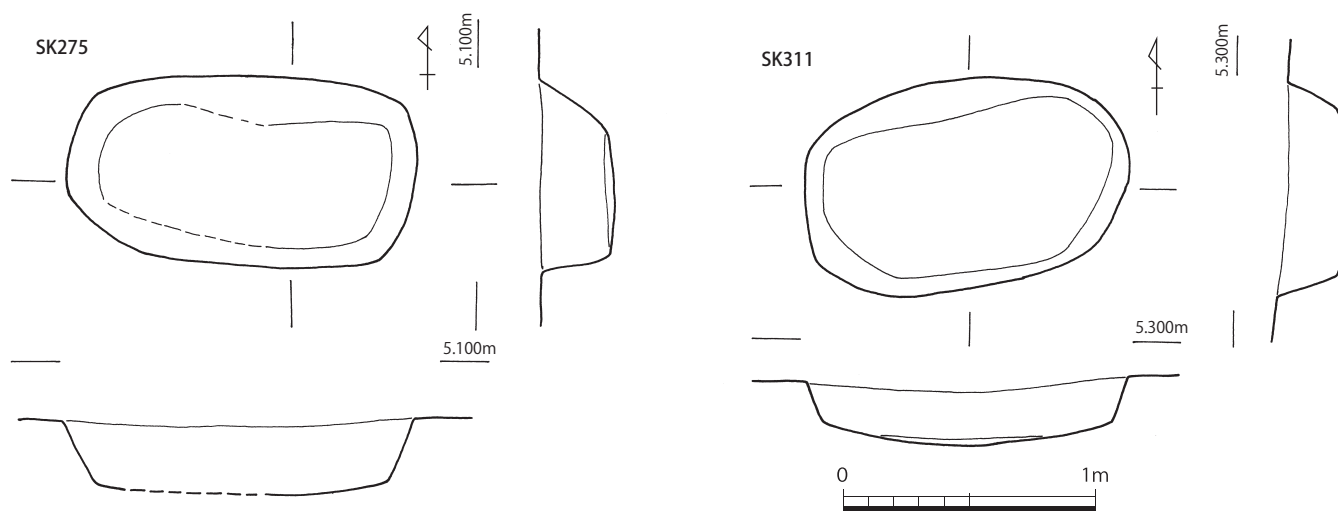
SK275 (第41図)はH33区で検出された土坑である。遺構の平面形態は略楕円形を呈し、規模は長さ1.35m、幅0.76m、深さ27cmである。埋土は周囲の土壌とあまり変化のない暗褐色粘質土の単一層である。出土遺物は認められないことから、遺構の詳細な時期は不明である。平面形態や埋土の状況から、墓である可能性も考慮しておきたいが、骨の出土は認められなかった。

墓?

**SK311**

SK311 (第41図)はH35区で検出された土坑である。遺構の平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長さ1.28m、幅0.82m、深さ21cmである。埋土は周囲の土壌とあまり変化のない暗褐色粘質土の単一層である。出土遺物がないことから、遺構の詳細な時期は不明である。SK275と同様、平面形態や埋土の状況から、墓である可能性も考慮しておきたいが、骨の出土は認められなかった。

墓?



第41図 SK275・SK311実測図(1/30)

**SK314・SK315**

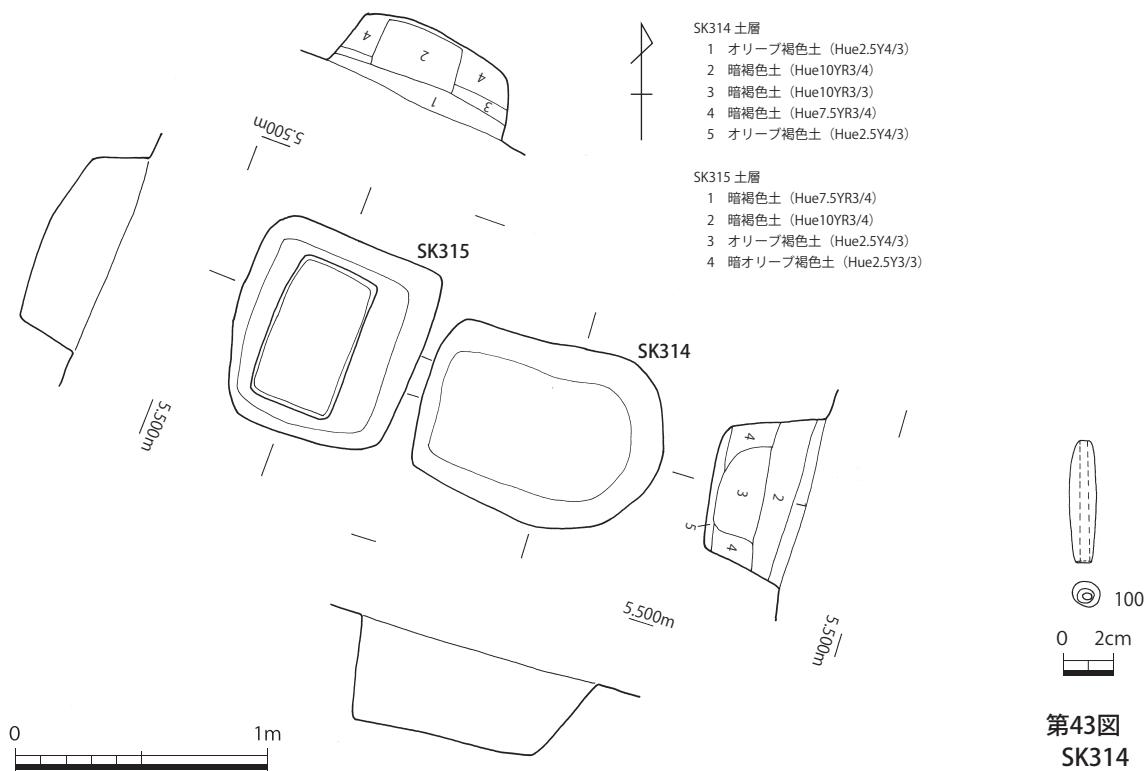
SK314・SK315はH34区に位置する土坑で、近接した地点で検出された。

SK314 (第42図)は平面形態が不整形を呈し、規模は長さ0.98m、幅0.74m、深さ38cmである。土層断面を検討すると、検出面より15cm程度下に埋土を1段掘り込んだ暗褐色土の堆積が認められた。遺構の規模や埋土の状況から小児墓である可能性を考慮し、掘り下げを進めたが、埋土中からは土錘が1点出土したのみで、骨や副葬品等は出土しなかった。当該遺構が墓である可能性は残るものの、それを積極的に断定することはできないため、遺構の性格については不明としておきたい。時期を判定する遺物も出土していないことから、遺構の構築時期も不明である。第43図100はSK253からの出土遺物で、管状土錘である。図示可能な遺物は、これ以外認められない。

墓?

SK315 (第42図)は平面形態が略方形を呈し、規模は長さ0.81m、幅0.75m、深さ30cmである。この遺構も土層断面を検討すると、検出面より10cm程度下に埋土を1段掘り込んだ長方形プランの暗褐色土の堆積が認められた。SK314と同様に小児墓である可能性を考慮し、掘り下げを進めたが、出土遺物は認められず、骨や副葬品等は出土しなかった。当該遺構についても墓である可能性は残るものの、それを積極的に断定することはできなかった。遺構の構築時期も不明である。

墓?



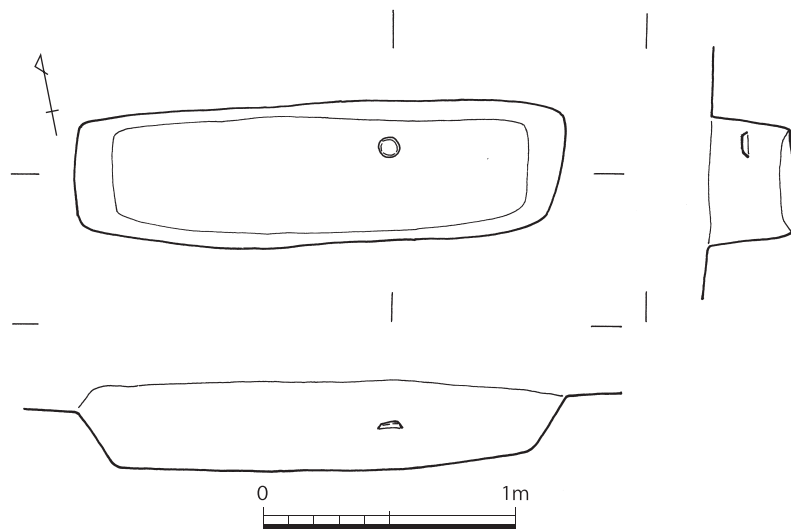
第42図 SK314・SK315実測図(1/30)

第43図  
SK314  
出土遺物  
(1/3)

SK356

SK356 (第44図)はH32区で検出された土坑である。遺構の平面形態は略長方形を呈し、規模は長さ1.90m、幅0.58m、深さ34cmである。図示していないが、遺構東側の埋土中位から、底部のみを残して再加工したロクロ目土師器皿が、底部を上にした状態で出土している。遺構の状態から、墓である可能性が考えられるが、骨などは出土しておらず、調査の状況からは遺構の性格を判断することはできなかった。図示可能な遺物は認められないが、ロクロ目土師器が出土していることから、遺構の構築年代は15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。

墓?



第44図 SK356実測図(1/30)

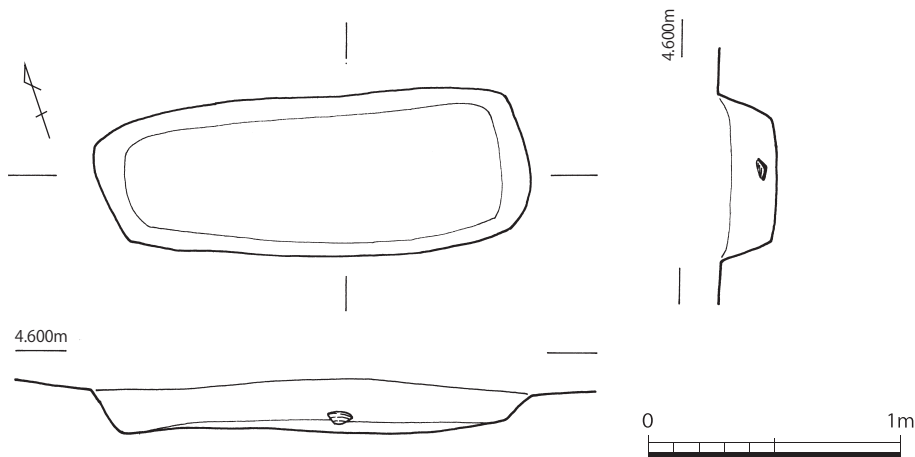


**SK371**

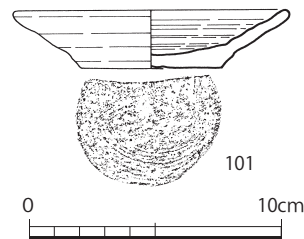
SK371（第45図）はH33区で検出された土坑である。16世紀後葉から末葉に比定されるSK305と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSK371→SK305である。遺構の平面形態は略楕円形を呈し、規模は長さ1.70m、幅0.64m、深さ20cmである。遺構中央の底面付近より、ロクロ目土師器皿が出土した。調査の状況から当該遺構が墓である可能性が考えられるが、骨などの出土が認められないため、断定はできない。出土遺物や切り合い関係から、遺構の構築年代は15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。

墓？

第46図はSK253からの出土遺物である。101はロクロ目土師器の皿で、図示可能な遺物はこれ以外、認められない。



第45図 SK371実測図(1/30)



第46図 SK371出土遺物(1/3)

**SK399**

SK399（第47図）はH32区で検出された土坑である。遺構の平面形態は略長方形を呈し、規模は長さ1.5m、幅9.6m、深さ46cmである。土坑の南東隅に片寄って掘り込みが認められ、内部からは頭大から拳大の礫が多数出土した。掘り込みの規模は長さ1.19m、幅0.6m、深さ46cmである。掘り込みの埋土上面には明茶褐色土が、礫を覆うように堆積していた。図示していないが、礫間からはロクロ目土師器皿の破片が出土している。また、土坑北東隅付近の埋土上位からは、備前焼播鉢の破片が出土している。遺構の性格は不明であるが、墓である可能性も考慮しておくべきと考える。ただし、骨等の出土は確認されていない。出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は15世紀末葉～16世紀初頭に比定される。

墓？

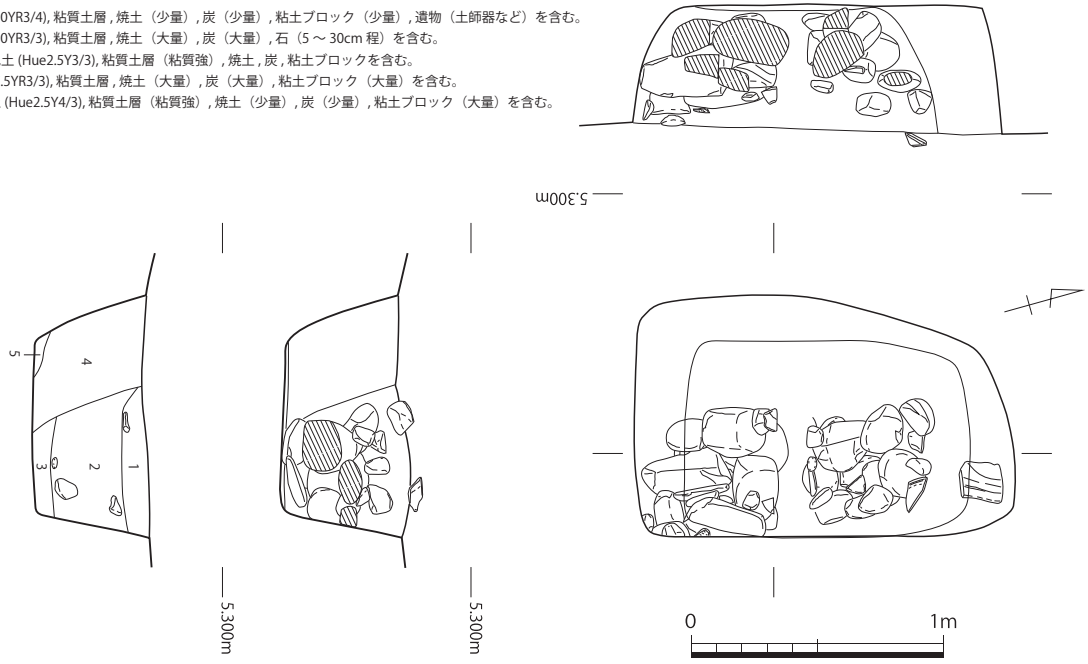
第48図はSK399からの出土遺物である。102は管状土錘である。103は景德鎮系青花の壺で、肩部の破片である。内面は露胎となる。104は備前焼播鉢で、土坑北東隅付近の埋土から出土した。中世6期に編年される製品である。

**SK405**

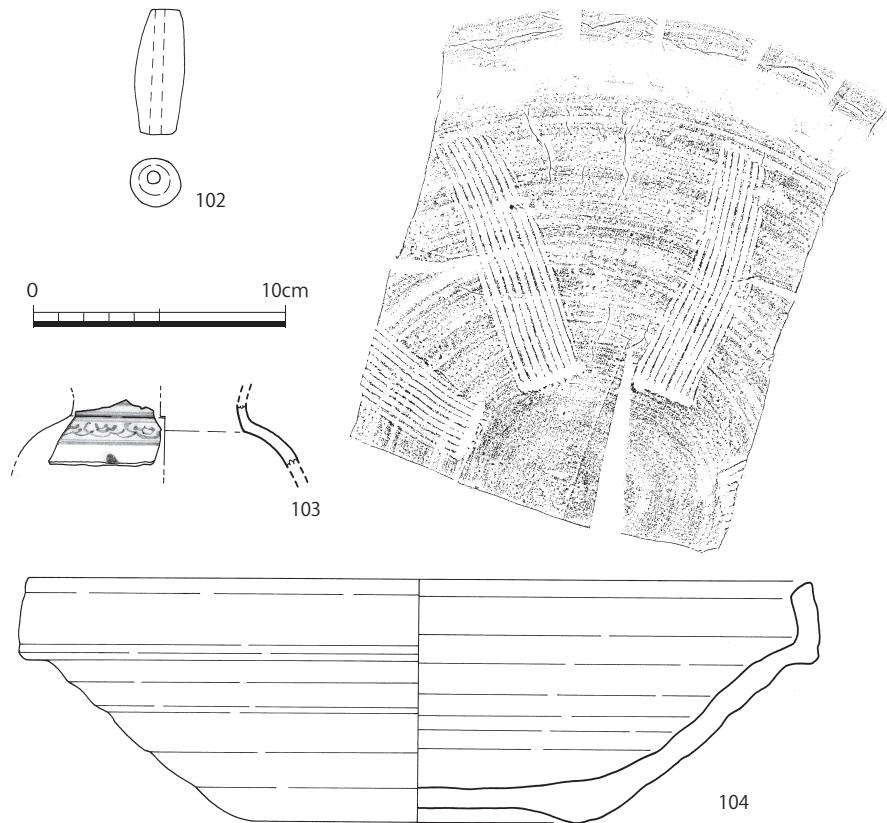
SK405（第49図）はI33区で検出された土坑である。遺構の平面形態は略長方形を呈し、規模は長さ1.52m、幅0.74m、深さ30cmである。検出時の状況から、当該遺構が土坑墓である可能性を考えて調査を進めたが、埋土は単一の暗褐色土で、京都系土師器皿の破片が出土した他は骨等は出土しなかった。墓である可能性も考慮しておくべきと考えるが、断定するには至っていない。出土遺物の年代から、遺構の構築年代は16世紀前葉から中葉に比定される。

第50図はSK405からの出土遺物である。105は京都系土師器皿の破片である。器壁が薄いタイプのもので、16世紀前葉から中葉に比定される。

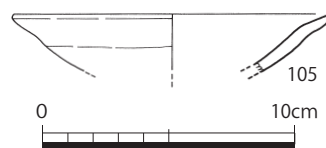
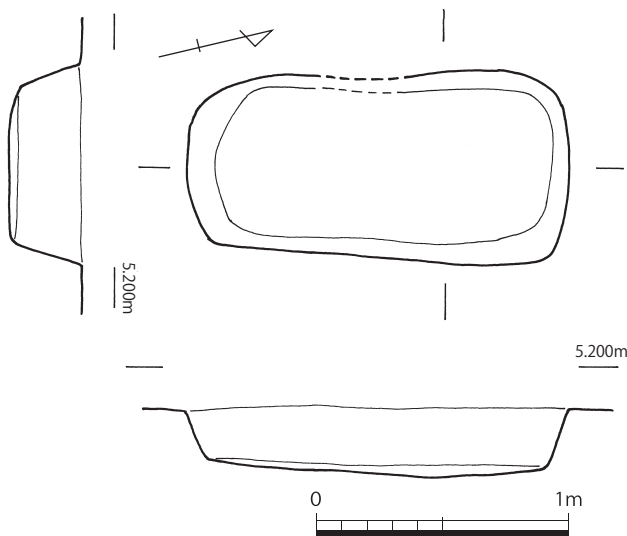
- 1 暗褐色土 (Hue10YR3/4), 粘質土層, 焼土 (少量), 炭 (少量), 粘土ブロック (少量), 遺物 (土師器など) を含む。
- 2 暗褐色土 (Hue10YR3/3), 粘質土層, 焼土 (大量), 炭 (大量), 石 (5~30cm 程) を含む。
- 3 暗オリーブ褐色土 (Hue2.5Y3/3), 粘質土層 (粘質強), 焼土, 炭, 粘土ブロックを含む。
- 4 暗褐色土 (Hue7.5YR3/3), 粘質土層, 焼土 (大量), 炭 (大量), 粘土ブロック (大量) を含む。
- 5 オリーブ褐色土 (Hue2.5Y4/3), 粘質土層 (粘質強), 焼土 (少量), 炭 (少量), 粘土ブロック (大量) を含む。



第47図 SK399実測図 (1/30)



第48図 SK399出土遺物 (1/3)



第50図 SK405出土遺物(1/3)

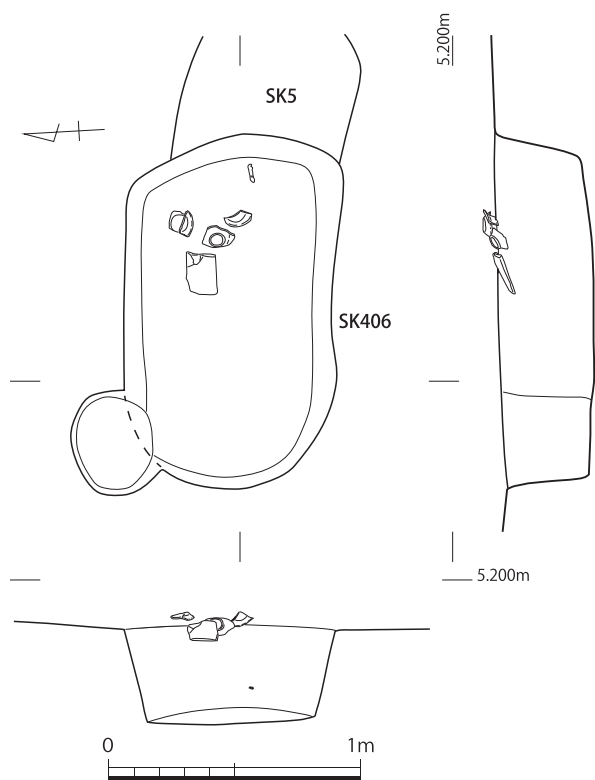
第49図 SK405実測図(1/30)

**SK406**

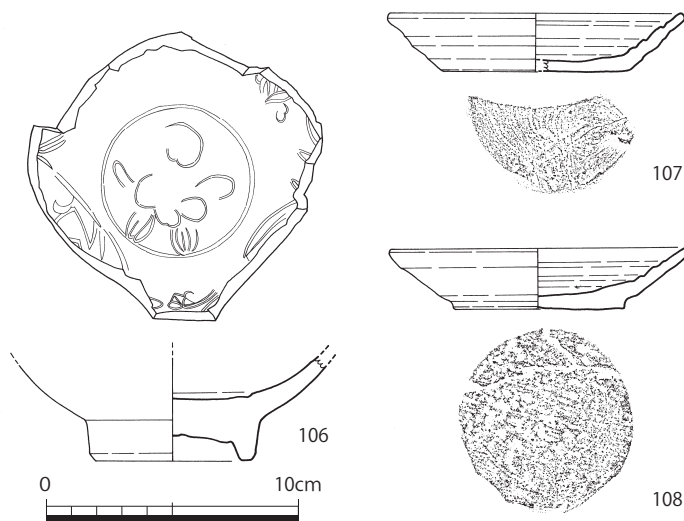
SK406(第51図)はI33区で検出された土坑である。時期不明の土坑SK510およびSK533を切っ  
て構築されている。遺構の平面形態は略隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.4m、幅0.49m、深さ  
38cmである。土坑東側の埋土上位より、礫・青磁碗・ロクロ目土師器の大型破片が出土した。こ  
れについても墓の可能性が考えられるが、骨等は出土しておらず、断定には至っていない。出土遺  
物の年代観から、遺構の構築年代は15世紀末葉から16世紀前葉に比定される。

墓?

第52図はSK406からの出土遺物である。106は龍泉窯系青磁碗で、口縁部と胴部上位を欠損する。  
見込みには花文の刻印がある。15世紀代の製品である。107・108はロクロ目土師器の皿である。



第51図 SK406実測図(1/30)



第52図 SK406出土遺物(1/3)

③井戸

SE240・SE353

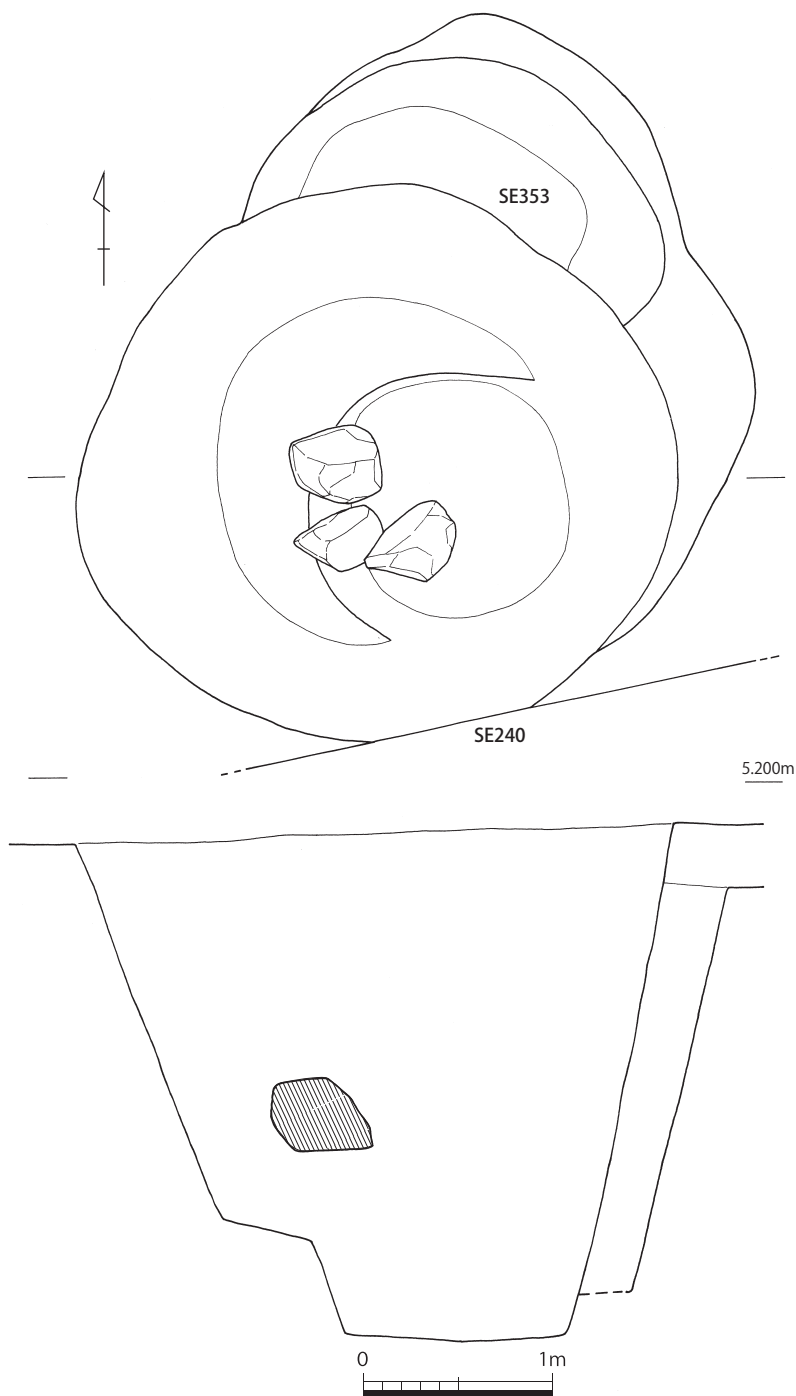
SE240・SE353（第53図）は切り合い関係にある2基の井戸で、H33区で検出された。構築順序はSE353→SE240である。

SE240の平面形態は略楕円形で、規模は長径3.19m、短径2.95m、深さ2.65mである。遺構内部の南東側に結桶を設置したとみられる掘り込みが認められるが、桶は完全に抜き取られていた。南側の埋土上位には拳大から頭大の礫が投げ込まれ、さらに埋土中位には頭大以上の大きな石が3個程度投げ込んでいる部位も認められた。埋土中からの出土遺物には陶磁器・土器・石臼などがあり、他に図示していないが、近世1期に比定される備前焼播鉢の破片もある。出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は16世紀末葉に比定される。

SE353の平面形態は略円形または略楕円形と推定されるが、SE240とほぼ重複する位置に構築されているため、その規模は不明である。また、東側はSE300と切り合い関係をもち、遺構の構築順序はSE353→SK300となる。遺構のほとんどがSE240の構築により破壊されており、井筒なども残存していなかった。遺構の構築年代は不明であるが、遺構の切り合い関係やSE240に混入した出土遺物（第54図114）などにより、15世紀末葉から16世紀前葉頃と推定しておきたい。

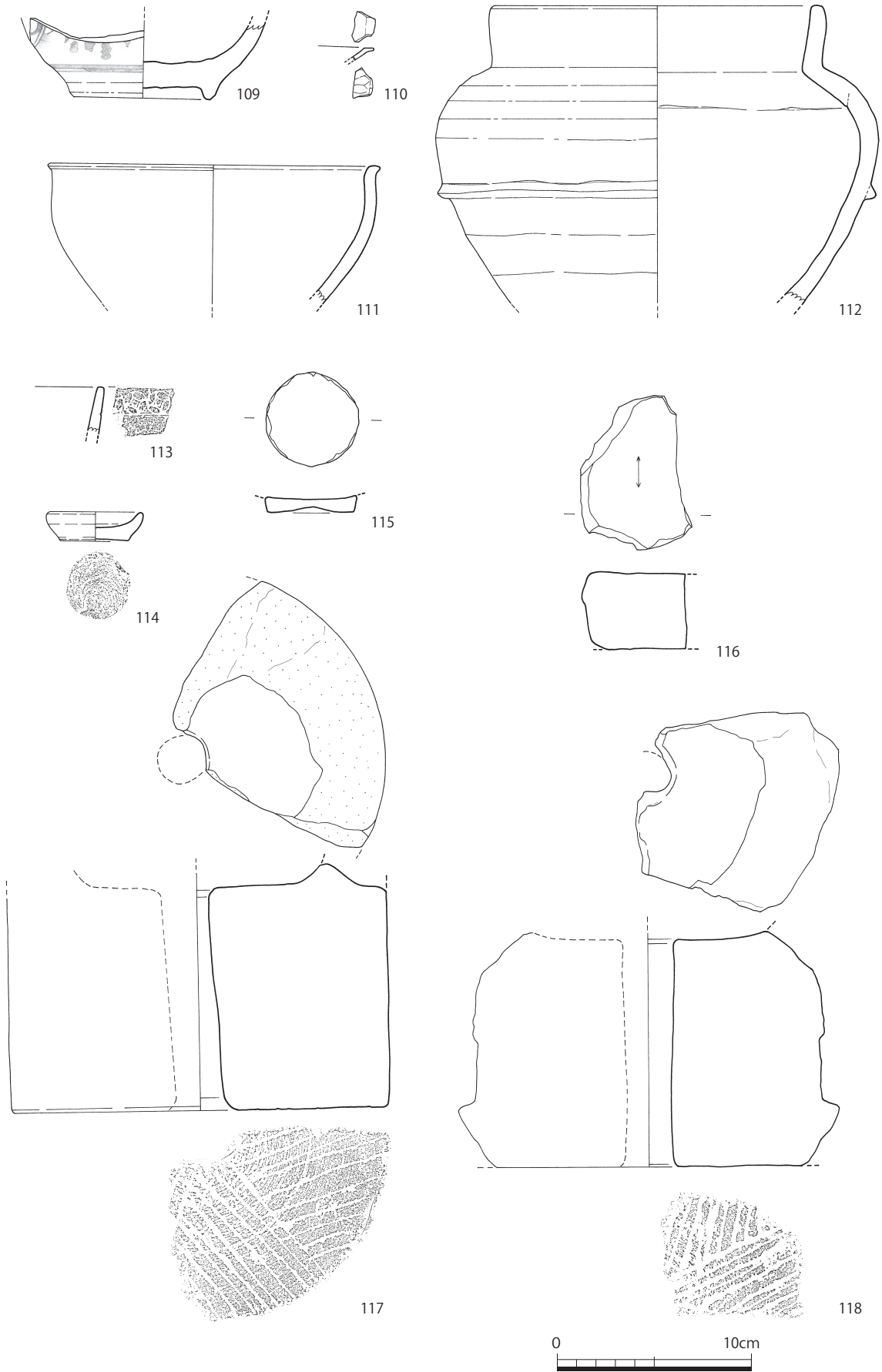
第54・55図は、SE240の出土遺物である。109は景德鎮系青花瓶で、内面は露胎となる。110は青釉小

桶は  
抜き取ら  
れている

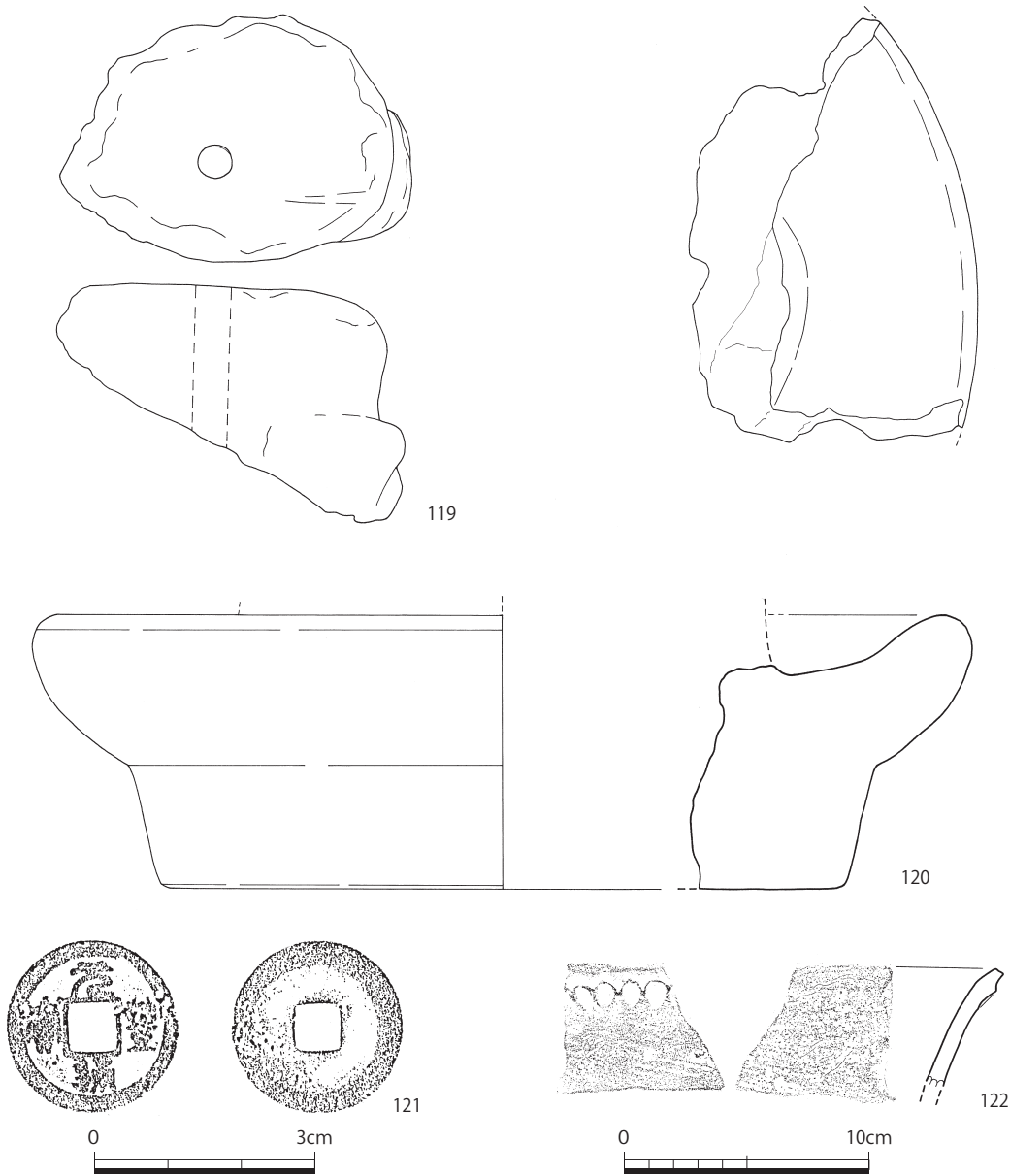


第53図 SE240・SE353実測図(1/40)





第54図 SE240出土遺物①(1/3)



第55図 SE240出土遺物②(1/3、1/1)

皿の口縁部破片で、内外面にコバルトブルーの色釉を施す。**111**は瓦質土器の鉢で底部を欠損する。**112**は瓦質土器の羽釜で、胴部中位よりやや下側に断面三角形の突帯を有する。胴部上位に把手が付くと推定されるが、残存していない。**113**は瓦質土器香炉の口縁部で、外面に七宝文の刻印を有する。**114**はロクロ目土師器の小皿であり、遺構北東側の壁面近くから出土したことから、本来SE353の帰属遺物である可能性が高いと考えられる。**115**は瀬戸美濃産陶器の天目碗を底部のみを残して円形に加工したものである。**116**は砥石で、砂岩質の素材が使用されている。**117～120**は茶白で、**117・118**は上白、**119・120**は下白である。**121**は初鑄造年1078年の北宋銭「元豊通寶」である。

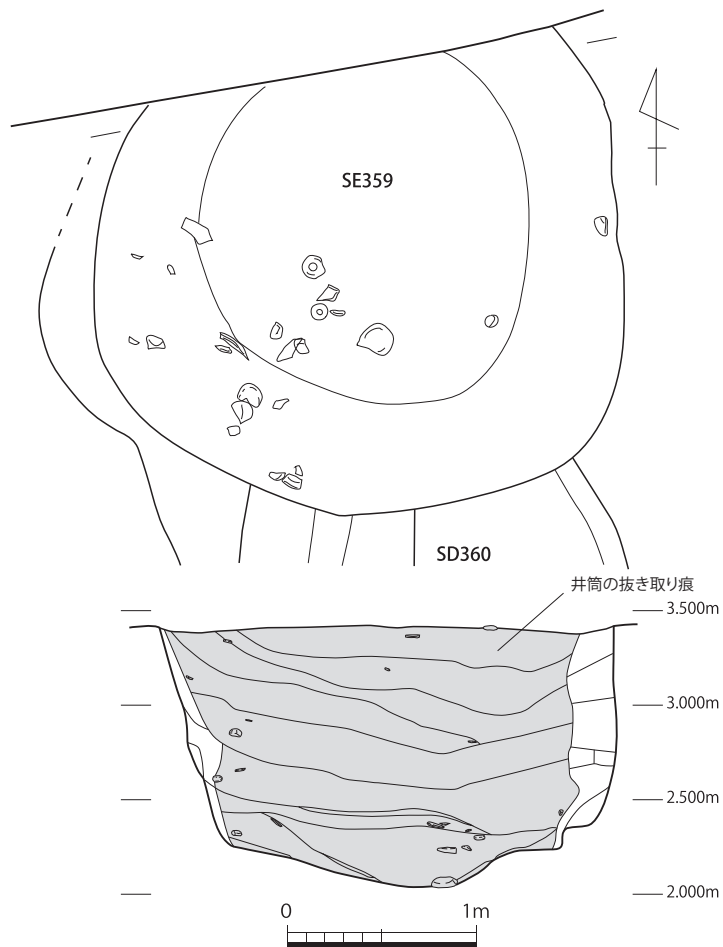
突帯文土器  
深鉢

第55図は、SE353の出土遺物である。**122**は縄文時代晩期に比定される突帯文土器深鉢の口縁部破片で、内外面に条痕調整を施す。中世の基盤層（地山）である黄褐色粘質土層の下位に堆積する砂礫層に包含されていたと推定されるもので、井戸に帰属する遺物ではない。

SE359

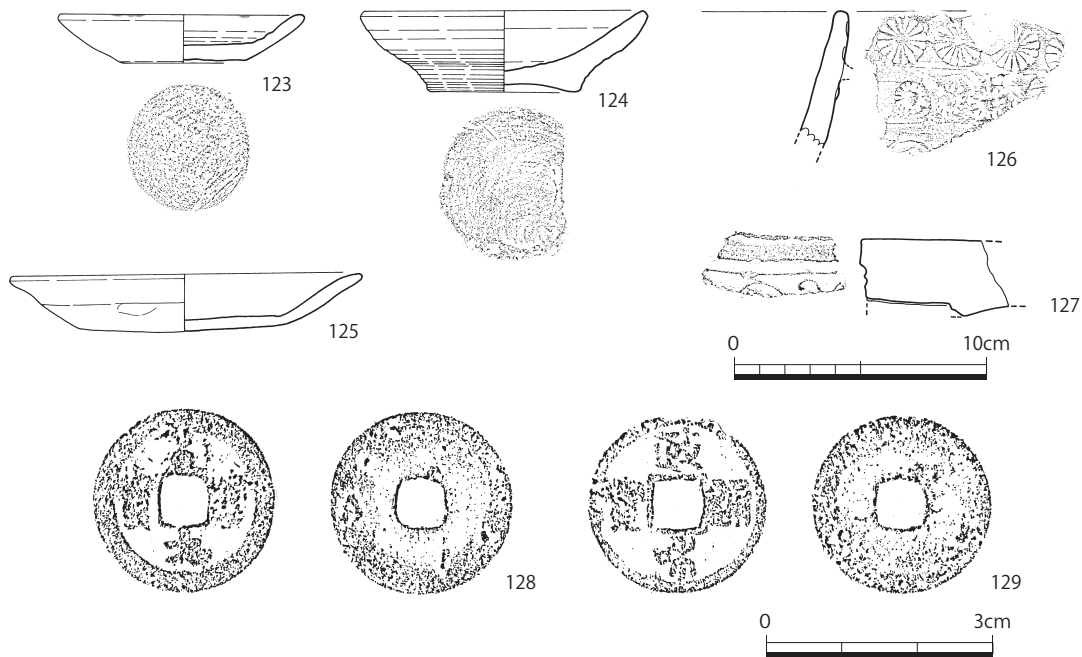
SE359（第56図）はH32区で検出された井戸である。溝SD360と切り合い関係を有し、遺構の構築順序はSD360→SE359となる。平面形態は略円形で、その規模は径約2.8m、深さ1.35mである。遺構上面を5cmほど掘り下げると、掘形よりひとまわり小さな略円形の掘り込みが認められたため、遺構の南側半分のみを掘り下げ、土層断面の観察を行った。その結果、上記の掘り込みは井筒の抜き取りの痕跡であることが判明し、井筒も残存していなかった。埋土中からは京都系土師器やロクロ目土師器などが出土したが、いずれも混入品と思われ、これらは切り合い関係にあるSD360の帰属遺物と考えられる。遺構の構築時期を直接示す遺物はないが、周辺の遺構の状況などから、SE359の構築年代は16世紀末葉に比定される。

井筒抜き取りの痕跡



第56図 SE359実測図(1/40)

第57図は、SE359の出土遺物である。123・124はロクロ目土師器の皿である。125は京都系



第57図 SE359出土遺物(1/3、1/1)

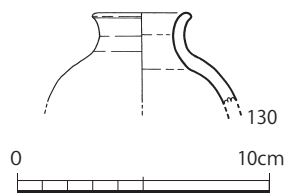
土師器で、器壁の薄いタイプのものである。126は瓦質土器の口縁部で、外面に菊花文などの刻印を有する。15世紀代の製品であろう。127は軒平瓦当部の破片である。128・129は銅銭で、128は初鑄造年995年の北宋銭「至道元寶」、129は初鑄造年1111年の北宋銭「政和通寶」である。

SE507

未完掘

SE507（写真図版8）はH31区で検出された井戸である。遺構の平面形態は略円形と推定されるが、調査区の制限で、遺構の南側約3分の1程度しか検出できていない。現状での規模は最大長2.84mである。遺構が狭い調査区の壁際に位置しており、完掘すると壁面の崩壊などのおそれが生じるため、検出面より約1m程度掘り下げたのみで人力掘削を中断した。そのため、井筒の構造などは不明である。埋土中からは備前焼や土器小片などが出土した。出土遺物と周辺の遺構の状況などから、SE507の構築年代は16世紀末葉と判断した。

第58図は、SE507の出土遺物である。130は備前焼小壺の口縁部で、図示可能な遺物はこれ1点に留まる。



第58図 SE507出土遺物 (1/3)

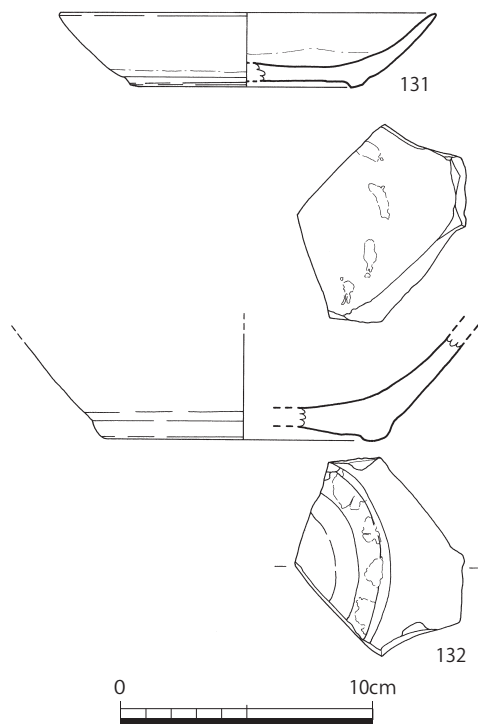
④溝

SD235・SD341

SD235およびSD341はH31区に位置する溝であるが、近世（18世紀後半）に構築されたものであるため、詳細な記述を割愛する。ここでは、近世陶磁器などに混じって出土した中世以前の遺物を図示する。

越州窯系  
青磁碗

第59図はSD235からの出土遺物である。131は中国南部産の白磁皿で、見込みと高台周辺が露胎になるタイプのものである。生産年代は16世紀中葉から後葉に比定される。132は越州窯系青磁碗で、見込みと高台畳付部に多数の目跡が残る。9世紀代の所産である。いずれも混入品である。



第59図 SD235出土遺物 (1/3)

SD236

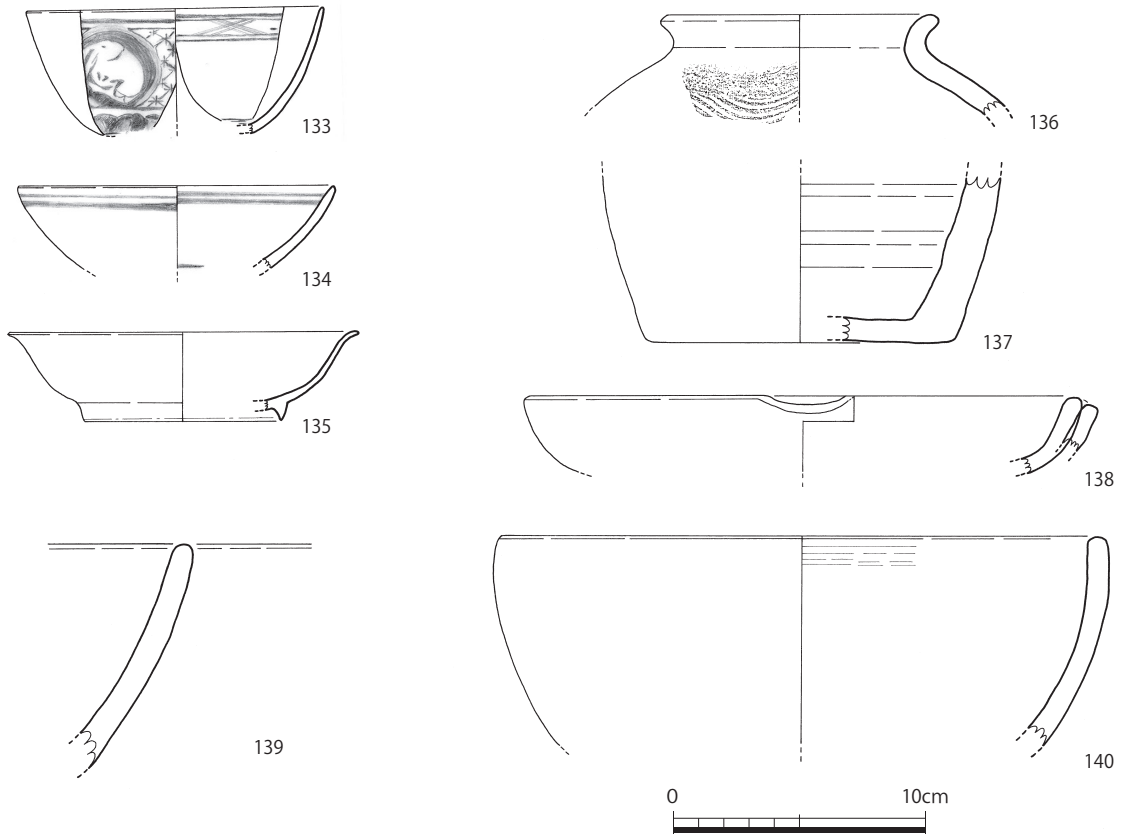
小規模な  
区画溝

SD236（写真図版9）はH34区で検出された溝である。15世紀末から16世紀初頭の土坑SK253を切っており、遺構の構築順序はSK253→SD236である。溝の規模は長さ3.0m、幅0.4～0.45m、深さ20cmで、南側の延長部はさらに調査区外に伸びるものの、北側では終端部を検出している。埋土中より、礫や陶磁器・土器などが出土した。小規模な区画溝であろう。出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は16世紀後葉から末葉に比定される。

五彩碗  
見返り兎文

第60図はSD236からの出土遺物である。133は景德鎮系の五彩碗で、外面文様の見返り兎文を赤絵、内面文様の四方禪文を呉須で描く。底部と高台部を欠損するが、E群碗（饅頭心碗）の形態を呈するものであろう。134は漳州窯系の青花碗で、底部を欠損する。135は景德鎮系の白磁皿で、森田分類のE群に分類される。136・137は備前焼である。136は壺で、肩部に櫛描き波状文を施す。137は壺の底部である。138は瓦質土器の口縁部で、口縁の一部に注口を設けている。138・139



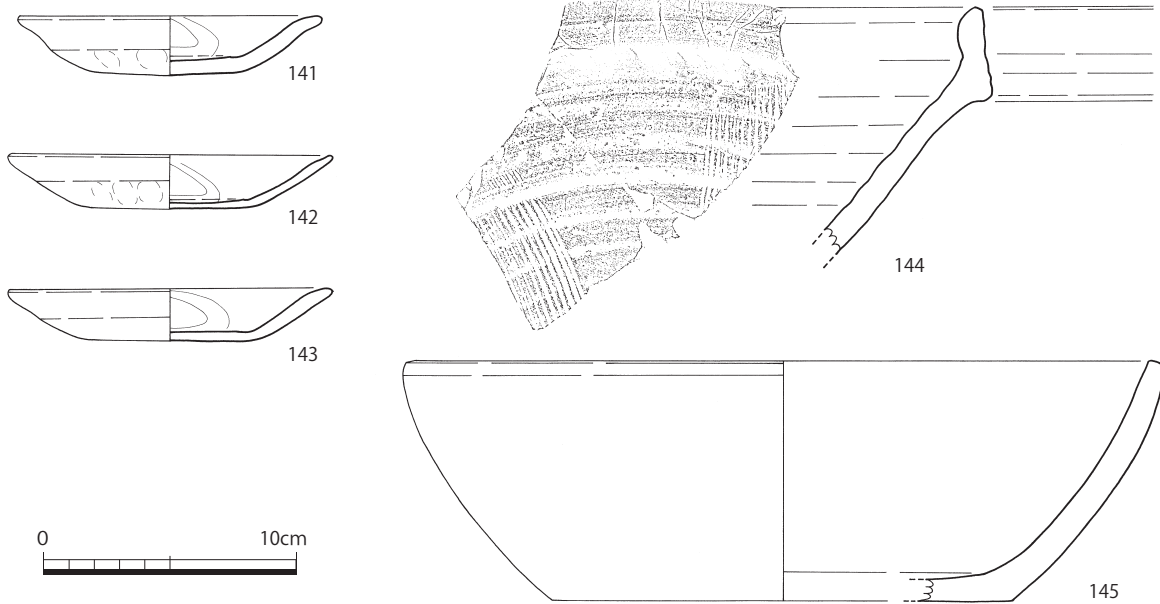


第60図 SD236出土遺物(1/3)

は瓦質土器の鉢である。

SD357・SD561

SD357・SD561(写真図版9)はH32区で検出された溝である。SD357は区域1Aで、SD561は区域1Bで検出されたため、別々の遺構番号を付したが、その位置関係から同一の溝遺構である。



第61図 SD561出土遺物(1/3)

区画溝 遺構の規模は長さ6m、幅0.8m、深さ15cmを測る。H32区の東側を南北方向に伸びる区画溝と推定される遺構であるが、残存状況が悪く、南側は削平により消失していた。北側はさらに未調査区の方に伸びる。SD357からは動物遺存体が1点出土したほかは遺物がほとんどなかったが、SD561からは土器・陶磁器類などが出土した。遺構の構築年代は16世紀前葉から中葉に比定される。

動物遺存体

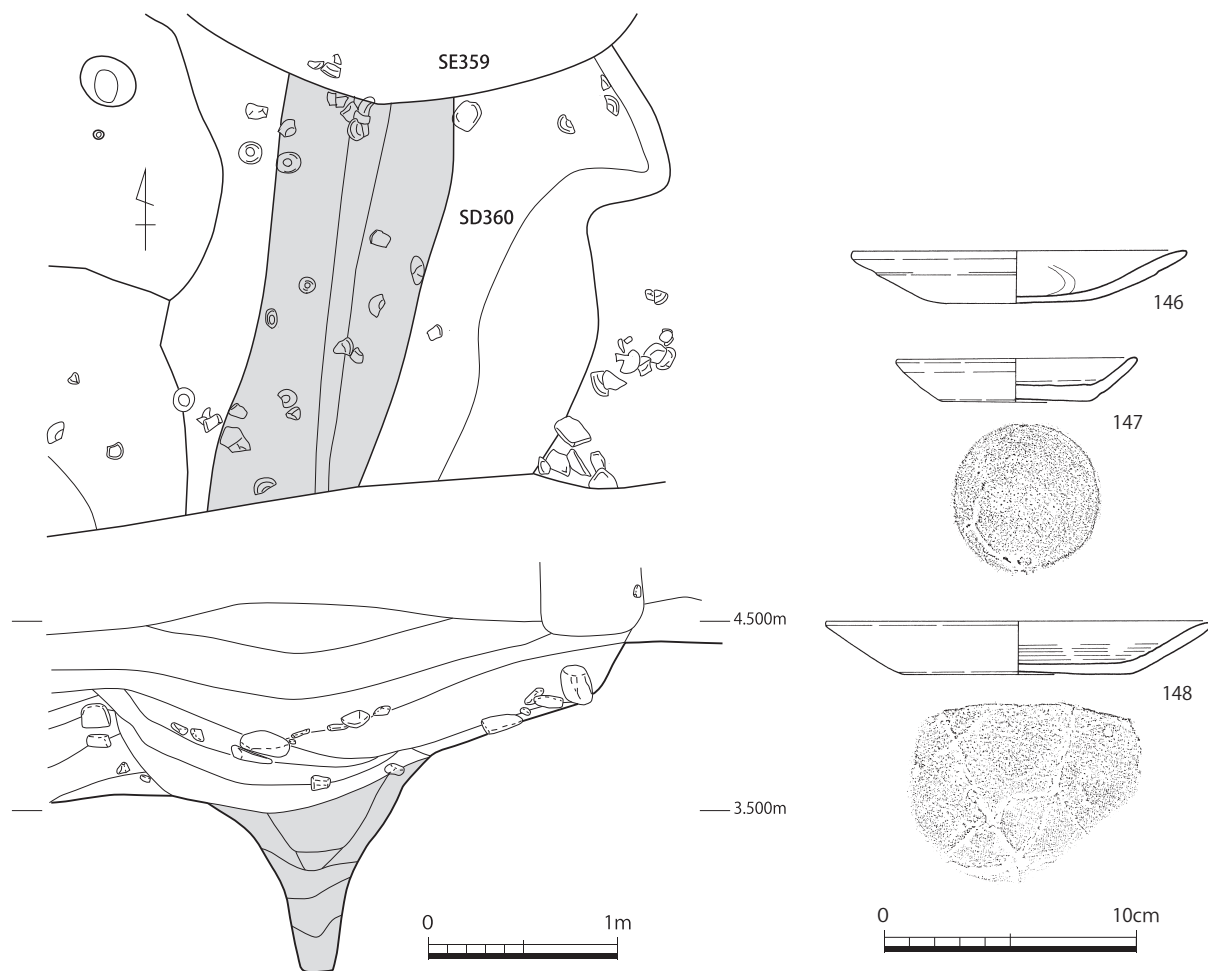
第61図はSD561の出土遺物である。141～143は京都系土師器の皿で、器壁が薄い古式の特徴を有する。144は備前焼播鉢で、中世6期に分類される製品である。145は瓦質土器の鉢である。

### SD360

断面形がY字形

SD360(第62図)はH32区で検出された溝である。区域1Aでは16世紀後葉から末葉の井戸SE359と、区域1Bでは15世紀代の溝SD372Bと切り合い関係を有し、遺構の構築順序は、SD372B→SD360→SE359となる。溝の規模は上面幅0.85m、深さ2.0mで、検出された長さは約8mを測る。南北とも未調査区に伸びるようである。溝の断面形態は、上面幅が狭く、深さが深い特徴的なY字形で、本調査区では当該遺構が唯一のものとなる。埋土を観察すると、底面に付近に若干の砂質土の堆積があるが、恒常的に水が流れていたり溜まっていたりしていた痕跡は認められなかった。埋土からは薄手の京都系土師器などが出土している。遺構の性格は区画溝であろう。出土遺物の年代観から、遺構の構築年代は16世紀前葉から中葉に比定される。

第63図はSD360からの出土遺物である。146は京都系土師器の皿で、器壁が薄い古式の特徴をもつものである。147・148はロクロ目土師器の皿である。



第62図 SD360実測図(1/40)

第63図 SD360出土遺物(1/3)

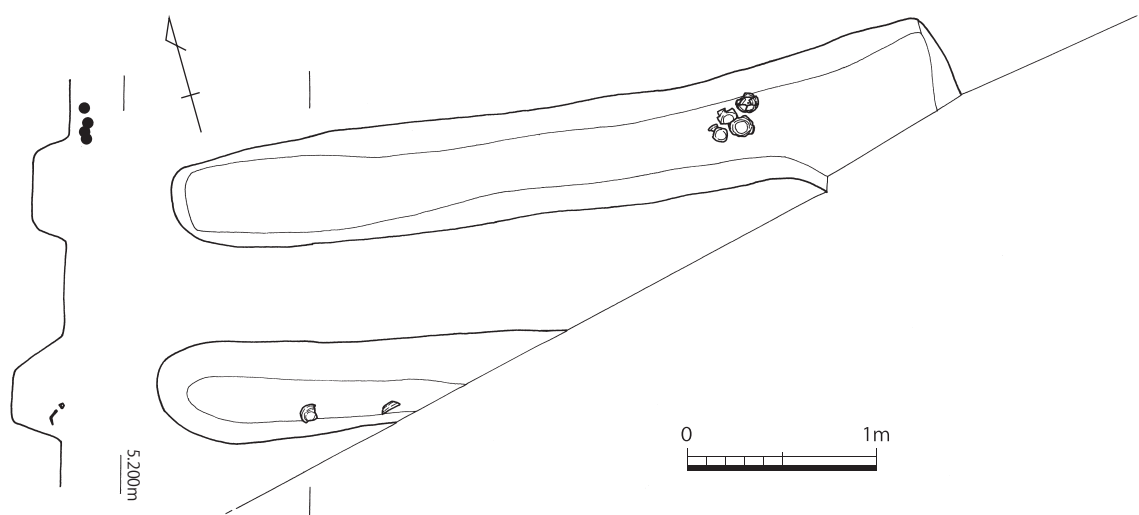
SD361・SD362・SX237

SD361・SD362（第64図）は東西方向に平行する2本の溝で、H33・H34区で検出された。SD361の規模は長さ2.1m、幅0.54m、深さ30cmを測り、東側は調査区外に延びる。埋土中からロクロ目土師器など、土器片少量が出土した。SD362の規模は長さ4.2m、幅0.58m、深さ20cmを測る。遺構の状況から、南側に屈曲する可能性が高いと思われるが、調査区の限界により、詳細は不明である。埋土中より土器片が少量出土しているが、図示可能なものは認められない。

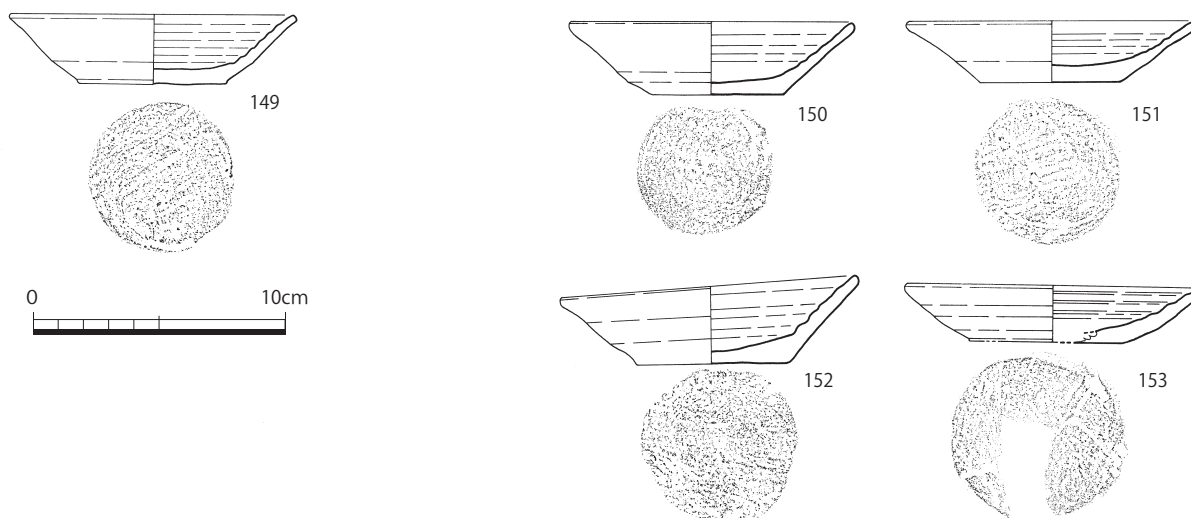
SX237はSD361の  
帰属遺物

SX237はSD362の遺構上面から検出された遺物集中部である。ロクロ目土師器4枚が集中しており、3枚は正位（口縁部を上にした状態）で、他の1枚は逆位（底部を上にした状態）で出土した。区域1Aの包含層の掘り下げ時に検出し、平面図とレベルを記録した後に取り上げた。その後、さらなる包含層の掘り下げの後、SD362の遺構プランを検出した。以上のような状況からSX237は、SD362の埋土上面あるいは直上に位置していることがわかり、これらのロクロ目土師器はSD362に帰属する遺物であると解釈した。

以上のことから、SD361・SD362・SX237は、すべて15世紀末葉から16世紀前葉の遺構である。第65図で図示した遺物は、SD361およびSX237からの出土遺物である。149はSD361、150～153はSX237からの遺物で、以上はすべてロクロ目土師器の皿である。



第64図 SD361・SD362・SX237実測図(1/40)



第65図 SD361・SD362・SX237出土遺物(1/3)

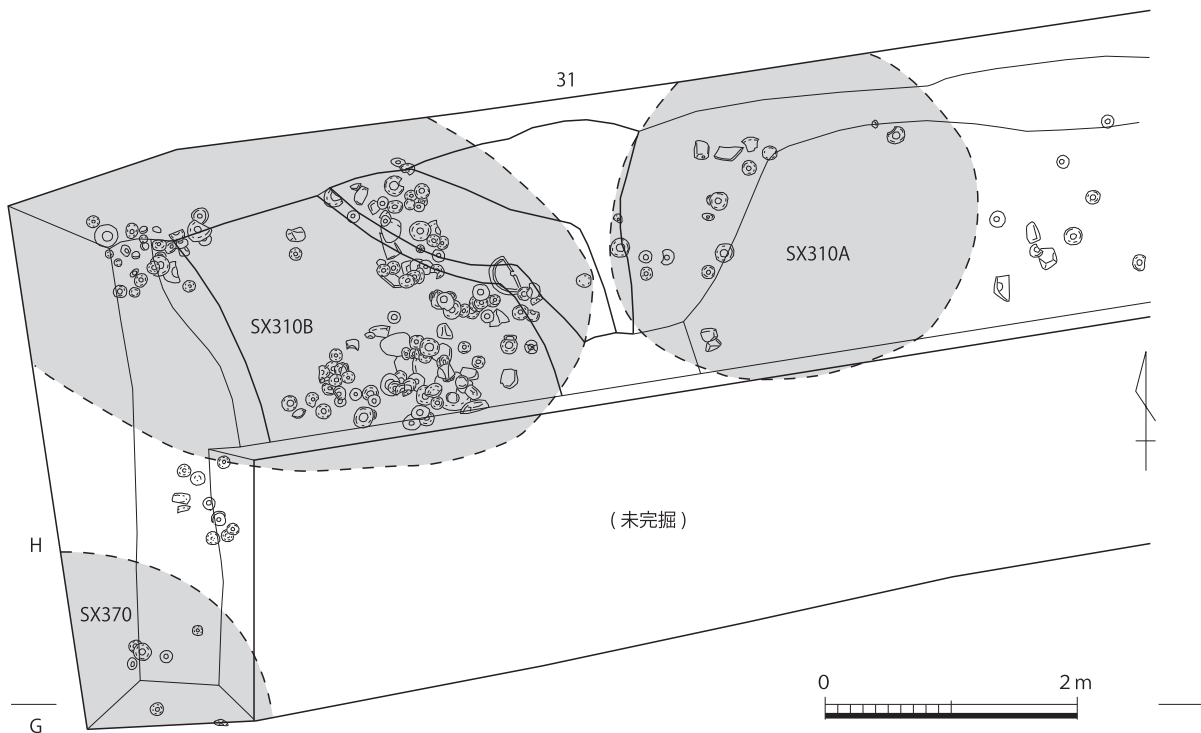
⑤大型落ち込み遺構

SX310

SX310（第9・10図）はH31・H32区に位置する大型遺構である。区域1A区の表土剥ぎを終了した段階で、当該地区にはグライ化した青褐色土の粘質土が広がっており、その中に完形品の京都系土師器を含む土器類が多量に包含されている状況が認められた。さらに、このような土層と遺物の分布状況は、第96次調査区の西端部を含めた広範な領域に及んでいることが推定されるため、この地点については移植ゴテを用いて慎重に面下げを行う一方、遺物が包含されている層の厚みを把握するために攪乱を利用してテストピットを掘り下げることとした。その結果、テストピットによる土層断面からは土師器の破片が層をなして堆積している状況が認められ、面下げを行っている地点からも土器類が大量に出土し始めた。テストピット断面の土層観察から、当該遺構の深さは現地表面から3m以上となり、この深度までは工事が及ばないことが予測された。そこで、遺構の保存と調査の効率を上げることを目的に、区域1A区の北半分と西壁付近のみを完掘し、南半分は一定深度（標高約3.7m付近）で掘り下げを留めることとした。

掘り下げを進める中で、H32区の東寄りの付近で、当該遺構の東端部と推定される遺構ラインが検出された。京都系土師器などはこのライン以西から出土量が増加し、完形品や完形に近い大型破片も単独であるいは数個体がまとまって出土することがあった。また、出土遺物の中には土器類だけでなく、陶磁器や金属製品、石器、銅銭なども認められた。これらの出土遺物の中で注目されるものとしては、懸仏の本尊部とみられる青銅製の千手観音像がある。出土した京都系土師器などの土器類は大半が16世紀前葉から中葉に比定されるものであるが、陶磁器類や一部の土器類については16世紀後葉から末葉以降のものも認められる。このような状況から、千手観音像についても、当該遺構に廃棄された年代が、16世紀前葉から中葉まで遡るのか、16世紀後葉以降に下るのかを明確にできていない。

千手観音像  
(懸仏)



第66図 SX310実測図(1/60)



廃棄  
ブロック  
SX310A・  
SX310B

特徴的な遺物や土器類の完形品については、出土地点とレベルを記録しながら掘り下げを進めた  
が、破片については地区ごとに一括して取り上げを行った。このようにして、調査を進めていたと  
ころ、H31 区の2箇所で京都系土師器を主体とする遺物の集中地点が検出された。これらの遺物  
集中地点のうち、西側のものを **SX310A**、東側のものを **SX310B** と呼称する。これらの遺物集中地  
点は、遺物の分布状態（写真図版 10・11）からすると、1 回毎に限定される廃棄ブロックと推定  
される。この2つの廃棄ブロックを構成するものは、16 世紀前葉から中葉の遺物のみで形成され  
ている。

**SX310A**・**SX310B** の下にも土器類や遺物の堆積が認められ、掘り下げるにつれて土層のグライ  
化の侵攻具合が進み、最下層からは木片や曲物底板・漆器椀・漆器杯・柄杓などの木製品も少量出  
土した。このうち、漆器椀の一部や柄杓については側板の木質痕跡のみが遺存していたものの、遺  
物の取り上げは不可能であった（写真図版 12）。

出土遺物の年代観から、**SX310** に関する遺構の年代をまとめておく。**SX310** については、前述  
のように 16 世紀前葉から末葉までの遺物を包含する。廃棄ブロックである **SX310A**・**SX310B** に  
ついては、16 世紀前葉から中葉に比定される遺物のみが出土することから、遺構の年代はこの時  
期に限定できることになる。

第 67 図 **154**～**164** は **SX310A** として取り上げた遺物集中部からの出土遺物である。**154** は手  
捏ね整形による小皿または蓋、**155**～**163** は京都系土師器の皿である。京都系土師器の皿はすべ  
て器壁が薄く、古い様相を呈する資料である。**164** は中国南部産の白磁皿で、見込みと高台周辺が  
露胎となる。見込みには「×」状のヘラ記号が施される。

「×」状の  
ヘラ記号

第 67 図 **165**～**294** は **SX310B** として取り上げた遺物集中部からの出土遺物である。**115**～**175**  
は手捏ね整形による小皿または蓋、**176**・**177** は手捏ね整形による耳皿、**178**～**273** は京都系土師  
器の皿、**275** は在地系の土師質土器皿、**274**～**294** はロクロ目土師器の皿である。耳皿は手捏ね整  
形の皿の口縁部を湾曲させることによって製作されている。京都系土師器の皿はすべてが器壁が  
薄く古い様相を呈する資料で、このような資料が **274** 以下のロクロ目土師器と一括資料を形成し  
ていることがわかる。**273** の底部には焼成後の穿孔がなされている。**275** は底部に回転糸切り痕が  
ある在地系の土師質土器であるが、これについては府内町跡第 13 次調査 **SX706**・**SX707**<sup>1)</sup> などで  
類例が認められる資料である。

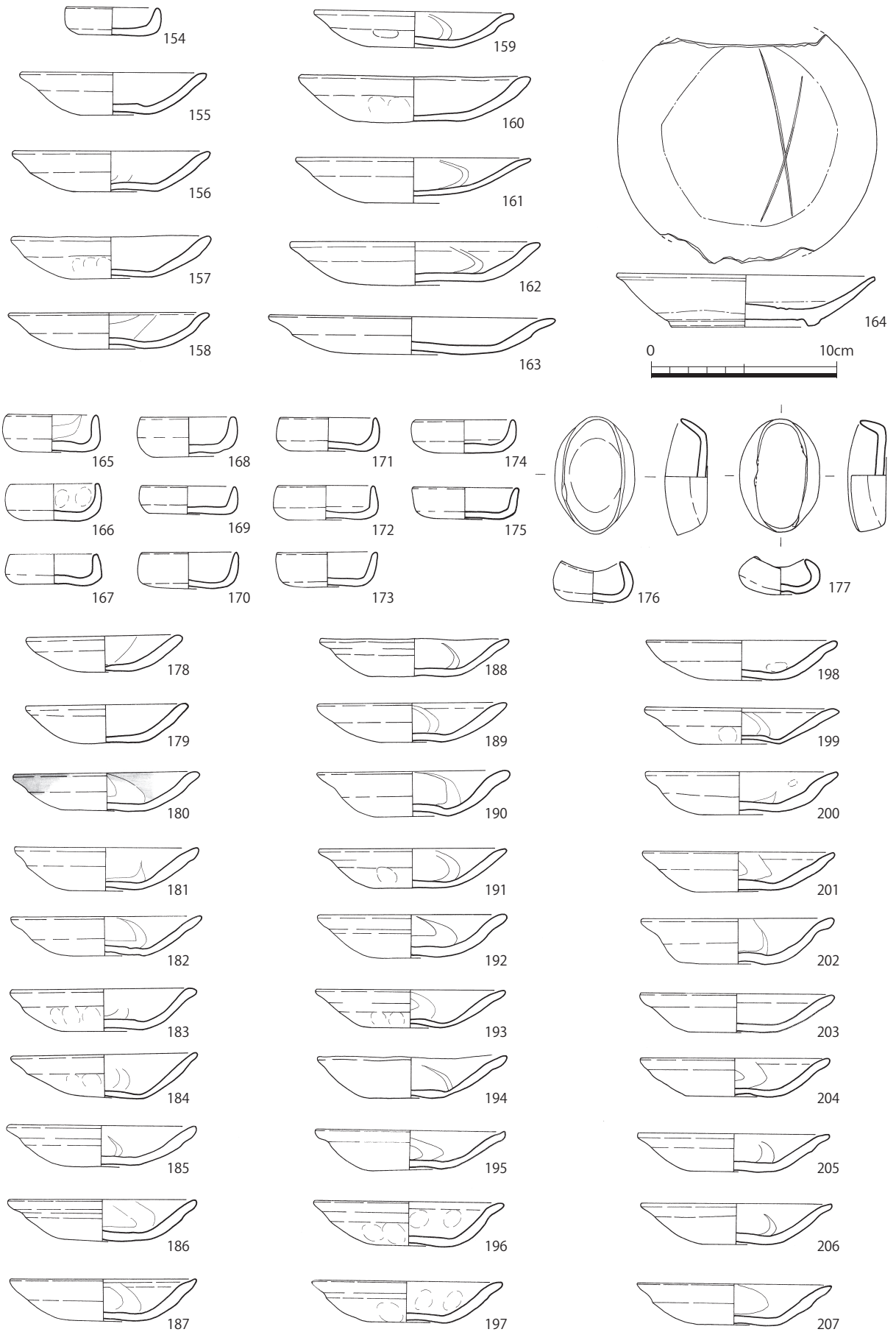
在地系の  
土師質土器  
府内町跡  
第13次調査  
で類例

**295**～**583** については、**SX310** として取り上げた遺物の中で、**SX310A**・**SX310B** として提示し  
たもの以外を一括して図示している。京都系土師器の中には2 個体から数個体が至近の距離でま  
とまって出土したものもあるが、紙幅の関係から詳細を提示できていない。

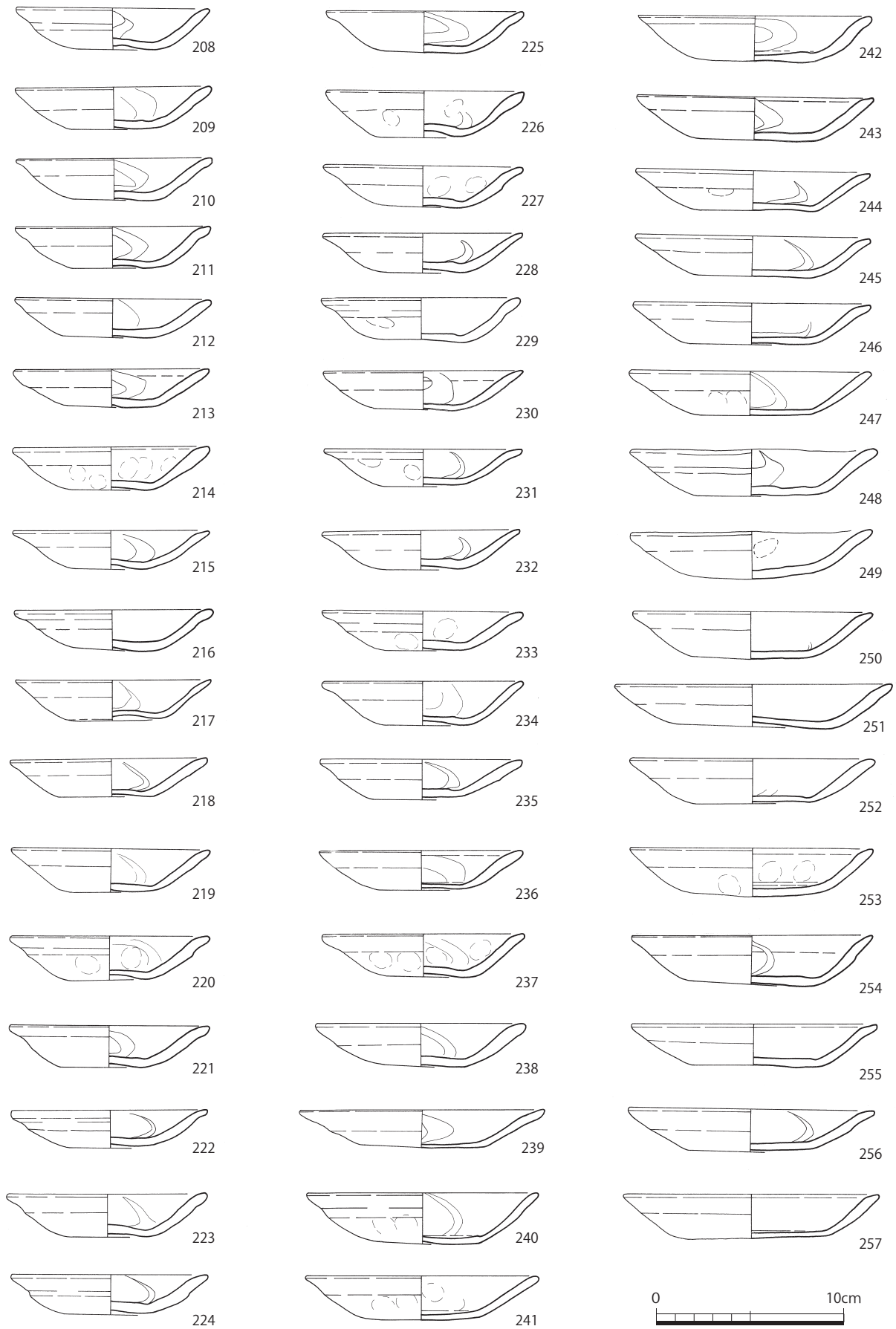
**295**～**311** は手捏ね整形による小皿または蓋で、**311** の底部には焼成後の穿孔が認められる。  
**312**～**317** は手捏ね整形による耳皿で、小皿の口縁部を湾曲させることによって製作されている。  
**318**～**458** は京都系土師器の皿で、大半が食器として使用されたものと思われるが、中には口縁  
部や内外面にススが付着するものがあり、灯明皿として使用されたものも含まれているようだ。  
**459**～**462** は京都系土師器の技法で製作された深手の坏である。これらの中には、製作年代が 16  
世紀後葉以降に下る資料も含まれている可能性が考えられる。**463**～**490** はロクロ目土師器の皿で、  
底部に回転糸切り痕を有するものであるが、これに加えて板状圧痕が認められる資料も存在する。

**491**～**494** は景德鎮系の青花碗、**495** は漳州窯系の青花碗、**496** は景德鎮系の青花皿、**497**・  
**498** は景德鎮系の五彩皿、**499** は景德鎮系の青花鉢、**500** は漳州窯系の青花皿である。**501** は中国  
産の白磁碗、**502** は中国南部産の白磁皿、**503** は中国産の白磁小杯である。**502** の口縁部外面には

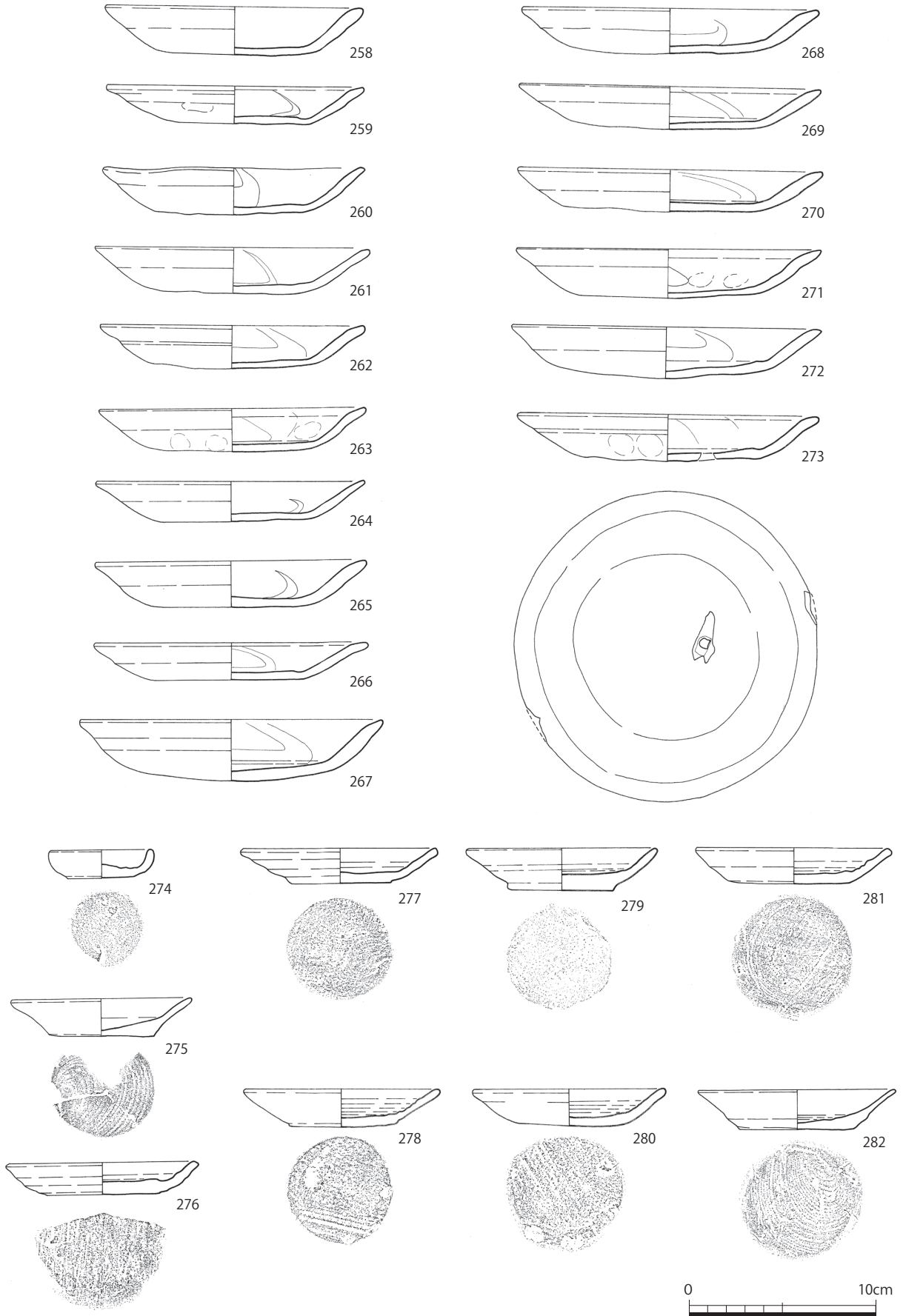
(1) 大分県教育庁埋蔵文化財センター『豊後府内3』（大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第2集 2005年）196～201頁



第67図 SX310出土遺物①(1/3)

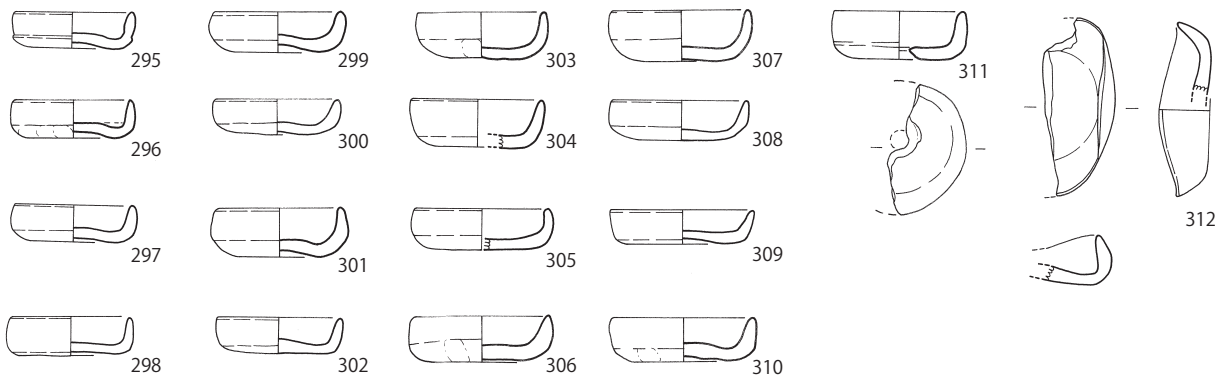
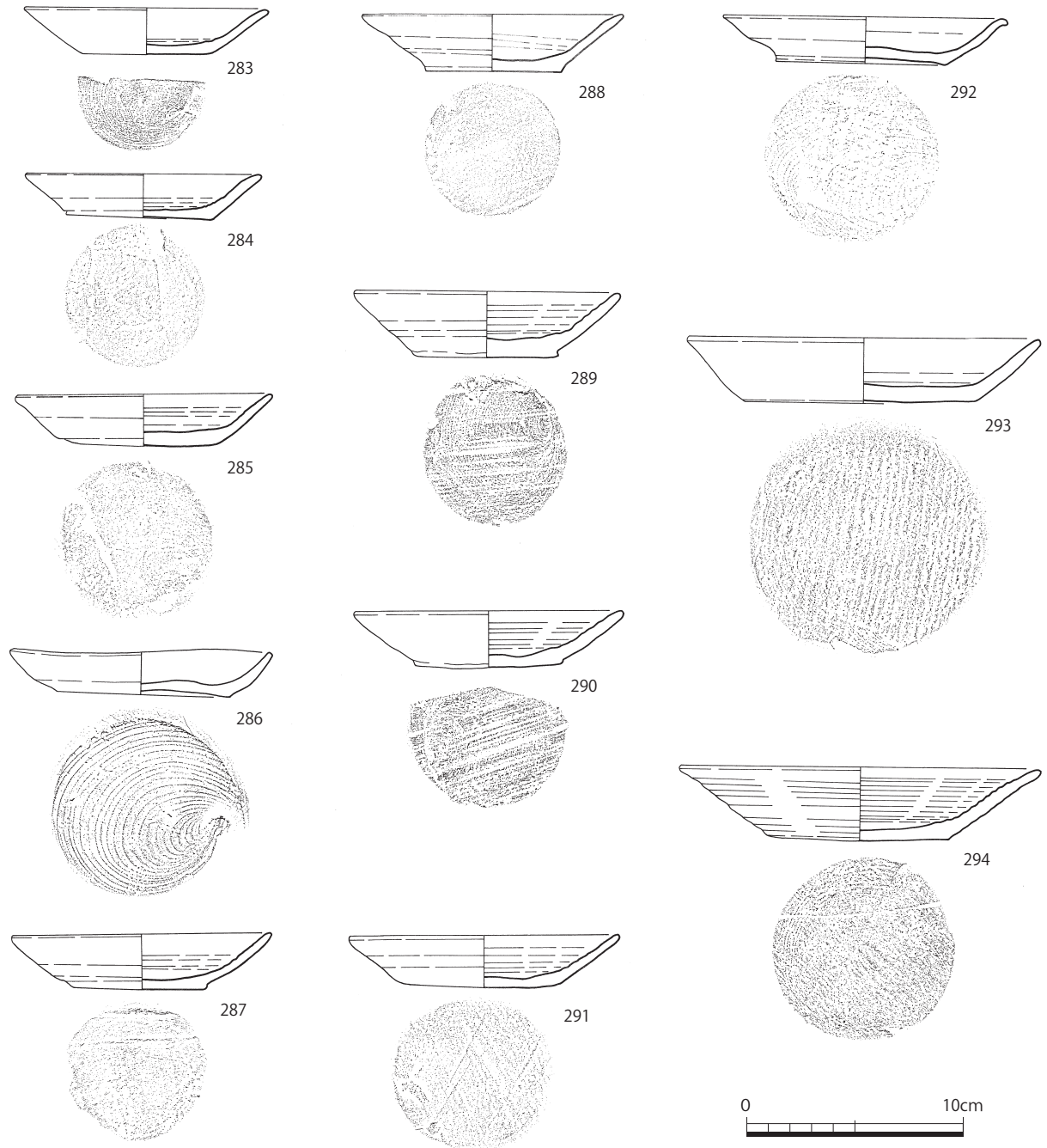


第68図 SX310出土遺物②(1/3)

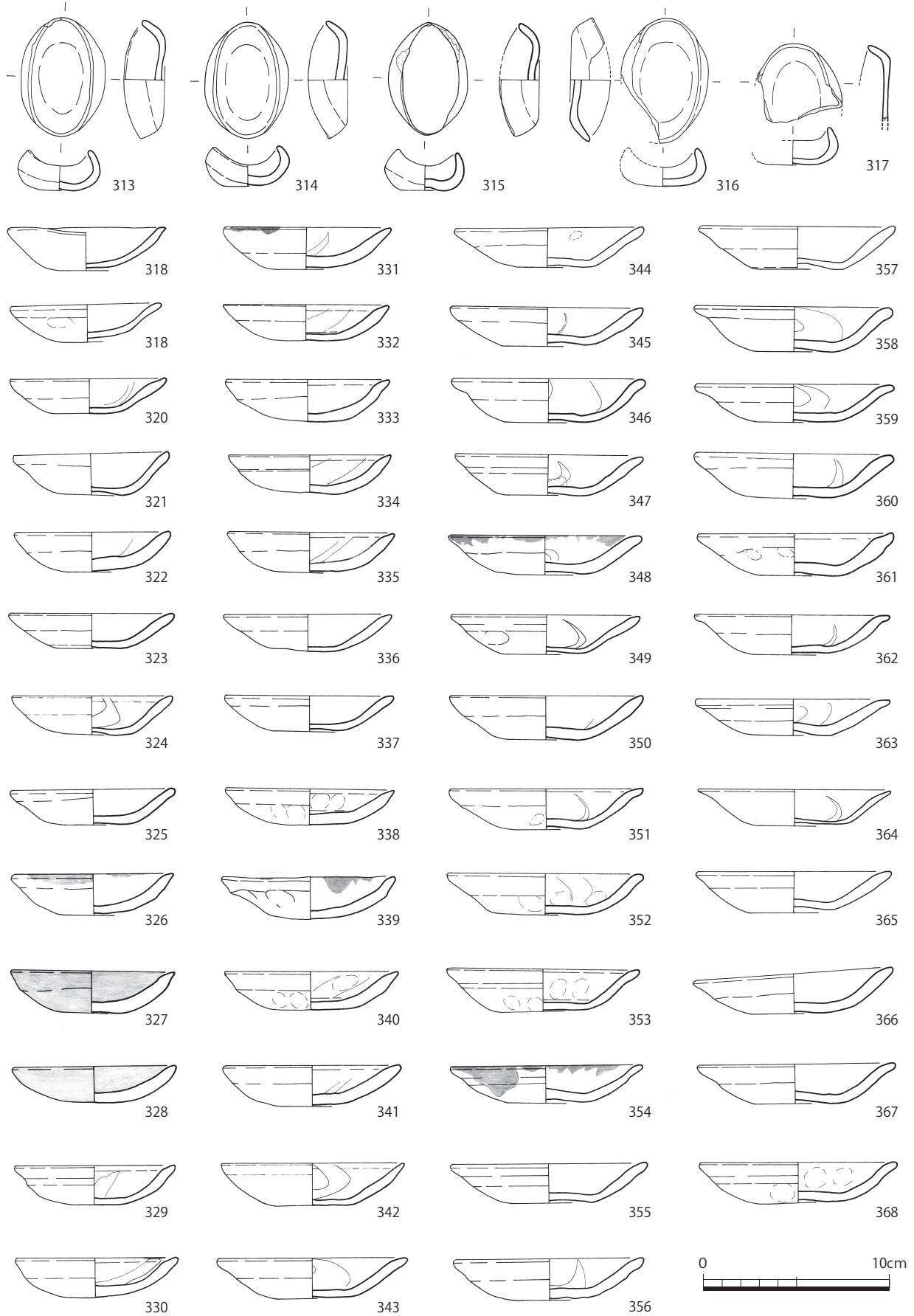


第69図 SX310出土遺物③(1/3)

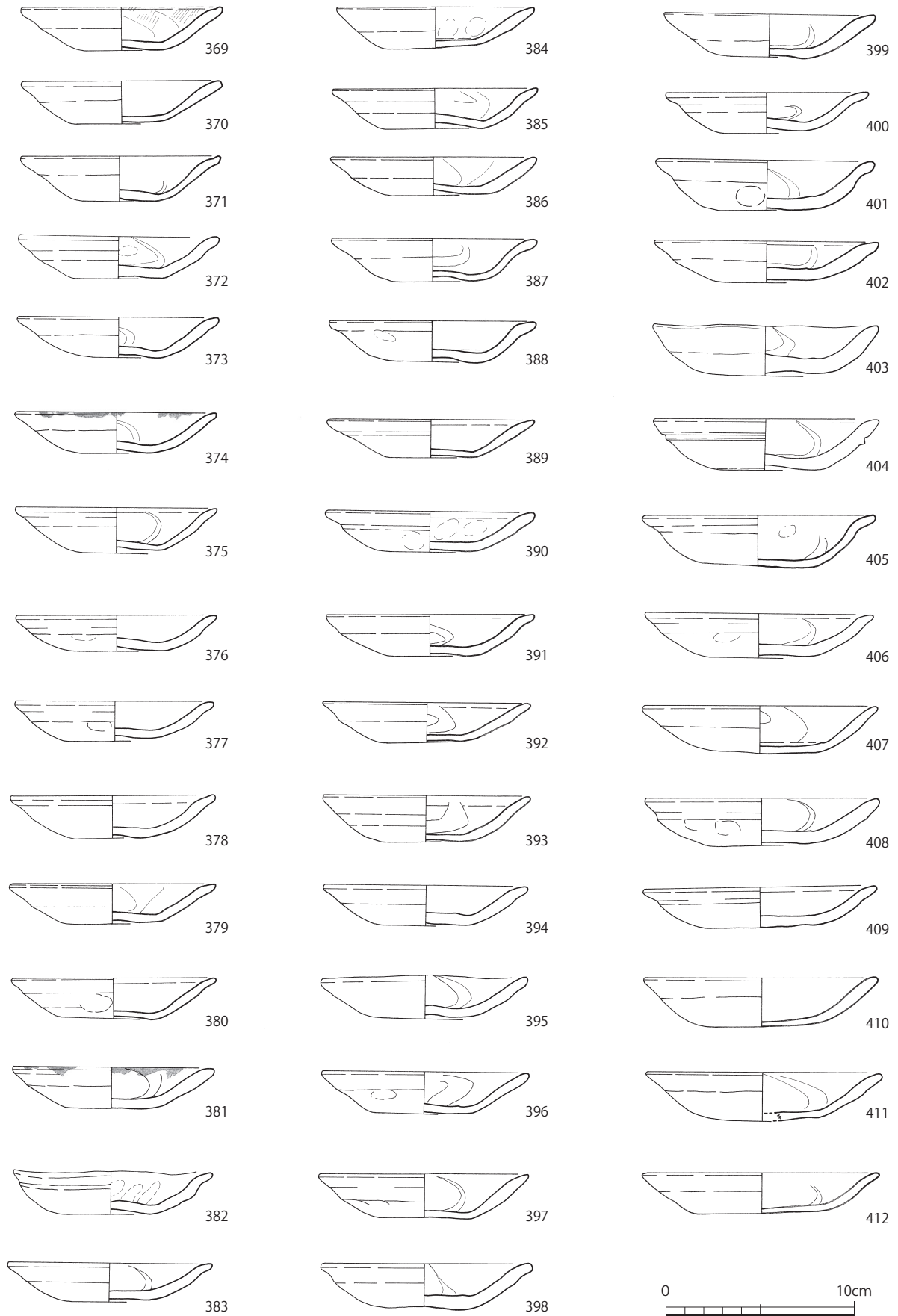




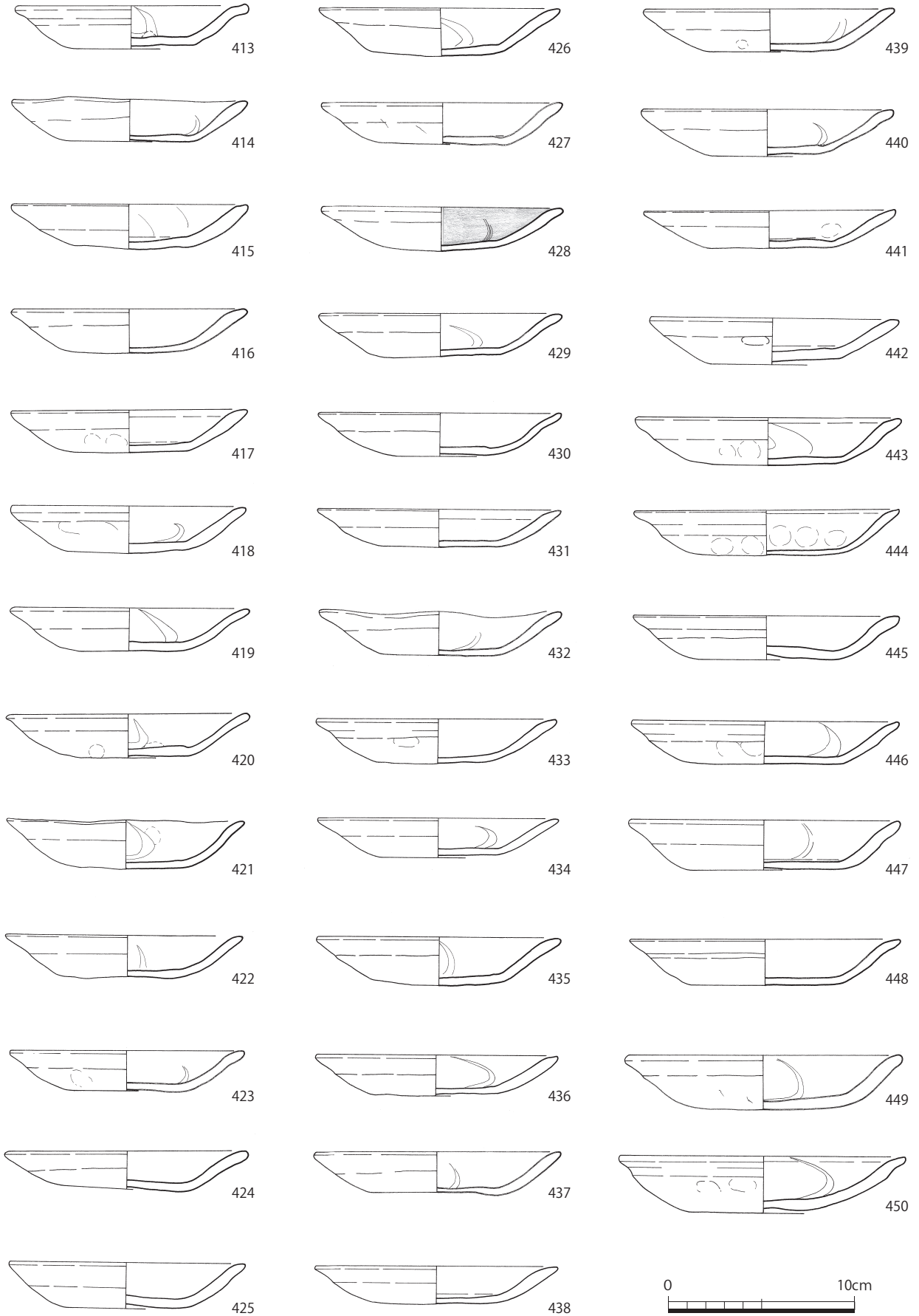
第70図 SX310出土遺物④(1/3)



第71図 SX310出土遺物⑤(1/3)

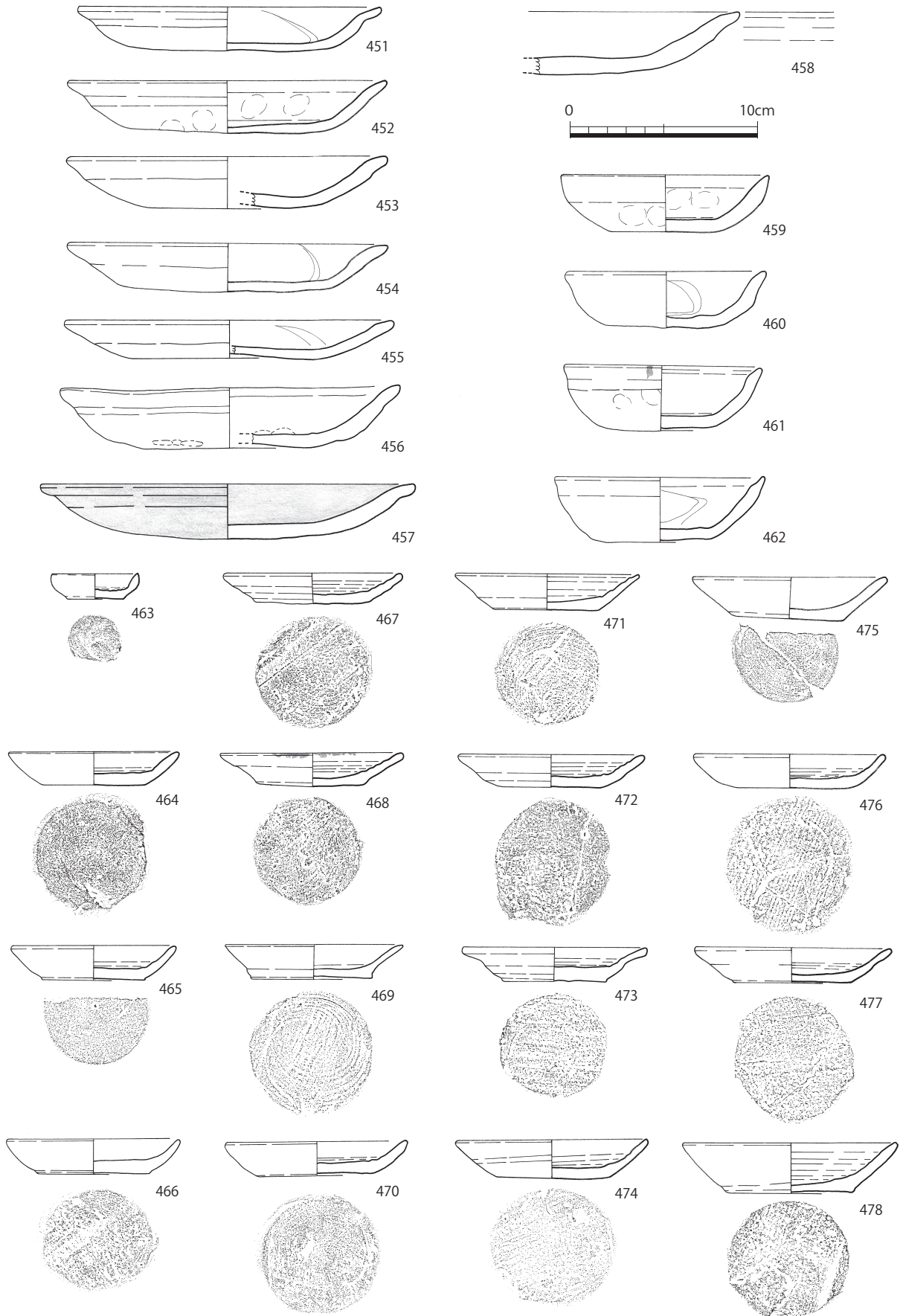


第72図 SX310出土遺物⑥(1/3)

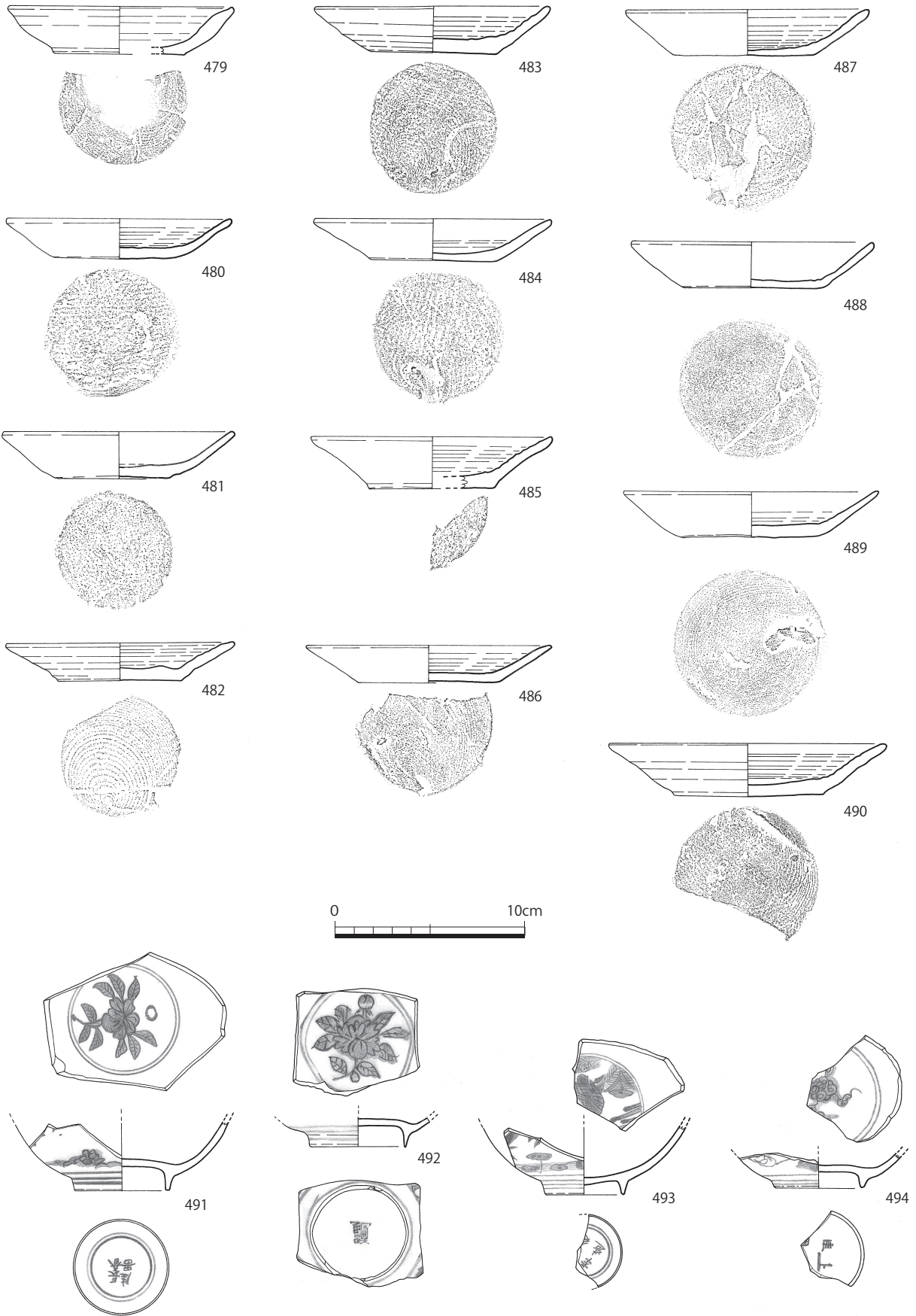


第73図 SX310出土遺物⑦(1/3)

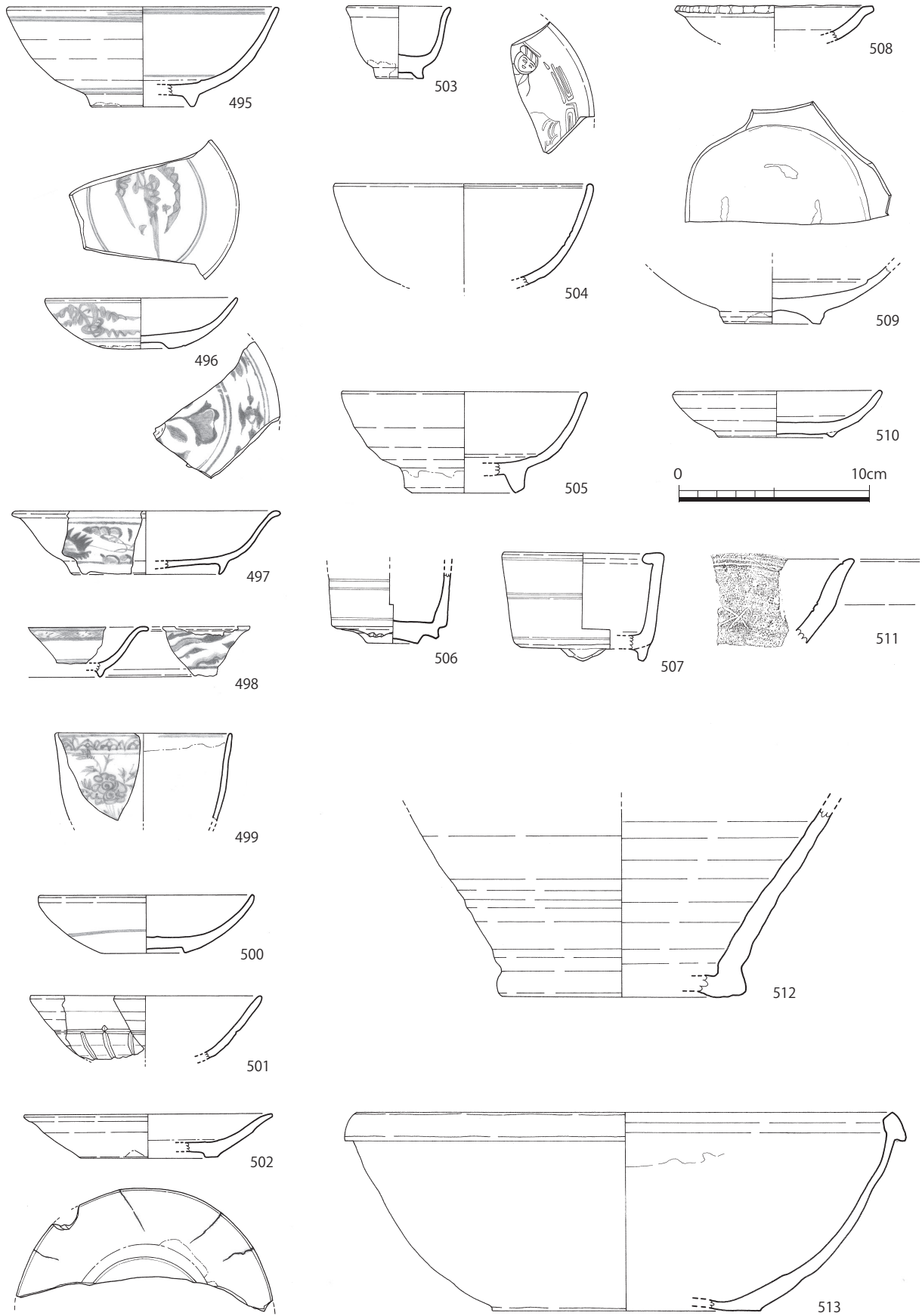




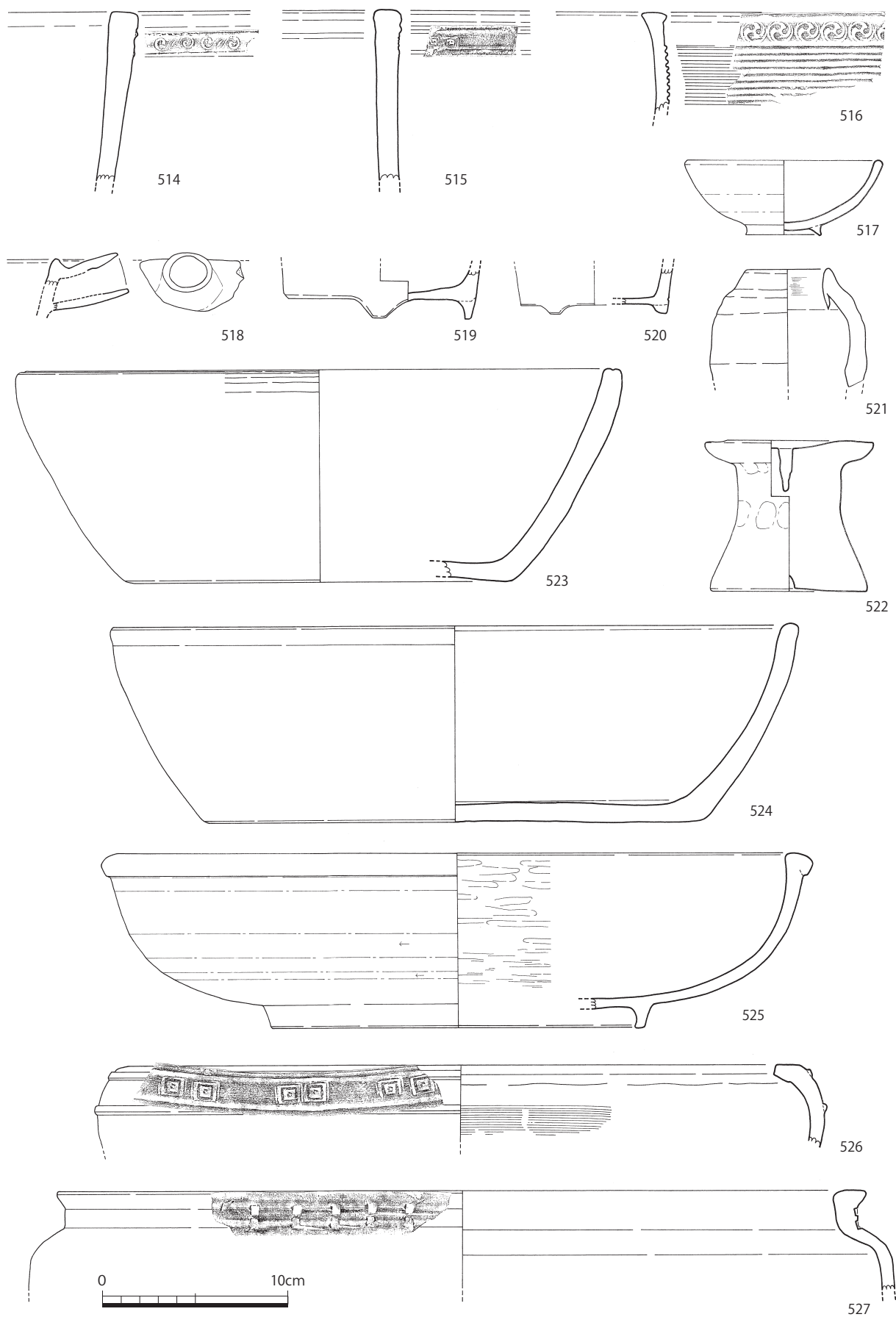
第74図 SX310出土遺物⑧(1/3)



第75図 SX310出土遺物⑨(1/3)

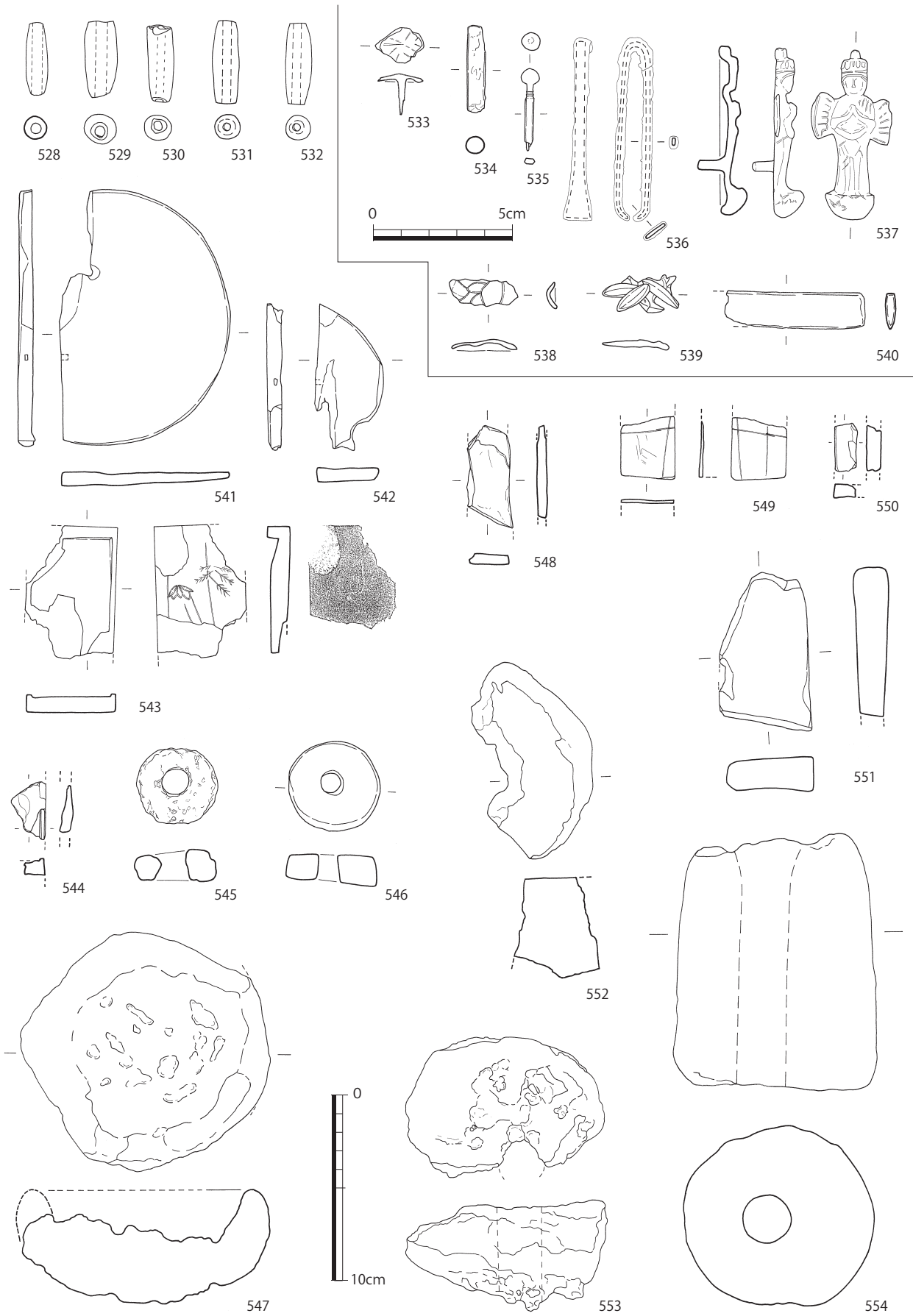


第76図 SX310出土遺物⑩(1/3)

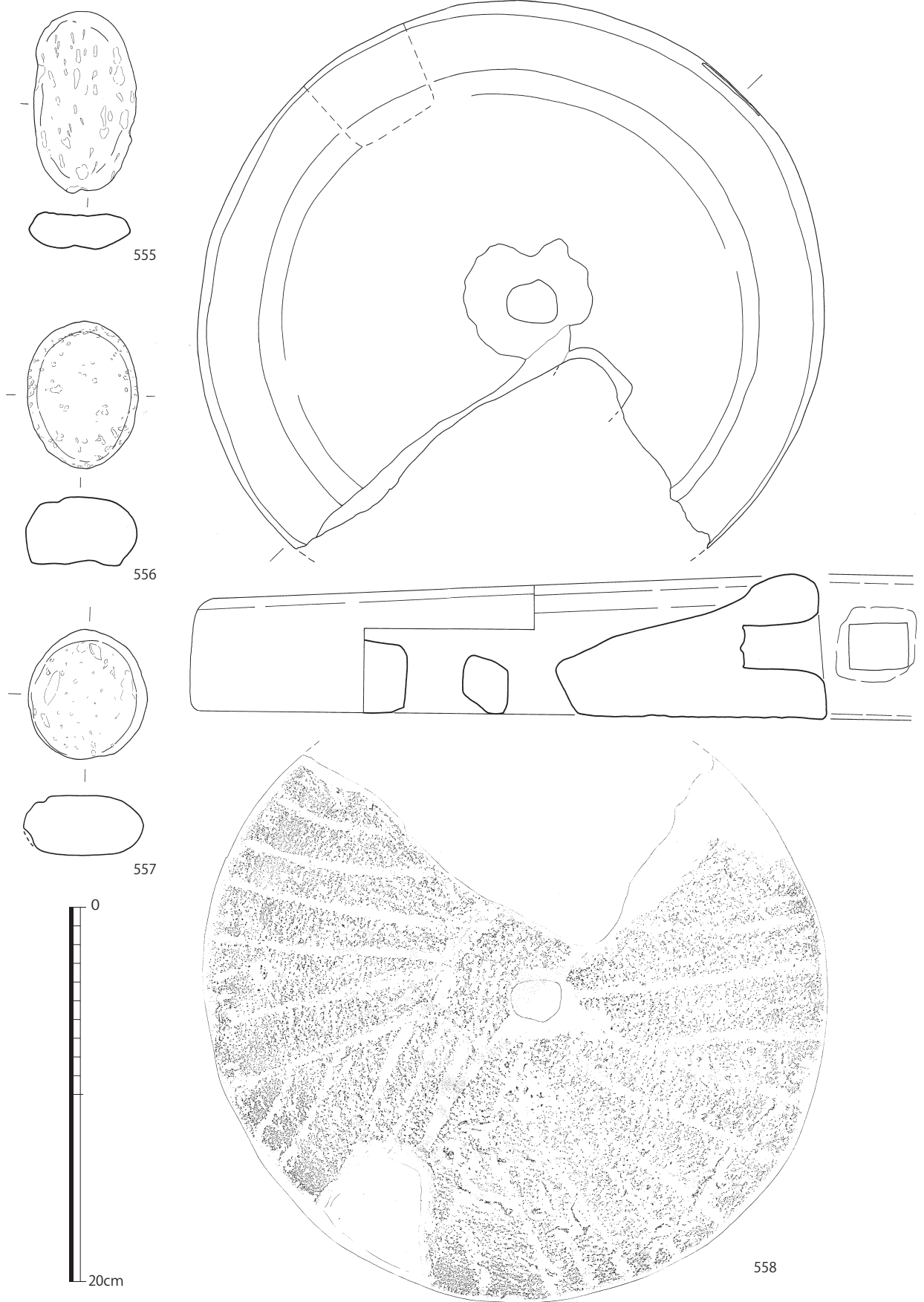


第77図 SX310出土遺物①(1/3)

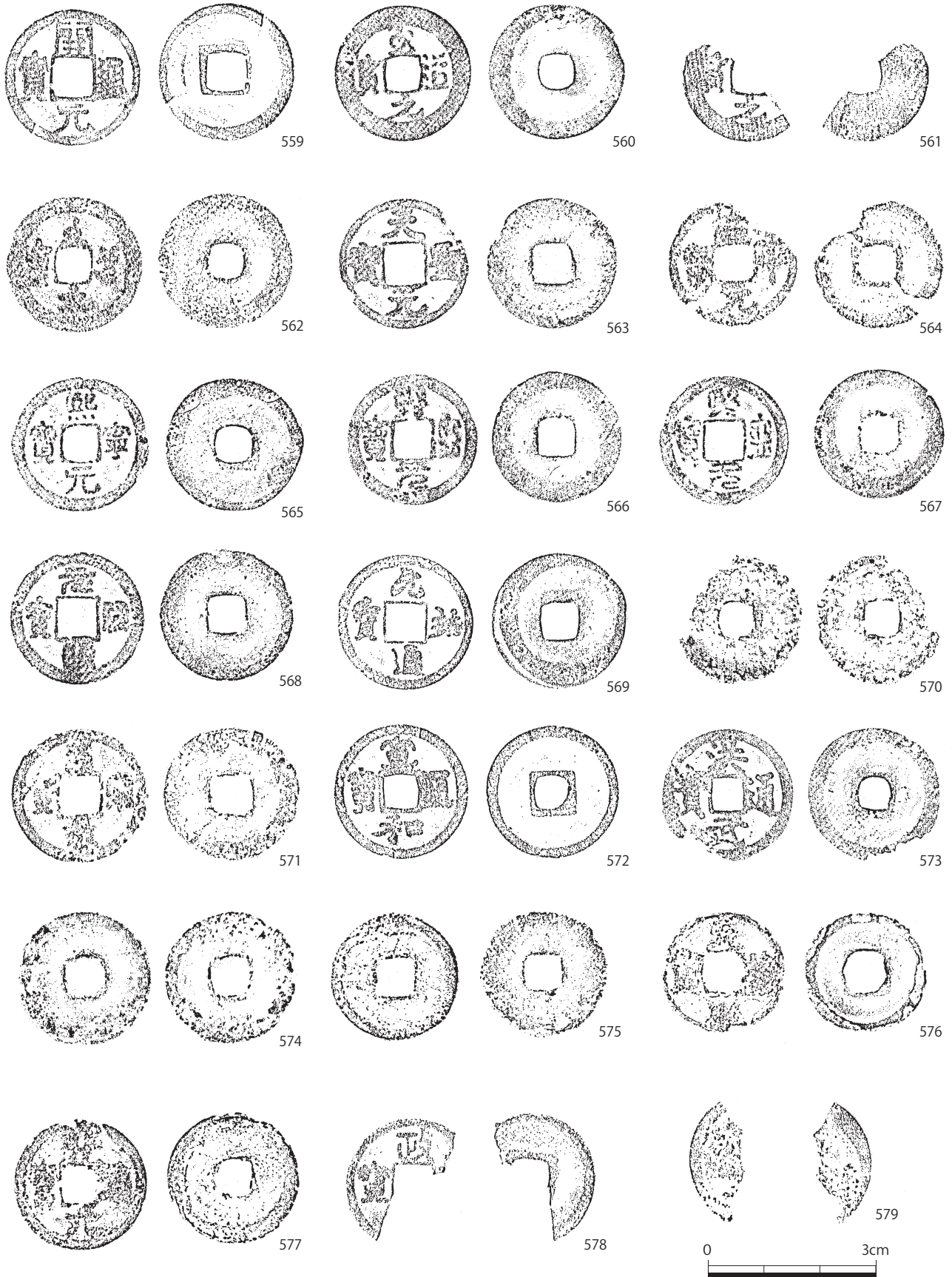




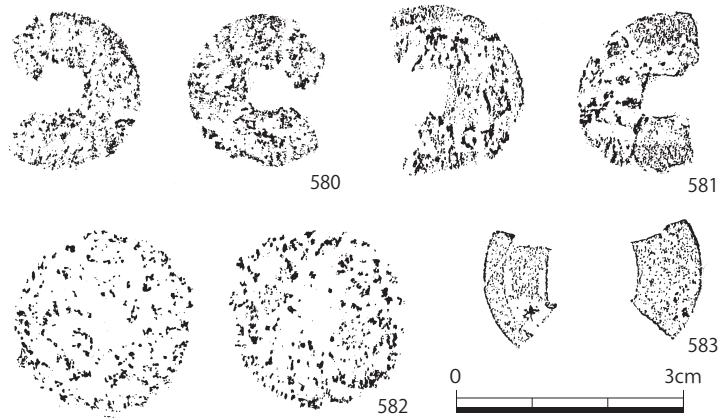
第78図 SX310出土遺物⑫(1/2、1/3)



第79図 SX310出土遺物⑬(1/3)



第80図 SX310出土遺物<sup>⑭</sup>(1/1)



第81図 SX310出土遺物⑬(1/1)

ヒビ状の亀裂が生じているが、これが焼成時のものなのか使用によるものか判断できない。504～508は中国産の青磁で、504・505は碗、506・507は香炉、508は皿である。504は龍泉窯で15世紀代に製作されたもので、内面に印花による人物文と雷文が施されている。日本列島では「人形手」と呼称され、茶道具として珍重された製品であることが知られている。509は朝鮮王朝産の白磁碗で、見込みに鏡と呼ばれる段と目積みが認められる。510は瀬戸美濃産の陶器皿で、大窯Ⅲ期の製品である。511は産地不明の焼締陶器皿または鉢で口縁内面に沈線が認められるとともに、体部内面に「×」状のへら記号が施されている。512は中国産の褐釉陶器壺で、底部付近の破片である。513は中国南部産焼締陶器の鉢である。

人形手

514～527は在地系の瓦質土器または土師質土器で、514～516は長胴形の火鉢、517は碗、518は把手付きの鍋、519・520は香炉、521は焼塩壺、522は燭台、523～525は鉢、526・527は火鉢である。

528～532は管状土錘で、530を除いて完存品となる。523～540は金属製品で、523は鉾、534は用途不明、535は鉾または釘、536は毛抜き、537は懸仏、538・539は目貫金具、540は小柄である。

千手観音の懸仏

537の懸仏は注目される遺物で、千手観音の本尊部であろう。腕部の表現が著しく退化しているため、戦国期頃の製品である可能性が高い。

541・542は木製品で、曲物底板である。SX310から出土した木製品としては、他に柄杓や漆器杯があるが、前者は腐食のため取り上げが不可能であり、後者は保存処理を実施していないため、図面を提示できていない。543～558は石製品である。543・544は輝緑凝灰岩を使用した石硯（赤間硯）で、543の裏面には植物を表現したと考えられる刻線文様が認められる。545・546は軽石製の沈子で、穿孔が認められる。547は用途不明であるが、軽石の側面に加工を施した容器状の製品であろうか。548～551は砥石である。552は用途不明の石製品、553・554は軟質な花崗岩を素材とした鞆の羽口であろう。555～557は軽石を円形または楕円形状に加工したものであるが、用途は不明である。558は安山岩を素材とした石臼で、SX310の最下層から出土している。

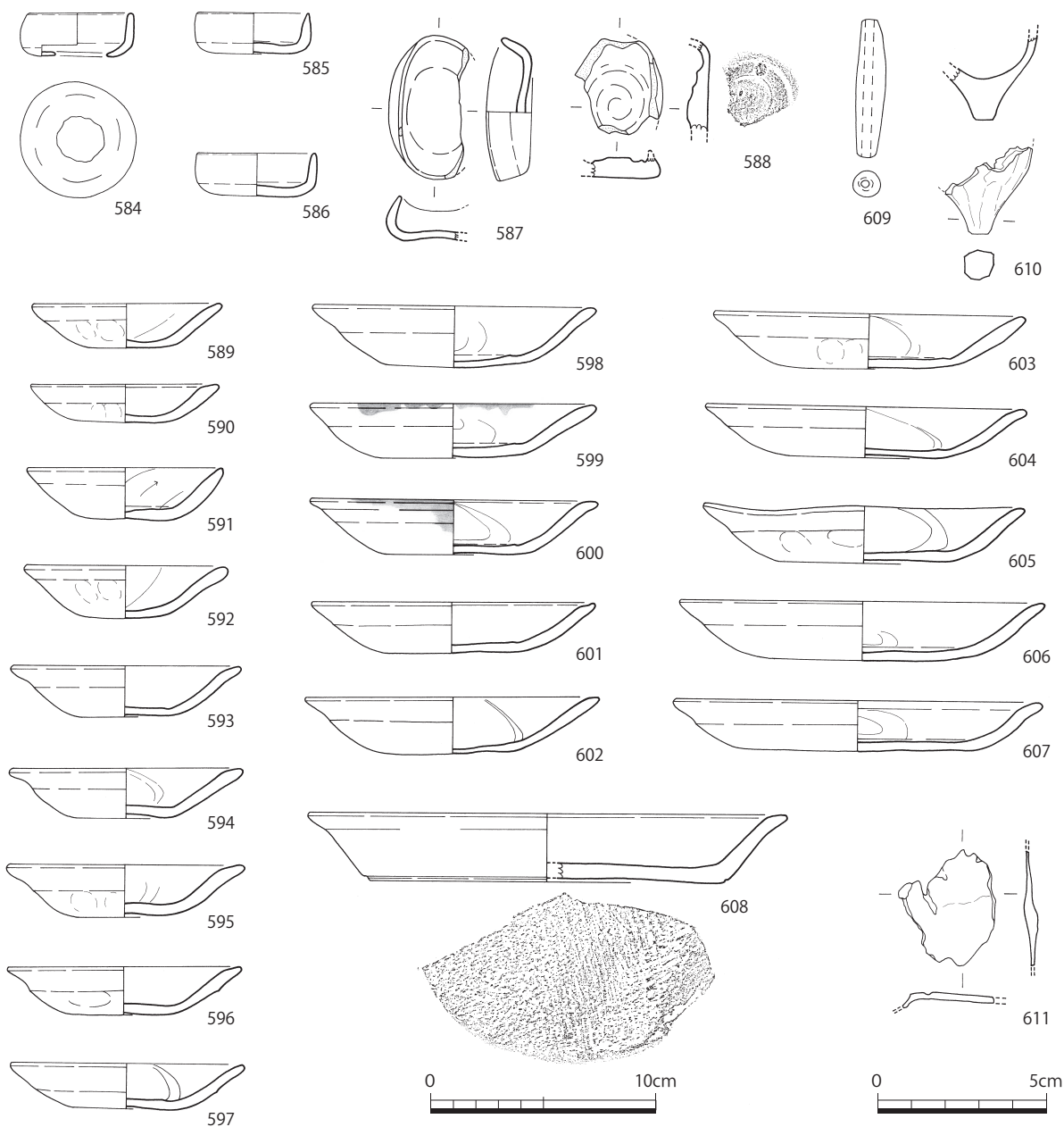
刻線文様のある石硯

559～583は銅銭である。銭種などは、遺物一覧表を参照されたい。

### SX370

SX370(第66図)はH31区で検出された遺物集中部である。調査区の南東隅付近に位置しており、京都系土師器などが東西1.2m、南北1mの範囲からまとまって出土した。調査当初は多量の土師器の破片が集中した状態で検出されたことから、当該遺構をSX310の内部に掘り込まれた土坑で





第82図 SX370出土遺物(1/3、1/2)

京都系土師  
器の廃棄  
ブロック

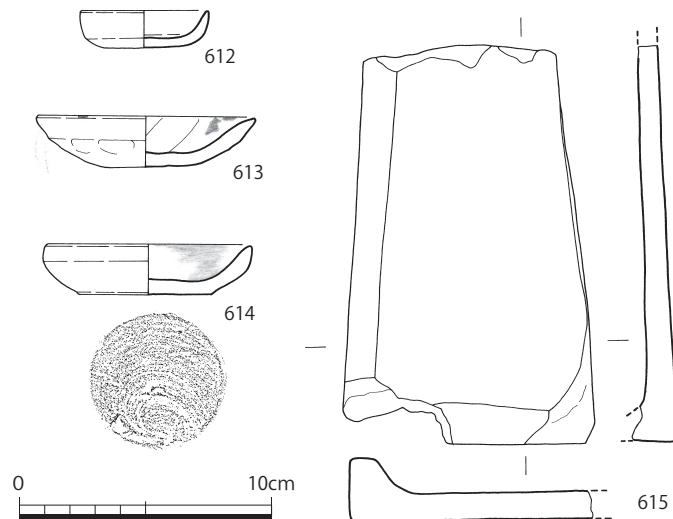
あると認識していた。しかしながら、掘り下げを進めてみると、明瞭な掘形のラインを検出できなかったことに加え、土師器皿の破片が層をなして集中していたことから、当該遺構をSX310AやSX310Bと同様に京都系土師器の廃棄ブロックであると認識するに至った。SX310AやSX310Bと比較すると、その規模は小型で出土遺物も破片が多いが、完形もしくは完形に近い状態に復元される資料も存在する。この廃棄ブロックの東側と北側は、さらに調査区外に伸びる。出土遺物は基本的には京都系土師器皿が主体で構成されているが、ロクロ目土師器皿の破片や耳皿なども少量存在している。土錘や銅製品の小片なども出土しているが、これらは廃棄の過程もしくは遺構の形成時に混入したものと考えられる。出土遺物の大半は食器として使用された京都系土師器皿であるが、灯明皿として使用されたものも少量存在する。出土した京都系土師器皿はいずれも器壁が薄く古相を呈する資料であることから、遺構の年代は16世紀前葉から中葉に比定される。

第82図はSX370の出土遺物である。土師器類は一部を除き、完形ないし完形に近い状態に復元された資料を図示している。584～586は手捏ね整形による小皿または蓋で、587の底部には焼成後の穿孔が認められる。587・588は耳皿で、587は手捏ね整形の小皿、588はロクロ目土師器の小皿を利用して製作されている。589～607は京都系土師器の皿で、大半が食器として使用されているが、599の口縁部にはススの付着が認められ、一部には灯明皿として使用されたものが存在することがわかる。608は土師質土器の皿である。胎土・色調、口縁部の作り方など、京都系土師器と類似する資料であるが、底部が明瞭な平底を呈し、外底部に圧痕が認められる。609は管状土錘、610は瓦質土器香炉の脚部である。611は銅製品の小破片で、用途は不明である。

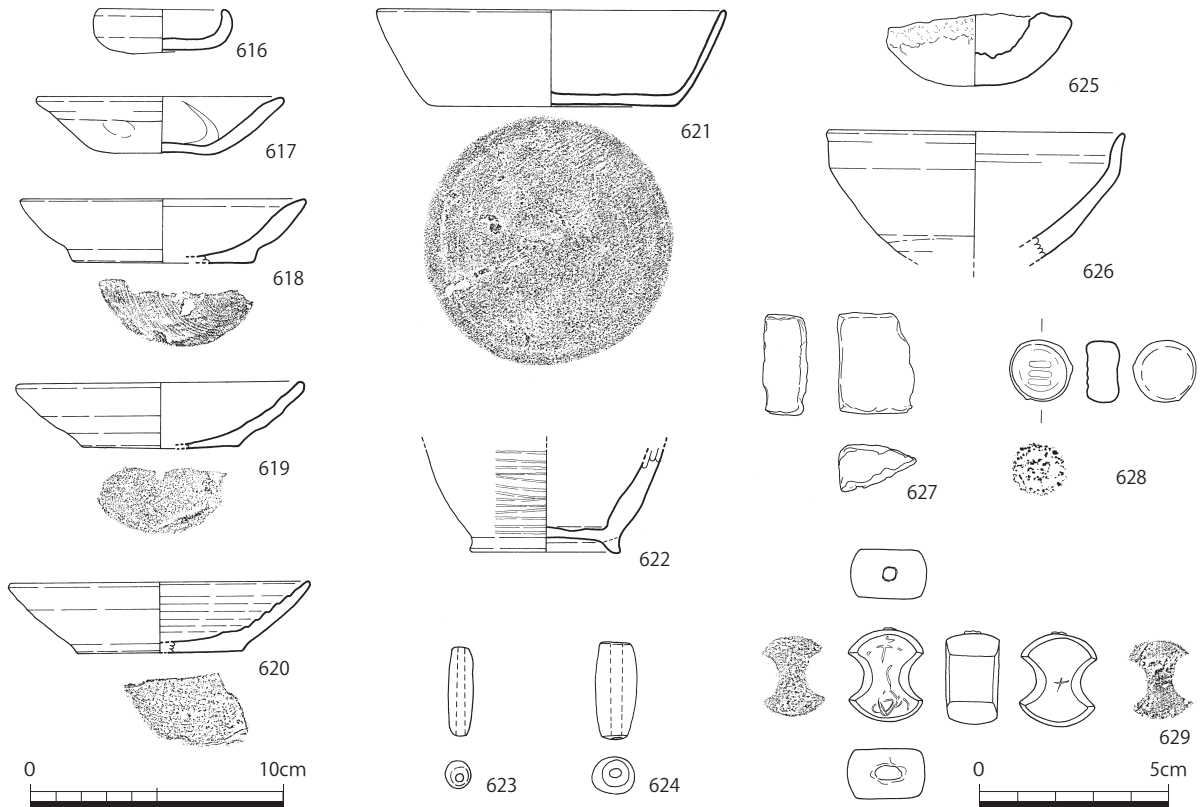
#### SX402

SX402はH32区に位置する遺物の集中地点である。SX310とした大型落ち込み遺構の上面に形成されたもので、明確な掘り込みラインや掘形は検出できなかったが、東西約2m、南北約1mの範囲に拳大の礫や土師質土器・瓦質土器が集中して出土した。出土遺物の年代観から、遺構の年代は16世紀前葉から中葉に比定される。

第83図はSX402の出土遺物である。612は手捏ね整形による小皿あるいは蓋、613は京都系土師器の皿である。口縁部内面にススが付着しており、灯明皿として使用されたことがわかる。614は底部外面に糸切り痕をもつ在地系土師器の皿で、この口縁内面にもススが付着する。615は瓦質土器の製品であるが、器種不明である。



第83図 SX402出土遺物(1/3)



第84図 区域1 柱穴出土遺物(616~627は1/3、628・629は1/2)

⑥柱穴

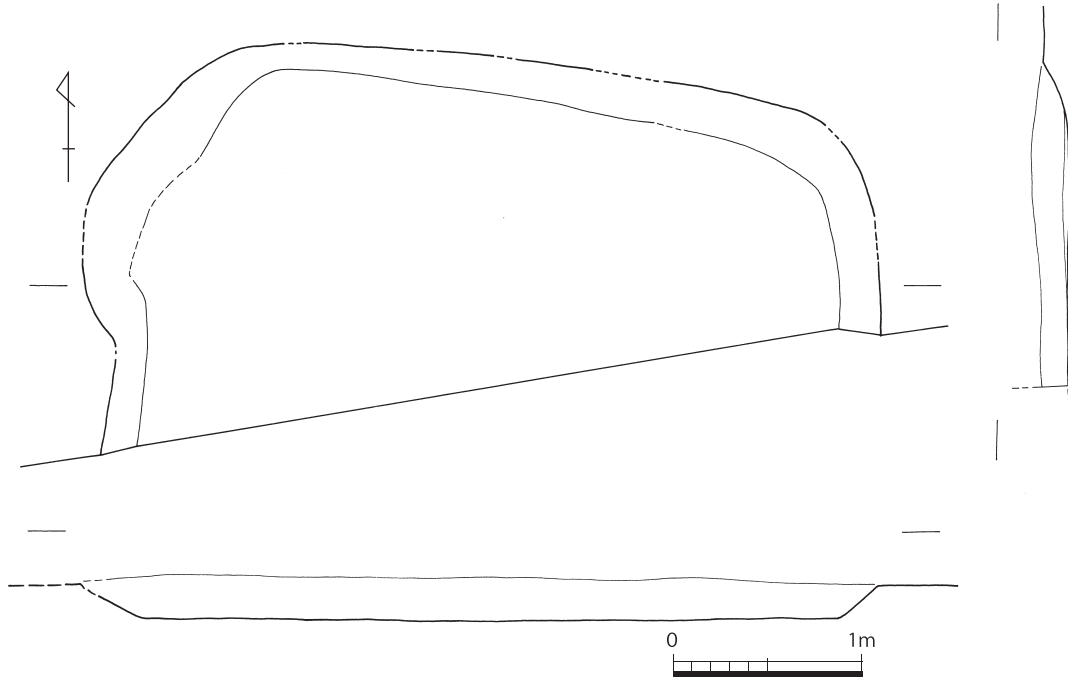
区域1で検出された多数の柱穴は、掘立柱建物あるいは柵状の柱穴列の一部と推定されるが、建物跡と明確に認識できるものは確認できていない。このことについては第3節で検討することとし、本項目では柱穴からの出土遺物(第84図)や特記すべきものを記述しておく。

616はH32区の柱穴SP503から出土した土師質土器の小皿または焼塩壺の蓋で、手捏ね整形によって製作されている。617はH35区の柱穴SP242から出土した京都系土師器の皿である。柱穴の埋土中から完存の状態出土した。618はH31区の柱穴SP408から出土した土師質土器皿で、15世紀後葉頃の所産である。619はH34区の柱穴SP466から出土した土師質土器皿で、15世紀後葉頃の所産である。620はL33区の柱穴SP407から出土したロクロ目土師器の皿で、柱穴の埋土上位から出土した。621はH32区の柱穴SP383から出土した土師質土器の坏で、底部に板状圧痕が認められる。遺物は14世紀代のものと思われるが、柱穴は15~16世紀の遺構と推定されるため、混入品であろう。622はH32区の柱穴SP340から出土した土師器の小型壺で、胴部下半部から高台を有する底部が残存している。外面にはミガキが施されている。8~9世紀代の遺物であるが、柱穴自体は15~16世紀の遺構であるため、混入品であろう。623・624は管状土錘で、623はI34区の柱穴SP294、624はH32区の柱穴SP338からの出土である。625はI34区の柱穴SP472から出土した取瓶である。626はH32区の柱穴SP364から出土した瀬戸美濃産の天目碗である。627はI34区の柱穴SP473から出土した砥石で、砂岩系の石材を素材とする。628はI34区の柱穴SP386から出土した太鼓形分銅である。表面に大友家の定紋と思われる三木紋を鑄出している。法量は径1.6cm、厚み0.9cm、重さ10.7gである。SP386の埋土には焼土が多く含まれていた(写真図版13)ことから、遺構の年代は16世紀末葉頃と推定される。629はI34区の柱穴SP409から出土した繭形分銅である。表面に分銅の法量を表記したタガネ彫りの文字、裏面に「十」字形の記号が施されている。本体は青銅製で、端面の一部には重さを調節するために流し込まれた

太鼓形分銅  
繭形分銅

鉛の栓がみられる。分銅の重さは 38.5 g を測ることから、表面の文字は「壹両」（1 両 ≒ 37.5 g）と判読される可能性が高い。

また、図示可能な出土遺物は認められないものの、H34 区の柱穴 SP290 および I34 区の柱穴 SP309 の埋土には焼土が多く含まれていた。特に SP309 は柱痕跡の埋土のみに焼土が多量に含まれる。さらに I34 区の柱穴 SP397 の底面からは、礎盤石（柱穴内礎石）と思われる川原石が据えられていた（写真図版 13）。



第85図 SX390実測図(1/40)

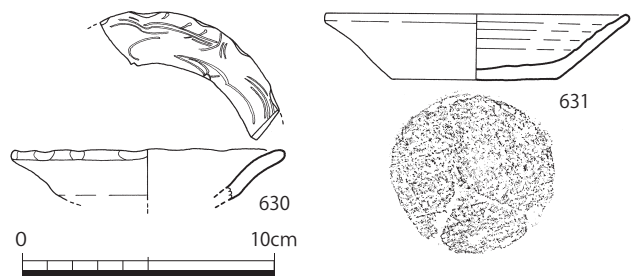
⑦その他の遺構（方形竪穴遺構）

SX390

SX390（第 85 図）は H32 区に位置する遺構である。その規模は南北 1.4 m 以上、東西 3.20 m、深さ 18cm を測る。遺構のプランは隅丸長方形で、床面からは数基の柱穴を検出したが、この遺構に付属する遺構かどうかは判断がつかない。16 世紀前葉から中葉に構築された溝 SD360 の上位で検出されている。遺構の形状から、SX390 は「方形竪穴遺構」の可能性が高いと考える。埋土中からの出土遺物にはロクロ目土師器皿と 15 世紀代の青磁があるが、層位的な状況と周辺の遺構状況から、遺構の年代を直接的に示すものではないと考えている。遺構の構築年代は、16 世紀後葉から末葉まで降る可能性を指摘しておきたい。

方形竪穴遺構

第 86 図は SX390 からの出土遺物である。630 は中国産の青磁皿で、口縁部が輪花となる。15 世紀代の製品である。631 はロクロ目土師器の皿である。



第86図 SX390出土遺物(1/3)



⑧遺構に伴わない遺物（包含層・整地層）

第87・88 図は遺構に伴わない遺物で、包含層や整地層から出土したものを一括して提示している。

632 は同安窯系青磁皿で、見込みに片彫りと櫛状工具による文様が施されている。13世紀代の製品である。633・634 は青白磁合子の蓋で、633 の天井部には型押しによる鳳凰文が認められる。633・634 も13世紀代の製品。635 は龍泉窯系青磁瓶類の把手である。14～15世紀代のものか。636 は五彩の小杯で、見込みは蛇の目状に釉剥ぎとなる。また、当該部分に赤絵による文様がある。16世紀代に比定される。637 は口縁部の小破片であるが、内外面に翡翠釉（青釉）が施されている。638・639 は青釉陶器小皿で、内外面にコバルトブルーに発色する翡翠釉が施されている。640 は中国産の褐釉陶器壺で、把手が残存する肩部付近の破片である。内面は露胎となる。641 は中国産焼締陶器の蓋であろう。638～641 はいずれも16世紀代に比定される。642 は器種不明であるが、外面に白磁釉を施し、一部に赤絵の上絵付を行っている。内面は露胎となる。16世紀代に比定される中国産の製品で、水注もしくは水滴などの破片であろうか。643 は古瀬戸梅瓶の破片で、外面に色調が淡緑色を呈する灰釉を施している。14～15世紀代に比定される。644 は中国南部産の播鉢で、16世紀代に比定される製品である。645 は備前焼播鉢で、口縁部の形態から中世3期a（14世紀後葉～15世紀初頭）に分類される資料である。

646～651 は京都系土師器で、いずれも16世紀後葉頃に比定される。646 は小皿または蓋、647～650 は皿、651 は耳皿である。652～657 はロクロ目土師器で、15世紀末葉から16世紀前葉に比定される。652 は小皿、655～657 は皿である。

658～662 は在地系の瓦質土器で、いずれも16世紀後葉から末葉に比定される製品である。658・662 は長胴形の火鉢で、口縁部外面に双頭蔵手文もしくは雷文の刻印（スタンプ文）を施す。660～662 は鉢で、660 は口縁部が垂直に立ち上がる形態を呈するもの、661・662 は口縁部が緩やかに立ち上がる形態を呈するものである。661・662 の外面には丁寧なナデとミガキが施されている。663 は器種不明のもので、焼成の状況は須恵器または須恵質土器を思わせるものである。側縁部は面をなし、側縁に平行する部位の外面には刃物またはヘラを当てた断面V字形の沈線が施されている。当該部分は透かしである可能性が考えられる。内面に相当する部位には弧状に湾曲する突帯をもつ。破片であるため、器種・時期ともに不明である。664～685 は土錘である。686・687 は土人形である。前者は小片のため、何を象っているか不明であるが、底部から続く未貫通の小孔が認められる。687 は魚を象っている。いずれも江戸時代中期（18世紀）以降の製品であろう。688・689 は土器片加工品で、土師質土器片を円形に再加工している。690 は須恵期蓋坏で、TK23～TK47型式に比定される5世紀末葉頃の製品である。周辺に当該時期の遺構は存在しておらず、混入資料である。691 は土製の独楽で、上面の中央部に軸を挿入するための小円孔が設けられている。体部の断面は円錐形を呈し、外面には沈線が施されている。沈線が施された部位には赤色顔料が施されている。遺構に伴わない単品での出土であるため、製作年代ははっきりしないが、周辺の遺物の状況より16世紀代の所産と推定する。豊後府内では木製の独楽は出土事例が多いが、土製の独楽は少なく、注目しておきたい遺物である。

器種・時期不明の須恵器または須恵質土器

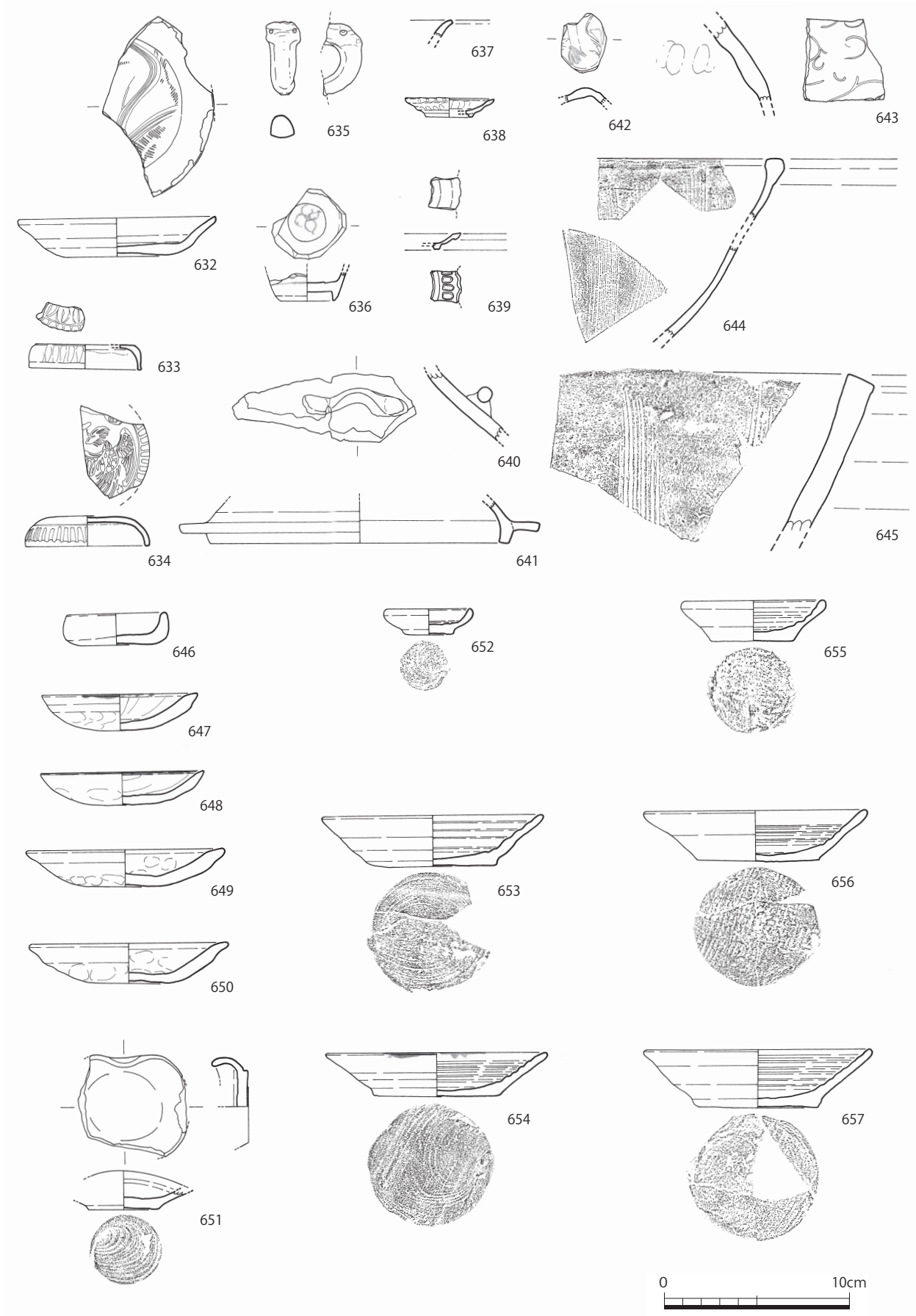
土人形（江戸時代中期以降）

土製独楽（16世紀?）

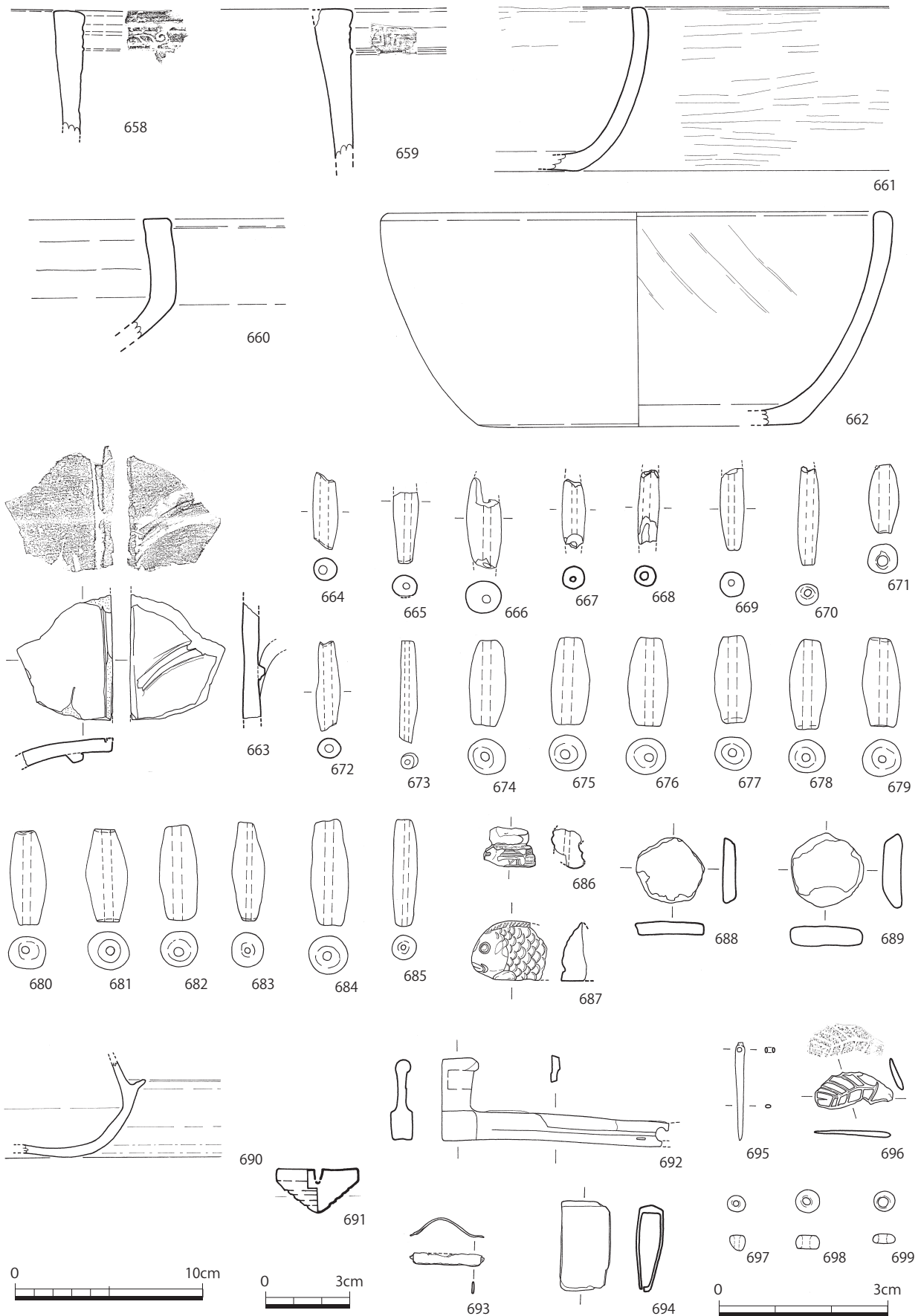
692～696 は金属製品で、すべて青銅を素材としている。692 は鍵前、694 は刀装具、696 は目貫金具であろう。693 は断面が緩やかに湾曲するもの、695 は上端部に貫通孔を設けるものであるが、いずれも用途不明である。697～699 はガラス小玉で、色調は青色を呈する。

700～704 は石製品。700・701 は砂岩質の石材を素材とした砥石である。702 は和泉砂岩に類する石材を使用した茶臼の下臼で、上端部にわずかに刻目が残っている。703 は滑石を素材とした石鍋の口縁部破片である。704 は軽石で作られた凹石である。

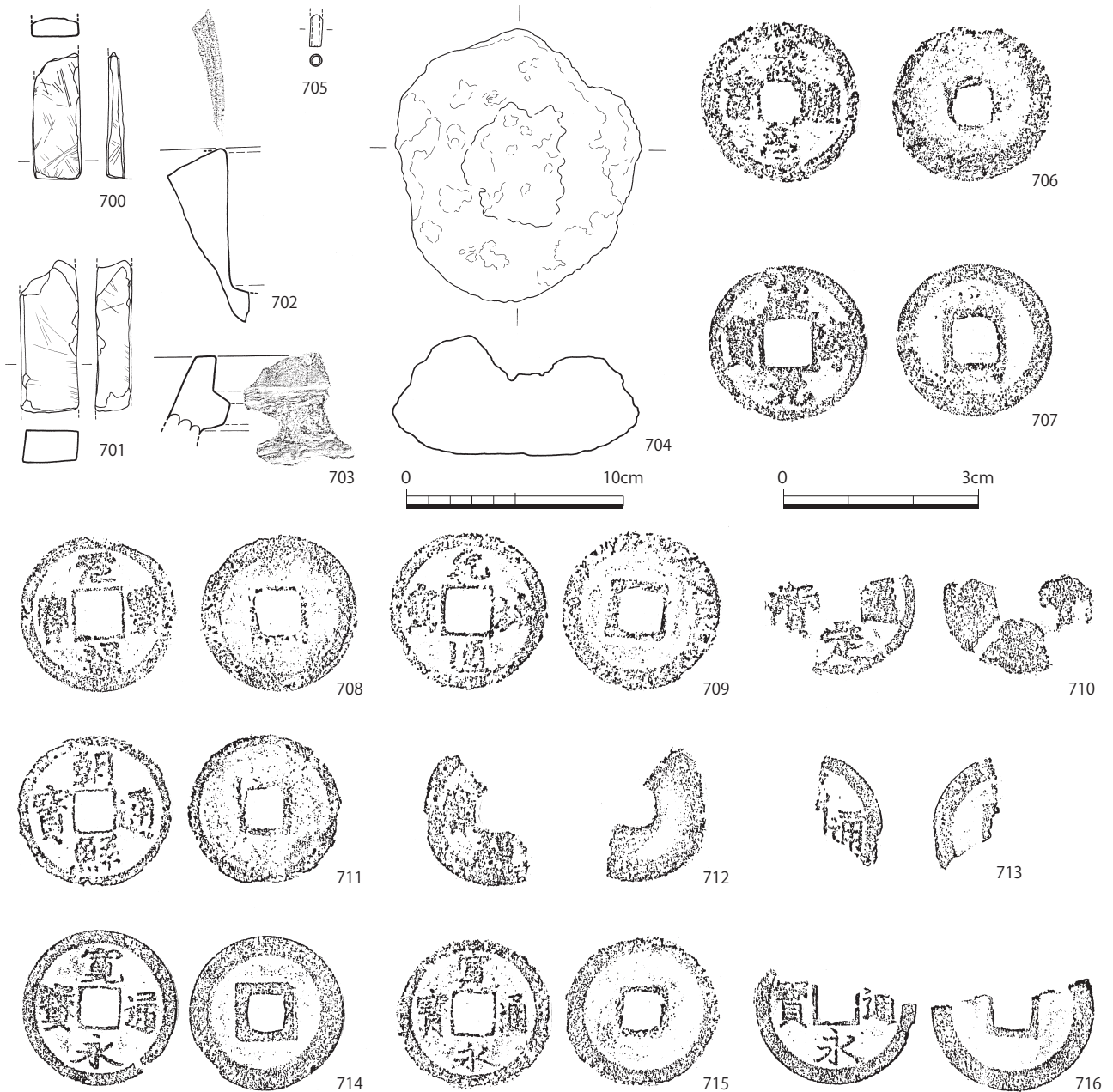
706～716 は銅銭である。銭種などは遺物一覧表を参照されたい。



第87図 区域1・遺構に伴わない遺物①(1/3)



第88図 区域1・遺構に伴わない遺物②(658~690は1/3、691~696は1/2、697~699は1/1)



第89図 区域1・遺構に伴わない遺物③(1/3、1/1)

(3) 下層遺構群 (15世紀後葉以前)

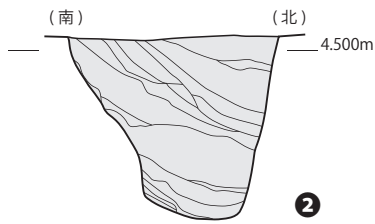
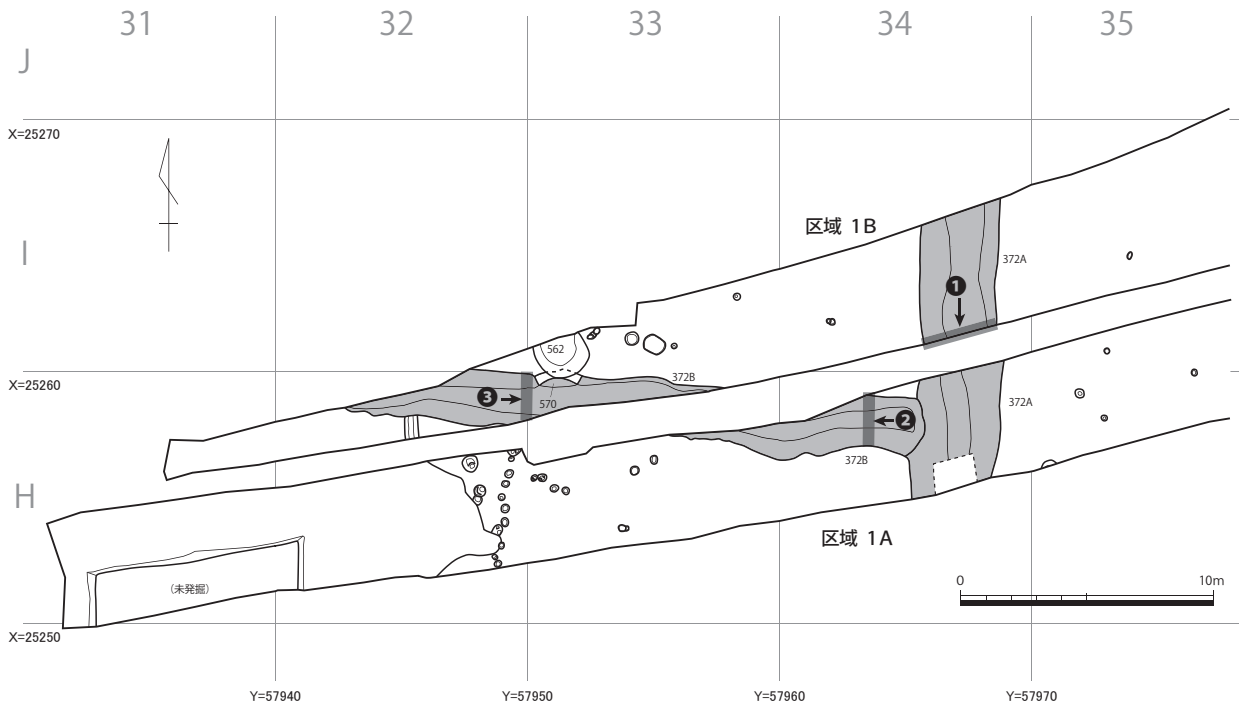
①溝 (堀)

SD372A、SD372B

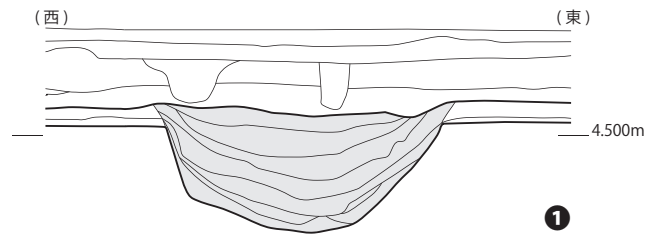
SD372A・SD372B (第90図) は下層遺構群に属する溝で、SD372AはI34・H34区で、SD372BはH32～H34区で検出された。

SD372Aは南北方向に伸びる大型の溝で、断面はU字状を呈する。上面幅は3.0～3.5m、深さは1.25m、検出された長さは約22mである。遺構の規模が大型であるため、溝というよりは、「堀」と呼称した方が妥当であろう。北側と南側は未調査区に伸びる。埋土は暗褐色の粘質土が主体となるが、底面付近と壁際には砂質土が堆積する部位が認められたことから、雨天時などに周辺から土砂が少量流れ込んだ状況が観察できる。また、遺構の底面や内部には、水が流れていたり溜まってい

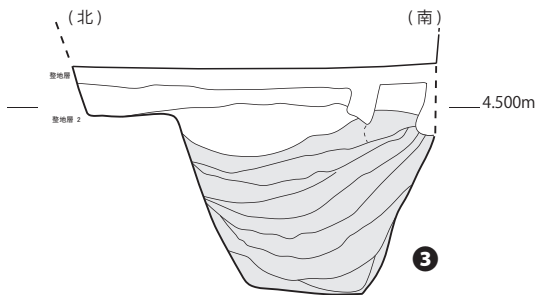




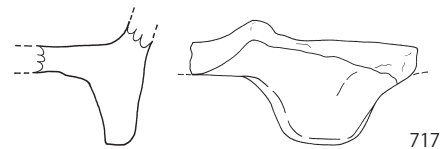
トーン部分は、SD372B の埋土  
(土砂が南側から流入)



トーン部分は、SD372A の埋土



トーン部分は、SD372B の埋土



第90図 SD327A・SD327Bと出土遺物(遺構図は1/300、土層図は1/60、遺物は1/3)

たりした痕跡は認められなかった。以上のことから、SD372Aは「空堀」であったと判断できる。

SD372Bは東西方向に伸びる溝（堀）で、断面は逆台形を呈する。断面の形状は幅が狭いのに対して深さが深い印象を受け、成人男性1人が肩まですっぽり入ってしまうような規模となる（写真図版13）。遺構の上面幅は1.8～2.1m、深さは1.45～1.50m、検出された長さは約23mである。東側はSD372Aとぶつかる部位で収束し、西側はさらに未調査区の方に伸びる。SD372Aよりは東に伸びないため、SD372AとSD372Bの平面形態はT字状を呈している。埋土の状況を観察すると、南側からの流入土が認められ、特に断面②ではそれが顕著である。この状況から、SD372Bの南側には土塁状の積土が存在していた可能性が考えられる。また、遺構の底面や内部には、水が流れていたり溜まっていたりした痕跡は認められなかった。

以上の遺構の性格は、区画のための堀（空堀）であると推定され、第3節の小結でさらに検討したい。出土遺物が少なく、遺構の詳細な年代を検討するには資料不足であるが、層位的な所見と出土遺物から、おおむね15世紀代に比定されよう。

第90図で示したものは、SD372Bからの出土遺物である。717は瓦質土器火鉢で、脚部が残存する底部付近の破片である。小破片であるが、内外面にナデが施されている。15世紀代の遺物と推定する。

## ②土坑

### SK562

SK562はI33区の下層で検出された土坑で、平面形態は略楕円形を呈する。現状での規模は東西2.1m、南北1.6m、深さ20cmで、北側はさらに調査区外に伸びる。15世紀代の溝（堀）SD372Bおよび時期不明の土坑SK570を切って構築されている。埋土中は暗青茶褐色の土壌で構成されており、内部からは土器片が少量出土しているが、図化に耐えるものは存在しない。遺構の性格は、廃棄土坑であろう。遺構の切り合い関係や層位的な所見から、15世紀代の遺構と推定されるが、詳細な年代は確定できなかった。

### SK570

SK570はH33区の下層で検出された土坑で、平面形態は略楕円形と推定される。現状での規模は東西2.0m、南北0.6m、深さ30cmで、15世紀代の溝（堀）SD372Bの構築により、遺構の大半を破壊されているほか、その上面を時期不明の土坑SK562に切られている。遺構の構築順序をまとめると、SK570→SD372B→SK562となる。埋土は暗褐色粘質土で構成されている。出土遺物は土器の細片が少量出土しているのみである。この遺構の性格も廃棄土坑と推定される。切り合い関係や層位的な所見から、遺構の年代は15世紀代以前に比定できるが、それ以上の詳しい年代を確定することができない。

2. 区域2（第1南北街路・上市町ほか）の調査

(1) 遺構の概要と基本層序

区域2は中世大友府内町跡第96次調査の調査区東側に相当し、グリット番号I36～M47区の地点に位置する。第1節で記したとおり、高架工事との調整から、発掘調査は区域2の東側から着手することとなり、発掘調査が終了次第、調査区を分割して工事側に引き渡すことになっていた。

区域2の地点は、府内古図および1987年刊行の『大分市史』に収録されている「戦国時代府内復元図」によると、第1南北街路および上市町（西側は御所小路町の一部？）に相当する。

区域2は幅約3.5m、長さ約123mにおよぶ東西に長いトレンチ状の調査区である。北側に隣接する地点には、大分県教育庁埋蔵文化財センターが平成13年（2001）度に発掘調査を実施した中世大友府内町跡第16次調査区が位置している。遺構の概要と基本層序の特徴を以下に列挙しておく（第91～93図参照）。

- ・調査区東側、L45区を主体とする地点に、第1南北街路と推定される南北方向の道路遺構が検出される。第1面から第3面にかけては、道路遺構の東西に町屋に関連する遺構群と判断される柱穴や土坑などが検出される。

- ・遺構面は最大で4面が確認される。第1面には16世紀末葉～17世紀初頭、第2面には16世紀後葉、第3面には15世紀末葉～16世紀後葉、第4面には14・15世紀代の遺構が構築されている。検出される遺構数が最も多いのは第3面で、当該遺構面に属する遺構には、第2面で検出された遺構と同時期のものも存在する。従って、本報告では第2・3面で確認された遺構を一括して報告する。調査区の西側では第1・2面を形成する整地層の厚みが薄くなり、検出される遺構面は2面程度となる。

- ・L47区から東側には、大分川の河岸段丘に起因する落ち込みが存在することから、この地点付近の地山面が川側（東側）に向かって急激に傾斜する。

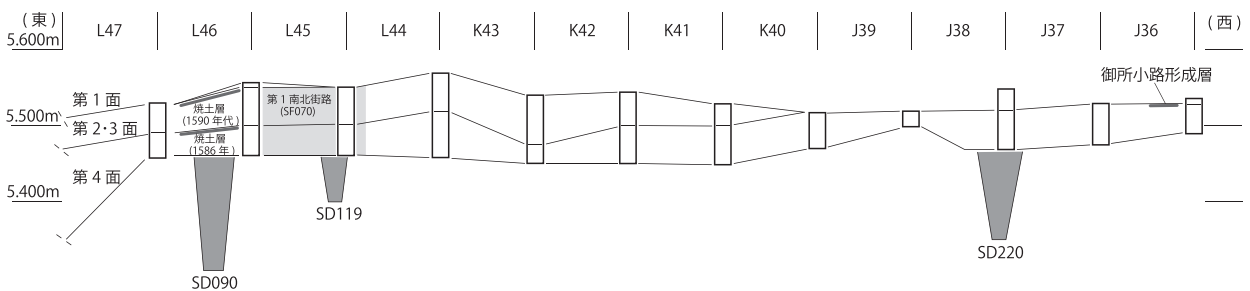
- ・L46区を主体とする地点には2面の焼土層の堆積が認められる。下位の焼土層は出土遺物や遺構のあり方から判断して、島津侵攻時の天正14年（1586）焼土層と推定される。上位の焼土層からは良好な出土遺物が認められないが、層位や遺構の状況から判断して、1590年代に形成されたものと推定される。当該焼土層は慶長元年（1597）大地震に起因するものとの憶測があるが、現状ではそれを証明する明確な根拠は存在しない。1590年代の焼土層が面的に堆積している地点は、第16次調査区および第96次調査区の東側にしか認められない。

- ・調査区中央付近（J38～K41区）では、検出される遺構数が極端に少なくなり、遺構が希薄となる。これについては、当該地点付近が上市町や御所小路町の裏手に位置することから生じた現象と推定される。

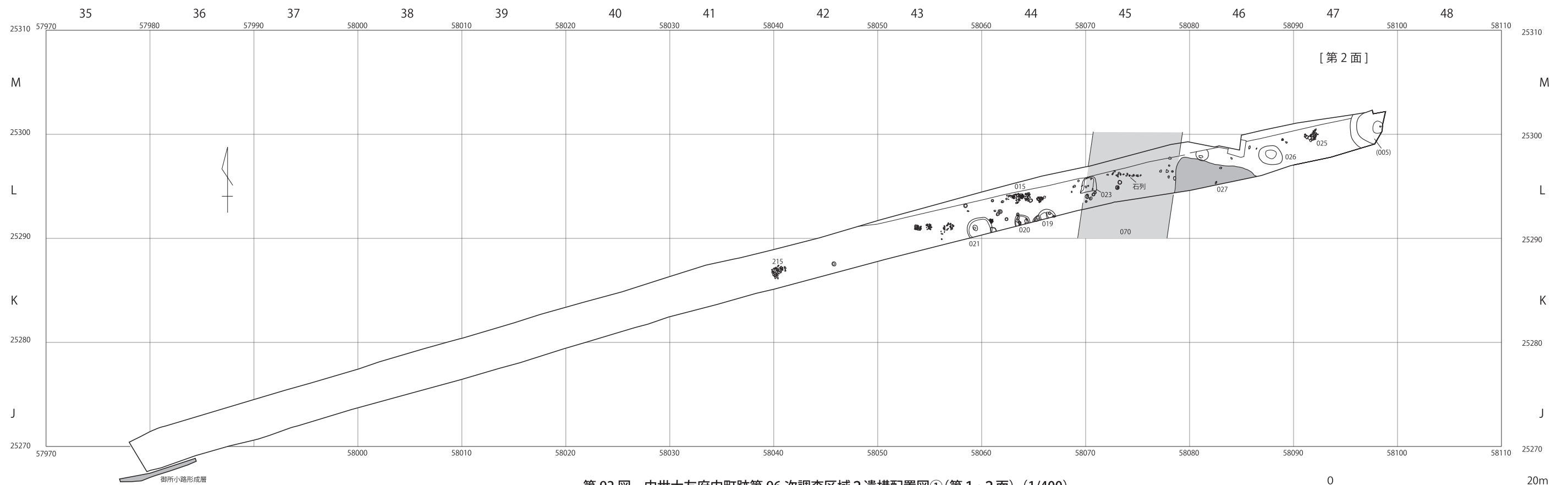
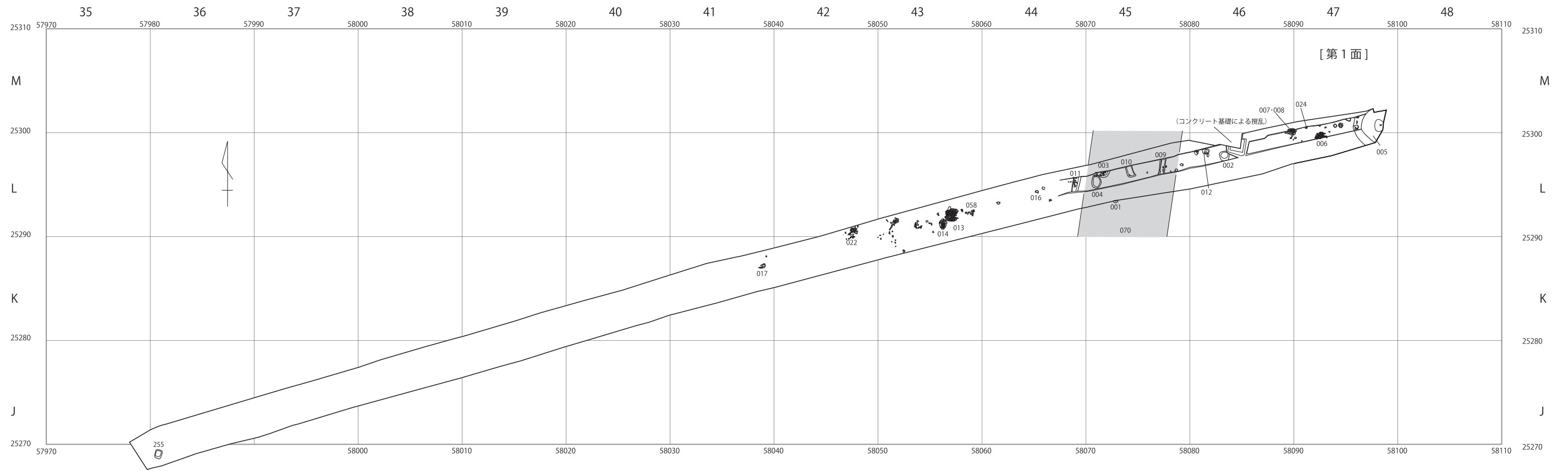
以下、個々の遺構の詳細を報告する。

第1南北街路および上市町

最大で4面の遺構面



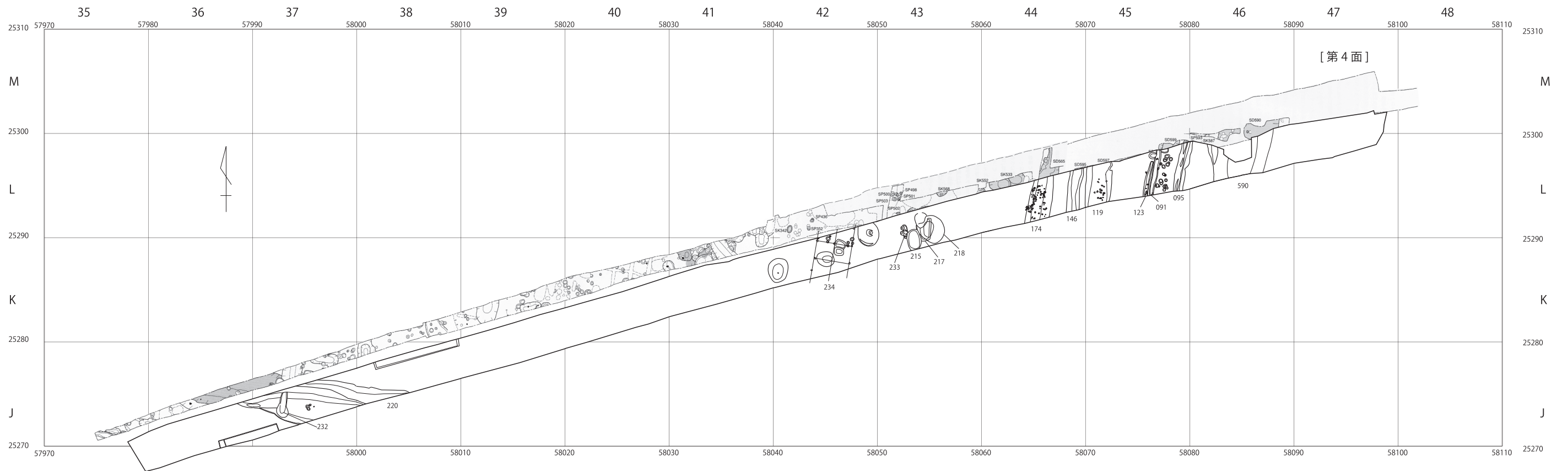
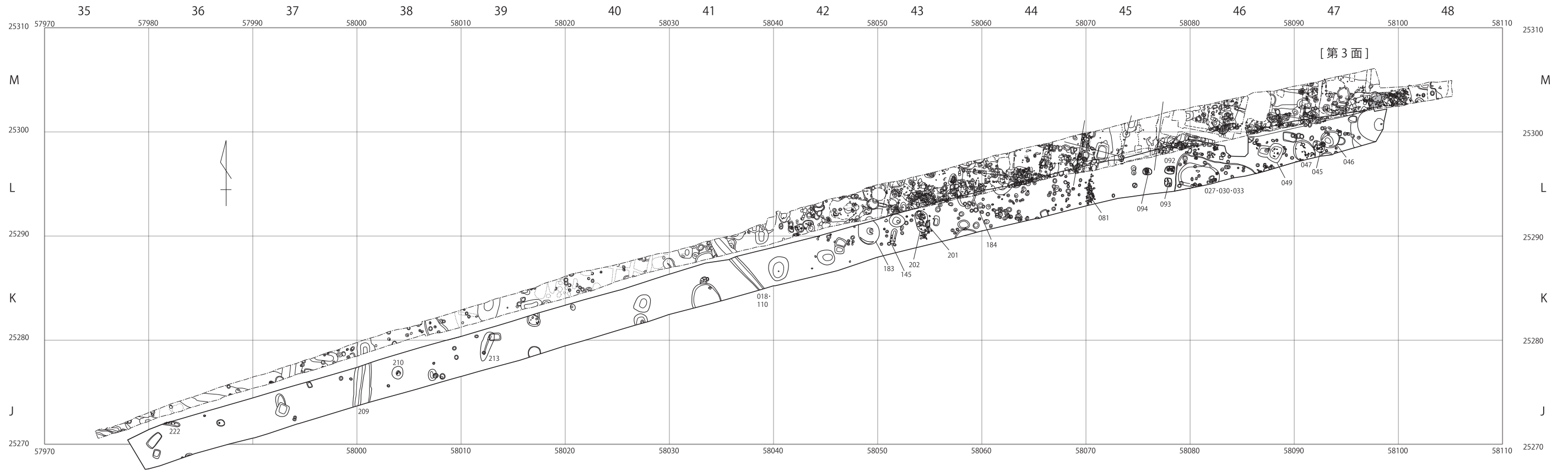
第91図 区域2(上市町ほか)土層模式図



第92図 中世大友府内町跡第96次調査区域2遺構配置図①(第1・2面) (1/400)

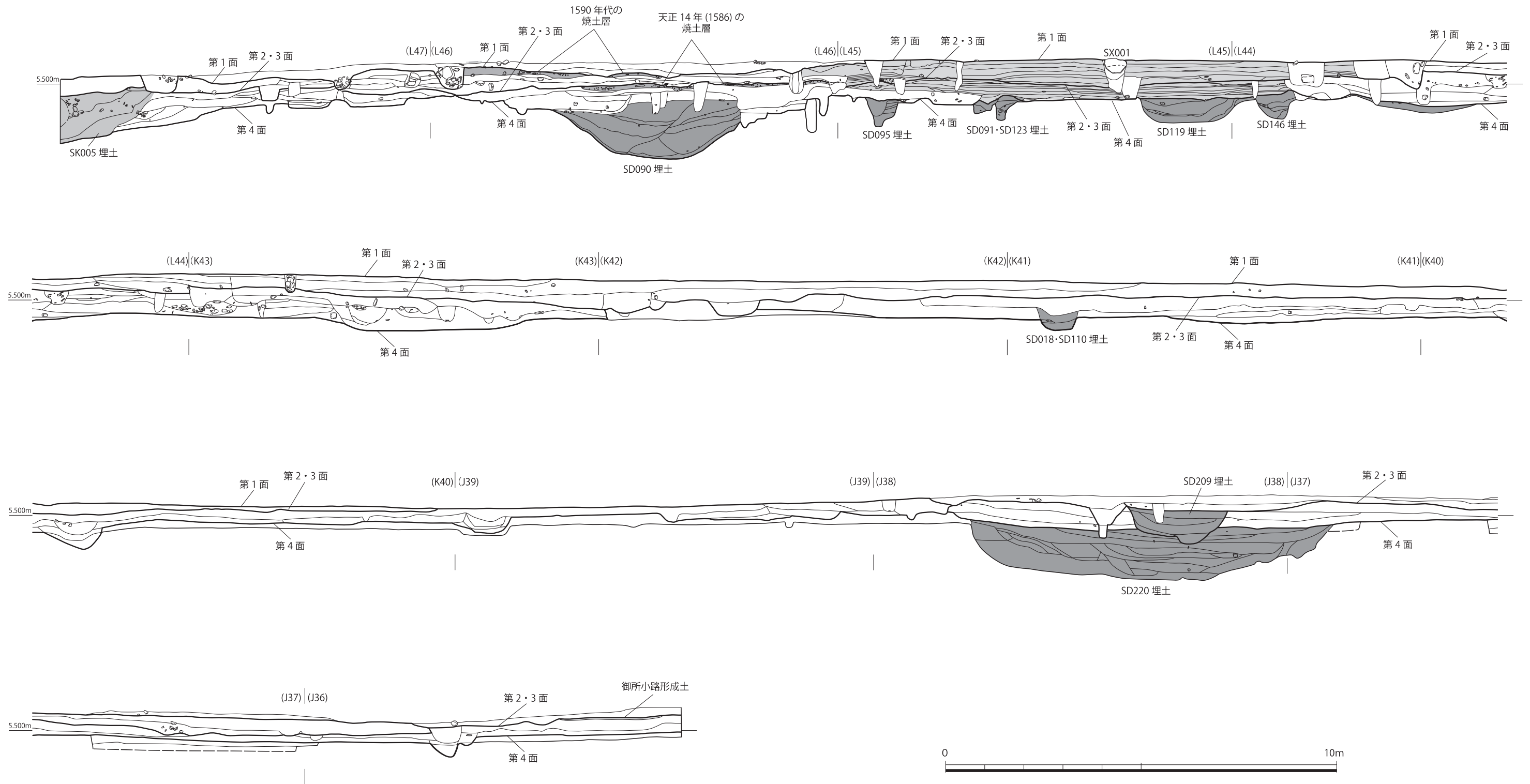






第93図 中世大友府内町跡第96次調査区域2遺構配置図②(第3・4面) (1/400)





第94図 区域2南壁土層部(1/100)

第2表 中世大友府内町跡第96次調査主要遺構一覧表(区域2)

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置		遺構の時期	特記事項	掲載頁
SX001	S001	埋葬遺構	区域2	L45区	近世(18世紀後半)以降		88
SK002	S002	土坑	区域2	M46区	第1遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)	焼土層を切る	90
SK003	S003	土坑	区域2	L45区	第1遺構面(近世か?)	最上面の路面を切る	85
SK004	S004	土坑	区域2	L45区	第1遺構面(近世か?)	最上面の路面を切る	85
SK005	S005	土坑	区域2	L47・M47区	第1遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)		90
SX006	S006	集石遺構	区域2	L47区	第1遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)		98
SX007	S007	集石遺構	区域2	M46・M47・L46・L47区	第1遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)		98
SX008	S008	祭祀遺構?	区域2	M46区	第1遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)		98
SD009	S009	溝(道路側溝)	区域2	L45区	第1遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)		89
SD011	S011	溝(道路側溝)	区域2	L45区	第1遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)		89
SP012	S012	柱穴	区域2	L47区	第1遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)		121
SK013	S013	土坑	区域2	L43区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)		96
SK014	S014	土坑	区域2	L43区	第1遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)		98
SX015	S015	遺物集中部	区域2	L44区	第2遺構面(16世紀前葉～中葉)		119
SX016	S016	遺物集中部	区域2	L44区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)	礫の下にロクロ目土師器と備前焼播鉢破片	120
SX017	S017	遺物集中部	区域2	K41区	第3遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)	数個の礫と鉄滓が集中	100
SD018	S018	溝	区域2	K41区	第3遺構面(16世紀?)	SD110と同一遺構	103
SK019	S019	土坑	区域2	L44区	第2～3遺構面(16世紀)		105
SK020	S020	土坑	区域2	L44区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)		105
SK021	S021	土坑	区域2	L43～L44区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀)		105
SX022	S022	集石遺構	区域2	L42区	第1遺構面(16世紀末葉～18世紀初頭)		99
SX025	S025	集石遺構	区域2	L47区	第2遺構面(16世紀後葉～末葉)		118
SX027	S027	焼土層	区域2	L45・L46区	第2～3遺構面(16世紀後葉～末葉)	天正14年(1586)焼土層	101
SX032	S032	礎石	区域2	L45・L46区	第3遺構面(16世紀後葉～末葉)	7個の礎石(SX032a～SX032g)	100
SX033	S033	掘り込み遺構	区域2	L45・L46区	第3遺構面(16世紀後葉～末葉)	焼土SX027下位に位置する掘り込み遺構	100
SK045	S045	土坑	区域2	L47区	第2～3遺構面(16世紀後葉～末葉)		106
SK046	S046	土坑	区域2	L47区	第2～3遺構面(16世紀)		106
SK047	S047	土坑	区域2	L47区	第2～3遺構面(16世紀後葉～末葉)		107
SK049	S049	土坑	区域2	L46区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)		108
SP069	S069	柱穴	区域2	L46区	第2～3遺構面(16世紀前葉～中葉)		121
SF070	S070	道路遺構	区域2	L45区	第2～3遺構面(16世紀前葉～中葉)		84
SP073	S073	柱穴	区域2	L46区	第2～3遺構面(15～16世紀)	銅銭、礎石S032a直下の柱穴	121
SX081	S081	石列	区域2	L44・L45区	第3遺構面(16世紀後葉～末葉)		86
SP088	S088	柱穴	区域2	L46区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)		121
SD091	S091	側溝	区域2	L45区	第4遺構面(15世紀)		125
SK092	S092	土坑	区域2	L46区	第3遺構面(15世紀?)		86
SK093	S093	土坑	区域2	L47区	第3遺構面(16世紀?)		86
SK094	S094	土坑	区域2	L48区	第3遺構面(16世紀?)		86
SD095	S095	溝	区域2	L45区	第4遺構面(15世紀)		125
SP098	S098	柱穴	区域2	L46区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)	埋土上位からロクロ目土師器完形品が出土	121
SP103	S103	柱穴	区域2	L46区	第2～3遺構面(15～16世紀)		121
SD110	S110	溝	区域2	K41区	第3遺構面(16世紀?)	SD018と同一遺構	103
SD119	S119	溝	区域2	L45区	第3遺構面(14世紀後葉)		127
SD123	S123	溝	区域2	L45区	第4遺構面(15世紀)		122
SP136	S136	柱穴	区域2	L45区	第3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)		121
SK145	S145	土坑	区域2	L43区	第2～3遺構面(16世紀後葉～17世紀前葉)	キサゴ・サザエなどの貝類を大量廃棄	108
SD146	S146	溝	区域2	L44区	第4遺構面(15世紀)		125
SP156	S156	柱穴	区域2	L44区	第2～3遺構面(16世紀後葉～末葉)		121
SP161	S161	柱穴	区域2	L43区	第2～3遺構面(15～16世紀)		121
SK170	S170	土坑	区域2	L43区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀)	埋土中位より鉄器出土	109
SD174	S174	溝	区域2	L44区	第4遺構面(14世紀後葉)		127
SP177	S177	柱穴	区域2	L44区	第2～3遺構面(15～16世紀)		121
SK183	S183	土坑	区域2	L42～K42区	第2～3遺構面(16世紀後葉～末葉)		109
SK184	S184	土坑	区域2	L43区	第2～3遺構面(15～16世紀)		114
SP199	S199	柱穴	区域2	L44区	第2～3遺構面(16世紀前葉～中葉)		121
SK201	S201	土坑	区域2	L43区	第2～3遺構面(16世紀前葉～中葉)		114
SK202	S202	土坑	区域2	L43区	第2～3遺構面(16世紀前葉～中葉)	青磁瓶出土	114
SK205	S205	土坑	区域2	L42区	第2～3遺構面(16世紀後葉～末葉)		115
SK206	S206	土坑	区域2	K40区	第2～3遺構面(16世紀後葉～末葉)	滑石製石製品出土	115
SD209	S209	溝	区域2	J37・J38区	第2～3遺構面(16世紀前葉以前)		103
SK210	S210	土坑	区域2	J31区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)	ロクロ目土師器4枚が一括出土	116
SK213	S213	土坑	区域2	K39・J39区	第2～3遺構面(15～16世紀)		116
SK214	S214	土坑	区域2	K39・J39区	第2～3遺構面(15～16世紀)		116
SK215	S215	土坑	区域2	I43・J43区	第4遺構面(14～15世紀)		134
SK217	S217	土坑	区域2	J43区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)		117
SK218	S218	土坑	区域2	J43区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)		117
SD220	S220	溝(堀)	区域2	J37・J38区	第4遺構面(14世紀後葉)		132
SK225	S225	土坑	区域2	K36区	第1遺構面(16世紀末葉～17世紀初頭)		98
SD232	S232	溝	区域2	J37区	第2～3遺構面(15世紀末葉～16世紀前葉)		104
SK233	S233	土坑	区域2	L43・K43区	第4遺構面(14世紀前葉)	吉備系土師器碗・在地系土師器が共存	134
SH234	S234	建物	区域2	L42・K42区	第4遺構面(14～15世紀)	柱穴内礎石の建物?	135
SD590	S590	溝(堀)	区域2	L46区	第4遺構面(15世紀)		122

(2) 第1南北街路と関連遺構

第1南北  
街路  
SF070

SF070(第95図)は、L45区を主体とする地点で検出された「第1南北街路」と推定される南北方向の道路遺構である。道路の幅員は7~8mを測り、遺構を形成する整地層は砂質土と粘質土を版築状に積み上げる工法で構築がなされている。SF070を形成する層の厚みは1m前後を測り、10数面程度の硬化面が確認される。道路を形成する整地層の大半はブロック状に堆積していることが大半で、広範囲にわたって同一性状の土層が堆積していることが少ないため、実際の発掘現場では、一時期を区切って同時に使用された面を追跡することは極めて困難な状況にある。そこで、本報告では検出された遺構面ごとにSF070の大まかな変遷をみていきたい(第96図)。

第1面

第1面(16世紀末葉~17世紀初頭)では、表面がやや削平されていたものの、道路側溝SD009(西側溝)・SD011(東側溝)が検出され、これらの2つの側溝に挟まれた地点が道路遺構であることが判明した。また、調査区南辺に沿った地点では埋甕(便甕)遺構SX001が検出されたが、これについては出土遺物から江戸時代後期以降のものであることが判明した。

第2面

第2面(16世紀末葉)では、路面上に東西方向に延びる石列と小型の柱穴が数個が検出されたが、これらの遺構の性格を明確にすることはできなかった。道路側溝と思われる明確な遺構は存在しない。また、第1南北街路の東側に隣接する地点から、天正14年(1586)焼土層と推定されるSX027が検出された。

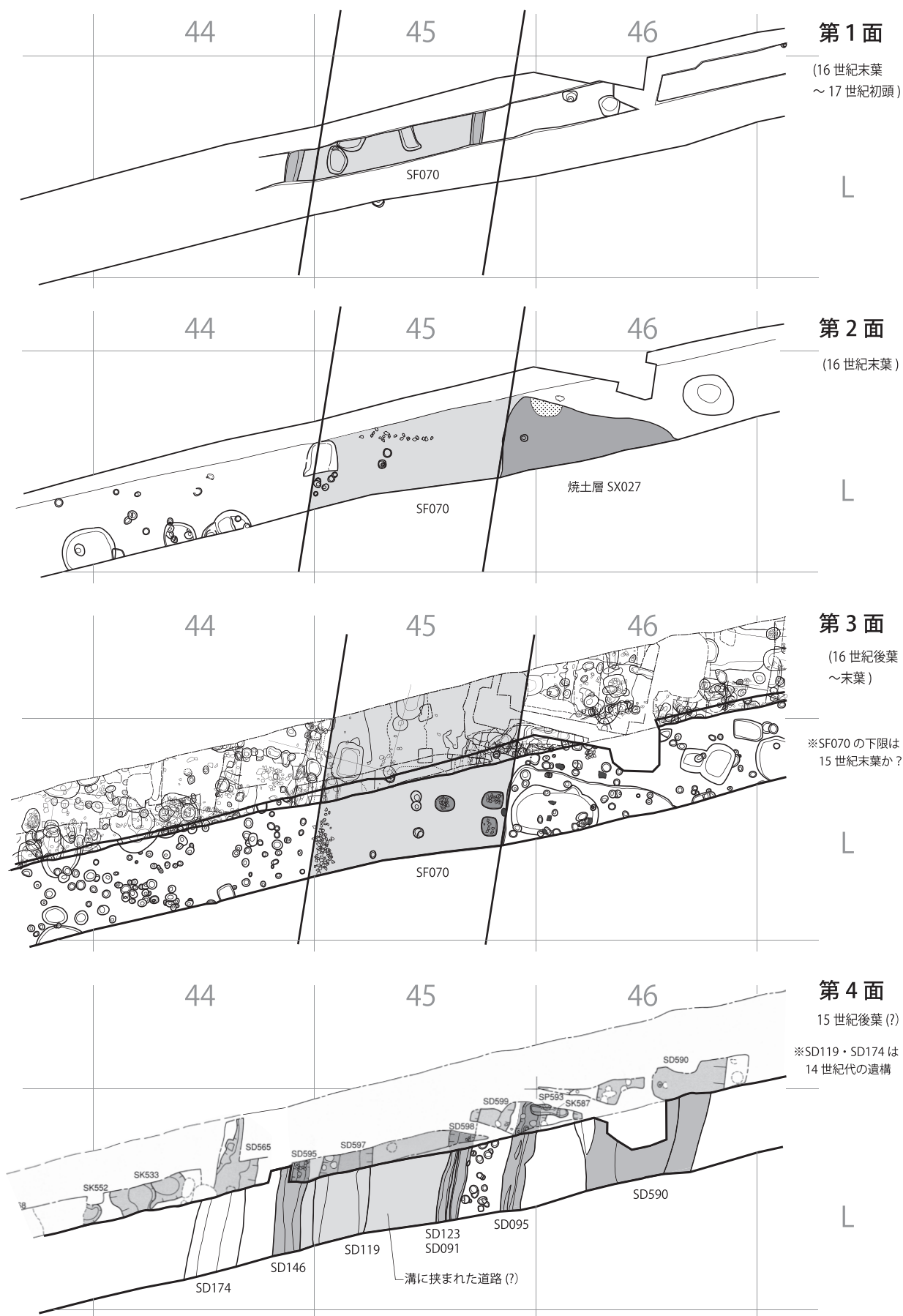
第3面

第3面(16世紀後葉~末葉)では道路遺構の西辺付近に石列SX081、道路遺構の東側に内部に礫を充填した土坑SK092~SK094が検出された。SX081(第97図)は道路遺構の西辺を区切る遺構と判断でき、掘形などは明確にできなかったが、側溝などの施設であった可能性がある。SK092~SK094(第97図)は、発掘調査時には、木戸(釘貫)などに関連する遺構の可能性を考えて調査を進めたが、最終的にはその性格を明らかにすることはできなかった。SK092~SK094からは、いずれも図示可能な出土遺物は認められなかったが、構築された遺構面や周辺の遺構の状況より、その構築年代は16世紀後葉から末葉に比定される。

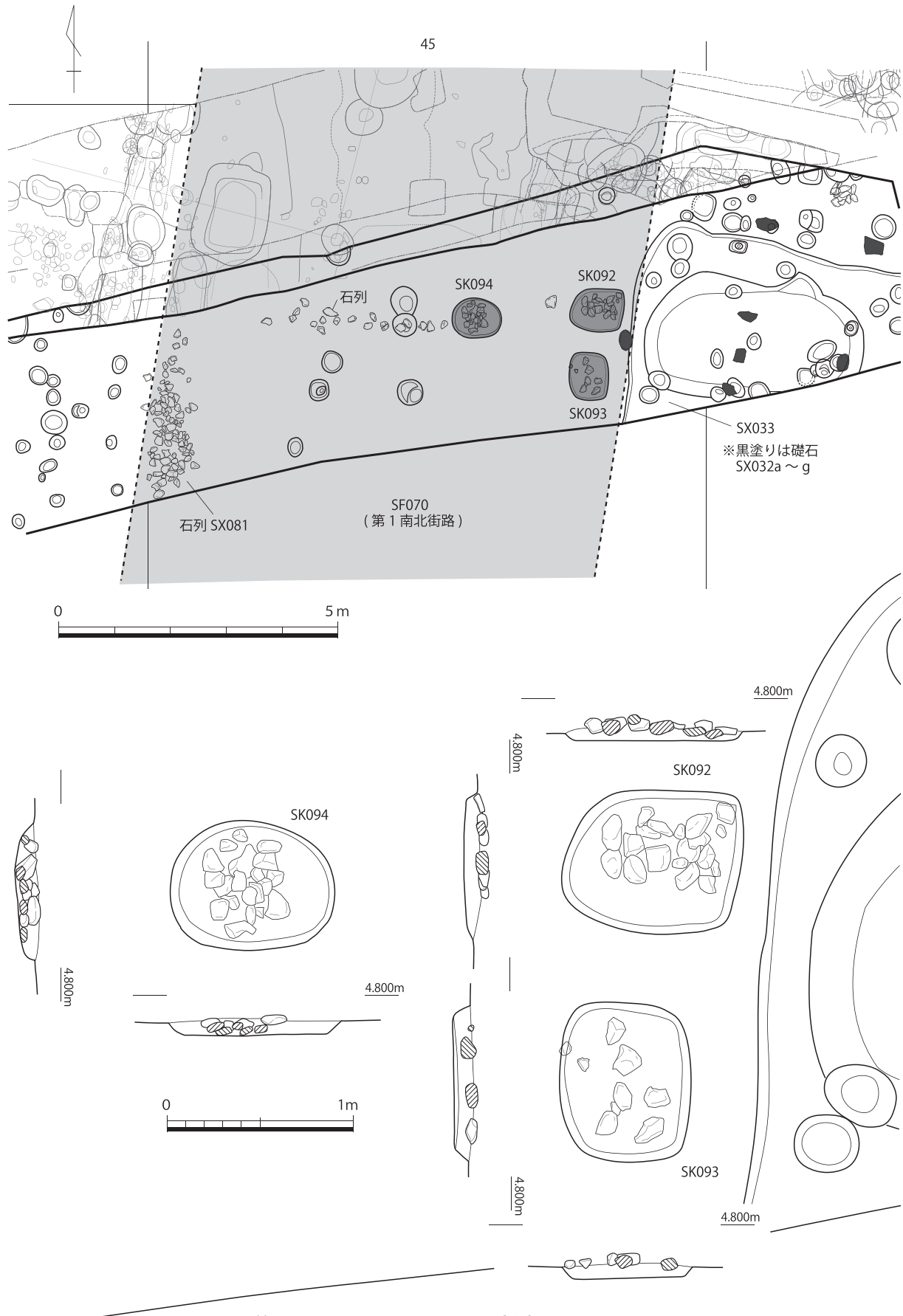


第95図 第1南北街路SF070土層実測図(1/100)

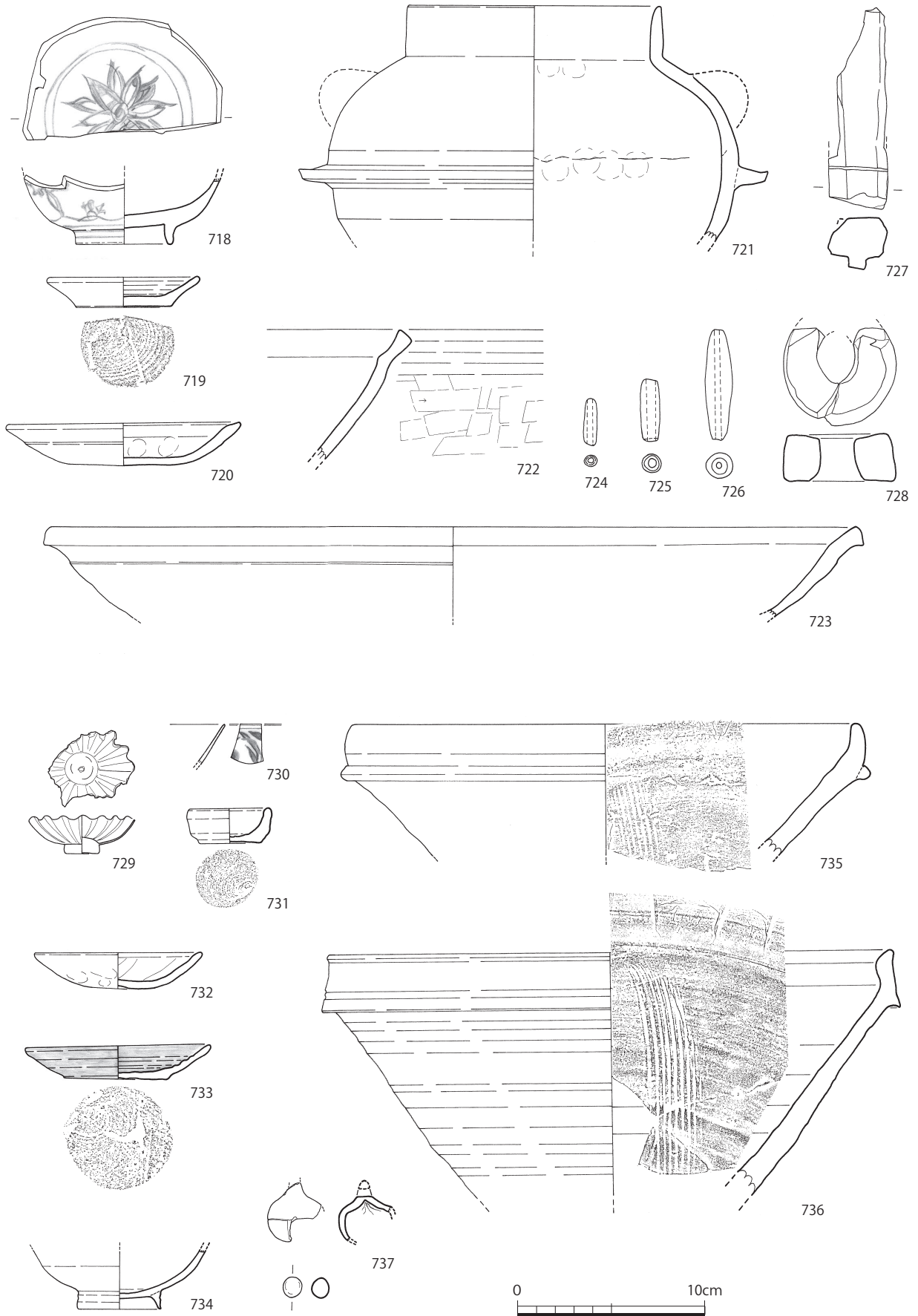




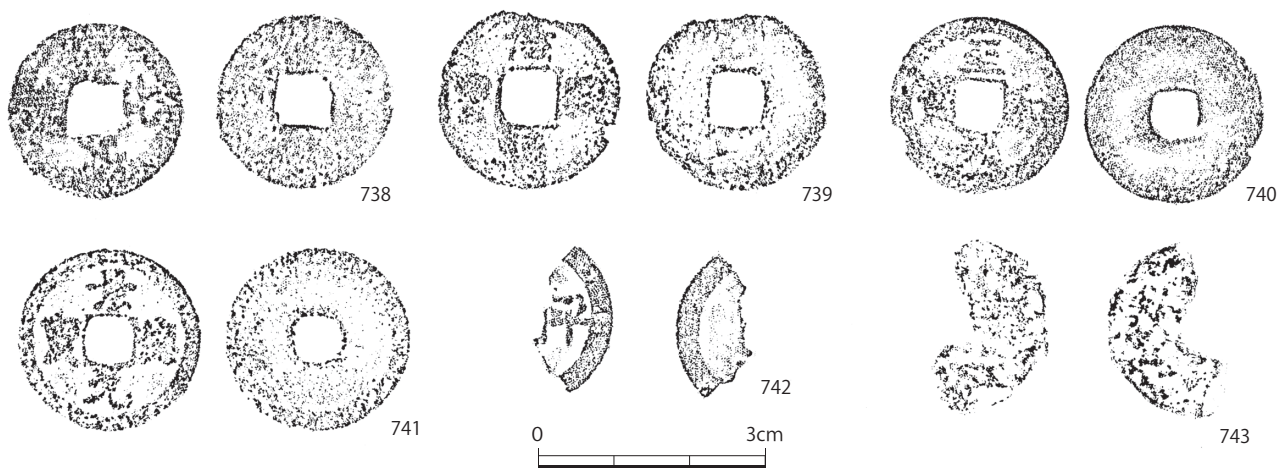
第96図 第1南北街路SF070の変遷(1/250)



第97図 SK092・SK093・SK094実測図(1/100・1/30)



第98図 SF070出土遺物①(1/3)



第99図 SF070出土遺物②(1/1)

道路遺構の東西には礎石や列状に展開する柱穴列、建物遺構に関連すると思われる掘り込みなどが検出され、町屋の建物跡を構成する遺構群と思われる。柱穴列を構成する柱穴群には重複するものも多く、その一部は上層の第2面から掘り込まれたものも存在するものと推定される。

以上のような遺構のあり方から、第1南北街路が版築状の積土工法で形成される時期は、16世紀後半までは確実に確認できる。その初源の時期については、今回の調査では明らかにできなかったが、道路を形成する層の厚みや硬化面の多さ、および周辺の遺構のあり方から、16世紀前葉もしくは15世紀末葉頃まで遡る可能性が考えられよう。

第4面

SF070を形成する版築状の積土をすべて撤去すると、第4面が現れる。当該遺構面には15世紀後葉に比定されるSD590・SD095・SD123・SD091・SD146、14世紀代のSD119・SD174が構築されている。このうち、調査区の制限はあるものの、15世紀後葉のSD146とSD123・SD091に挟まれた空間約6mには顕著な遺構がなく、当該地点が南北方向の道路として使用されていた可能性が想定できる。また、14世紀後葉頃に比定できるSD119・SD174の主軸方向は、15世紀代の溝と同一方向であり、さらには15世紀末葉以降に比定される第1南北街路SF070と同一方向である。以上の所見は、第1南北街路の起源を検討する上で重要な所見であると考えられるが、調査範囲の狭さなどの制限から、上記の課題を検討する上では、なお資料不足で時期尚早と考えている。今後の資料の蓄積に期待したい。

SF070と関連する遺構からの出土遺物を、下記で紹介する。

第98・99図は、SF070からの出土遺物で、718～723はSF070の形成土中から出土したものの、729～743は第1南北街路が位置するL45区からの取り上げ遺物である。

718は景德鎮系青花碗で、見込みに花文、体部に花唐草を描く16世紀後葉に比定される製品である。719はロクロ目土師器皿、720は京都系土師器皿で、前者は15世紀末葉から16世紀前葉、後者は16世紀後葉に比定される。722・723は瓦質土器の鍋で、16世紀後葉の所産である。724～726は管状土錘、727は結晶片岩製の砥石、728は軽石製の沈子である。729は青銅製の紅皿で、国内の中世遺跡で散見される遺物<sup>(1)</sup>であるが、豊後府内からは初出の資料である。730は景德鎮系

青銅製紅皿

(1) 古賀真木子「化粧に用いる金属製の菊花形の皿」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』10 1992年)

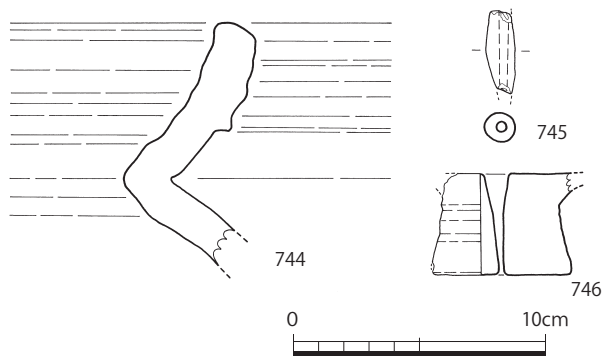


五彩碗の口縁部で、16世紀後葉に比定される。731は土師質土器小皿で15世紀代、732は京都系土師器皿で16世紀前葉から中葉、733はロクロ目土師器皿で15世紀後葉から16世紀前葉の製品である。734は瓦質土器碗で、これは16世紀後葉の製品である。735・736は備前焼播鉢で、前者は中世5期b（15世紀後葉）、後者は中世6期（16世紀前葉～中葉）に比定される。737は土鈴で、その内部に小さな土玉が残っていた。器壁の一部が脆弱であったことから、取り上げ時点で体部の一部が破損し、土玉がこぼれ出た状態となっていた。738～743は銅銭である。銭種などは巻末の遺物一覧表を参照されたい。

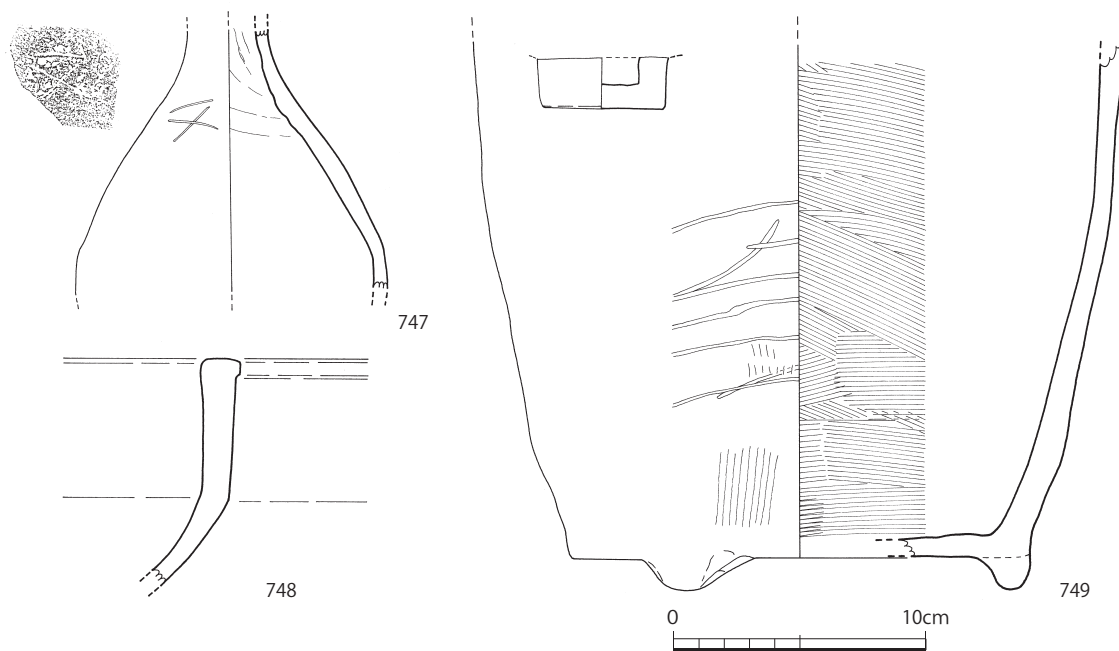
土鈴

第100図は便壘SX001から出土した遺物である。遺構自体は近世後期以降のものであるが、内部から中世の遺物が出土したので、特に紹介する。744は備前焼大甕の口縁部、745は管状土錘、746は土師質土器の燭台である。その他、18世紀後半から19世紀代に比定できる関西系陶器灯火具が出土しており、遺構の年代を示唆する遺物と考えるが、図示していない。

第101図は第1南北街路の道路側溝のひとつであるSD009からの出土遺物である。747は備前焼の徳利または瓶で、肩部にヘラ記号が認められる。748～750は瓦質土器で、748は鉢、749は火鉢、750は風炉の脚部である。以上の遺物は、いずれも16世紀後葉に比定される製品である。



第100図 SX001出土遺物(1/3)



第101図 SD009出土遺物(1/3)

(3) 第1面の遺構群 (1590年～1600年代頃)

①土坑

SK002

埋土上位に  
被熱した礫

SK002 (写真図版 19) は M46 区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は東西 2.1 m、南北 1.5 m、深さ 40cm を測る。遺構の北東隅部と南側は、攪乱により破壊されている。埋土上面から上位にかけて頭大の礫が集中しており、礫の大部分は被熱による赤変が認められた。埋土中位から下位にかけては礫をあまり含まず、土壌により埋められていた。礫の大半は家屋の屋根上に重しとして乗せていたものである可能性が考えられる。層位的な所見から、1590 年代以降に構築された遺構と考える。図示可能な出土遺物は認められなかった。

SK005

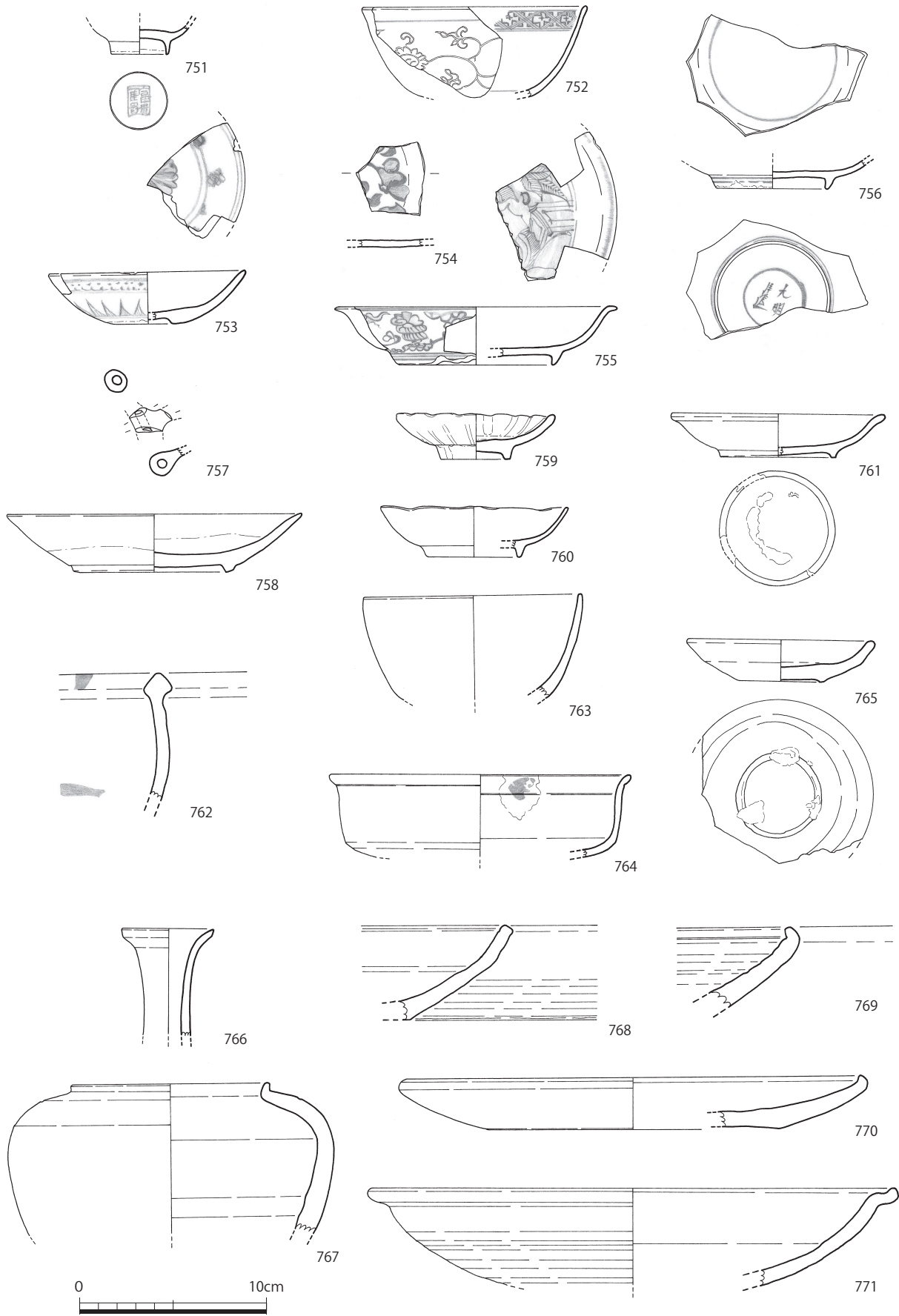
SK005 は M47・L47 区に位置する土坑で、第 16 次調査 SK223 と同一遺構である。土坑の平面形態は略円形を呈し、東はさらに調査区外に伸びる。その規模は東西 2.3 m、南北 1.2 m、深さ 1.2m を測るが、未調査部分を合わせて径 5 m ほどの大型の遺構となる。土坑の壁面や底面に特筆すべき施設は設けられていないことから、大型の廃棄土坑と考えられる。埋土には炭化物や焼土を含む層やブロックも確認できる。土層の状況から一度に埋められたものではなく、複数回にわたる掘り返しが行われた後に徐々に埋没していった状況がうかがえる。天正 14 年 (1586) 焼土層を切って構築されていることが確認できており、出土遺物に唐津焼が認められることなどからも、遺構の年代は 1590 年代以降に比定される。

唐津焼

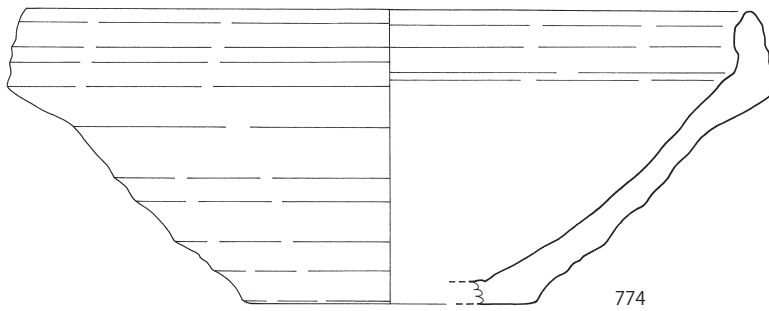
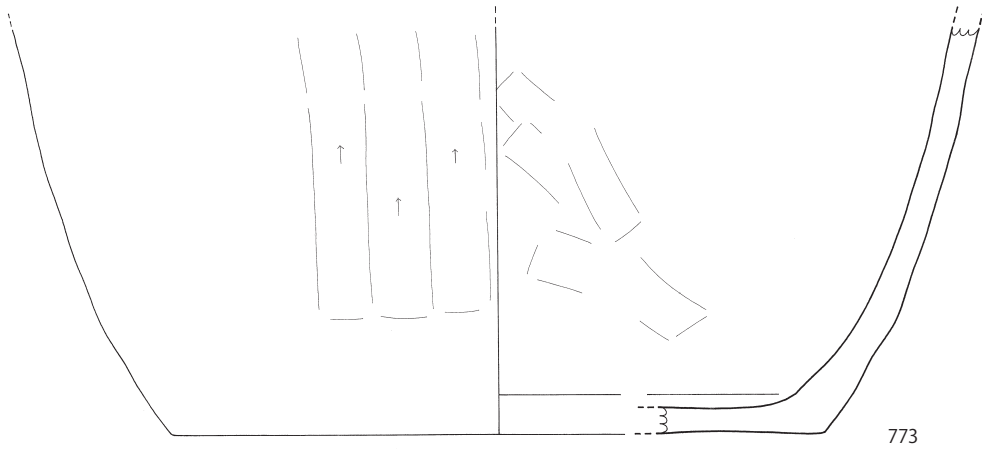
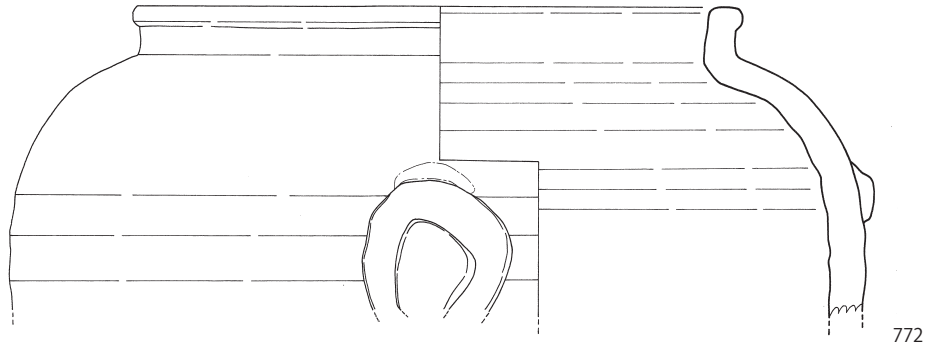
第 102～107 図は SK005 からの出土遺物である。多量の出土遺物が認められるが、代表的なものを以下で提示する。751・752 は中国景德鎮系青花碗で、いずれも小野分類 E 群に属する。751 の内外面には文様が認められず、外底部に「富貴佳器」銘が描かれる。752 の外面には毛彫りによる花唐草文、口縁内面には四方禪文が認められる。753～756 は中国景德鎮系青花皿で、753 は底部が基筭底となる C 群、754・756 は E 群、755 は B 1 群である。756 の外底部には一重圏線内に「大明年製」銘が描かれる。757～761 は中国産の白磁である。757 はその形態や縦断面に貫通孔が認められることから、水注の注口部の一部であろう。758 は見込みと高台周辺が露胎となるタイプの製品、759・760 は口縁部が輪花となるもの、761 は外反する口縁を持ち、外底部に砂などの付着物が認められる。762 は磁窰窯系黄釉鉄絵盤の破片で、13 世紀代の製品であることから、混入品であろう。763 は唐津焼の陶器碗で、内外面に土灰釉といわれる深緑色の釉が施されている。1590～1600 年代の製品である。764・765 は瀬戸美濃産の陶器で、764 は鉢、765 は皿である。764 の口縁部内面の一部には緑釉が施されている。いずれも大窯 3 期後半から 4 期のものである。766～776 は備前焼で、766 は瓶、767 は無頸壺、768～771 は鉢、772 は水屋甕、773 は大甕の底部、774～776 は播鉢である。播鉢は 16 世紀前半を主体に生産された中世 6 期の製品である。777～781 は京都系土師器の皿、782 は底部外面に糸切り痕が認められる在地系の土師質土器の皿である。783 も在地系の土師質土器の皿であるが、底部 2 箇所略楕円形の貫通孔と円形を呈する小型の未貫通孔が複数認められる。焼成後の加工であるが、何を意図したものかは不明である。784～795 は瓦質土器で、784 は把手付の鉢 (把手部は欠損)、785 は土鍋、786～788 は鉢、789～791 は長胴形の火鉢、792～794 は播鉢、795 は羽釜である。790～791 の火鉢の口縁部外面には刻印 (スタンプ文) を有し、それぞれ 789 は二連雷文、790 は双頭蕨手文、991 は「×」状の文様である。796 は土師質土器の加工品、797 は瓦の加工品で、いずれも製品を再利用して円形に加工している。

土師質  
土器皿  
底部に  
加工

799～800 は砥石、801 は鉄釘、802 は火箸である。803～808 は銅銭である。銭種などは遺物一覧表を参照されたい。

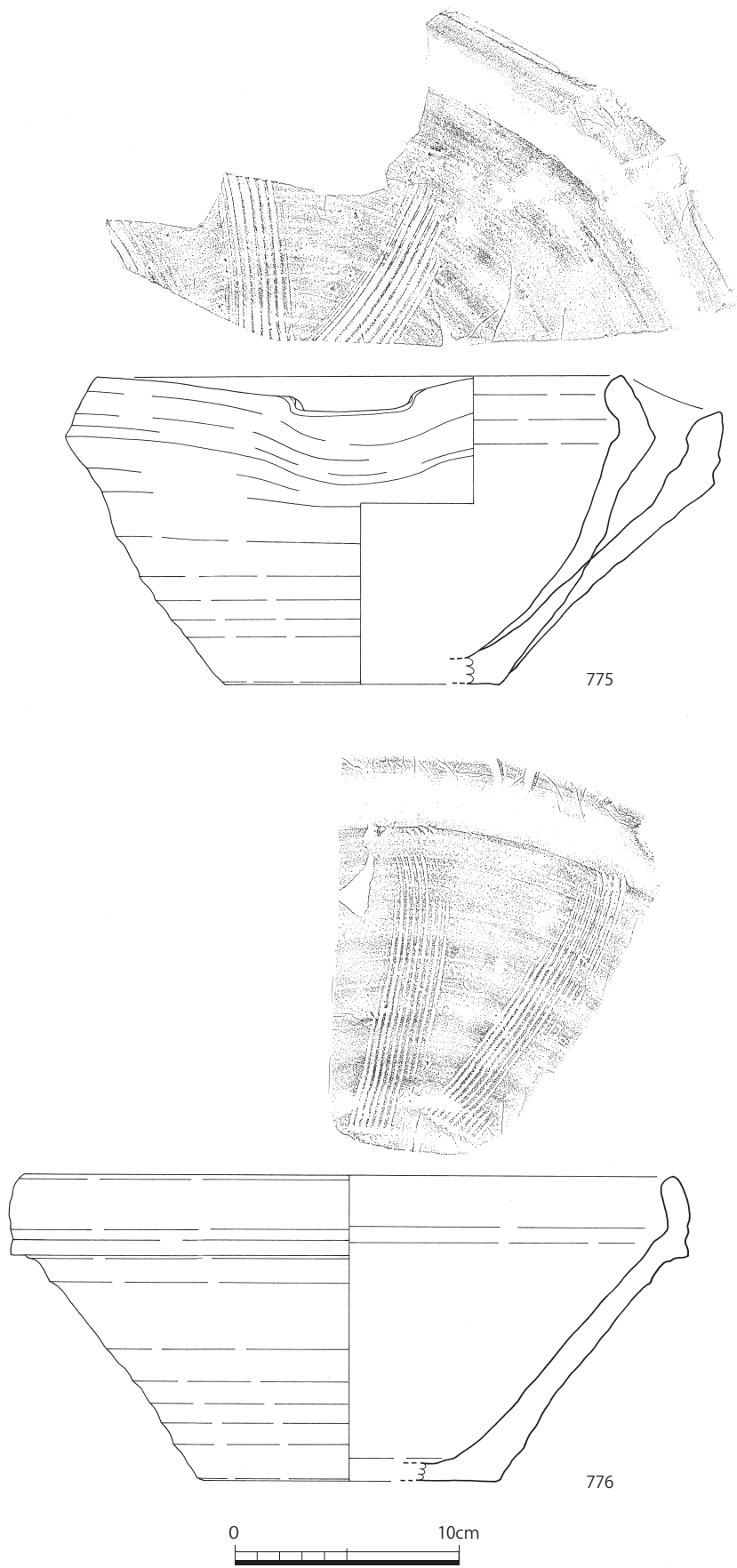


第102図 SK005出土遺物①(1/3)

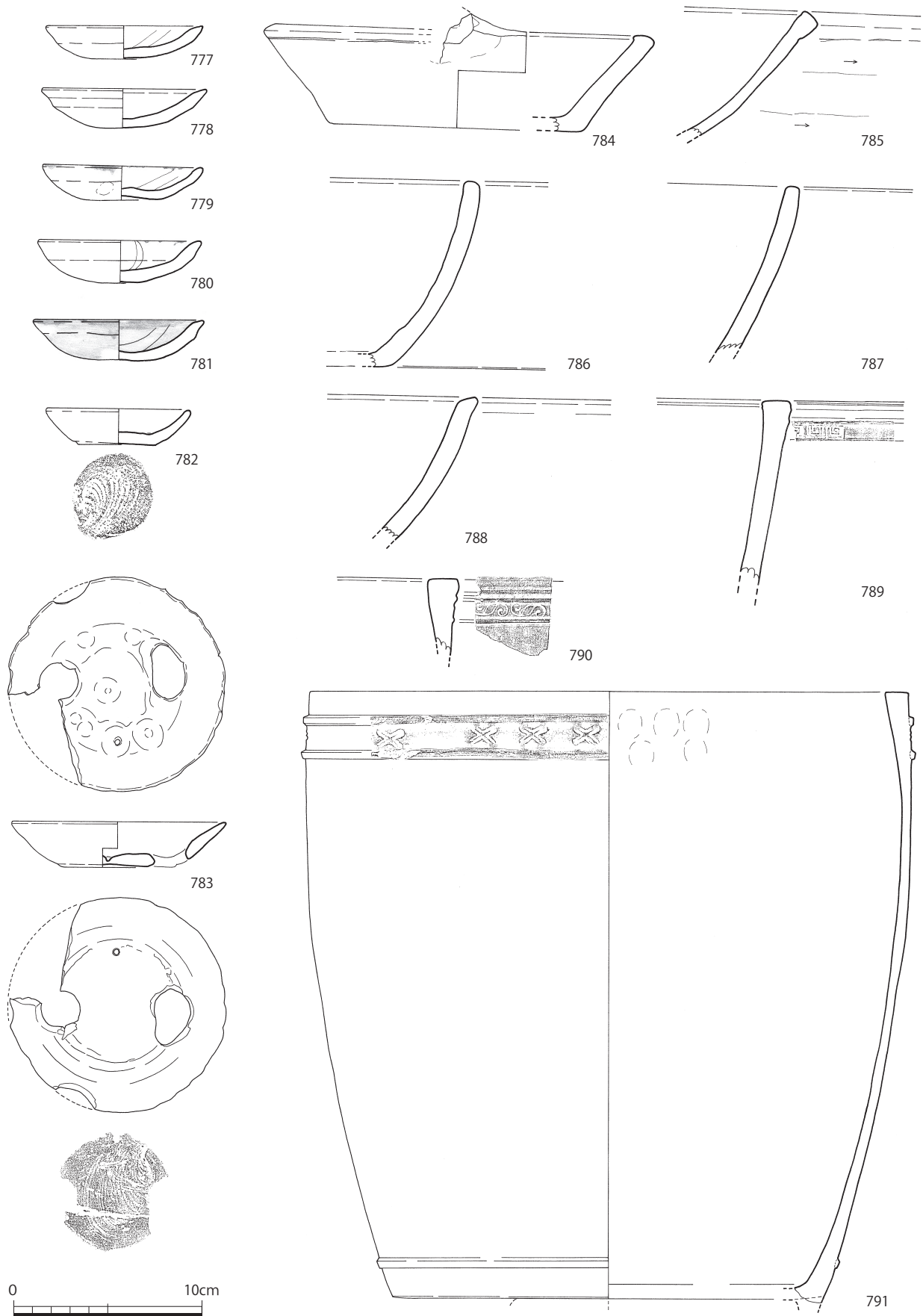


第103図 SK005出土遺物②(1/3)

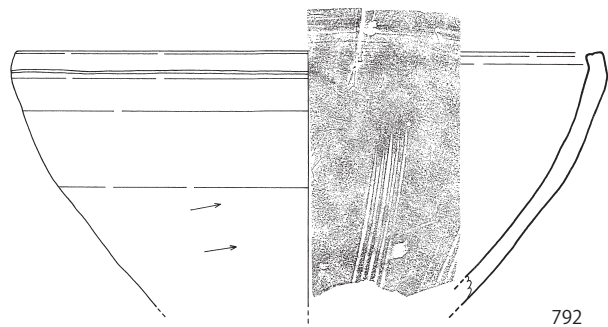




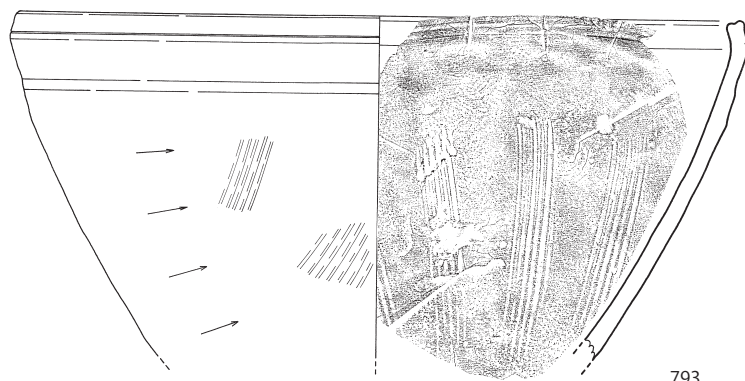
第104図 SK005出土遺物③(1/3)



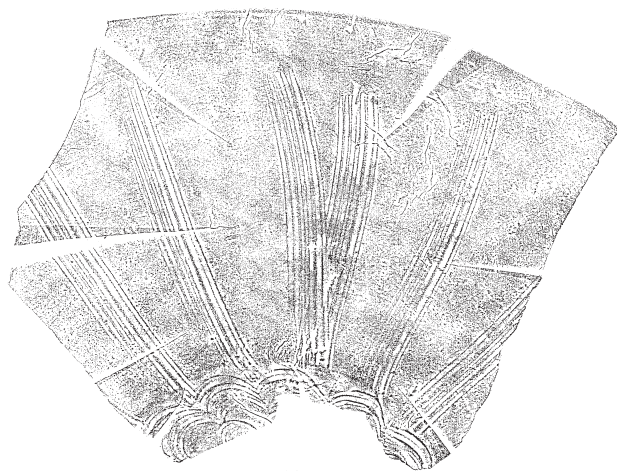
第105図 SK005出土遺物④(1/3)



792



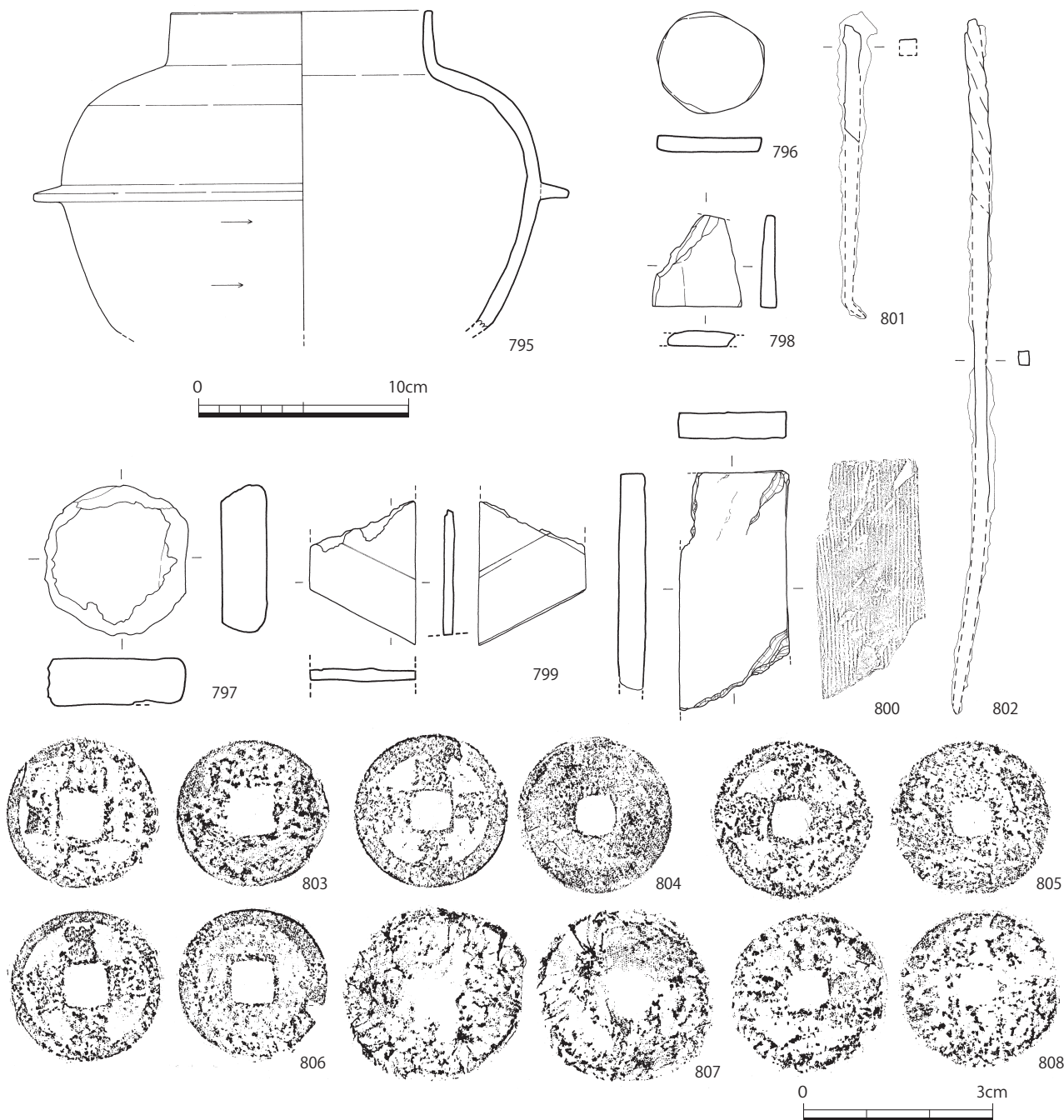
793



794



第106図 SK005出土遺物⑤(1/3)

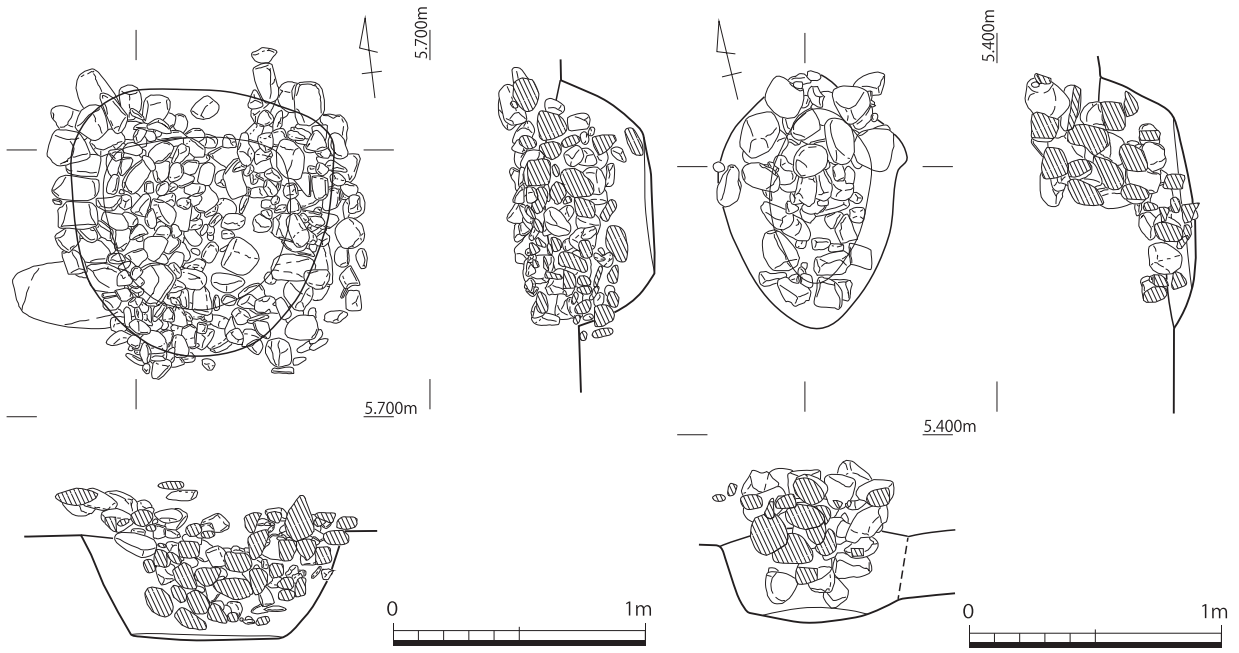


第107図 SK005出土遺物⑥(1/3、1/1)

SK013

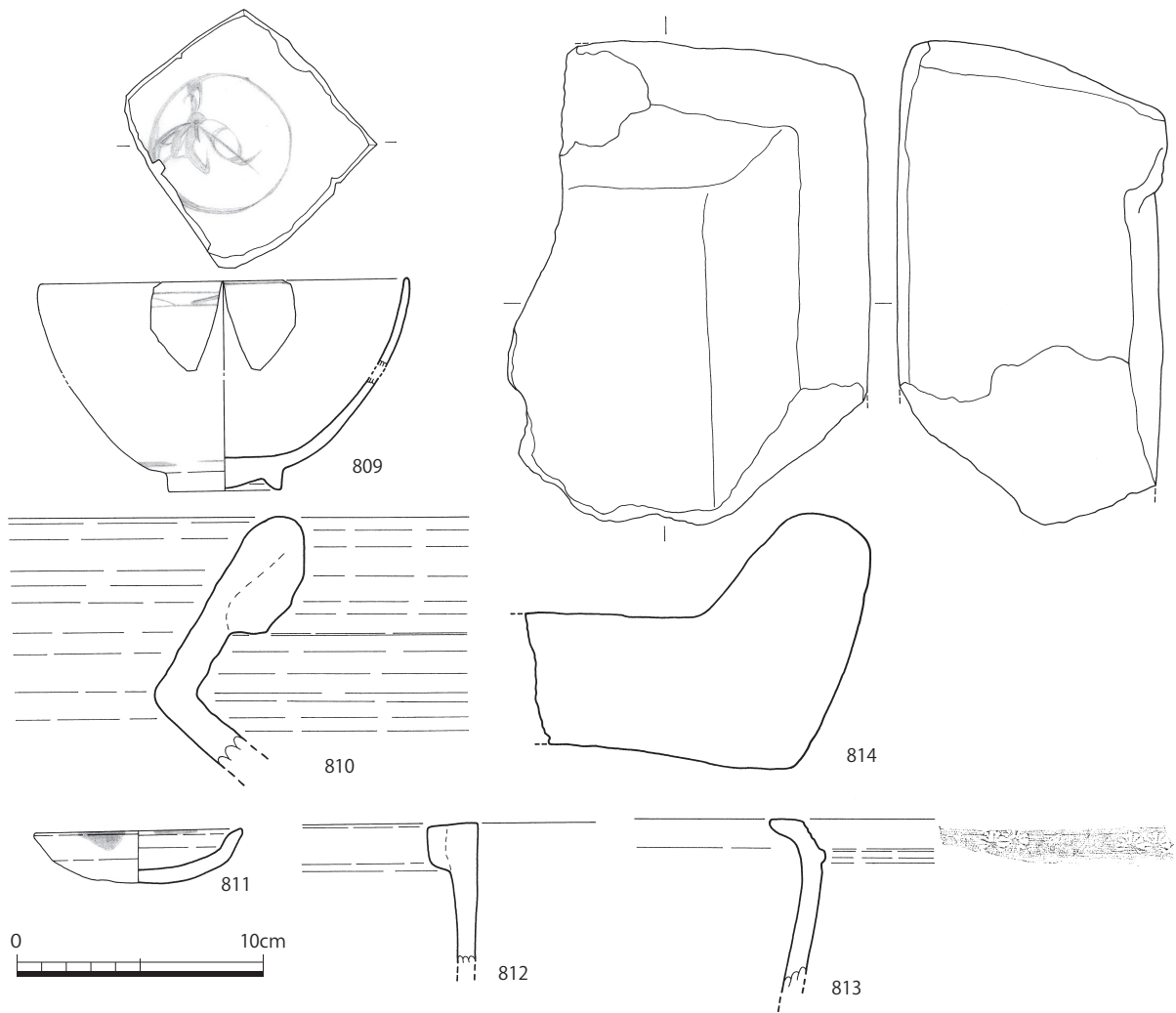
土坑内部に  
礫が詰まる

SK013 (第108図)はL43区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形を呈し、その規模は東西0.98m、南北1.06m、深さ40cmを測る。遺構上面から埋土下位にかけて拳大の礫が集中して詰まった状態で出土したが、礫には被熱の痕跡は認められなかった。礫の間から漳州窯系青花碗・京都系土師器などが出土している。層位的な所見と出土遺物から、遺構の構築年代は1590年代以降と推定する。第110図はSK013からの出土遺物である。**809**は漳州窯系青花碗で、接合していない口縁部と底部が出土しており、図上復元した。**810**は備前焼大甕の口縁部で、近世1期の製品である。**811**は京都系土師器の皿で、口縁端部にススの付着が認められる。**812**は瓦質土器で、箱形の方形火鉢の口縁部であろう。**813**は火鉢または風炉で、口縁部は屈曲して、上面が平坦面を形成する。口縁部外面に菊花文の刻印(スタンプ文)をもつ。**814**は凝灰岩製の石製品である。



第108図 SK013実測図(1/30)

第109図 SK014実測図(1/30)



第110図 SK013出土遺物(1/3)



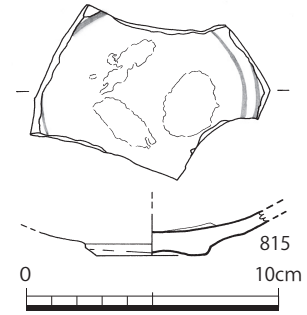
**SK014**

SK014 (第109図)はL43区に位置する土坑で、集石遺構SX013の南西側で検出された。土坑の平面形態は略円形を呈し、その規模は東西0.7m、南北1.0m、深さ35cmを測る。遺構の南側は攪乱により削平された部分がある。SX013と同じく遺構上面から埋土下位まで礫が詰められた状態で出土している。SX013と異なるのは礫の大半が頭大の大きさで、やや大型であることと礫の一部が被熱による赤変が認められることである。層位的な所見から、遺構の構築年代は1590年代以降と推定する。図示可能な遺物は認められなかった。

**SK225**

SK225 (写真図版19)はK36区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長辺1.4m、短辺0.7m、深さ20cmである。検出時には土坑の周辺に硬化面などを認識できず、遺構の掘り込み面が路面である可能性を考えていなかったが、当該土坑はその位置関係から、御所小路の路面上に構築された廃棄土坑である可能性が高い。出土遺物は僅少であるが、埋土中より唐津焼が出土している。出土遺物の年代から、遺構の構築年代は17世紀初頭から前葉と推定される。

御所小路  
路面上に  
構築された  
廃棄土坑



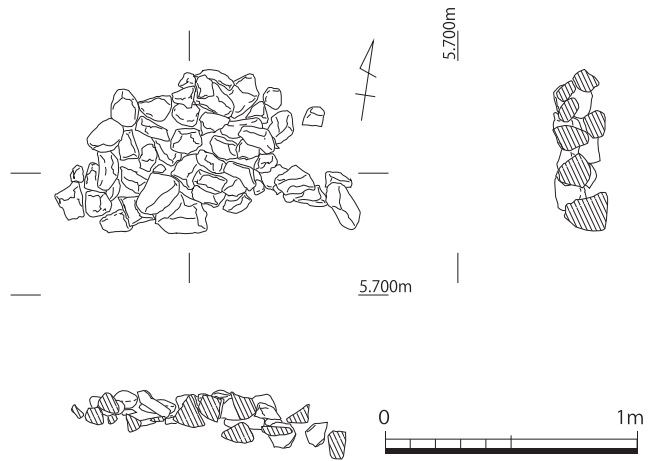
第111図 SK225出土遺物 (1/3)

第111図はSK225からの出土遺物である。815は唐津焼の皿で、見込みには鉄絵による二条の圈線が描かれている。内外面には灰釉が施され、見込みには砂目積みが認められる。1600～1630年代の製品である。

②集石遺構ほか

**SX006**

SX006 (第112図)はL47区に位置する集石遺構である。東西1.2m、南北0.6mの範囲に拳大の礫を集積したもので、遺構の周囲に明瞭な掘形等は認められなかった。出土遺物は認められないが、天正14年(1586)の焼土層を切り込んで構築されていることを確認している。従って、遺構の年代は1590年代以降に比定できる。



第112図 SX006実測図 (1/30)

**SX007・SX008**

SX007 (第113図)はM46～M47・L46～L47の交点付近に位置する集石遺構である。東西1.2m、南北0.8mの範囲に拳大の礫を集積したもので、遺構の周囲に明瞭な掘形等は認められなかった。礫が主体で人工的な遺物は極めて少ないが、瓦質土器火鉢の破片が出土している。天正14年(1586)の焼土層の上位またはそれを切り込んで構築されていることを確認しているため、遺構の年代は1590年代以降に比定できる。

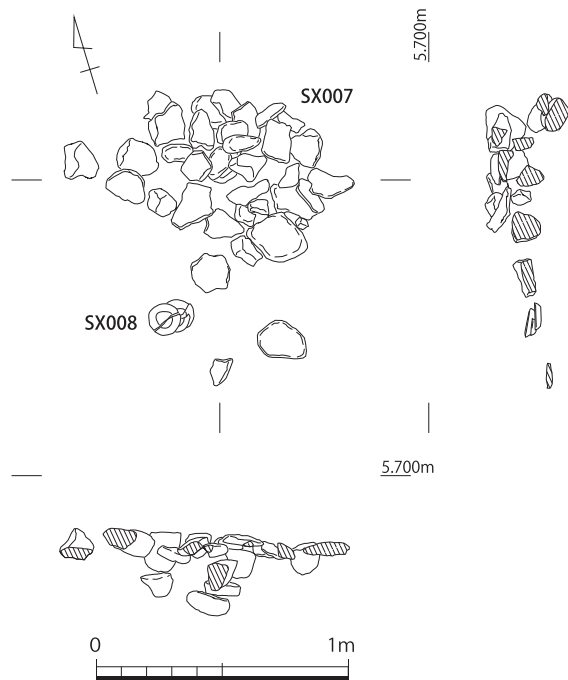
第114図はSK007からの出土遺物である。816は瓦質土器火鉢の底部で、板状の脚部が付属する。SX008 (第113図)はL46区に位置する遺構で、集石遺構SX007の南西側に構築されている。京都系土師器皿2枚を正位で埋置したもので、それぞれの土器はややずれてはいるが重なった状態と

京都系土師  
器皿が2枚  
出土

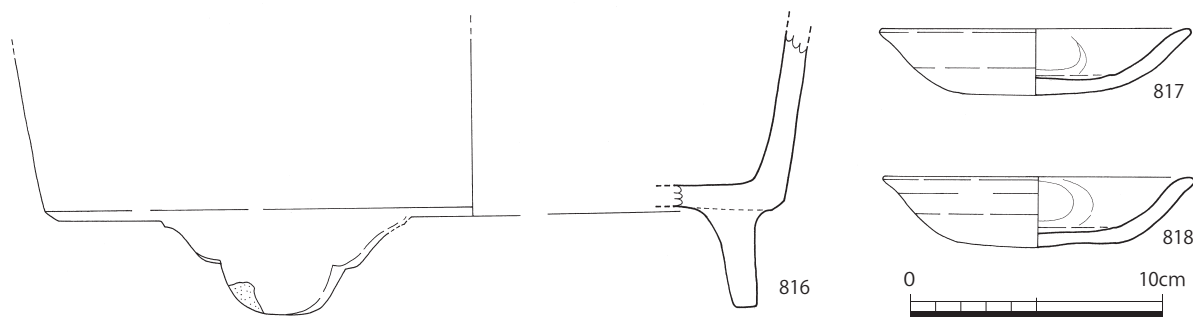
祭祀遺構？

なっている。集石遺構 SX007 の至近の距離に位置しているが、SX007 は焼土層中に包含されており、SX007 に付属するものではないと判断した。遺構の周囲に掘形などの痕跡は認められない。地鎮などに関わる祭祀遺構である可能性も考えられるが、断定できなかった。層位や京都系土師器の形態から、16 世紀後葉から末葉の所産と考えている。

第 114 図は SK008 からの出土遺物である。817・818 はいずれも京都系土師器の皿で、完存品となる。内面にススなどの付着は認められない。



第113図 SX007・SX008実測図(1/30)

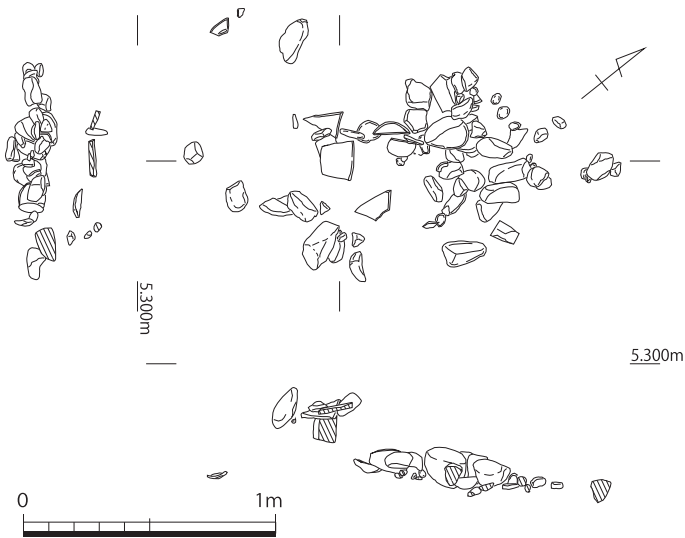


第114図 SX007・SX008出土遺物(1/3)

**SX022**

SX022 (第 115 図) は L42 区に位置する集石遺構である。東西 1.8 m、南北 0.9 m の範囲に拳大の礫が分布する。層位的な所見より、遺構の年代は 16 世紀末葉から 17 世紀初頭に比定される。

第 116 図は SX022 からの出土遺物である。818 は軒平瓦片で、中心飾りや右半部の文様を欠損するが、瓦当文様は宝珠唐草文に復元される。16 世紀後葉の所産である。819 は安山岩製の石臼の破片である。



第115図 SX022実測図(1/30)

**SX017**

鉄滓

SX017（写真図版20）はK41区に位置する遺構である。南側は攪乱を受けているが、遺構の東側に拳大の礫を数个配し、西側には鉄滓が堆積していた。鉄滓が分布する範囲は東西80cm、南北50cmと狭いが、整理用コンテナ1箱分ほどの量の鉄滓が出土した。周辺の礫は被熱により赤変している。鉄滓の他には遺物は認められなかった。第1面に所属する遺構と解釈しているが、当該層の分布が希薄になる地点であるため、第2～3層に所属する遺構である可能性も考えておきたい。出土層位より、遺構の時期は16世紀末葉から17世紀初頭に比定される。



818



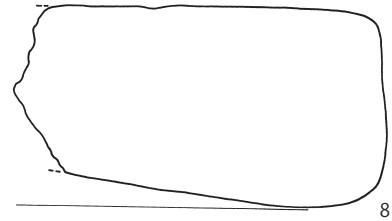
819

**(4) 第2～第3面の遺構群**

**(15世紀末葉～16世紀末葉)**

**① 礎石・掘り込み遺構・焼土層など**

L45～L46区で検出した遺構（第117図）である。第1南北街路SF070の東に隣接する遺構で、町屋の建物遺構の一部、あるいはそれに関連する遺構と推定される。



819



第116図 SX022出土遺物(1/3)

礎石  
SX032

掘り込み  
遺構SX033

焼土層  
SX027

ガラス小玉  
の出土状況

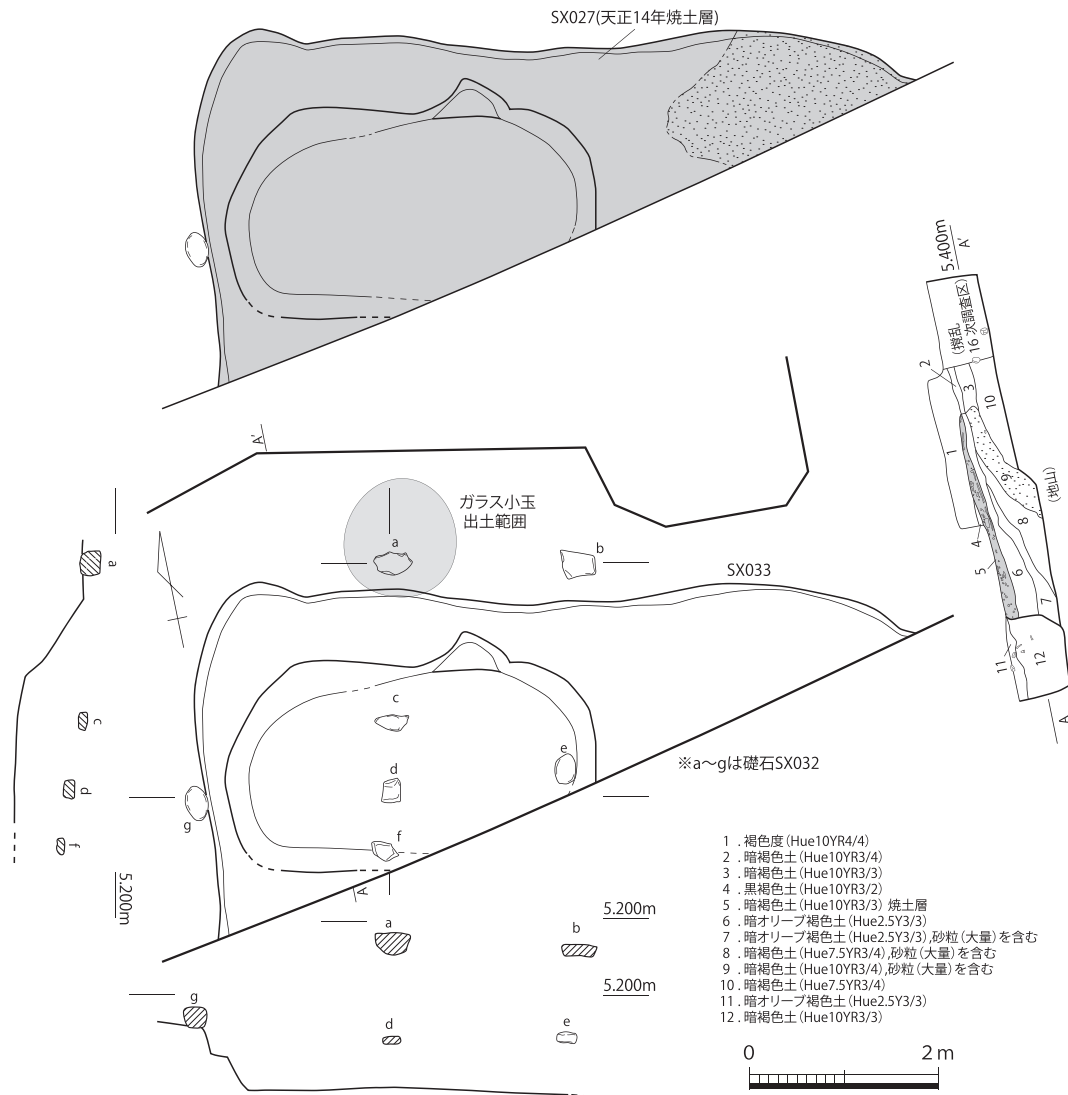
建物遺構の礎石、あるいは礎石の可能性のある礫7個をSX032（個々の礎石を個別に呼称する必要がある場合は、SX032a～SX032gとする）、建物遺構に伴うと思われる掘り込みをSX033、SX033の上位に堆積し、礎石の一部を被覆する焼土層をSX027とした。

調査の推移を以下で述べる。まず、L46区を掘り下げてゆくと、礎石と推定される大型の礫SX032aが検出された。SX032aの南側には砂質土と焼土層が分布しており、これらは分布の状況から礎石SX032aとは直接関係しない遺構と思われた。また、礎石SX032aの周辺からはガラス小玉数点が近接した場所で出土した。さらに掘り下げを進めると、ガラス小玉（第118図820～931）の出土点数が増加し、最終的には112点を数えるに至った。ガラス小玉の出土範囲はSX032aを中心として、半径約60～80cm程度の範囲に収まるが、2～3個がかたまっても、集積されたような状況ではなかった。また、SX032aの東側で礎石SX032bが検出された。

礎石SX032a・SX032bの南側で検出された焼土層SX032は、東西約7.4m以上、南北約3.6m以上の範囲に、10～20cm程度の厚みで水平に広がっていた。焼土層の下位には掘り込み遺構SX033があり、内部は黄褐色粘質土と黄褐色砂質土で埋められていた。SX033内部の土層は斜め方向に堆積しており、壁際には黄褐色砂質土が堆積するとともに、この砂質土が遺構北側にも広がっていたことが確認できる。焼土層SX033は、この掘り込み遺構SX034を覆うように分布している。

焼土層SX033を除去すると、礎石と推定される礫5個（SX032c～SX032g）が検出された。これらはSX032a・SX032bと比較すると、やや小型で原位置を動いている可能性が考えられるものもあるが、掘り込み遺構SX033に伴う礎石と推定される。

以上の状況より、L45～L46区には、SX032a・SX032bを礎石とする建物遺構とSX033を伴い、



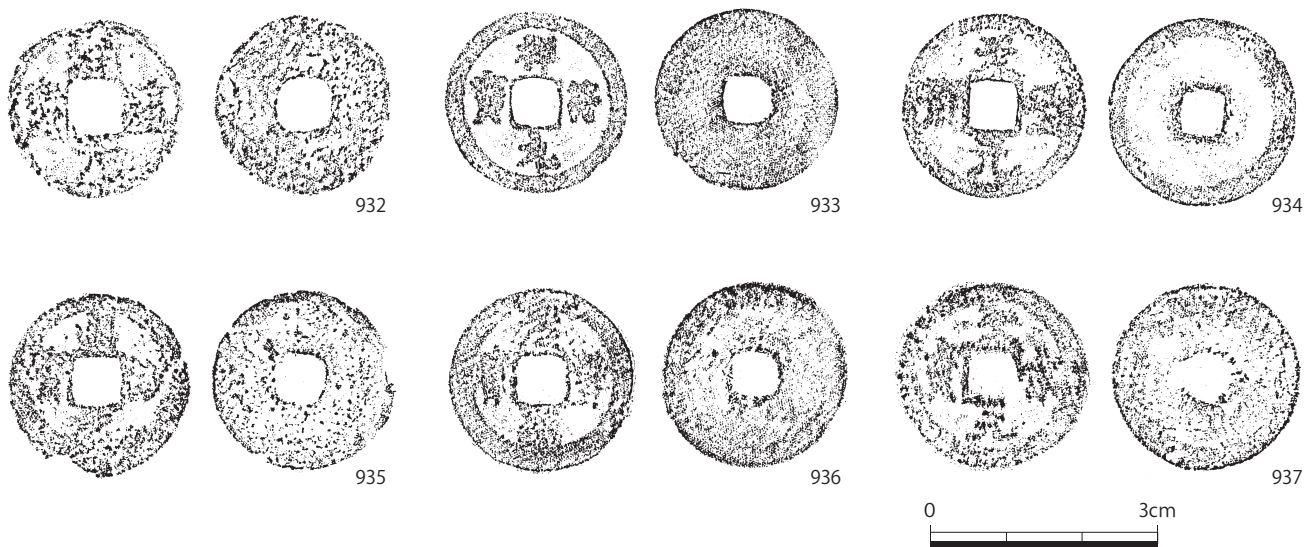
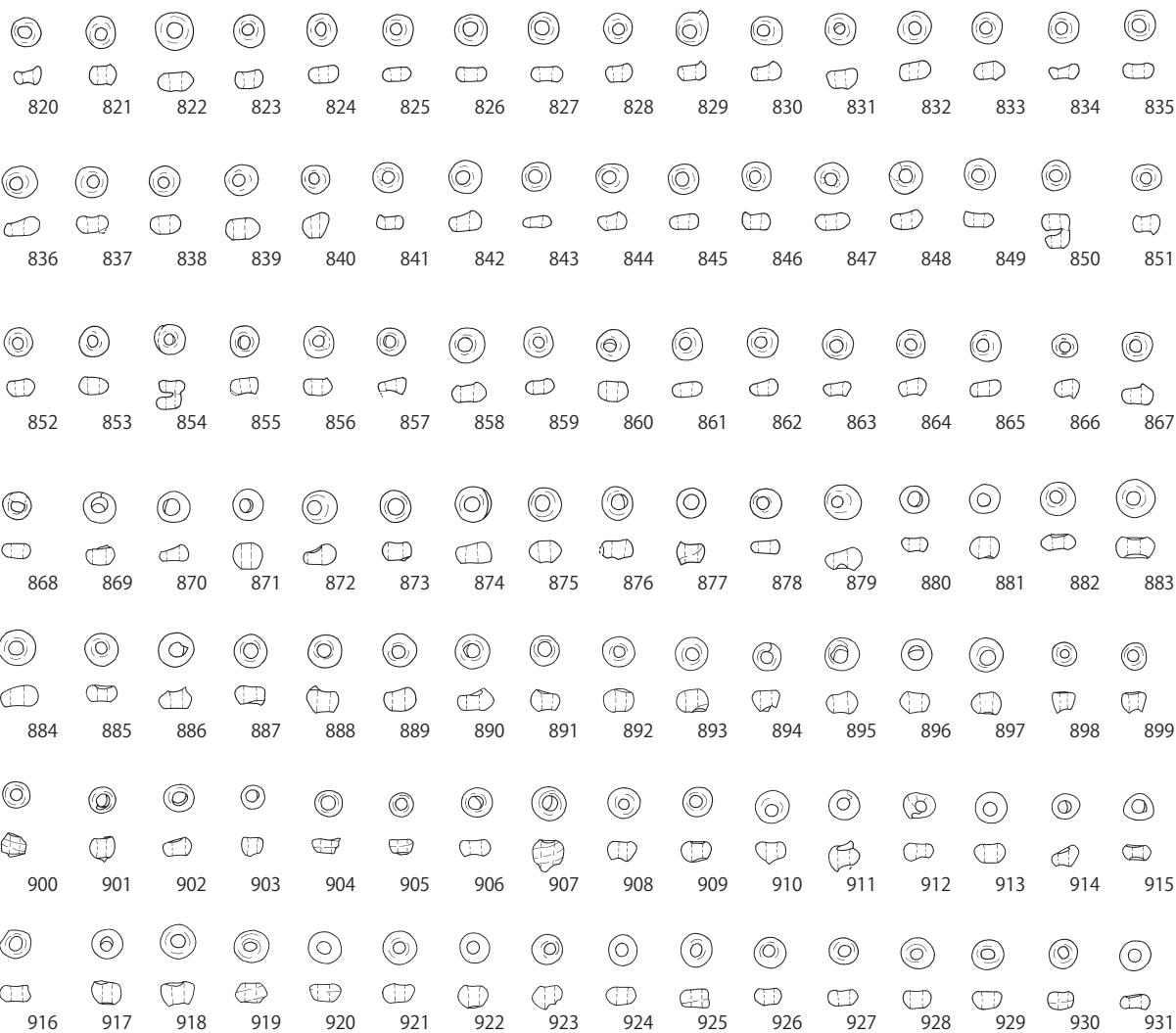
第117図 SX027・SX032・SX033実測図(1/80)

SX032c ~ SX032gを礎石とする2棟の礎石建物が存在したと考えられる。いずれの建物も第1南北街路と直行する方向で構築されている。

SX032aとSX032との柱間は約2mを測り、この建物には京間の1間が柱間寸法として採用された可能性が考えられる。北側の礎石列は、攪乱などにより消失しており、96次調査区の北側に隣接する第16次調査でも対応する礎石は確認されていない。

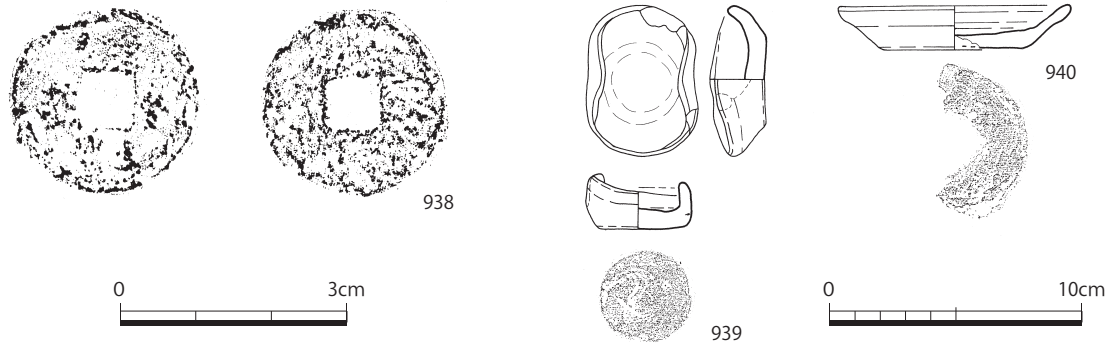
SX033を伴う礎石には柱間の寸法にばらつきがみられ、原位置を移動している可能性も考慮される。また、礎石を覆っていた焼土層SX027については、出土遺物や層位的な状況から、天正14年(1586)の島津侵攻時に伴うものであり、この想定が妥当なものであれば、これらの礎石建物は天正14年の火災によって焼失した可能性が考えられる。

第118・119図では、これらの建物遺構に関連する出土遺物を提示した。820~931は、礎石SX032aの周辺から出土したガラス小玉である。出土直後の時点では、遺物の大半は表面の色調がコバルトブルーを呈していた。しかし、現場から取り上げた後、洗浄を行ったところ、数時間を経



第118図 SX032・SX027出土遺物①(1/1)





第119図 SX027出土遺物②(1/1、1/3)

過した後に徐々に風化が進行し、表面が白色を呈するようになったものもある。

932～940は焼土層SX027からの出土遺物である。932～938は銅銭で、銭種などは遺物一覧表を参照されたい。939は手捏ね整形によって製作された耳皿、940はロクロ目土師器の皿である。

②溝

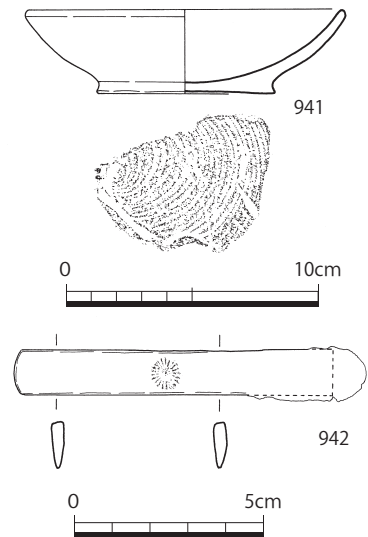
SD018・SD110

SD018・SD110はK41区に位置する溝である。発掘調査時の不手際でひとつの遺構にふたつの遺構番号を付してしましたが、両者は同一遺構である。K41区を斜めに縦断する形で検出され、その規模は幅0.7m、長さ4.0m、深さ20cmである。南側はさらに調査区外に伸び、北側は第16次調査SD110に接続する。溝の主軸は第1南北街路や町屋の建物遺構の主軸と大きく異なる。この溝付近を境に、特に西側では15世紀末葉から16世紀代の遺構の分布が極端に少なくなることを注意しておきたい。町屋に関わる区画溝であると推定されるが、遺構の主軸が大きく異なるため、その役割や機能は明らかではない。埋土中からの出土遺物は小柄や土器片があるが、全体的に出土量が少ない。なお、出土遺物の中に14世紀代の土師質土器杯があるが、遺構の掘り込み面は第2～3面に対応する面であることが明らかであるため、この遺物は混入品とみられる。遺構の構築年代は16世紀代と推定されるが、その詳細な年代は明らかにできていない。

SD018とSD110は同一遺構

遺構から西側は遺構が少ない

土師質土器杯は混入



第120図 SD110・SD018 出土遺物(1/3、1/2)

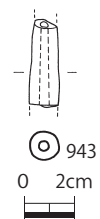
第120図はSD018・SD110からの出土遺物である。941はSD110として取り上げた土師質土器の杯である。14世紀前葉に比定されるが、前述したように混入品と思われる資料である。942はSD018として取り上げた青銅製の小柄で、中央部に菊花様の文様を鋳出している。

SD209

SD209はJ37・J38区の境付近に位置する南北方向の溝である。遺構の規模は幅1.6m、長さ3.8m、深さ15cmである。土層断面や完掘時の平面形態から、1回以上の掘り直しが行われていることがわかる。南側はさらに調査区外に伸び、北側は第16次調査区に接続する。第16次調査では遺構北側の終端部を検出している。出土遺物には土錘のほか、埋土中位に破碎された土器片が集中

して出土する地点がみられた。土器片には図示できる遺物は認められなかった。土器類には京都系土師器が含まれていなかったため、遺構の年代は16世紀前葉以前に推定される。

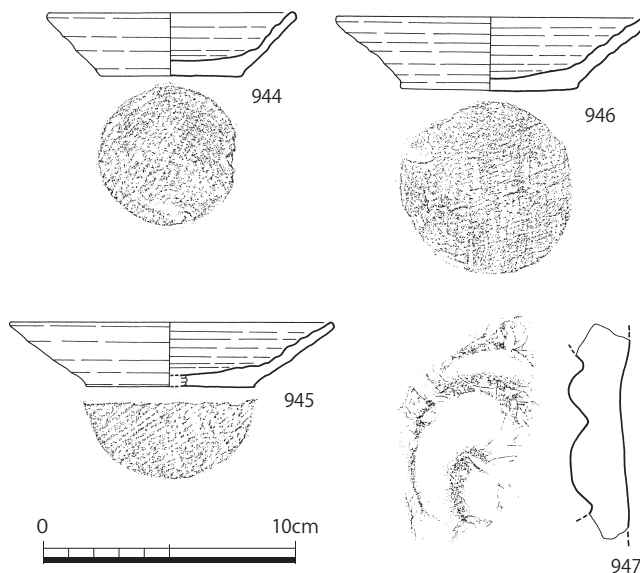
第121図はSD018・SD110からの出土遺物で、943は管状土錘である。



第121図 SD209  
出土遺物(1/3)

### SD232

SD232はJ37区に位置する南北方向の溝である。遺構の規模は幅0.6m、長さ3.0m以上、深さ60cmである。本来、2～3面で検出されるはずの遺構であるが、J37区周辺は整地層の堆積が薄かったため、実際の調査では地山面（第4面に対応）で検出した15世紀代の溝SD220の掘り下げ中に遺構のプランを確認した。従って、遺構の切り合い関係はSD220→SD232となる。また、調査時には土坑と認識していたが、報告書作成時に北側に隣接する第16次調査区に位置する溝に対応する可能性が高いことが判明した。今回の調査ではSD232は南端部より南側に伸びないことを確認しているため、当該地点が溝の南側の終息部である可能性が高いと考えている。埋土中より完形品を含むロクロ目土師器などが出土している。出土遺物の年代から、遺構の年代は15世紀末葉から16世紀前葉に比定される。



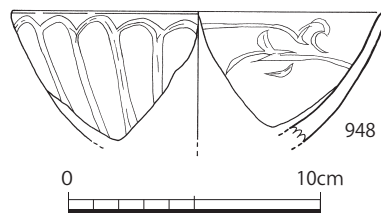
第122図はSK225からの出土遺物である。944～946はロクロ目土師器の皿、947は軒丸瓦の瓦当部の破片である。

第122図 SD232出土遺物(1/3)

③土坑

SK019

SK019はL44区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略円形を呈し、その規模は現状で東西2.4m、南北1.3m、深さ20cmを測る。遺構の南側は未調査区に伸びる。東側は埋土に焼土粒を多く含む柱穴SP1009（第1面より構築＝16世紀末葉～17世紀初頭）に切られている。なお、土坑底面で重複した下層の遺構を掘り抜いてしまった部分がある。遺構の性格は廃棄土坑（ゴミ捨て坑）であろう。出土遺物は僅少で図示可能な遺物が少ないため、遺構の詳細な年代は不明である。層位的な所見と出土遺物から、16世紀代の所産と考える。

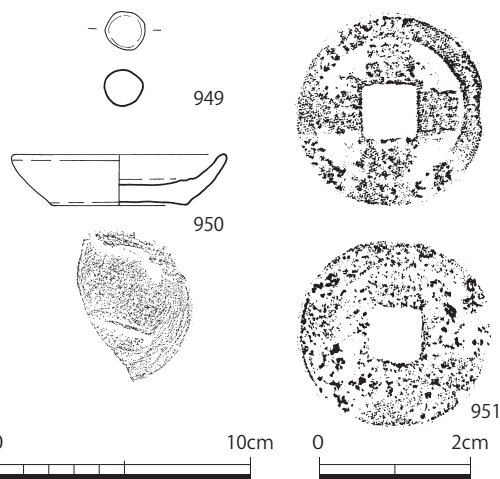


第123図 SK019出土遺物(1/3)

第123図はSK018からの出土遺物である。龍泉窯系青磁碗の破片で、外面に蓮弁文、内面に草花文が認められる。15世紀代の所産と思われるため、遺構の詳細な年代を示す遺物ではない。

SK020

SK020はL44区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略円形を呈し、その規模は現状で東西2.1m、南北1.4m、深さ20cmを測る。遺構の南側は未調査区に伸びる。埋土からは礫、土師質土器皿、銅銭などが出土している。遺構の性格は廃棄土坑であろう。出土遺物の年代観から、遺構の年代は15世紀末葉から16世紀前葉に比定できる。



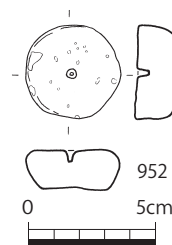
第124図 SK020出土遺物(1/3、1/1)

第124図はSK020からの出土遺物である。949は小型の土玉である。土鈴の内部にあった土玉である可能性が考えられるが、断定できない。950はロクロ目土師器の皿である。951は初鑄造年1056年の北宋銭「嘉祐通寶」である。他に銅銭の小破片が1点出土しているが図示していない。

土鈴の内部にあった土玉？

SK021

SK021（写真図版21）はL43～L44区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形を呈し、その規模は現状で東西1.2m、南北0.9m、深さ20cmを測る。遺構の南側は未調査区に伸びる。埋土からは拳大の礫が多数出土し、礫の中には被熱したものも認められた。出土遺物は僅少であり、遺構の詳細な年代を確定できないが、層位的な所見より15世紀末葉から16世紀代と推定される。



第125図 SK021出土遺物(1/3)

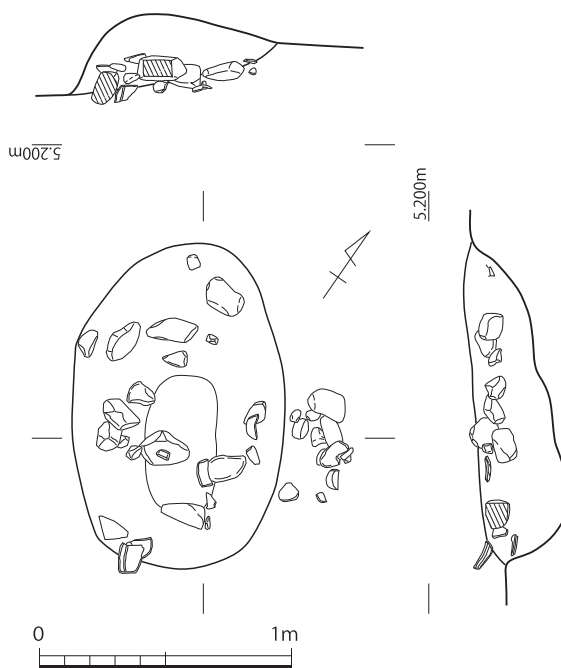
第125図はSK021からの出土遺物である。952は平面形態が円形を呈する軽石製の製品である。用途は不明であるが、中央部に未貫通の小孔が認められる。

SK045

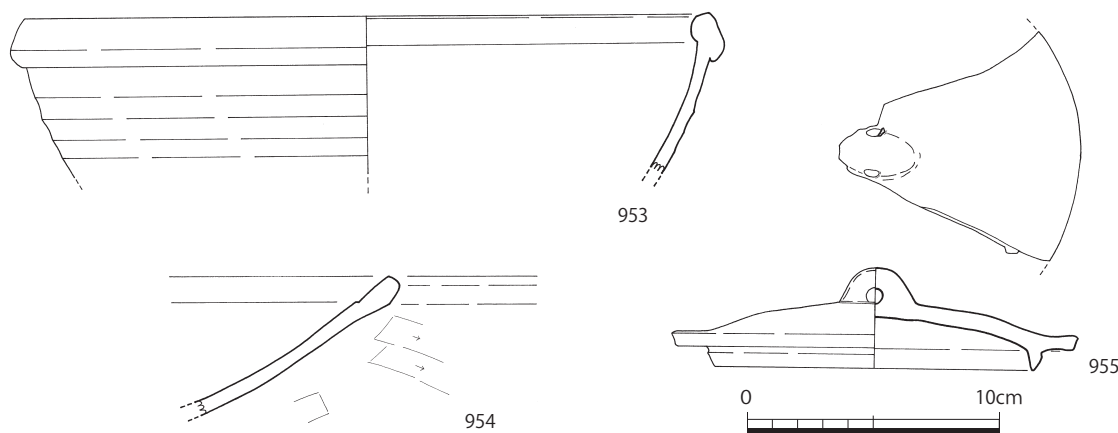
埋土上位に  
磔

SK045 (第126図) はL47区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径1.28m、短径0.84m、深さ34cmである。第3面で検出した遺構で、  
周辺に多数の土坑が掘られているが、その中では最も新しい時期に構築されている。埋土上位には拳大から頭大の磔が目立つが、埋土下位は土壌により埋められていた。出土遺物には中国南部産の焼締陶器鉢や瓦質土器などがある。出土遺物や層位的な所見により、遺構の時期は16世紀後葉から末葉である。

第127図はSK045からの出土遺物である。953は中国南部産の焼締陶器鉢で、吉田分類C類の製品である。954は瓦質土器の土鍋で、体部外面に削り調整が認められる。955は瓦質土器の蓋で、天井部に貫通孔をもつ摘みを設けている。



第126図 SK045実測図(1/30)

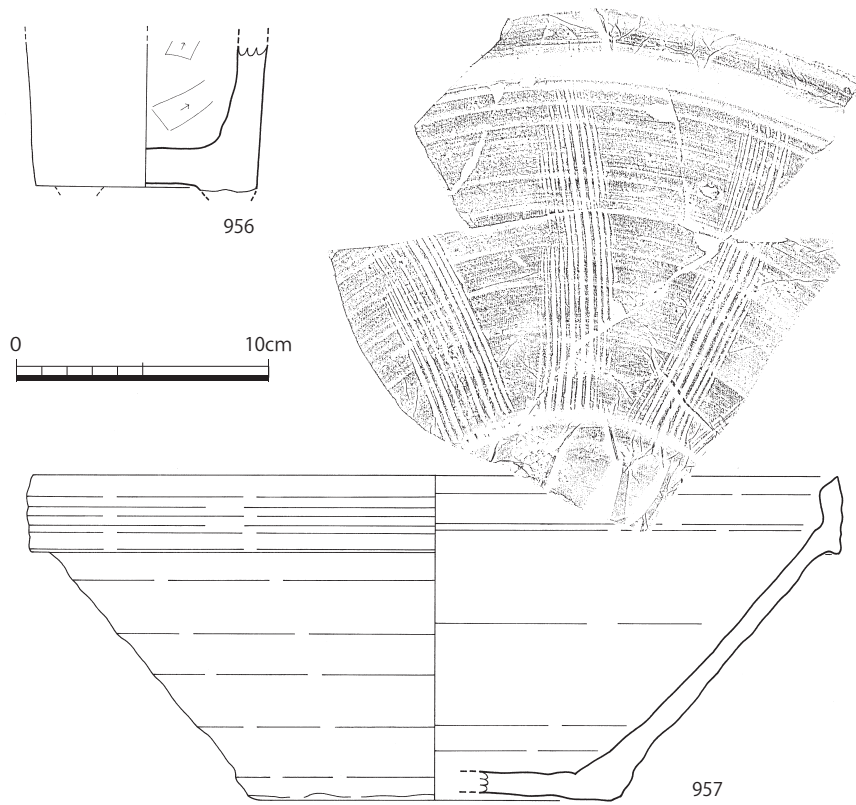


第127図 SK045出土遺物(1/3)

SK046

SK046 (写真図版21) はL47区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径2.5m、短径1.4m、深さ20cmである。遺構の南西側をSK045によって切られている(切り合い関係SK046→SK045)。埋土の上位から中位からは多数の磔が出土しており、底面は2段掘りとなっている。遺構西から北西側の底面から備前焼播鉢や瓦質土器香炉が出土した。遺構の構築時期は16世紀代であるが、これ以上の詳しい時期を特定できない。

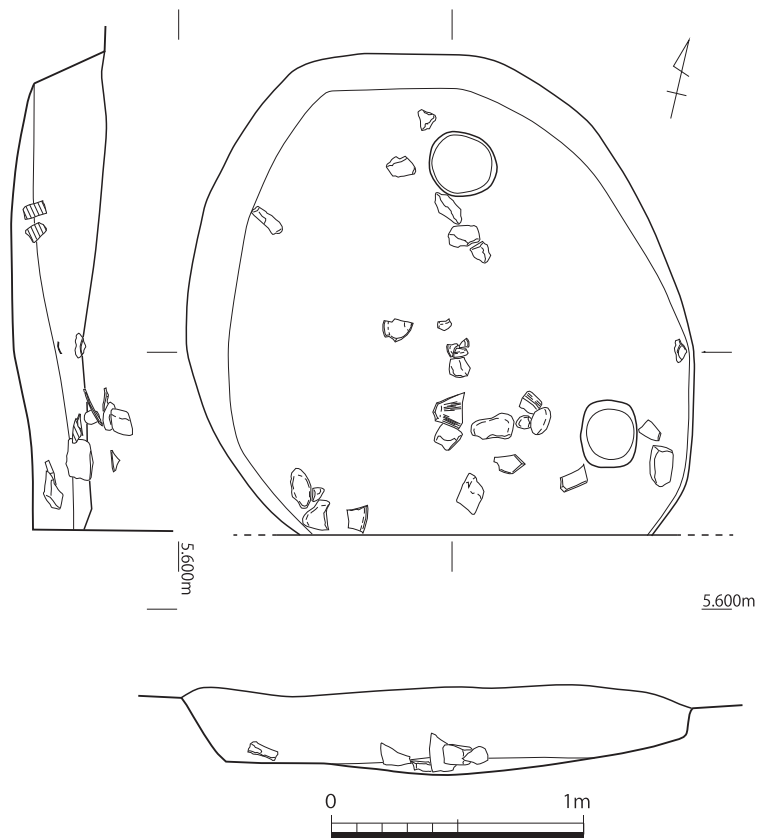
第128図はSK046からの出土遺物である。956は瓦質土器の香炉で、内外面ともにススが附着しており、色調が黒色を呈するものとなっている。957は備前焼播鉢で、16世紀前葉を主体に生産された中世6期の製品である。



第128図 SK046出土遺物(1/3)

**SK047**  
 SK047（第129図）はL47区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径2.0m、短径1.9m、深さ33cmである。西側に位置するSK045と近接した位置に構築されているが、切り合い関係は有していない。土坑底面よりやや浮いた位置で礫や遺物が出土している。出土遺物や層位的な所見により、遺構の時期は16世紀後葉から末葉に比定される。

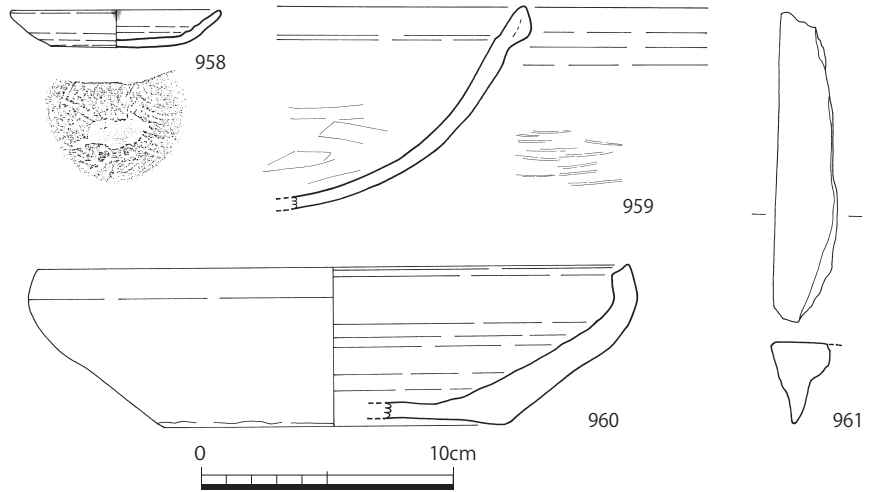
第130図はSK047からの出土遺物である。958はロクロ目土師器の皿、959は瓦質土器の土鍋、960は



第129図 SK047実測図(1/30)



備前焼の鉢である。958のロクロ目土師器は15世紀末葉から16世紀前葉に盛行する型式であるが、959の瓦質土器の土鍋、960の備前焼の鉢は16世紀後葉以降に比定される遺物である。961は砂岩系の石材を使用した砥石である。

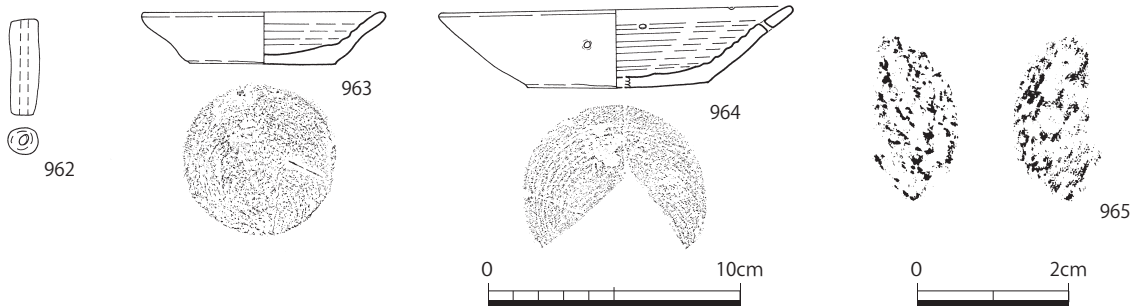


第130図 SK047出土遺物(1/3)

SK049

SK049(写真図版21)はL46区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径2.0m、短径1.8m、深さ30cmである。土坑底面よりやや浮いた位置で礫や遺物が出土している。出土遺物や層位的な所見により、遺構の時期は15世紀末葉から16世紀前葉に比定される。第131図はSK049からの出土遺物である。962は土錘、963・964はロクロ目土師器の皿である。964には口縁部に貫通孔がある。965は銅銭の破片であるが、銭文などは判読できない。

口縁部に貫通孔



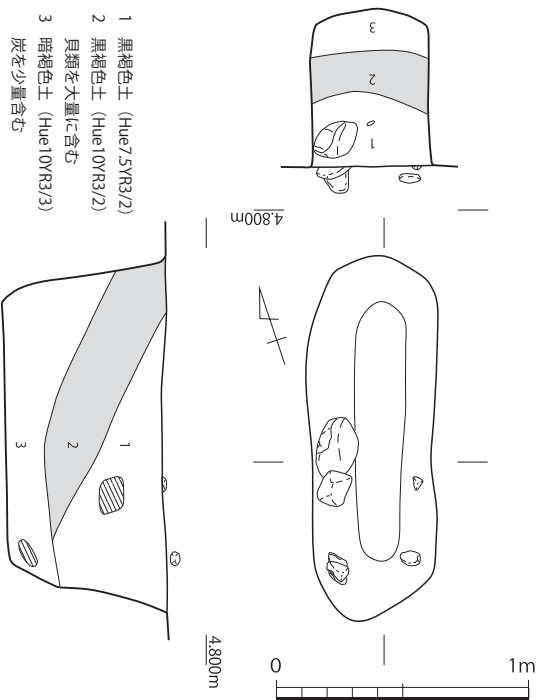
第131図 SK049実測図(1/30)

SK145

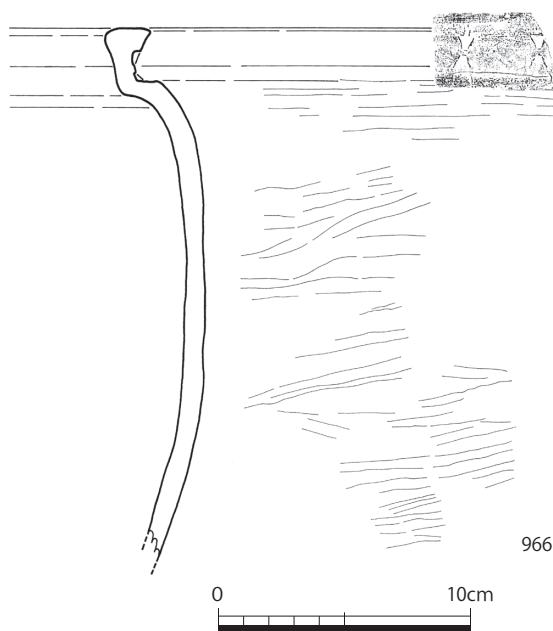
SK145(第132図)はL43区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径1.44m、短径0.46m、深さ60cmである。埋土は3層に分層され、そのうちの第2層からは大量のキサゴと一定量のサザエなどを主体とする貝類が多量に出土した。また、当該層の中には魚骨などの動物遺存体の出土が認められた。第2層は北から南に傾斜するように堆積しており、貝類などは北側から捨てられたことがわかる。また、貝類や動物遺存体が出土する層は第2層に限られることから、当該遺構は貝類などを一括廃棄するために掘られた土坑であると判断できる。埋土中からは動物遺存体の他、京都系土師器の小破片が出土していることを確認している。出土遺物の年代観から、遺構の年代は16世紀後葉から末葉に比定できる。

貝類を一括廃棄した土坑

第133図はSK145からの出土遺物である。966は瓦質土器火鉢で肥厚する口縁部外面に列点文を有する。他に京都系土師器の小破片が出土しているが、図示していない。



第132図 SK145実測図(1/30)

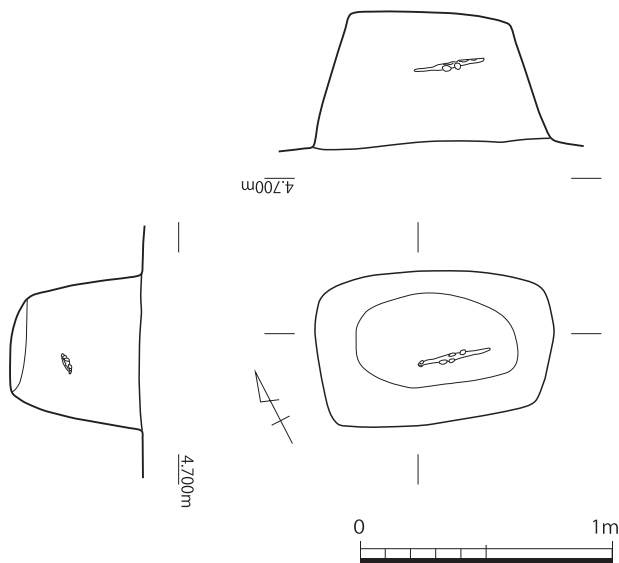


第133図 SK145出土遺物(1/3)

SK170

SK170 (第134図)はL43区に位置する遺構である。遺構の掘形の平面形態は隅丸長方形を呈し、その規模は長径0.94m、短径0.50m、深さ50cmである。埋土中位から鉄器(剣あるいは刀子か?)が出土している。遺構の形態や出土遺物から墓である可能性を考えたが、それを断定することはできなかった。第3面に構築された遺構であるため、15世紀後葉から16世紀末葉までの時間幅の中に比定されるが、それ以上の詳しい年代を確定できない。出土遺物には鉄器があるが、錆出が著しく、保存処理を終えていないため、図化を行っていない。

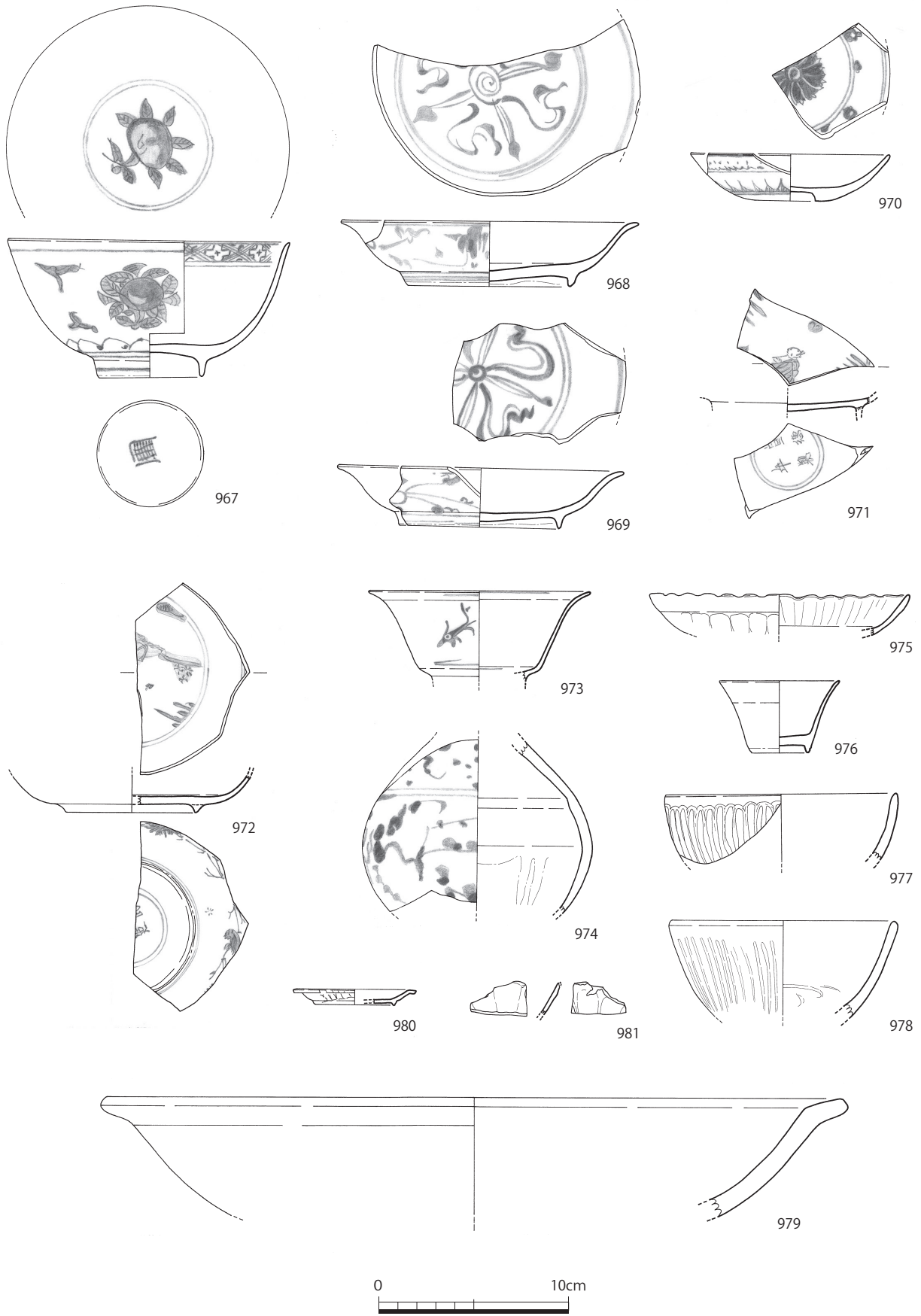
鉄器の  
出土



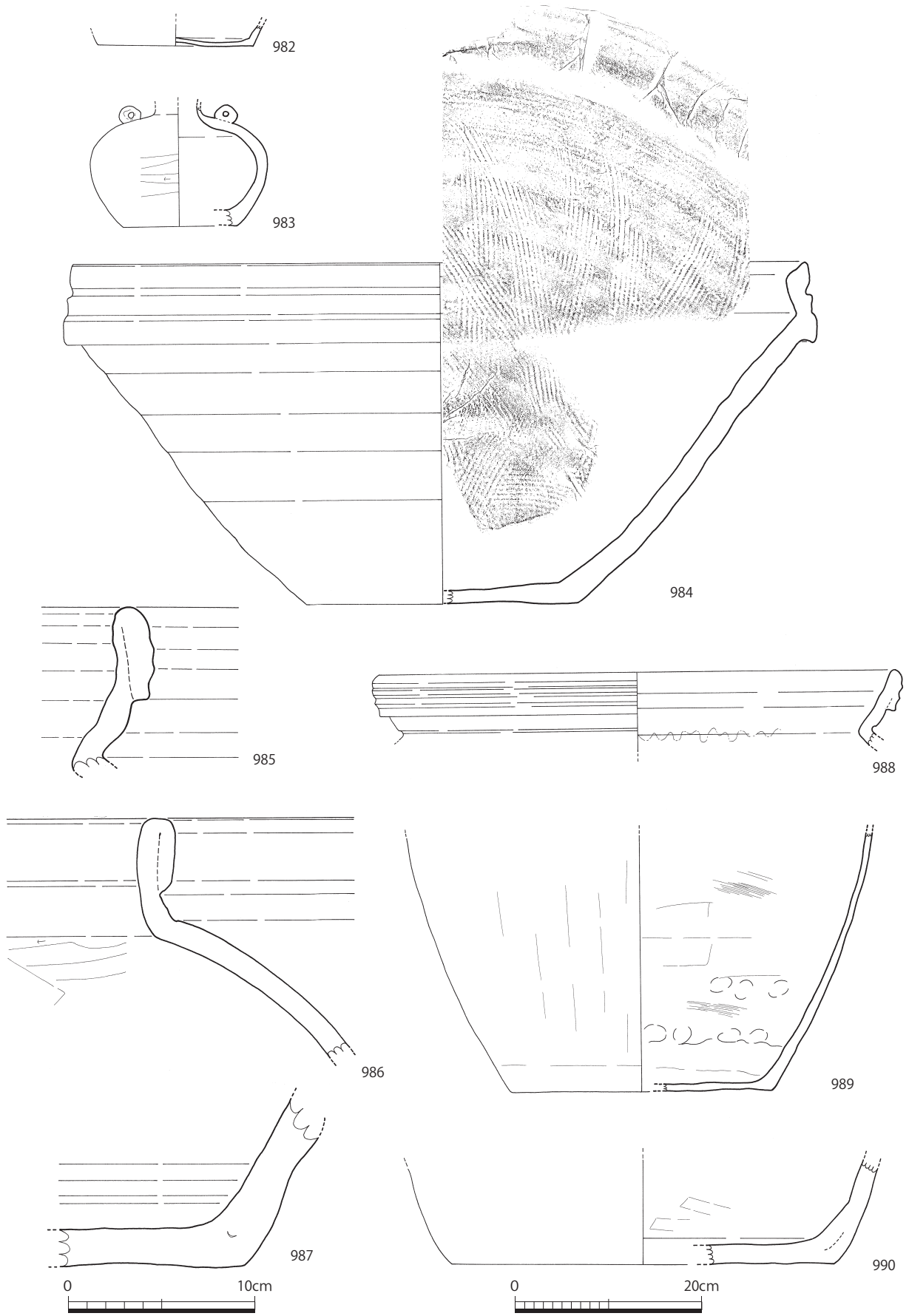
第134図 SK170実測図(1/30)

SK183

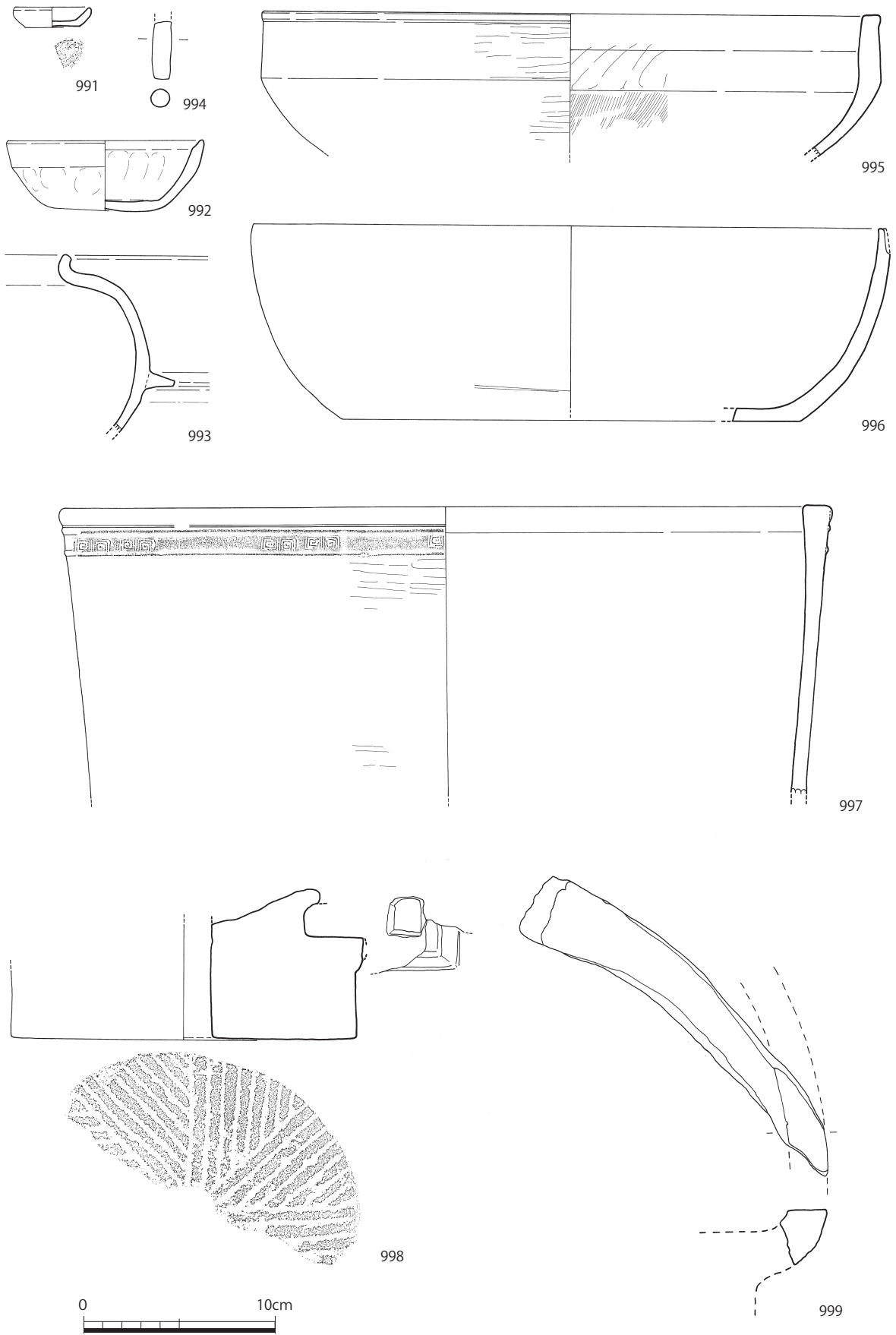
SK183 (写真図版22)はL42～K42区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は現状で長径2.4m、短径1.8m、深さ40cmである。遺構の北側は調査区外に伸びる。遺構上面から中位にかけては拳大から頭大の礫が詰まっており、南側壁面の一部には掘形の縁辺に沿うように礫が配置されている部分も見られた。また、土坑の底部付近には陶磁器類や備前焼挿鉢の大型破片などがまとまって出土した。出土遺物の年代観より、遺構の年代は16世紀後葉から末葉に比定される。



第135図 SK183出土遺物①(1/3)

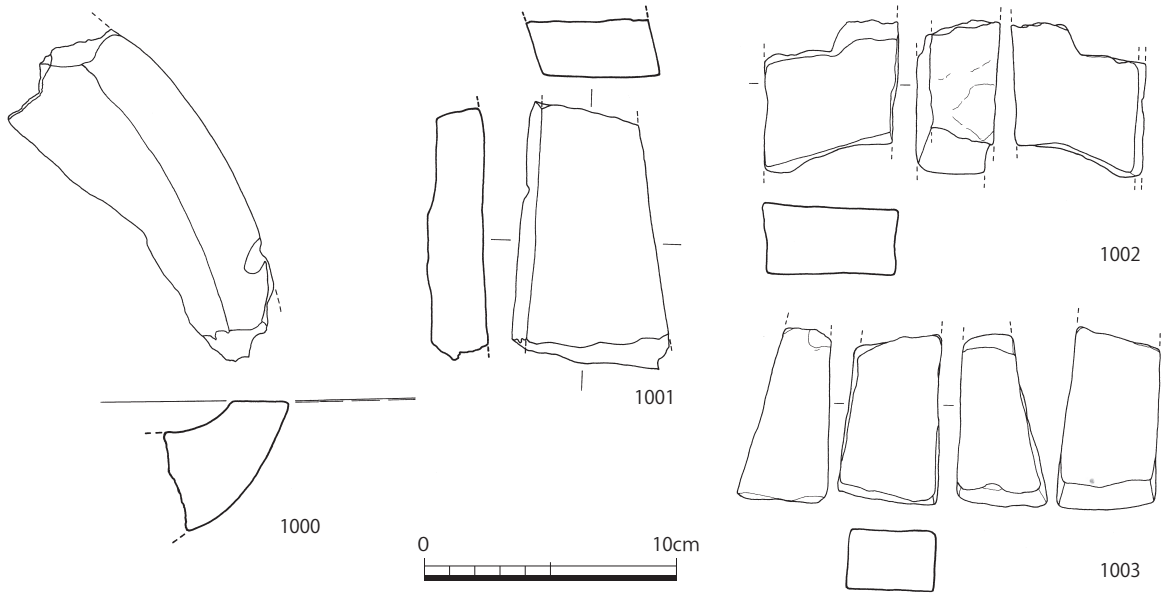


第136図 SK183出土遺物②(1/3,1/6)



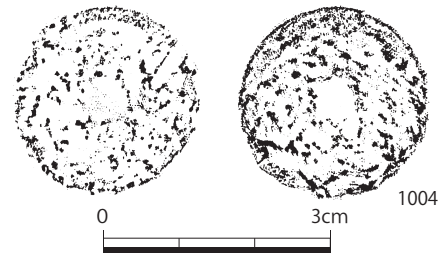
第137図 SK183出土遺物③(1/3)





第138図 SK183出土遺物④(1/3)

第135～139図はSK183からの出土遺物である。967～973は中国景德鎮系青花である。967はE群青花碗で、口径がやや大振りの製品である。通常の饅頭心タイプのものと比較すると、底部の盛り上がりがなく、口縁端部がわずかに端反りとなる。外底部に異体字銘が描かれている。968・969はB1群青花皿であるが、これも口径がやや大きい大振りのものとなる。



第139図 SK183出土遺物⑤(1/1)

器形や文様が同一であることから、組物として生産・使用されたものであろう。970は底部が碁笥底をなすC群青花皿である。971・972はE群青花皿で、971の外底部には「宣徳年製」銘、972の外底部には「□□□製」銘が描かれている。973は鉢で、体部下半の圈線は呉須で描かれるが、外面の魚(?)状の文様の色は褐色を呈しており、鉄絵が使用されている。974は漳州窯系青花の瓶である。980は青釉陶器の小皿で、内外面に翡翠釉と呼ばれるコバルトブルーの釉が施されている。981は陶器の小皿で、内外面に緑釉が施されている。975は白磁の皿で、口縁部が輪花となり、内外面に鎬文が施される。976は景德鎮系白磁杯で、森田分類E群の製品のひとつである。977～979は龍泉窯系青磁で、977・978は外面に細蓮弁文を施す碗、979は盤(大皿)である。982は朝鮮王朝産陶器で、舟徳利の底部破片である。

983～990は備前焼。983は双耳壺で、口縁部を欠損する。984は播鉢で、内面に放射状播目と斜め播目を交差させる近世1期の製品である。985～990は大甕で、985・988は近世1期に、986は中世3期bに比定される資料である。987・990は底部である。

991は在地系の土師質土器小皿である。15世紀代に比定される資料であることから、混入品であろう。992は京都系土師器であるが、形態が深手の杯となっている。993は棒状の形態を呈する破片であるが、用途は不明である。994～997は瓦質土器である。994は羽釜、995・996は鉢、997は口縁部外面に二連雷文を刻印する火鉢である。

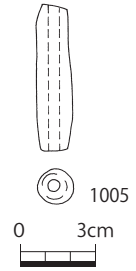
998～1000は茶臼で、和泉砂岩に類似した砂岩系の石材を素材とする。1001～1003は砥石である。1004は銅銭であるが、錆出のため銭文などを判読できない。

外面文様が鉄絵

**SK184**

SK184はL43区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は現状で東西2.1m、南北1.3m、深さ20cmである。遺構の北側は調査区外に伸びる。埋土中から土錘、埋土下位から頭大の礫が出土しているが、以上の他には図示できるような遺物はない。出土遺物からは詳細な年代を確定できないが、層位的な所見から、15～16世紀代の遺構であろう。

第140図はSK184からの出土遺物で、管状土錘の完存品である。



第140図  
SK184出土  
遺物(1/3)

**SK201**

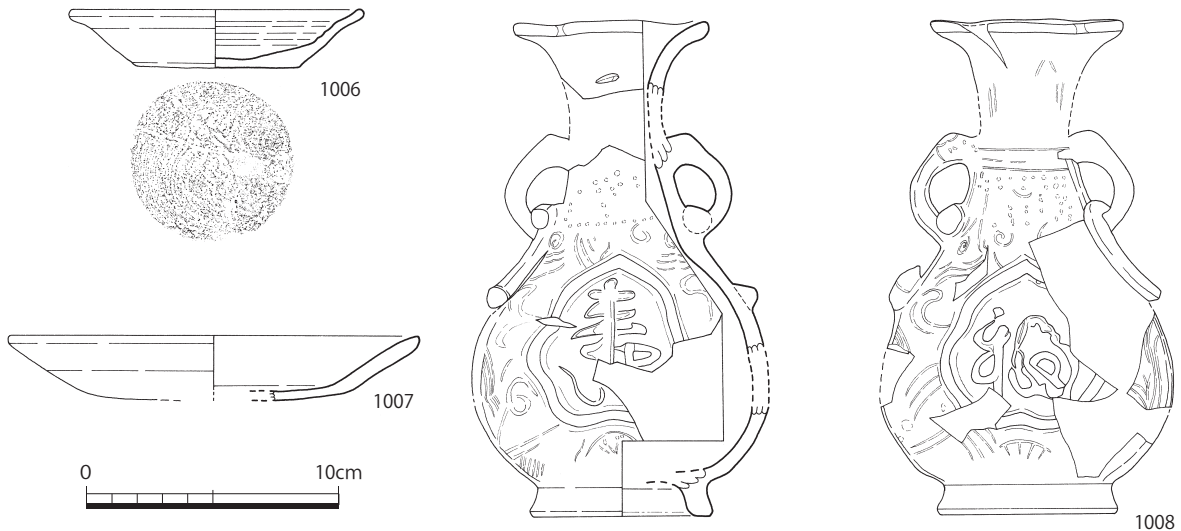
SK184はL43区に位置する小型の土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径1.5m、短径0.8m、深さ35cmである。時期不明の土坑SK202を切って構築されている（切り合い関係はSK202→SK201）。出土遺物の図面を提示していないが、薄手の京都系土師器皿2枚が出土しており、そのうち1枚にはススの付着が顕著に認められる。出土遺物と層位的な所見により、遺構の年代は16世紀前葉から中葉である。

**SK202**

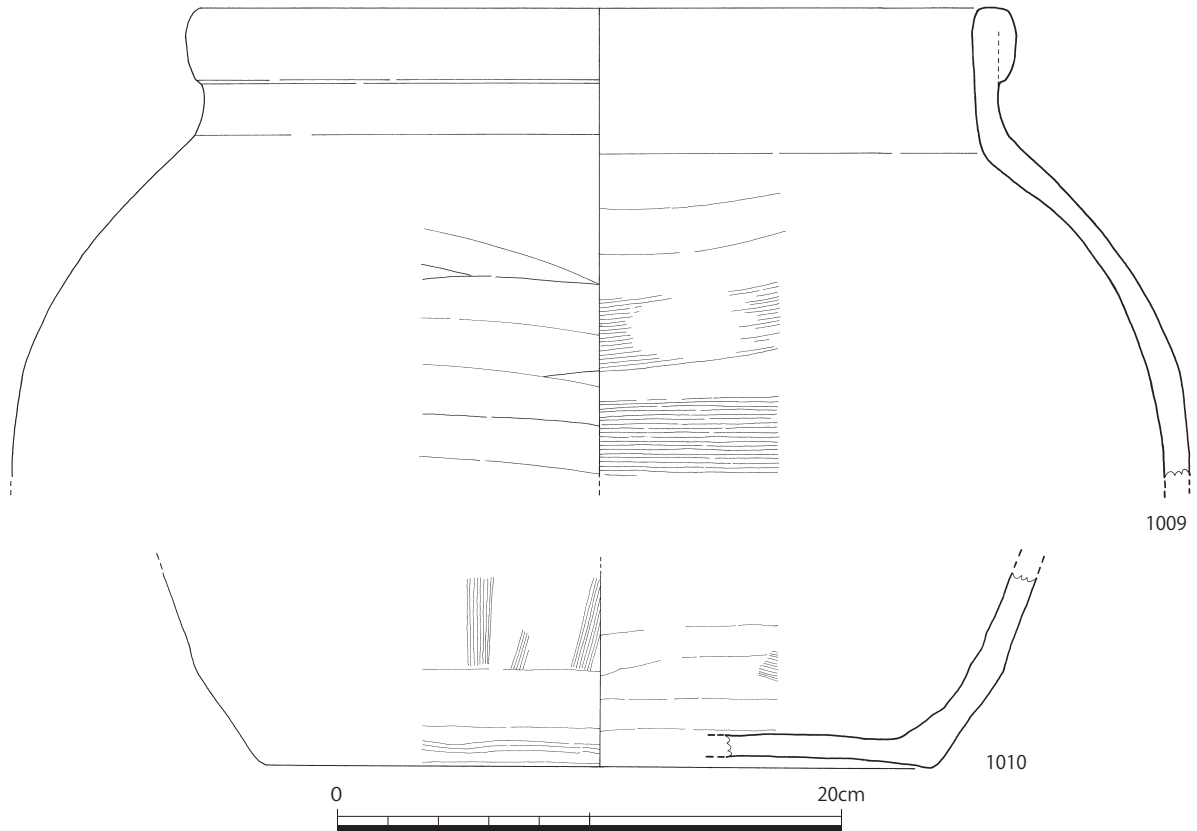
K202（写真図版22）はL43区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は現状で東西2.5m、南北1.3m、深さ30cmである。埋土下位から底面にかけては拳大から頭大の礫がまとまって出土した。出土した礫の中には被熱したものも認められる。礫の間や埋土中から、土師質土器・備前焼・青磁片などが出土した。出土遺物の中で、注目すべきものとして、出土遺物の中に完形近くに復元される青磁瓶がある。遺構の性格は廃棄土坑と推定される。出土遺物と層位的な所見により、遺構の年代は16世紀前葉から中葉である。

第141・142図はSK202からの出土遺物である。1006はロクロ目土師器の皿、1007は京都系土師器の皿である。1007の京都系土師器は器壁が薄く、古い様相をもつ資料である。1008は龍泉窯系青磁瓶で、15世紀代に比定される。欠損部分も目立つが、全形が判明する程度に復元できる資料である。型打ち整形によって製作されており、胴部中央に「福」「寿」字を陽刻している。把手の基部には不遊環をもつ。SK202から出土した資料は小破片で、他は周辺の整地層中から出土したものが接合した。1009・1010は備前焼の大甕である。

龍泉窯系  
青磁瓶



第141図 SK202出土遺物①(1/3)

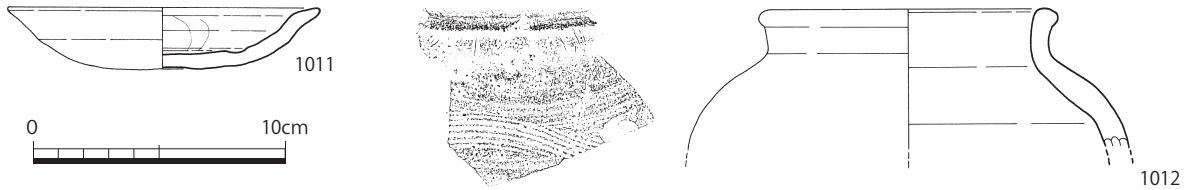


第142図 SK202出土遺物②(1/3)

SK205

SK205 (写真図版 22) は L42 区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径 3.1 m、短径 2.0 m、深さ 40cm である。埋土中から拳大の礫や遺物が少数出土している。出土遺物と層位的な所見により、遺構の年代は 16 世紀後葉から末葉である。

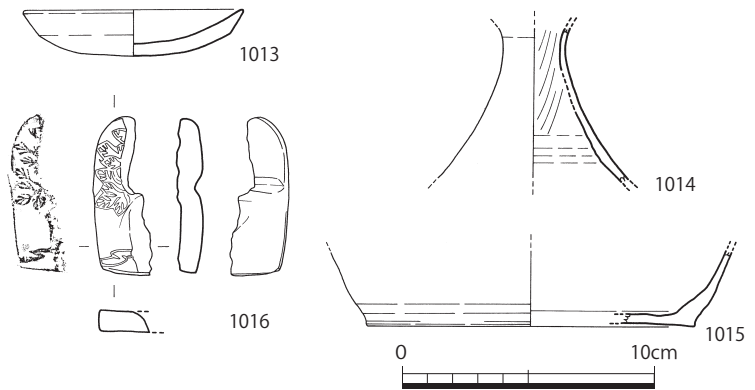
第 143 図は SK205 からの出土遺物である。1011 は京都系土師器の皿で、器壁が厚い新しい様相を呈するものである。1012 は備前焼の壺で、肩部に櫛描き波状文を施している。



第143図 SK205出土遺物(1/3)

SK206

SK206 (写真図版 22) は K40 区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径 0.8 m、短径 0.3 m、深さ 20cm である。土坑内部からは拳大から頭大の礫が多数出土した。出土遺物は少ないが、16 世紀後葉から末葉の遺構である。



第144図 SK206出土遺物(1/3)

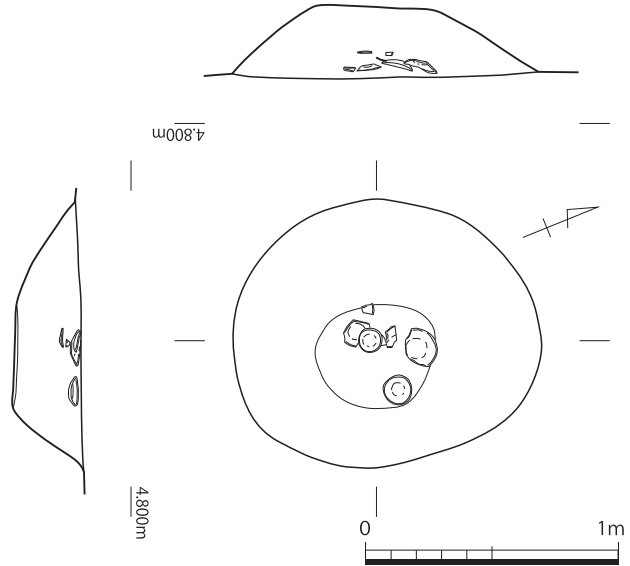
滑石製の  
石製品

第144図はSK205からの出土遺物である。1013は京都系土師器の皿、1014・1015は朝鮮王朝産陶器舟徳利、1016は滑石製の石製品である。1016の表面には植物(?)の文様が認められる。裏面は欠損するが、貫通孔のあるツマミが付いていたと推定される。

SK210

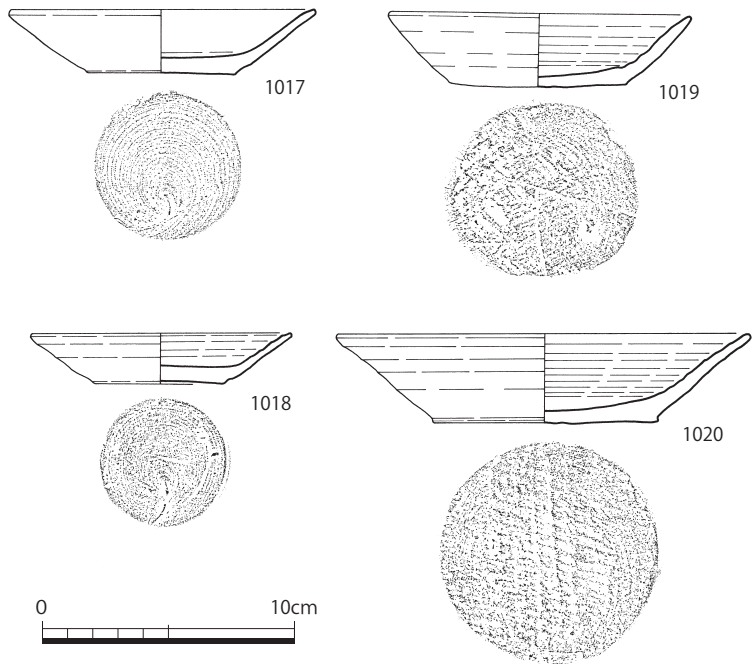
SK210(第145図)はJ31区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径1.2m、短径1.05m、深さ30cmである。埋土上位から、ロクロ目土師器の皿4枚が出土した。出土土器のうち、2枚はほぼ完形の状態であったが、他の2点は口縁部などが一部破損している。土器を一括して廃棄、または埋納した遺構であろう。出土遺物より、遺構の年代は15世紀末葉から16世紀前葉に比定できる。

土器の一括  
廃棄または  
埋納



第145図 SK210実測図(1/30)

第146図はSK205からの出土遺物である。1017～1020はロクロ目土師器の皿で、このうち1019・1020は完形品である。

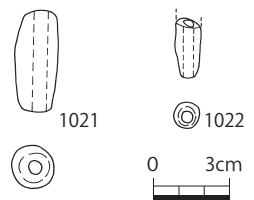


第146図 SK210出土遺物(1/3)

SK213

SK213はK39・J39区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略長楕円形で、その規模は長径2.0m、短径1.4m、深さ30cmである。土坑の断面形態はV字状となり、やや特異な形状を呈する。遺構の詳細な時期を示す遺物はないが、層位的な所見より、15～16世紀代に比定される遺構であろう。

第147図はSK205からの出土遺物である。1021・1022はいずれも管状土錘で、図示できる出土遺物はこの2点に留まる。



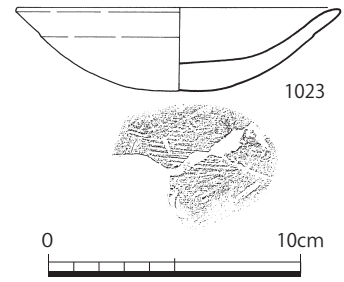
第147図 SK213  
出土遺物(1/3)

動物遺存体の出土

SK214

SK214 (写真図版 23) は K39 区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径 0.8 m、短径 0.5 m、深さ 30cm である。内部からは拳大の礫や遺物が少数出土したほか、土坑底面近くから動物遺存体が出土している。出土遺物から、遺構の年代は 16 世紀後葉から末葉に比定できる。

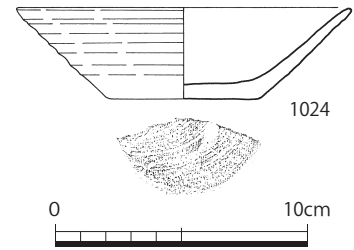
第 148 図は SK214 からの出土遺物である。1023 は京都系土師器の皿で、内外面にススが顕著に付着している。底部には板状圧痕も認められる。



第148図 SK214出土遺物(1/3)

SK217

SK217 は J43 区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長辺 2.0 m、短辺 1.4 m、深さ 30cm である。北側を時期不明の土坑 SK202、西南側を SK215 によって切られている。また、15 世紀末葉から 16 世紀前葉の土坑 SK218 を切って構築されている。切り合い関係をまとめると SK218 → SK217 → SK202・SK215 である。出土遺物は種区内が、埋土中より在地系のロクロ目土師器が出土している。切り合い



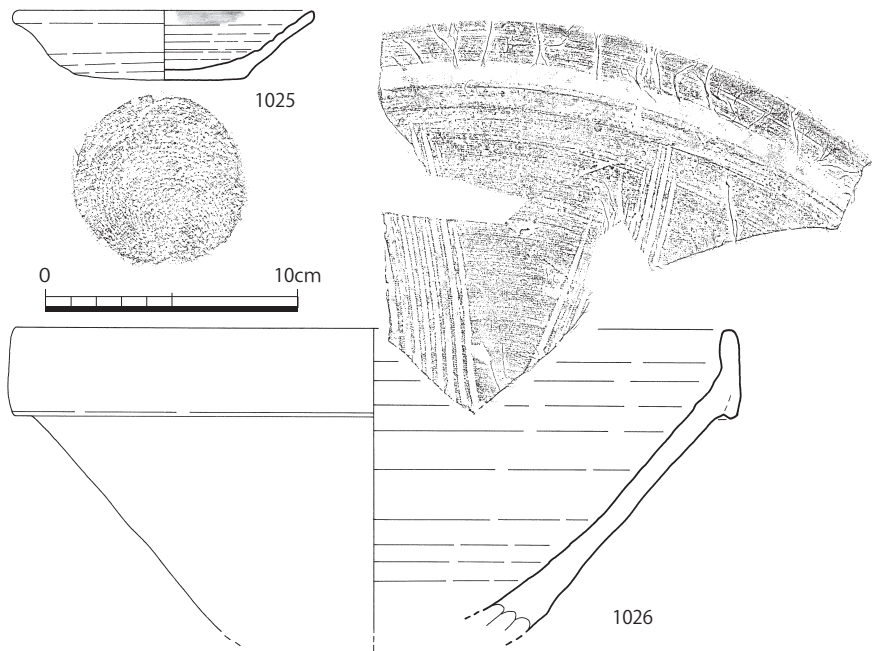
第149図 SK217出土遺物(1/3)

関係にある SK218 と同時期の遺物であるため、当該遺物は本来 SK218 の帰属である可能性も考えられる。出土遺物と遺構の切り合い関係から、遺構の年代は 15 世紀末葉から 16 世紀前葉に比定される。

第 149 図は SK214 からの出土遺物である。1024 は在地系のロクロ目土師器の皿であり、当該遺物が SK218 の帰属である可能性が考えられることはすでに記したとおりである。

SK218

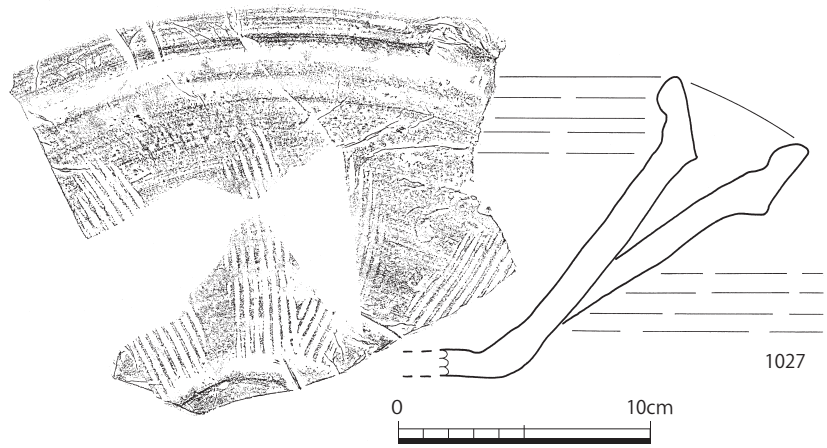
SK218 (写真図版 23) は J43 区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径 2.4 m、短径 1.8 m、深さ 30 cm である。周辺に位置する土坑 SK202・SK218 と切り合い関係を有し、すべての



第150図 SK218出土遺物①(1/3)



土坑から切られている。土層には暗褐色土と黄褐色土が交互に堆積している様子が観察され、炭化物の層が堆積している状況も確認される。また、一部で土坑の底を掘り返し



第151図 SK218出土遺物②(1/3)

一定期間  
開口していた  
廃棄土坑

ているような状況も認められた。一定期間、開口していた廃棄土坑であろう。出土遺物にはロクロ目土師器や備前焼播鉢がある。出土遺物から、遺構の年代は15世紀末葉から16世紀前葉に比定される。

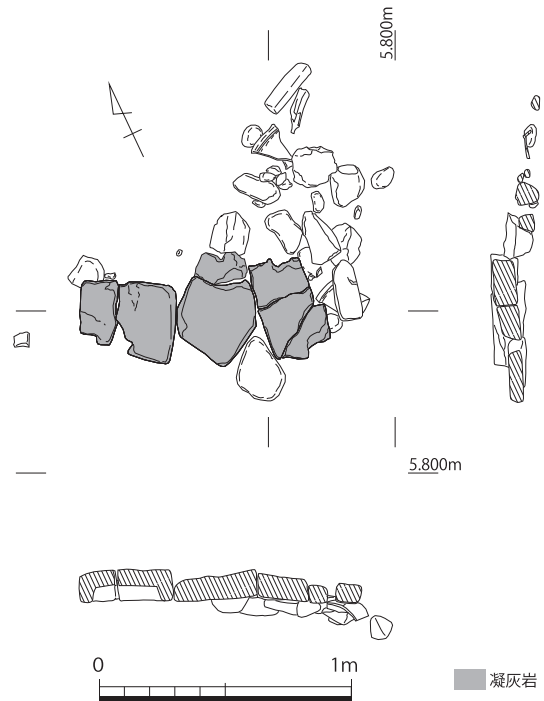
第150・151図はSK218からの出土遺物である。1025はロクロ目土師器の皿である。1026・1027は備前焼播鉢で、中世6期に分類される16世紀前葉を主体に生産された製品である。

### ③集石遺構など

#### SX025

SX025(第152図)はL47区に位置する集石遺構である。礫の分布する範囲は東西1.2m、南北1.35mで、凝灰岩製の4枚の平石を東西方向に並べ、東端部の平石の周辺に拳大から頭大の礫を配置している。凝灰岩の中には断面を「コ」の字状に加工し、石樋として用いられていたものもある。また、拳大から頭大の礫には被熱しているものも認められた。礫の間やその周辺から備前焼播鉢の大型破片や砥石などが出土している。出土遺物や層位的な所見より、遺構の時期は16世紀後葉から末葉に比定される。

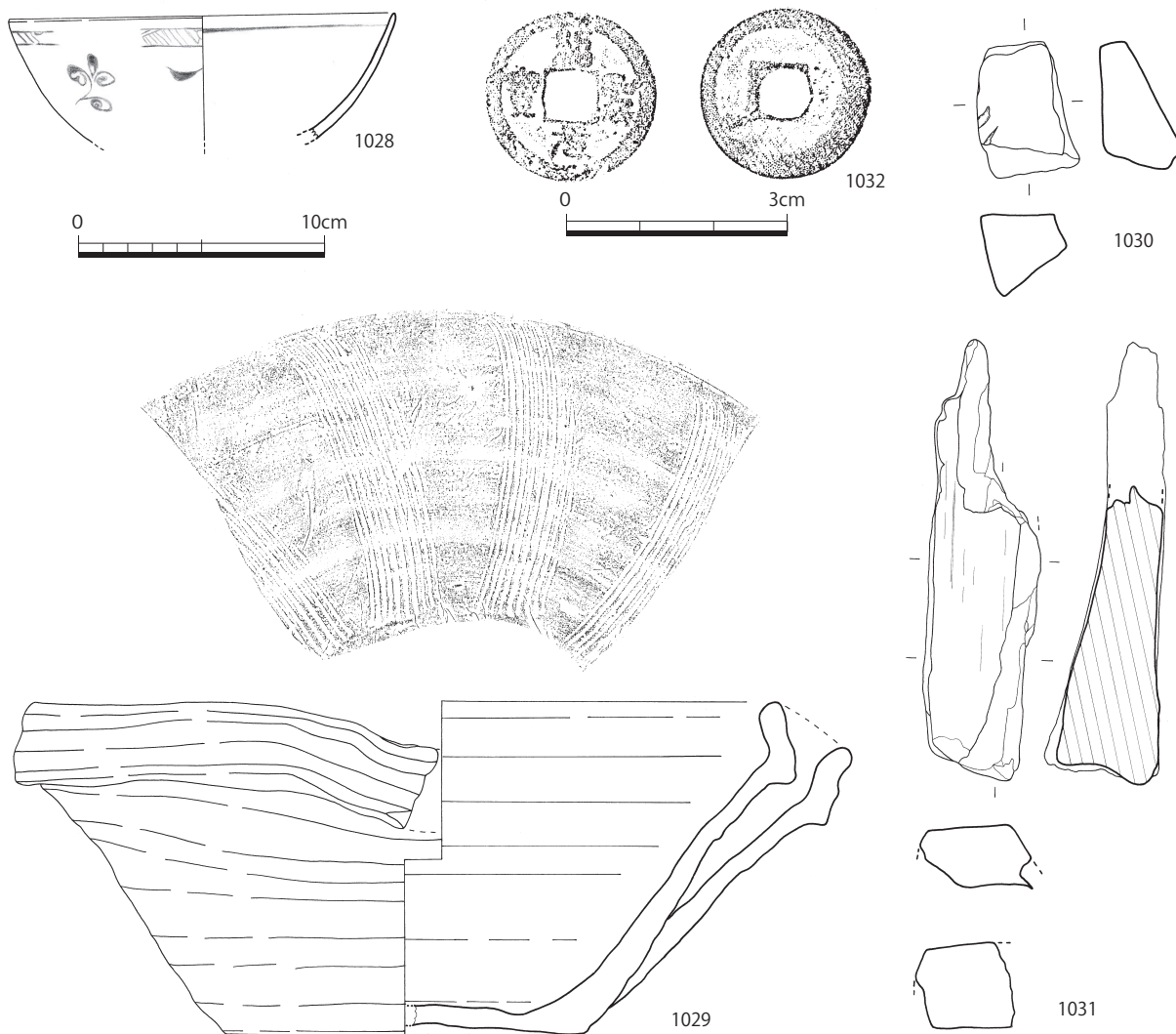
凝灰岩製の  
石樋



第152図 SX025実測図(1/30)

第152図はSX025からの出土遺物である。1028は中国漳州窯系青花碗である。1029は備前焼播鉢で16世紀前葉に比定される中世6期の製品である。

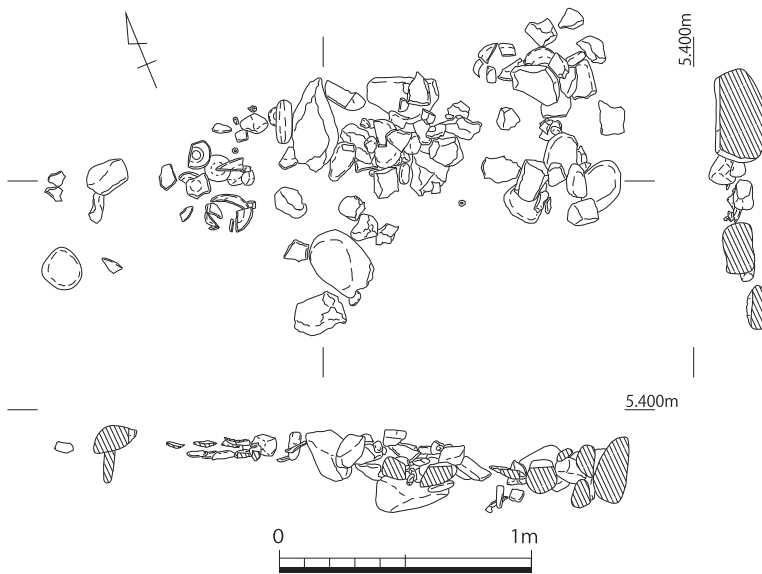
1030・1031は砥石、1032は初鑄造年1056年の北宋銭「紹聖元寶」である。



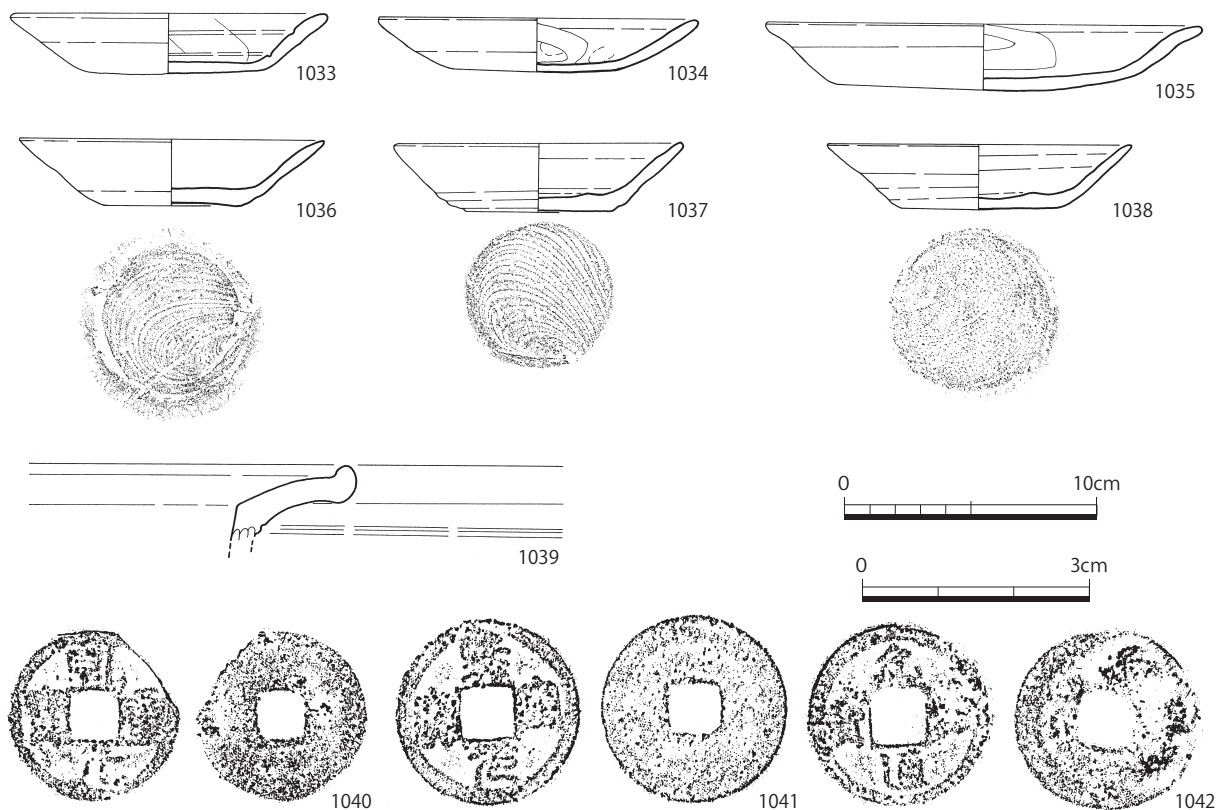
第153図 SX025出土遺物(1/3、1/1)

**SX015**

SX015（第154図）はL44区に位置する集石遺構である。東西約2.4m、南北約1.3mの範囲に拳大の礫や遺物が集中していた。出土遺物は薄手の京都系土師器や在地系の土師質土器がある。層位的な所見や出土遺物の年代観から、遺構の構築時期は16世紀前葉から中葉である。



第154図 SX015実測図(1/30)



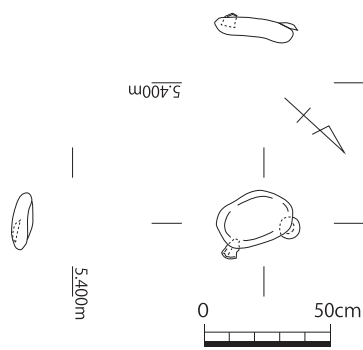
第155図 SX015出土遺物(1/3、1/1)

第155図はSX015からの出土遺物である。1033～1035は京都系土師器の皿である。いずれも器壁が薄く、古式の様相を呈しており、製作年代は16世紀前葉から中葉に比定される。1036～1038は色調が赤褐色を呈する在地系の土師質土器で、いわゆるロクロ目土師器であるが、内外面のロクロ目が目立たないもの(1036)もある。1039は瓦質土器火鉢の口縁部である。1040～1042は銅銭である。銭種などは遺物一覧表を参照されたい。

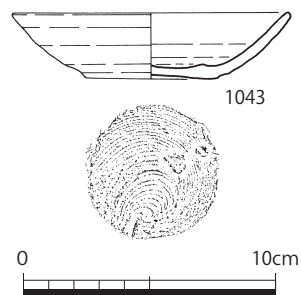
#### SX016

祭祀遺構？  
 SX016(第156図)はL44区に位置する遺構である。長径32cm、短径21cm、厚さ35cmのやや扁平な礫の下から、完形品のロクロ目土師器と備前焼播鉢の破片が出土した。遺構の状況から、何らかの祭祀的な遺構である可能性があるが、断定には至っていない。出土遺物の年代観から、遺構の年代は15世紀末葉から16世紀前葉に比定される。

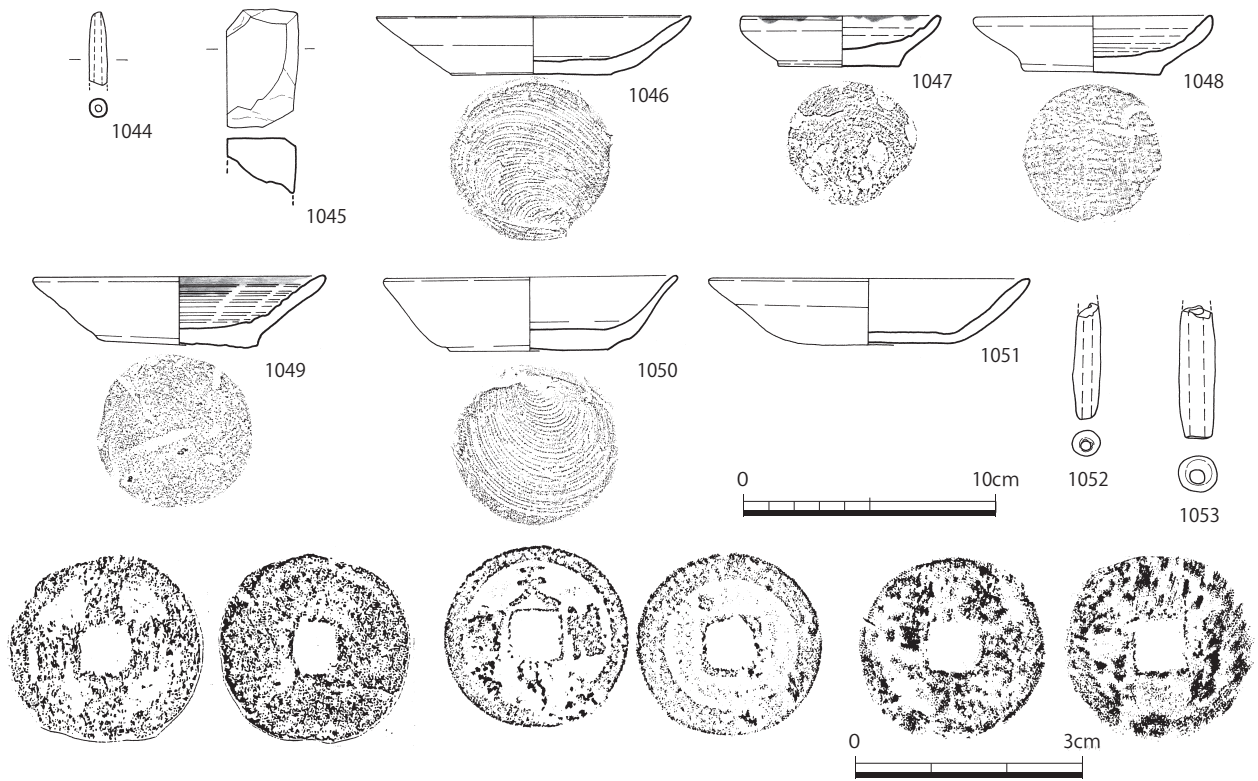
第157図はSX016の出土遺物である。1043はロクロ目土師器の皿で、完形に復元される。他に備前焼播鉢の破片が出土しているが、図示していない。



第156図 SX016実測図(1/30)



第157図 SX016出土遺物(1/3)



第158図 区域2 柱穴出土遺物(1/3、1/1)

④柱穴

第158図は、第2～3面に帰属する柱穴から出土した遺物である。

1044～1046はL44区に位置するSP199の遺物で、1044は管状土錘、1045は砥石、1046は土師質土器皿である。1046の土師質土器皿は底部に糸切り痕が認められるが、その形態から京都系土師器の模倣品と思われる資料である。

1047はL46区に位置するSP098の遺物で、ロクロ目土師器の皿である。柱穴の埋土上位から、完形の状態で出土した。口縁部にススの付着が認められる。1048・1049もロクロ目土師器の皿で、1048はL46区に位置するSP088、1049はL45区に位置するSP136の遺物である。1050はSP012から出土した土師質土器坏である。15世紀代の製品とみられることから、混入品であろう。柱穴は天正14年(1586)の焼土層の直下(第2面)で検出され、埋土には上位の焼土層に起因する焼土を多く含む。その他には図示していないが、朝鮮王朝産陶器舟徳利片が出土している。1051はL46区に位置するSP069の遺物で、器壁の薄い京都系土師器の皿である。なお、SP069はロクロ目土師器が出土する主体の土坑SK049に切られている。

1052・1053は管状土錘で1052はL44区に位置するSP156、1053はL43区に位置する土坑SP161の遺物である。なお、L44区の柱穴SP156は、町屋の柱穴列もしくは掘立柱建物を構成する柱穴のひとつと推定されるものである。

1054～1056は銅銭で、1054はL46区のSP073、1055は同じくL46区のSP103、1056はL44区のSP177からの出土遺物である。銭種などについては、巻末の遺物一覧表を参照されたい。なお、SP073はL46区に位置する礎石SX032aの直下から検出された柱穴である。



(5) 第4面の遺構群 (15世紀後葉以前)

①堀・溝

第1南北街路より下層で検出した堀・溝 (第160図)

第1南北街路からバックされる街路形成以前の遺構

L44～L46区に位置する第1南北街路を形成する班築状の整地層をすべて撤去すると、地山である黄褐色粘質土が現れる。この層の上面に構築された堀または溝が、SD091・SD095・SD119・SD123・SD146・SD174・SD590である。これらの遺構はすべて第1南北街路から完全にバックされており、いずれも街路が形成される以前の遺構であることが確認できている (第159図)。これらの堀・溝は15世紀代のもの (SD590・SD095・SD091・SD123・SD146) と14世紀代のもの (SD119・SD174) に大別できる。

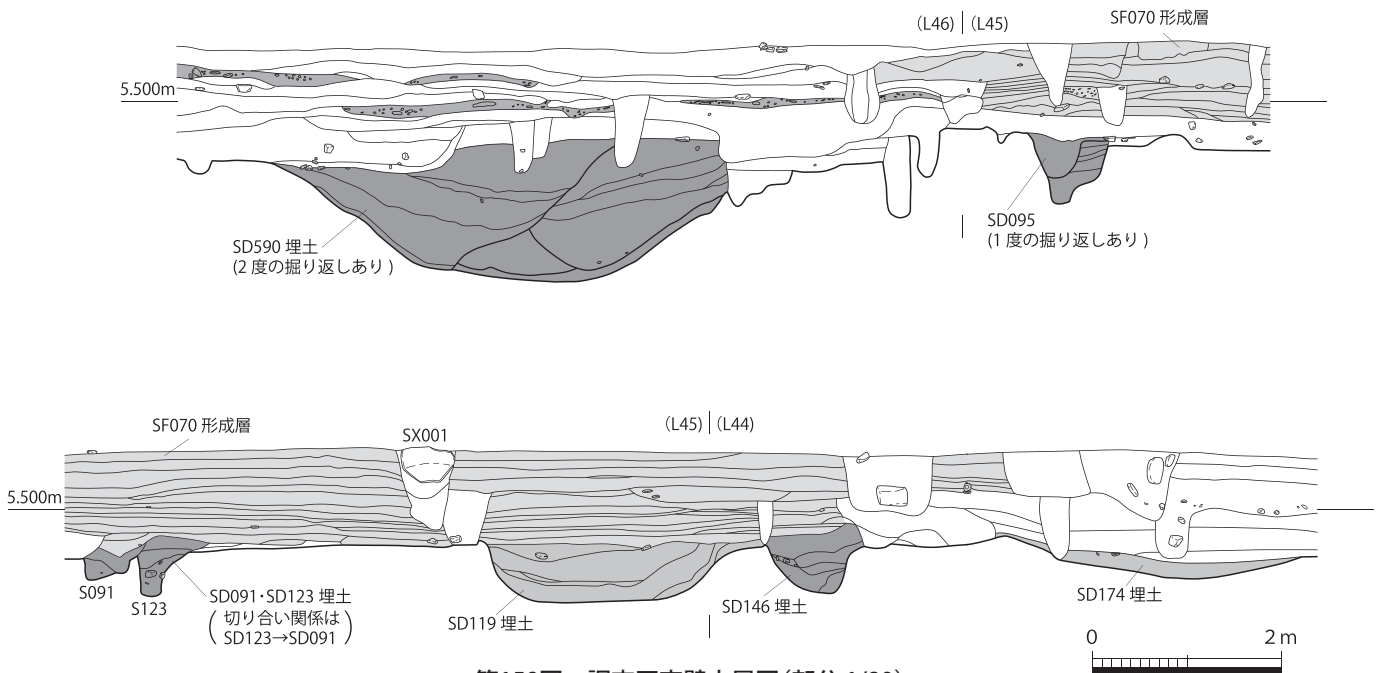
空堀

SD590はL46区に位置する大型の溝である。遺構の規模が大型であるため、溝というよりは、「堀」と呼称した方が妥当であろう。検出面での上面幅は4.8m、長さは3.7m、深さ1.4mで、第16次調査SD590と同一遺構である。土層断面の観察によると、少なくとも2回の掘り直しが認められる。また、埋土の一部に砂質土の流入が認められるものの、滞水を物語るような土層の堆積が認められないことから、当該遺構は「空堀」であったと判断できる。出土遺物から遺構の時期を判断するのは難しいが、遺物の中に白色系の土師質土器が認められることから、遺構の構築年代は15世紀代に比定される。

白色系の土師質土器

第161図はSD590の出土遺物である。1057～1060は土師質土器小皿、1061は坏である。このうち、1061は器壁が薄く、胎土の色調が白色を呈するため、周防地域で生産された白色系 (大内系) の土師質土器であろう。1062は備前焼の大甕の口縁部、1063～1065は管状土錘である。1066～1068は瓦質土器で、火鉢もしくは風炉である。1069は軒平瓦で、瓦当文様は巴文である。1070は磚で、表面に「十」字形の文様 (?) が認められるが、意図的なものかどうか明らかではない。

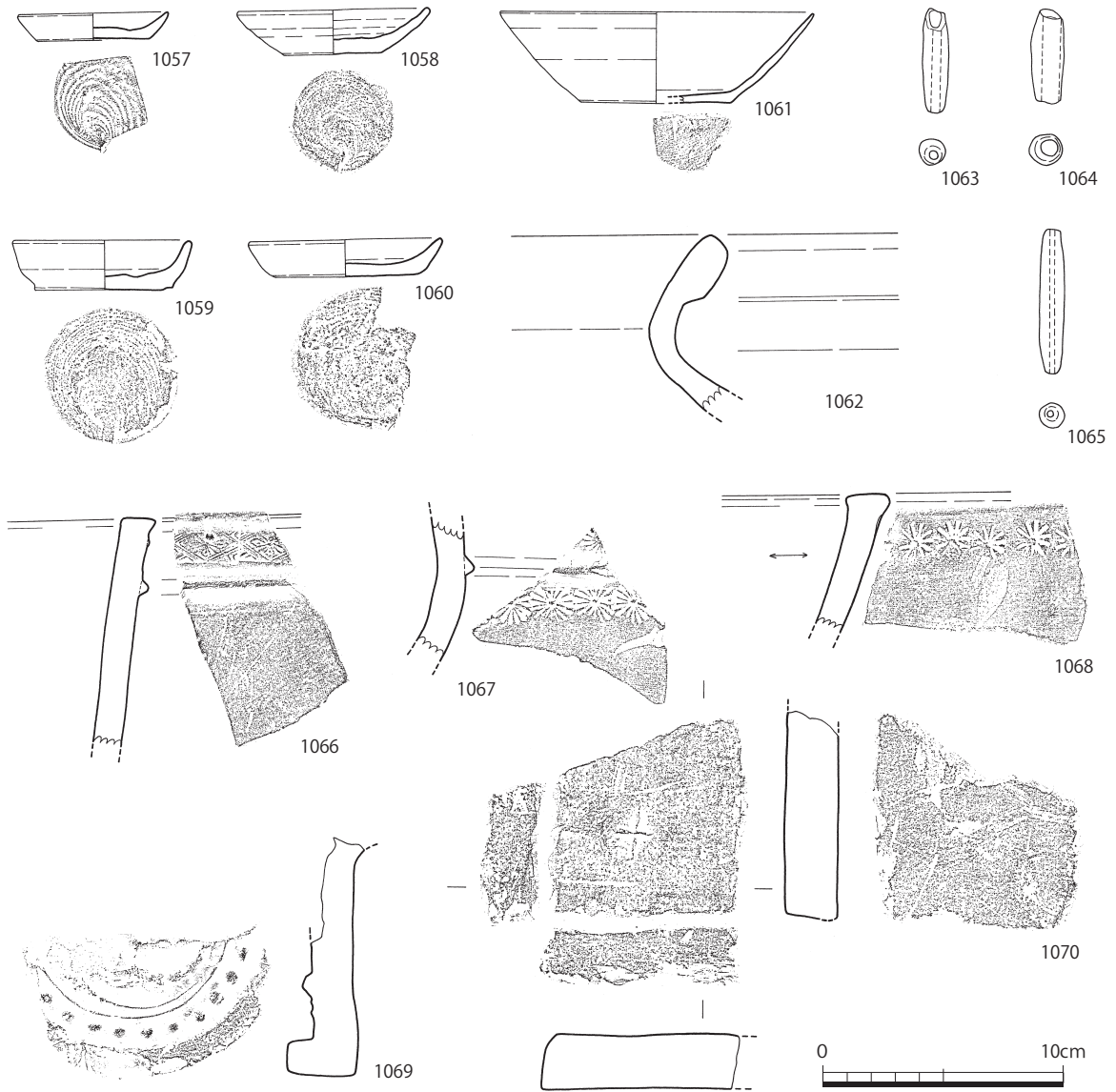
SD095はL45区に位置する溝である。溝の断面形態は逆台形状を呈する。検出面での上面幅は1.0m、長さは3.5m、深さ63cmで、第16次調査SD600と同一遺構である。土層断面の観察によると、少なくとも1回程度の掘り直しが行われた可能性が高い。出土遺物には青磁皿や瓦質土器・砥石などの他に、図示していないが、白色系の土師質土器の小破片が認められる。出土遺物の様相より、遺構の年代は15世紀代に比定される。



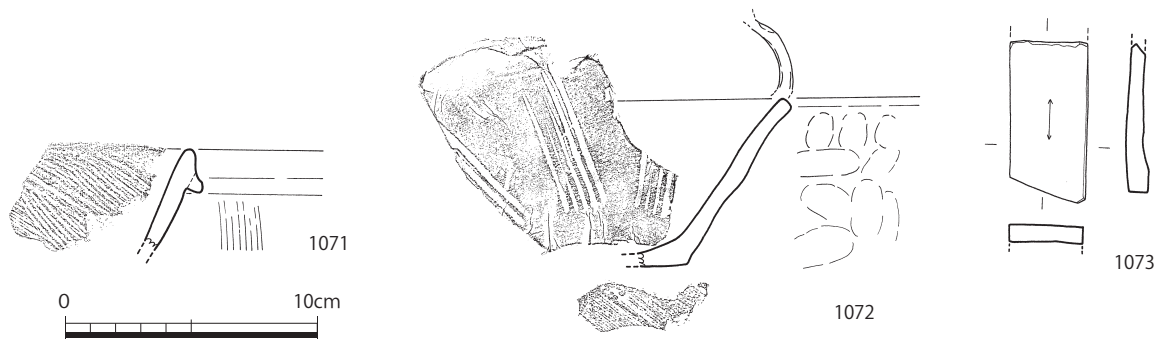
第159図 調査区南壁土層図(部分 1/80)





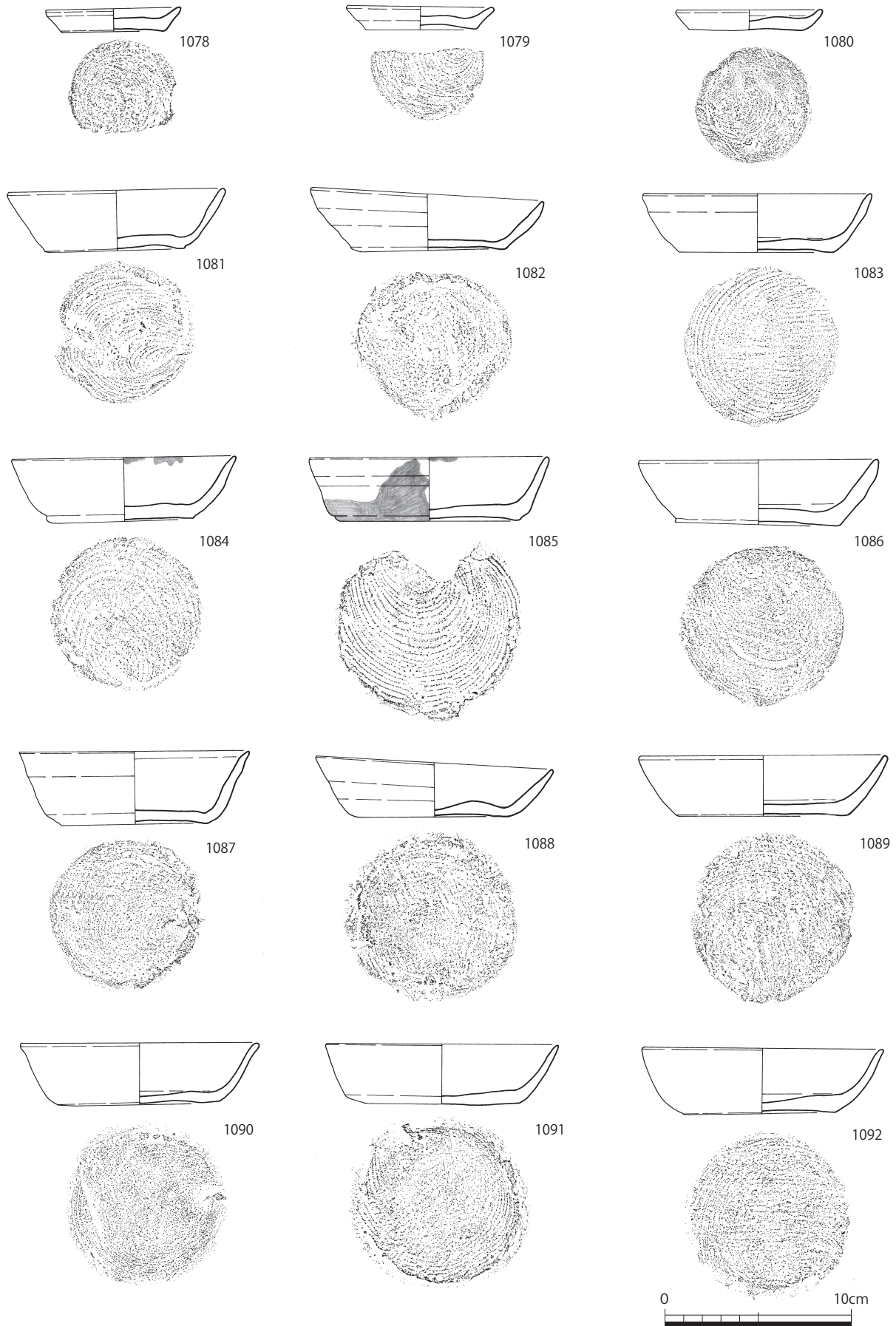


第161図 SD590出土遺物(1/3)



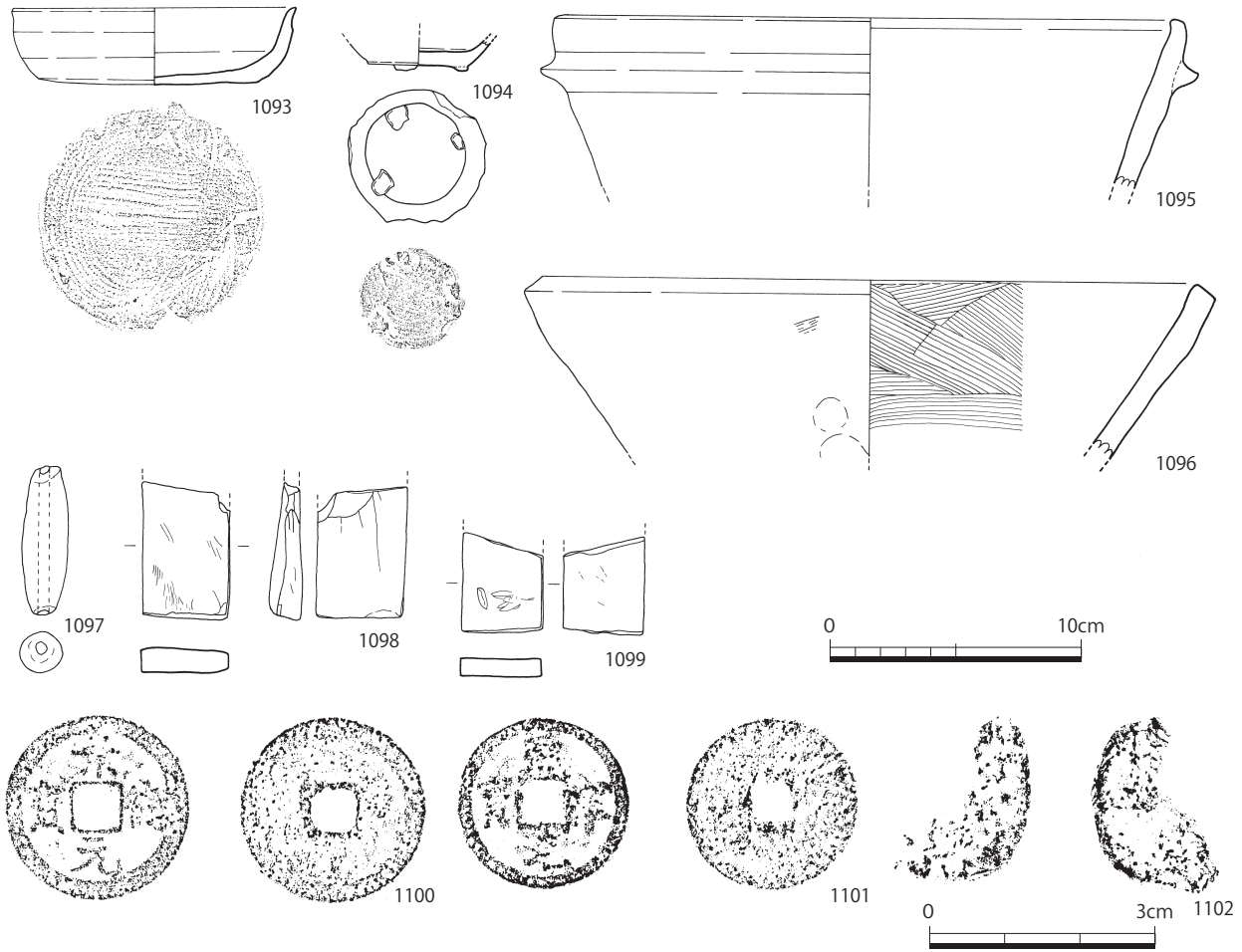
第162図 SD095出土遺物(1/3)





第165図 SD119出土遺物①(1/3)





第166図 SD119出土遺物②(1/3, 1/1)

SD119はL45区に位置する溝である。溝の断面形態はU字形を呈する。検出面での上面幅は2.5m、長さは3.1m、深さ70cmで、第16次調査SD597と同一遺構である。埋土中から土師質土器を主体として、瓦質土器や砥石、銅銭などが出土している。出土遺物は良好な一括資料と思われる。遺構の年代は14世紀後葉を主体とする時期であろう。

14世紀後葉の良好な一括資料

第165・166図はSD119の出土遺物である。1078～1080は土師質土器小皿で、口縁部の立ち上がりが低く、外側に開く器形を呈する。底部には回転糸切り痕が認められる。1081～1093は土師質土器坏で、一部は灯明皿として使用されている。体部が内湾気味に開く器形がほとんど(1081～1092)であるが、1093の体部はやや丸味を帯びたものとなる。いずれも底部に糸切り痕が認められる。1014は瀬戸美濃産の皿で、底部に重ね焼きの痕跡と糸切り痕が認められる。1095・1096は瓦質土器の鉢で、特に1095については口縁部の破片であるが、出土状況の写真(写真図版28)からも土師質土器などと確実に共伴していることが確認できる。1099は管状土錘、1098・1099は砥石である。1100～1102は銅銭である。銭種などは遺物一覧表を参照されたい。1100は初鑄造年1004年の北宋銭「景德元寶」、1101は1068年の北宋銭「熙寧元寶」、1102は不明である。

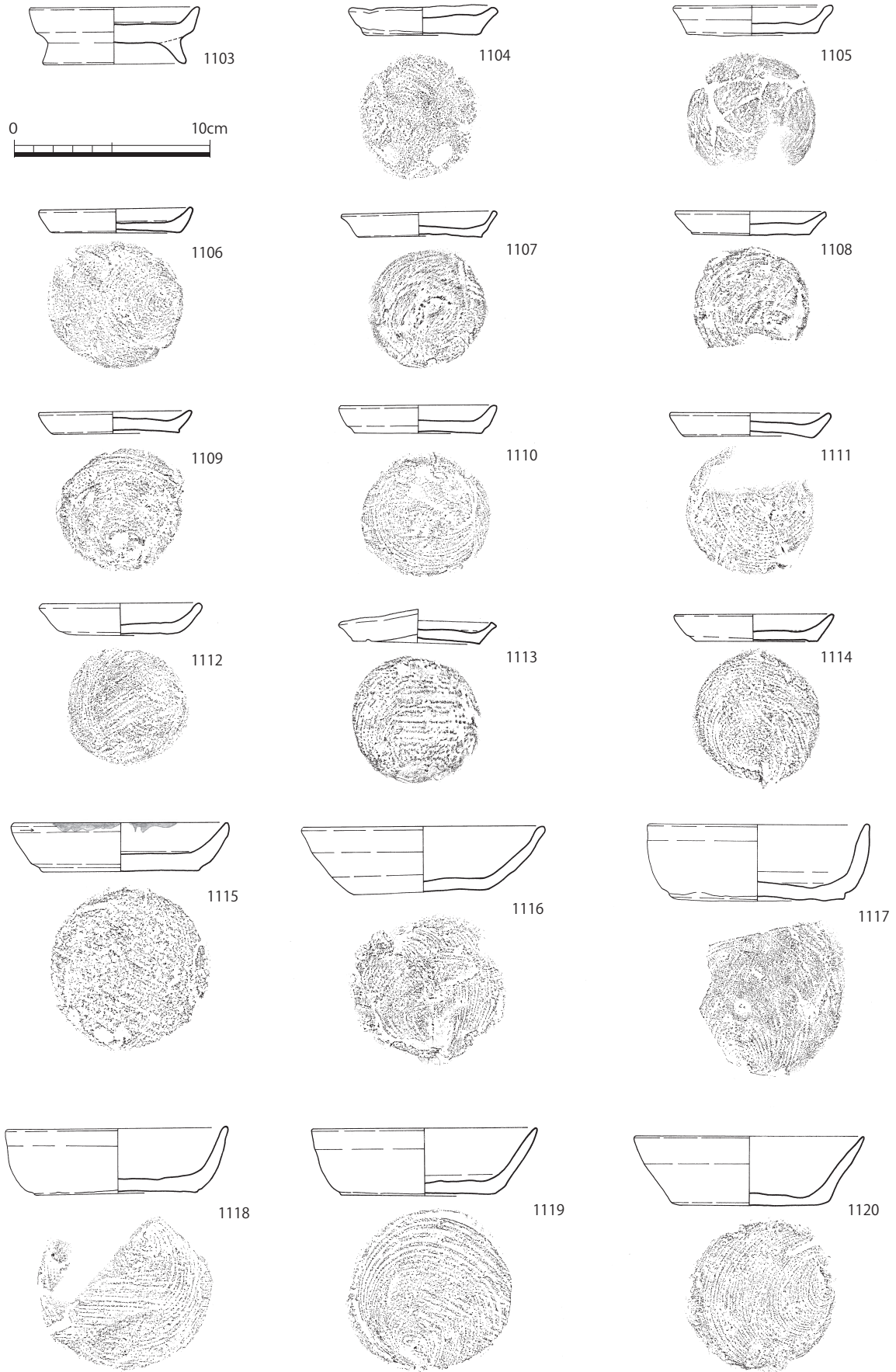
SD174はL44区に位置する溝である。溝の断面形態はU字形を呈する。検出面での上面幅は2.4m、長さは3.8m、深さ30cmで、第16次調査SD565と同一遺構である。埋土中から多量の土師質土器などが出土しており、これらについても良好な一括資料であるといえる。出土遺物の年代観から、遺構の年代も14世紀後葉に比定できる。

14世紀後葉の良好な一括資料

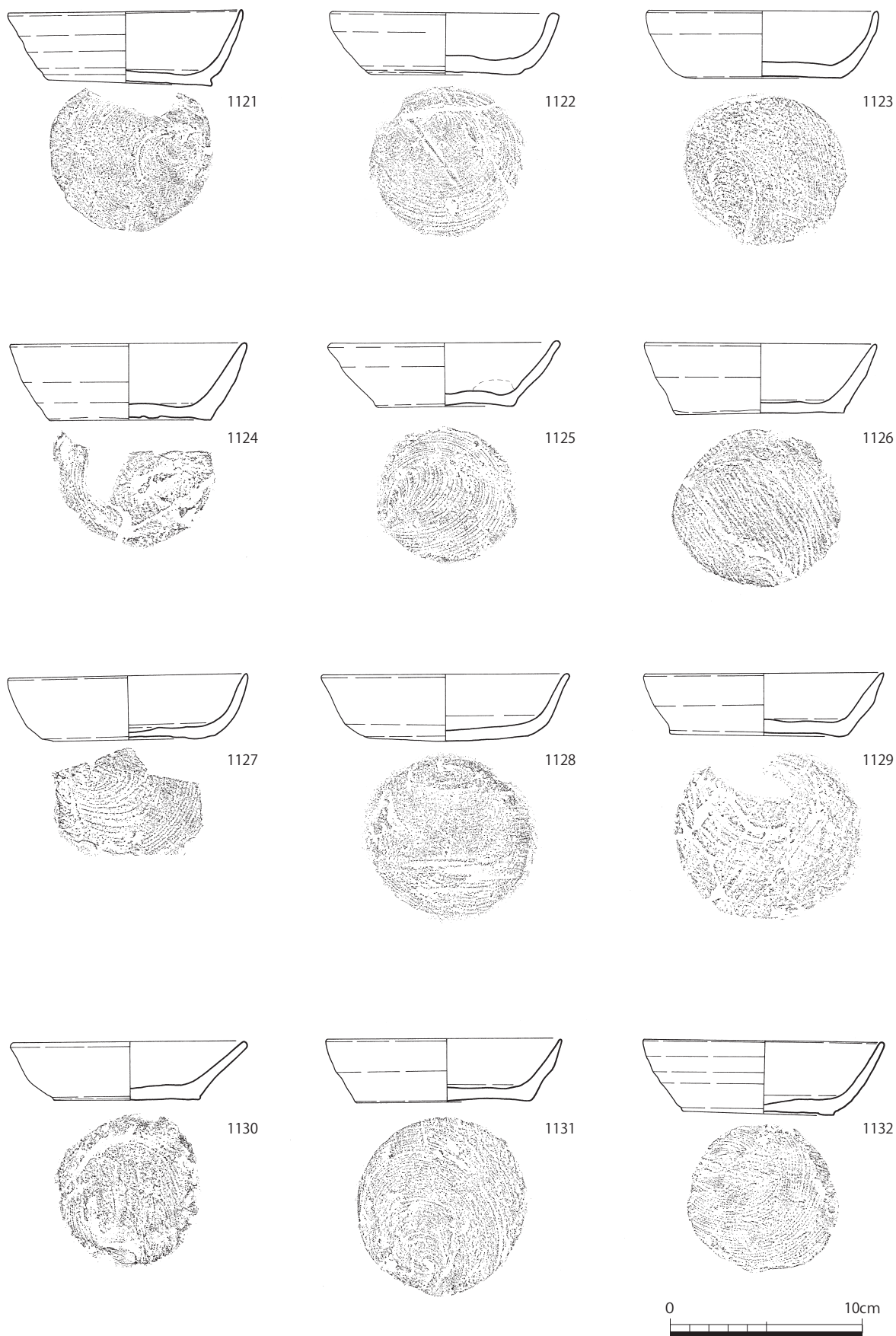
第167～171図はSD174の出土遺物である。1103は托形を呈する土師質土器燭台である。通常この種の燭台には底部に貫通孔があるが、この個体にはそれが認められない。この型式の燭台が

托形の土師質土器燭台

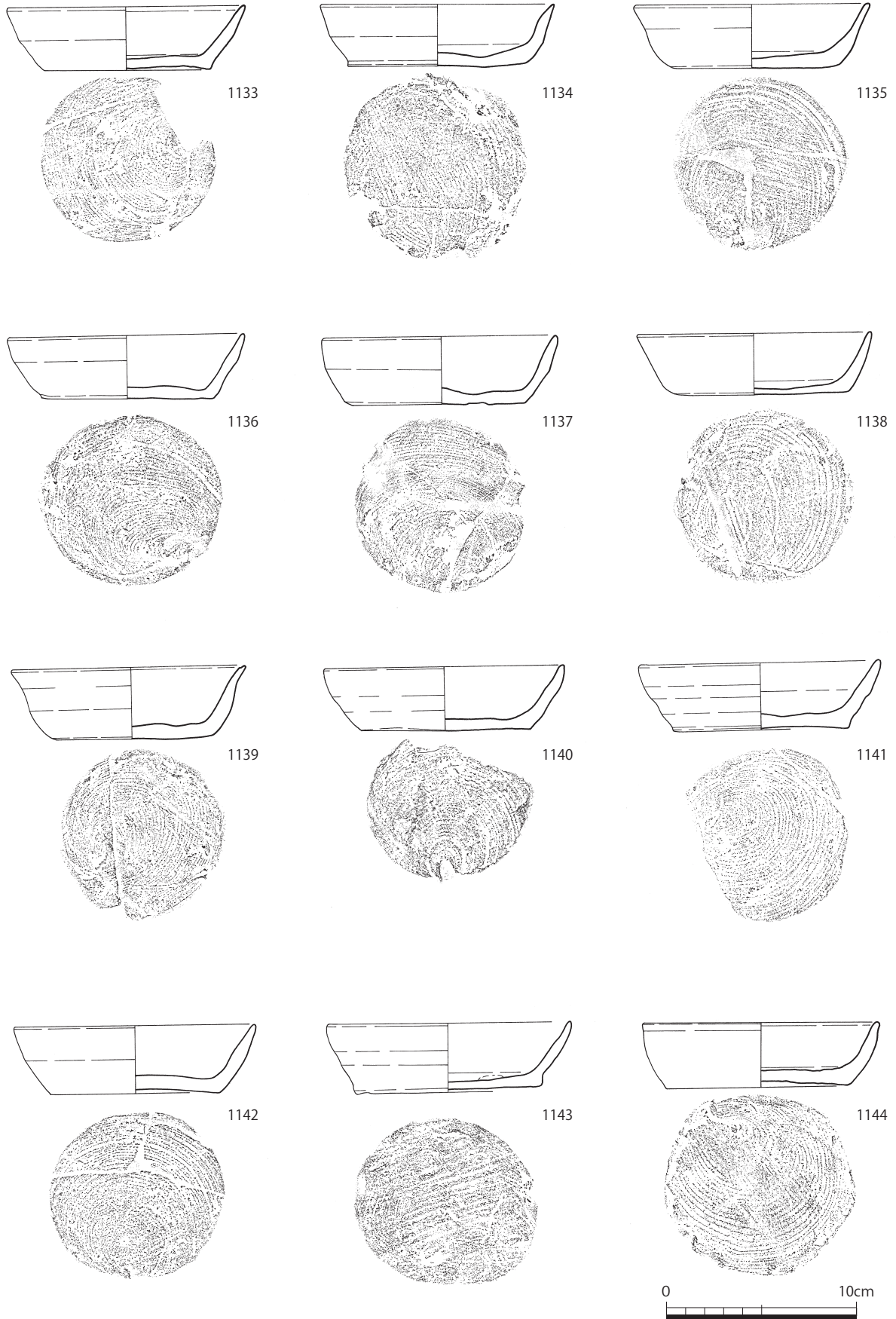




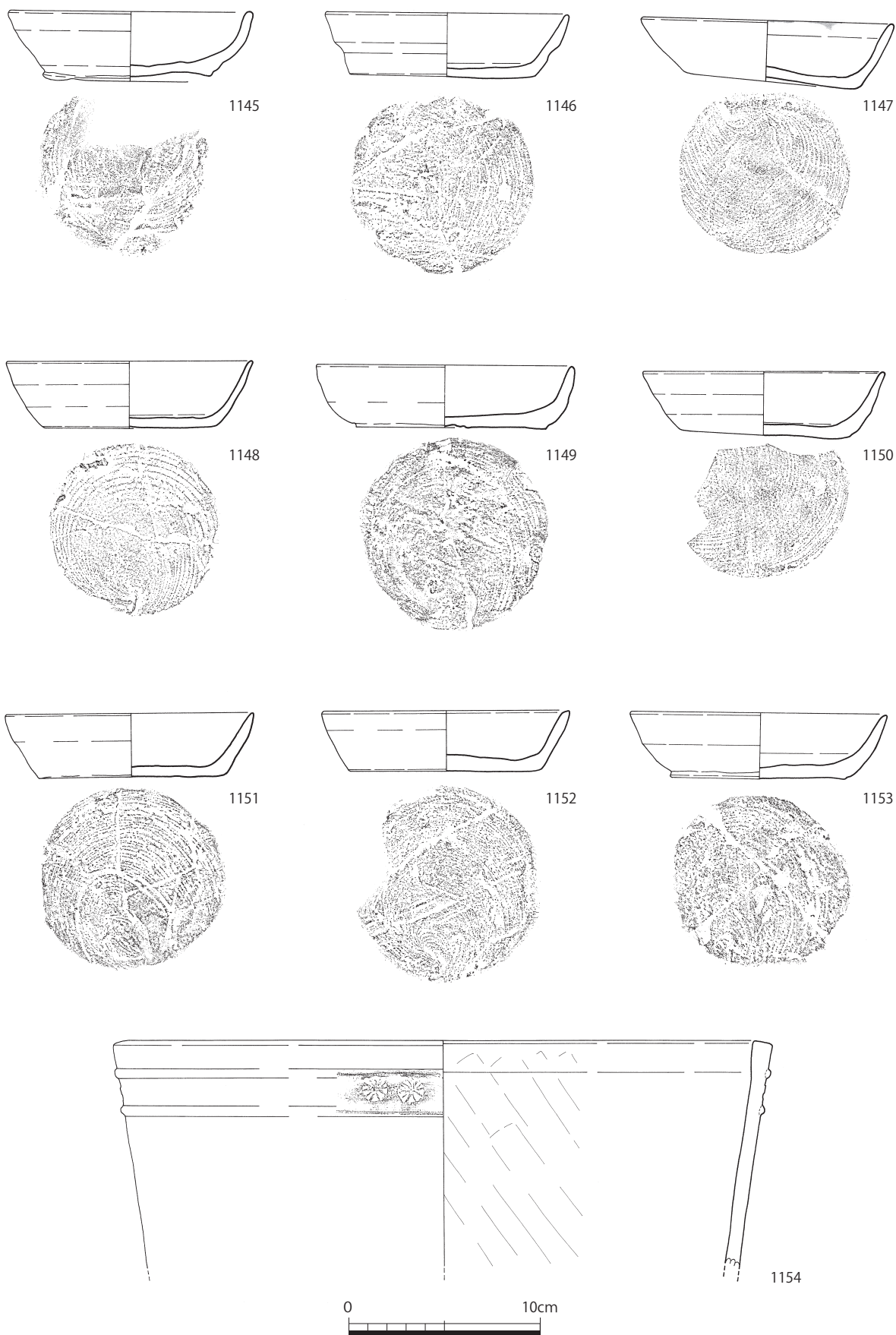
第167図 SD174出土遺物①(1/3)



第168図 SD174出土遺物②(1/3)

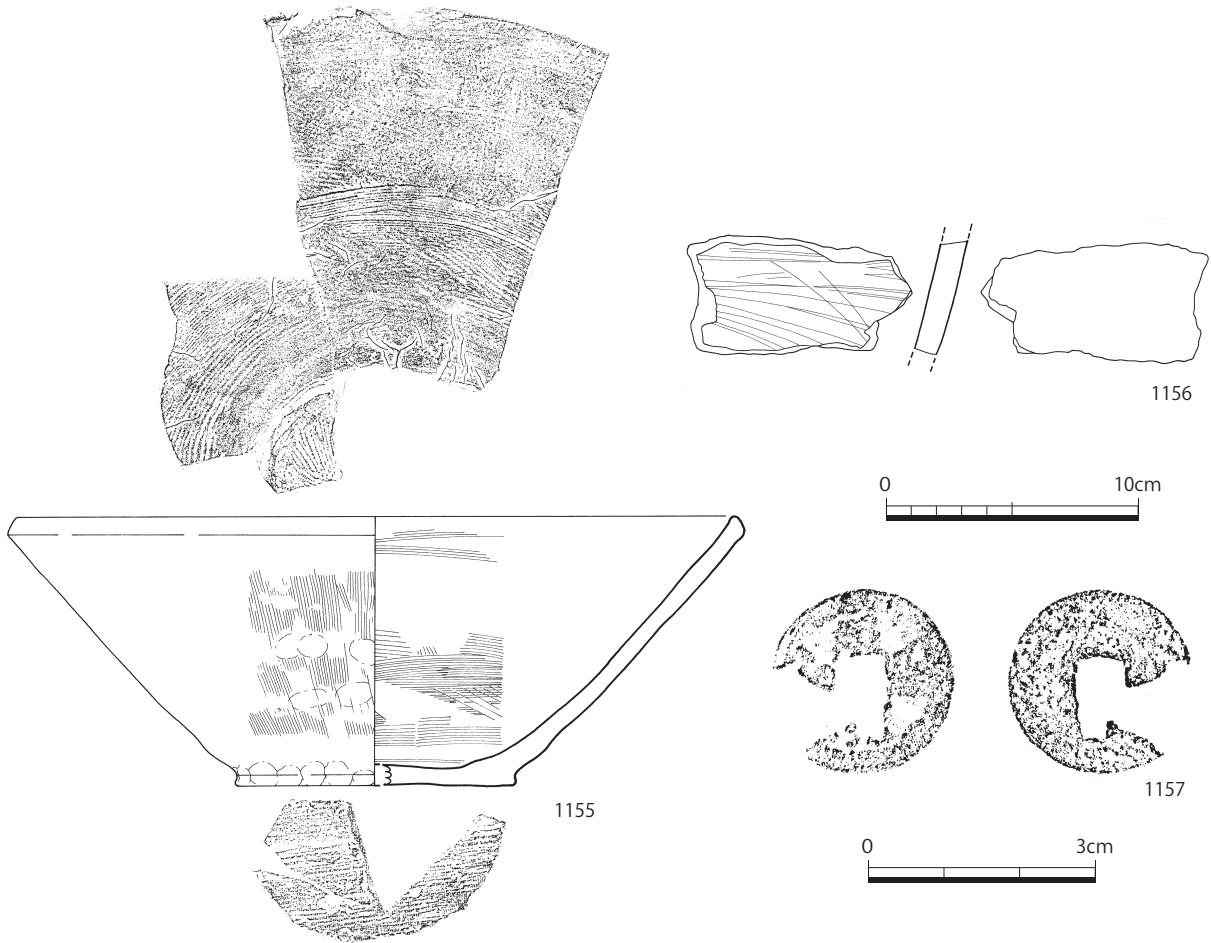


第169図 SD174出土遺物③(1/3)



第170図 SD174出土遺物④(1/3)





第171図 SD174出土遺物⑤(1/3,1/1)

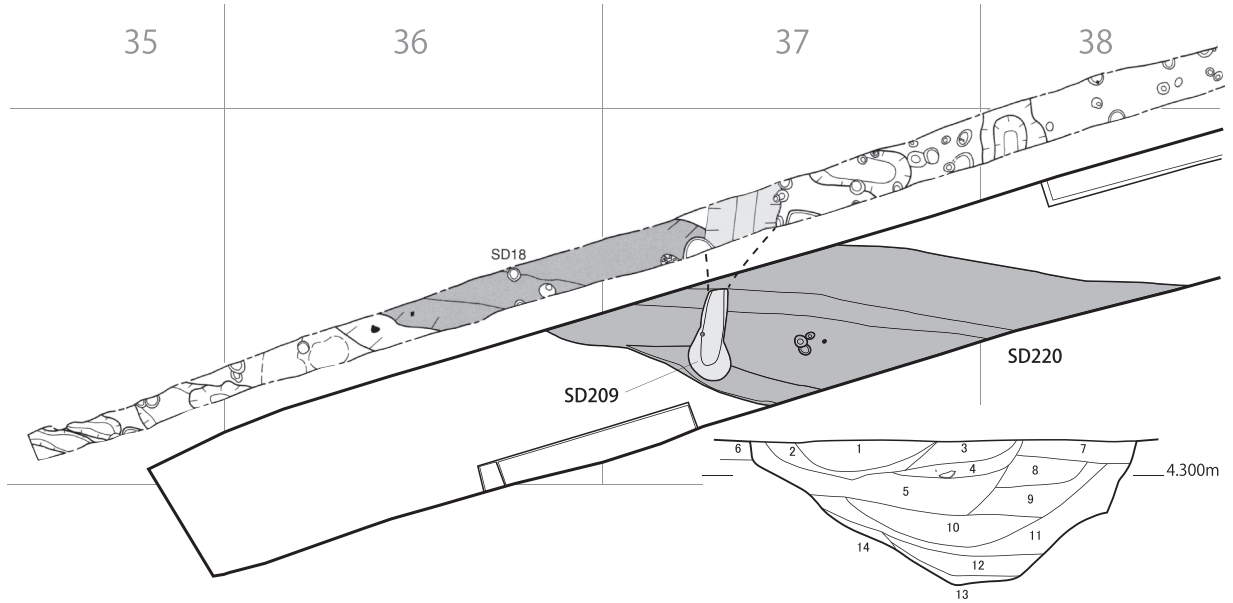
他の土師質土器の小皿や坏と共存していることに注意を払っておきたい。1104～1114は土師質土器小皿で、口縁部の立ち上がりが低く、外側に開く器形を呈する。底部には回転糸切り痕や板状圧痕が認められる。1115～1153は土師質土器坏で、口縁部の形態など、器形の細部に若干のバリエーションがみられる。底部には回転糸切り痕や板状圧痕が認められる。1154は瓦質土器火鉢で、口縁部外面に2条の突帯を巡らし、突帯間に菊花文の刻印（スタンプ文）を施文する。1155は瓦質土器鉢で、内外面と底部にハケメ状の調整痕が認められる。破片ではあるが、出土状況の写真（写真図版28）などから、他の土師質土器と確実に共存したことがわかる資料である。1156は滑石製石鍋の胴部破片、1157は初鑄造年1094年の北宋銭「紹聖元寶」である。

#### SD220

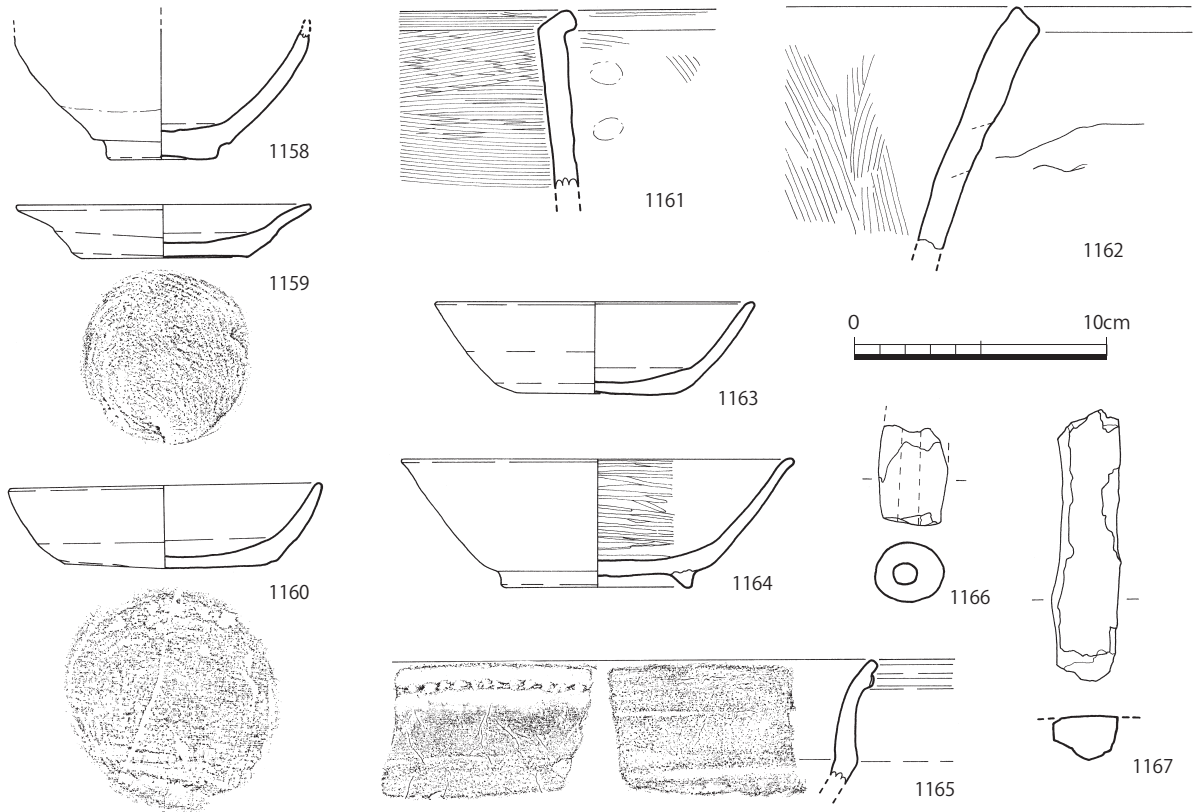
SD220（第172図）はL46区に位置する大型の溝である。遺構の規模が大型であるため、溝というよりは、「堀」と呼称した方が妥当である。検出面での上面幅は4.8m、長さは6.5m、深さ1.55mで、第16次調査SD18と同一遺構である。遺構検出時には気づかなかったが、埋土の掘り下げ中に南北方向の溝SD209（15世紀末葉～16世紀前葉）が切り合っていることが判明し、SD220はSD209に切られていることがわかった。遺構の構築順序は、SD220→SD209である。SD220の土層断面の観察によると、数度にわたる掘り直しの痕跡が認められ、そのたびに堀の深さを減じているような状況がうかがえる。また、埋土の一部に砂質土の流入が認められるものの、滞水を物語るような土層の堆積が認められないことから、当該遺構は「空堀」であったと判断できる。詳細

空堀





第172図 SD220実測図(遺構図は1/200、土層図は1/80)



第173図 SD220出土遺物(1/3)

な構築時期を決める遺物は少ないが、その年代を 14～15 世紀代に比定しておきたい。

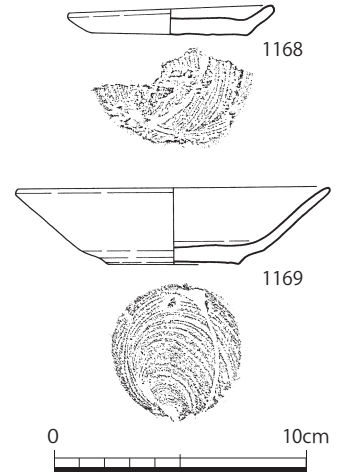
第 173 図は SD220 の出土遺物である。1158 は中国産の天目碗と推定される陶器碗である。1159・1160 は土師質土器坏で、底部に糸切り痕が認められる。1161・1162 は瓦質土器の口縁部である。1163・1164 は 9～10 世紀代に比定される古代の土師器で、1163 は坏、1164 は碗である。1165 は縄文時代晩期末の刻目突帯文土器である。1163～1165 は混入品である。1166 は孔径がやや大きい管状土錘、1167 は砂岩系の石材を使用した砥石である。

②土坑

SK215

SK215はI43・J43区に位置する土坑である。土坑の平面形態は略楕円形で、その規模は長径1.4m、短径0.8m、深さ30cmである。14世紀前葉に比定される土坑SK233および15世紀代と推定される土坑SK217を切って構築されている。埋土中から遺物が出土しているが、14世紀代の土師質土器小皿と15世紀代と推定される坏が出土しており、いずれかが混入品と思われるため、どちらを時期判定の基準とすべきか悩ましいところである。従って、遺構の時期については、14～15世紀に比定するに留めておきたい。

第174図はSK214からの出土遺物である。1168は土師質土器の小皿、1169は坏である。



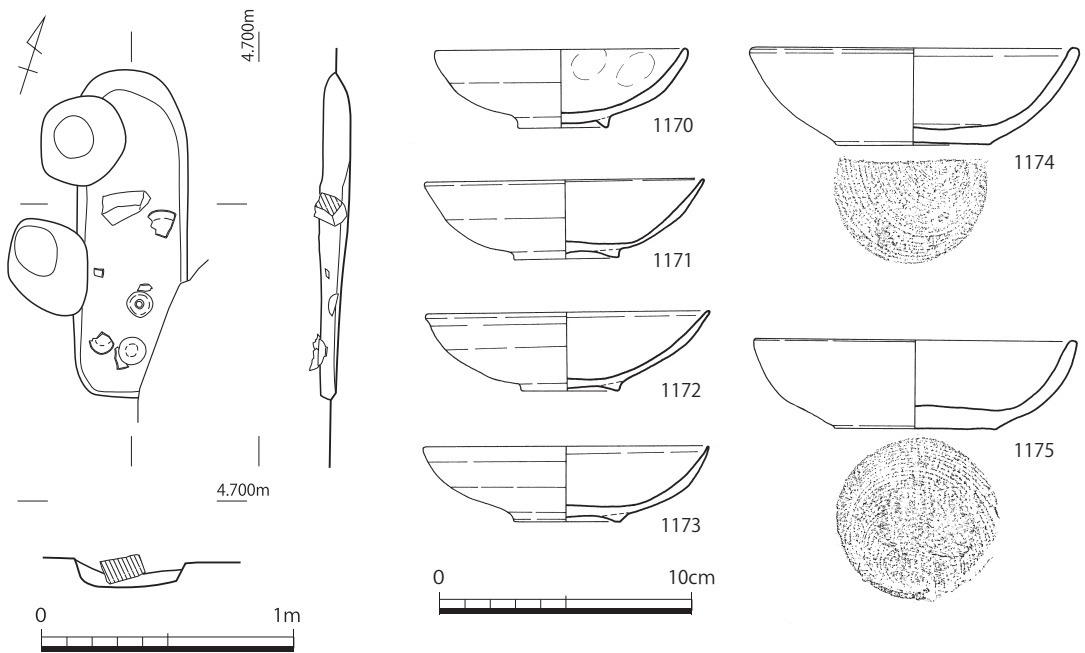
第174図  
SK215出土遺物(1/3)

SK233

SK233(第175図)はL43・K43区に位置する小型の土坑である。土坑の平面形態は長楕円形で、その規模は長辺1.3m、短辺0.4m、深さ10cmである。南東隅を土坑SK215の構築によって切られているほか、遺構西辺の一部を柱穴2基によって破壊されている。床面近くから土器類、床面よりやや浮いた状態で被熱した礫1個が出土した。土器類には吉備系土師器碗と在地系土師質土器の坏が認められ、両者が良好な状態で共伴した資料である。層位的な所見と出土遺物より、遺構の年代は14世紀前葉に比定される。

第176図はSK233からの出土遺物である。1170～1173は吉備系土師器碗で、いずれも高台部が退化する型式に相当する。14世紀前葉に比定される。1174・1175は在地系土師質土器の坏である。体部の立ち上がりが丸味を帯びた特徴的な型式に相当し、これらも14世紀初頭から前葉に比定される資料である。他に銅銭の破片があるが、錆出が著しく銭文を判読できないため図示していない。

吉備系  
土師器碗  
と在地系  
土師質  
土器坏が  
共伴



第175図 SK233実測図(1/30)

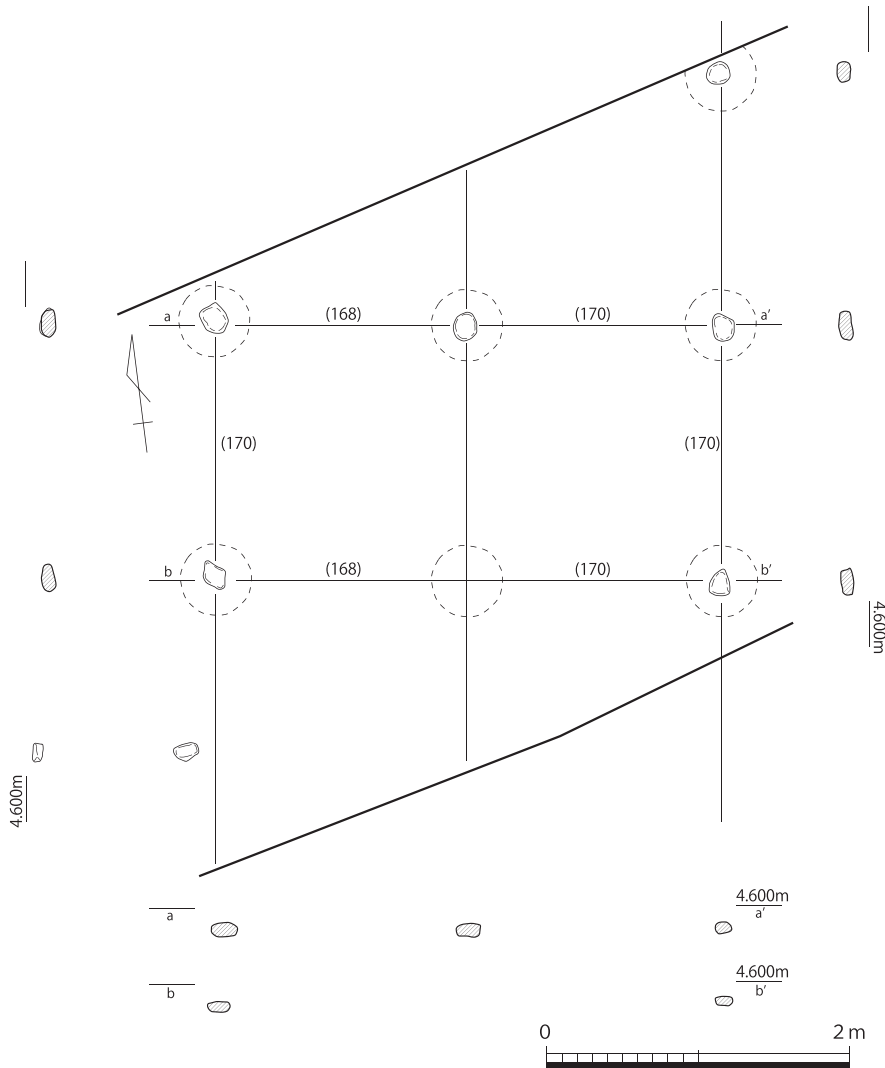
第176図 SK233出土遺物(1/3)

③掘立柱（柱穴内礎石）建物

L42・K42区を掘り下げ中に、地山である黄褐色粘質土もしくは灰褐色砂質土で、頭大の河原礫が規則的に並んでいる遺構を確認した。河原礫の周囲には土壌の変化を認めることはできなかったが、河原礫の状況から、これらは柱穴内に据えられた礎盤石（柱穴内礎石）であることが推定された。柱穴掘形の掘り込み面を確認していないため、これらは第3面以上の遺構面から掘り込まれた遺構である可能性も想定できるが、検出された遺構面を重視して、ここでは第4面に構築された掘立柱建物と解釈しておきたい。

第177図は掘立柱建物遺構SB234である。上記のように、柱穴内に据えられていたと推定される礎盤石（柱穴内礎石）のみを確認した。礎盤石は総計7個を検出し、その配置から南北方向に長い建物であり、梁行3間以上・桁間2間の規模になると推定される。柱間の寸法は約170cmを基本とする。なお、建物の主軸方向は、第1南北街路の下層で検出された溝遺構の主軸と一致する。ちなみに、第16次調査では対応する礎盤石は検出されていないようである。SB234に伴う出土遺物が認められないことから、遺構の詳細な構築年代は不明であるが、層位的な所見から、遺構の年代を14～15世紀に比定しておきたい。

礎盤石  
（柱穴内  
礎石）



第177図 SB234実測図(1/50)

(6) 遺構に伴わない遺物(包含層・整地層)

この項目では、包含層や整理層中から出土した遺物を報告する。第96次調査区域2では調査区が東西に細長いものであることと整地層が必ずしも各小区に渡って均等に堆積していなかったことから、出土遺物を層位毎に明確に分けて取り上げることができなかった。従って、以下では①第1南北街路より東側の地点で出土した遺物、②第1南北街路より西側の地点で出土した遺物、③御所小路付近で出土した遺物、④廃土中や壁面など出土地点が特定できない遺物の順で、報告を行うこととしたい。なお、個々の遺物の出土地点については、遺物一覧表を参照されたい。

第1南北街路より東側の地点で出土した遺物

第178～180図は、第1南北街路より東側の地点で出土した遺物である。

1176は景德鎮系青花で、小野分類B1群青花皿である。1177～1179・1183・1184は中国産の青磁で、いずれも15世紀代の製品である。1180は中国産の焼締陶器壺である。1181は磁州窯系陶器壺の胴部破片で、外面に鉄絵文様が認められる。1182は見込みと高台周辺が露胎となる中国南部産の白磁皿である。1185は備前焼播鉢、1186は備前焼の鉢である。1187は手捏ね整形による土師質土器の小皿、あるいは焼塩壺の蓋である。1188は京都系土師器皿で、16世紀後葉から末葉の製品。1189・1190は胎土が赤褐色を呈する在地系の土師質土器で、15世紀代の製品であろう。1191は土師質土器燭台で、底部に糸切り痕が認められる。

1192は灯明皿の付属品として使用された土師質土器の灯芯押さえで、表面の一部にススの痕跡が認められる。1193・1194は土鈴、1195・1196は管状土錘である。

ガラス小玉

1197～1201はガラス小玉である。個々の出土地点はL46・L47区に渡っているが、L46区にガラス小玉112個(第118図)がまとまって出土した地点があることに関連する遺物である可能性が考えられる。

繭形分銅  
1両  
(≒37.5g)

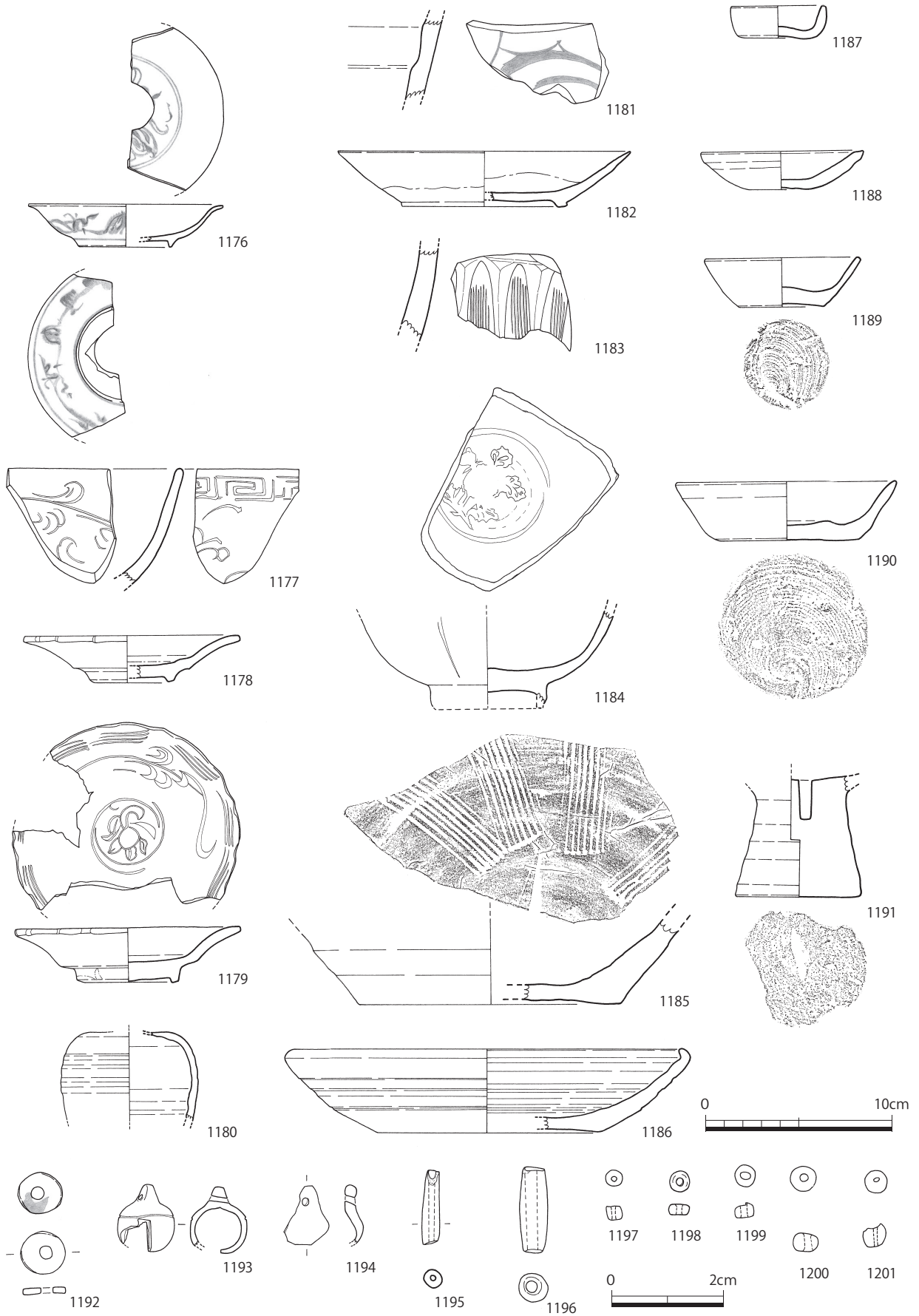
1202～1204は金属製品で、1202は用途不明、1203は小柄、1204は繭形分銅である。1204の繭形分銅の本体は青銅製で、端面の一部には重さを調節するために流し込まれた鉛の栓がみられる。表面にはタガネ彫りによる「壹両」の文字が刻まれており、重さが現状での重さは37.0gを測る。文字の標記と重量は矛盾せず、1両(≒37.5g)の規格の繭形分銅であることがわかる。30は滑石製石鍋の口縁部、1206は軽石製の沈子、1207は和泉砂岩製の茶臼、1208～1210は砂岩系の石材を素材とした砥石である。1211～1240は銅銭で、1234のような無文銭銭が出土していることに注意を払っておきたい。なお、個々の遺物の銭種などは遺物一覧表を参照されたい。

第1南北街路より西側の地点で出土した遺物

第181～186図は、第1南北街路より西側の地点で出土した遺物である。

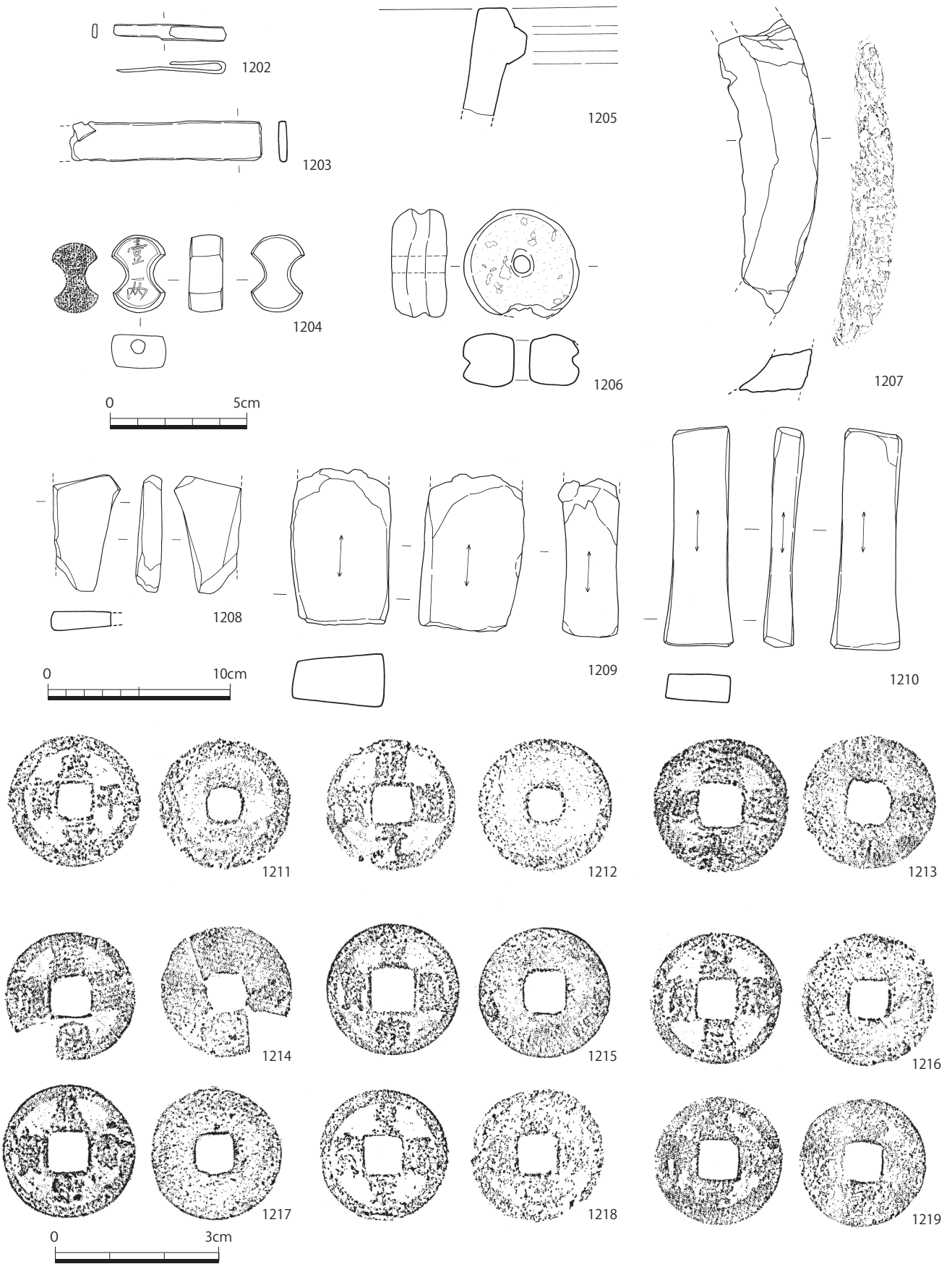
1241～1243は景德鎮系青花で、1241・1242はB1群青花皿、1243はE群青花皿である。1242の見込みには「寿」の文字が呉須で描かれている。1244・1245は見込みと高台付近が露胎となる白磁皿で、中国南部産の製品である。1245の見込みにはヘラ記号が認められる。1245は中国産の天目茶碗で、外面の黒褐色には「禾目天目」に似たような細かな文様がみられる。1247は中国南部産の黒褐釉陶器灯明皿で、内面に黒褐釉が施され、外面は露胎となる。1248は器種不明であるが、華南三彩の口縁部である。1249～1251は瀬戸美濃産の陶器で、1249は大窯3期の皿、1250は古瀬戸中期様式の梅瓶の胴部破片、1251は水滴である。1253～1255は備前焼で、1252は瓶または徳利、1253は小壺、1254は鉢、1255は大甕の底部である。1253については茶入として使用された可能性も考えられるが、断定できない。底部外面にヘラ記号が認められる。

1626～1276は土師質土器・瓦質土器である。1256・1257は小皿もしくは焼塩壺の蓋、1258～1261は京都系土師器皿、1263～1268・1270～1272・1275～1277は在地系の皿または坏、1269は燭台の底部、1273・1274は吉備系土師器碗である。なお、1275～1277のような体部が丸味を帯びる土師質土器の坏は、1273・1274のような吉備系土師器碗と共伴することが近年の調査で確認されてきており、製作年外を14世紀前葉頃に比定できることが確実視されている。

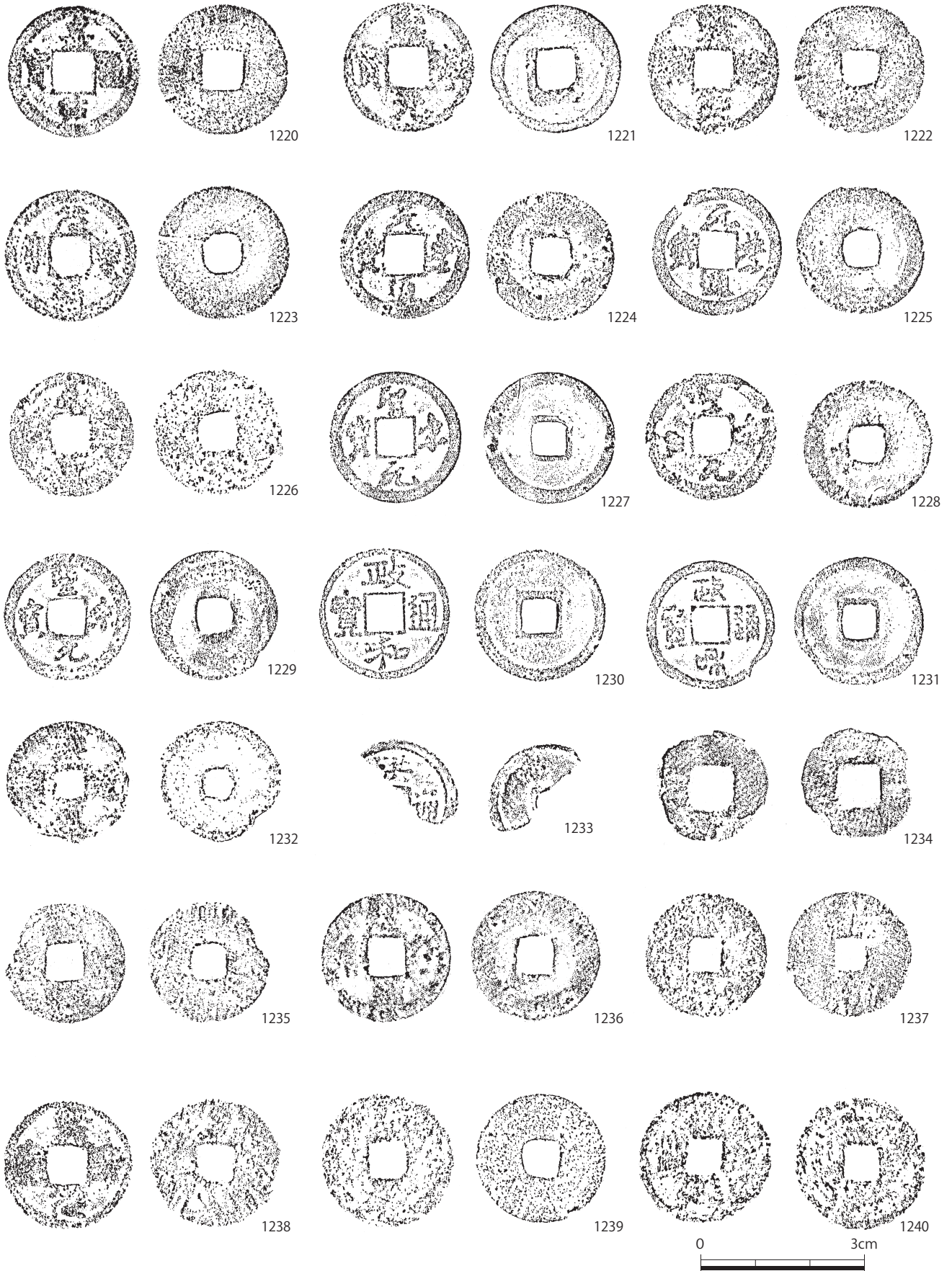


第178図 区域2・遺構に伴わない遺物(第1南北街路より東①)(1/3、1/1)

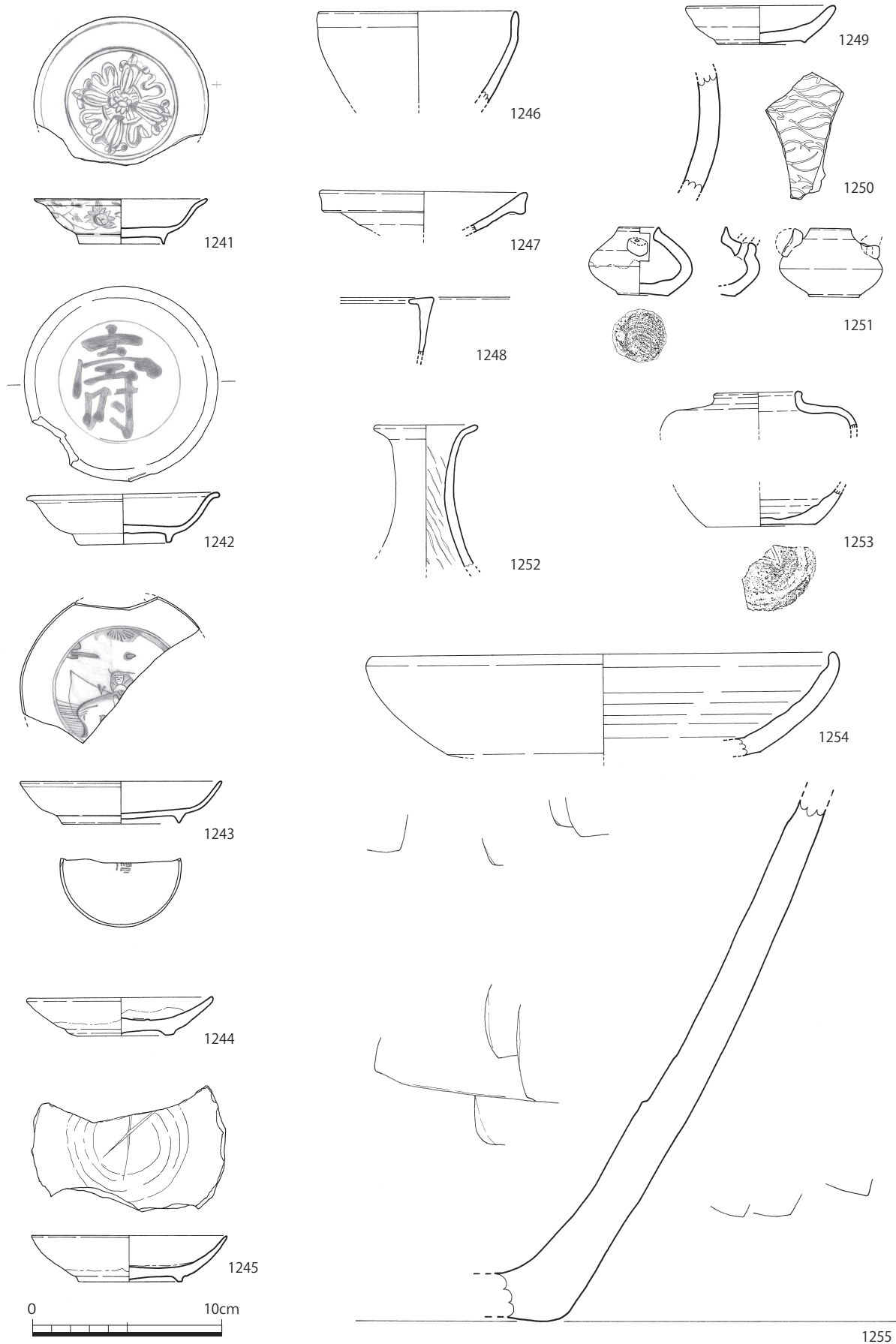




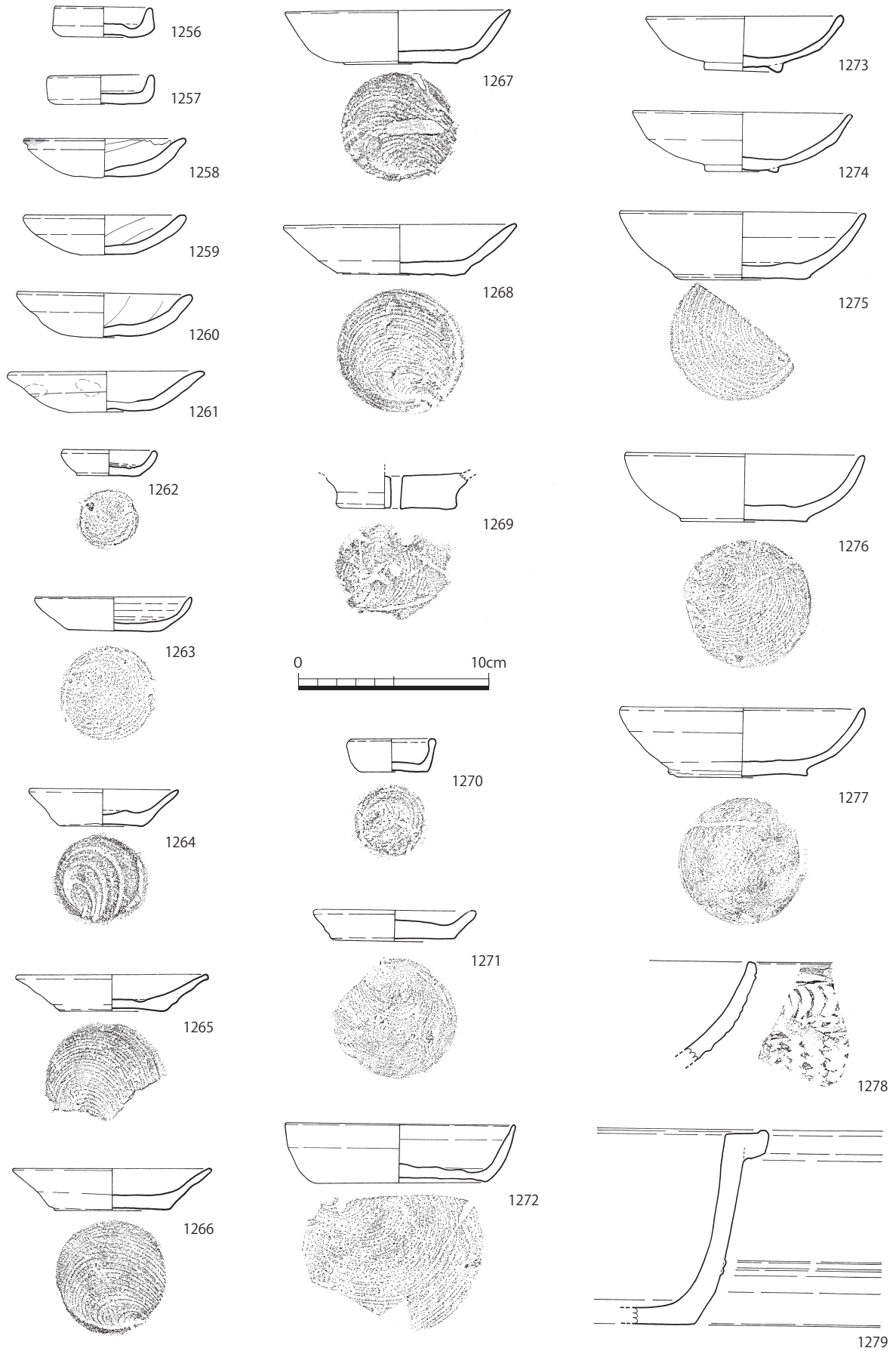
第179図 区域2・遺構に伴わない遺物(第1南北街路より東②)(1/3、1/2、1/1)



第180図 区域2・遺構に伴わない遺物(第1南北街路より東③)(1/1)

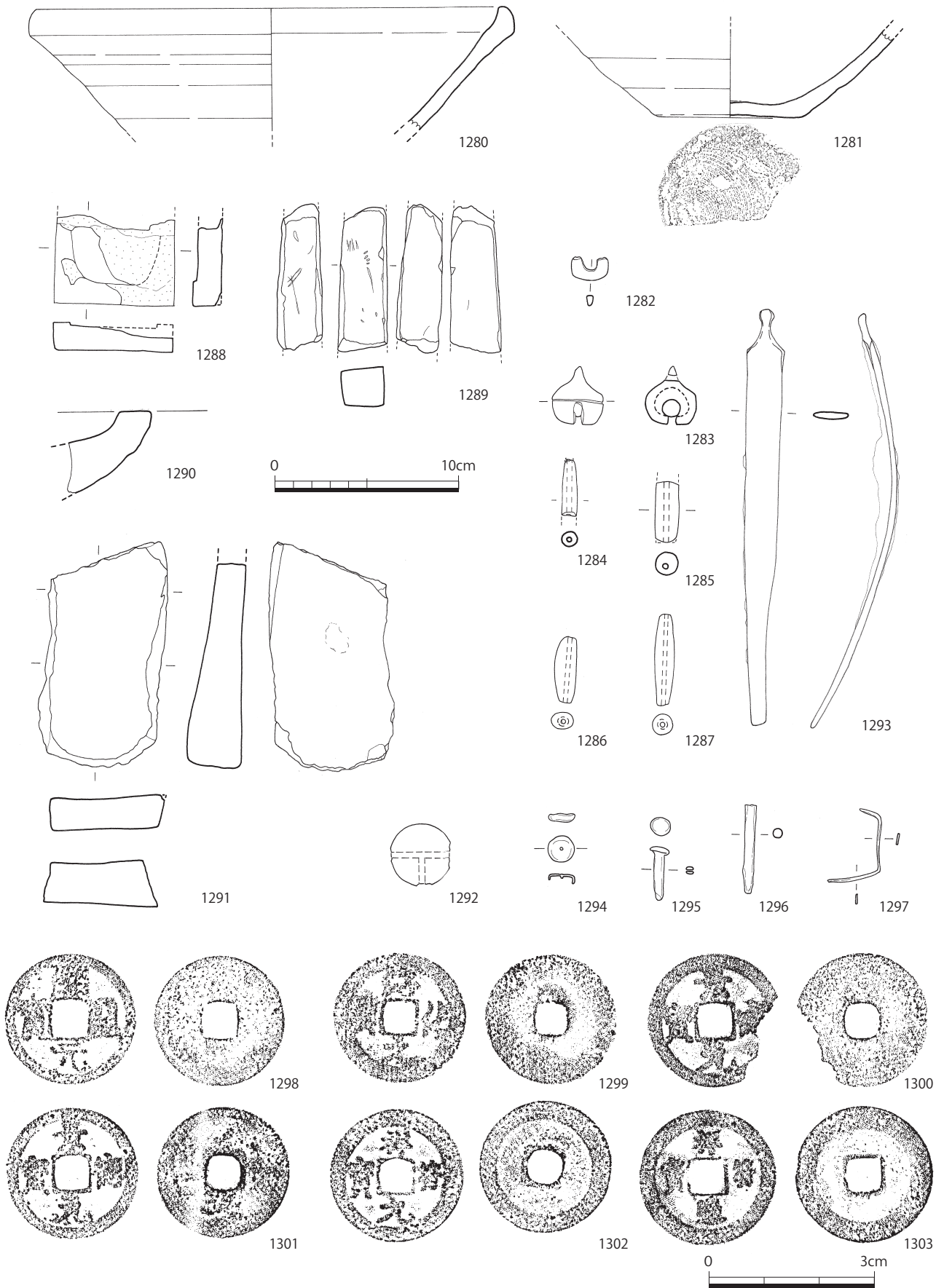


第181図 区域2・遺構に伴わない遺物(第1南北街路より西①)(1/3)



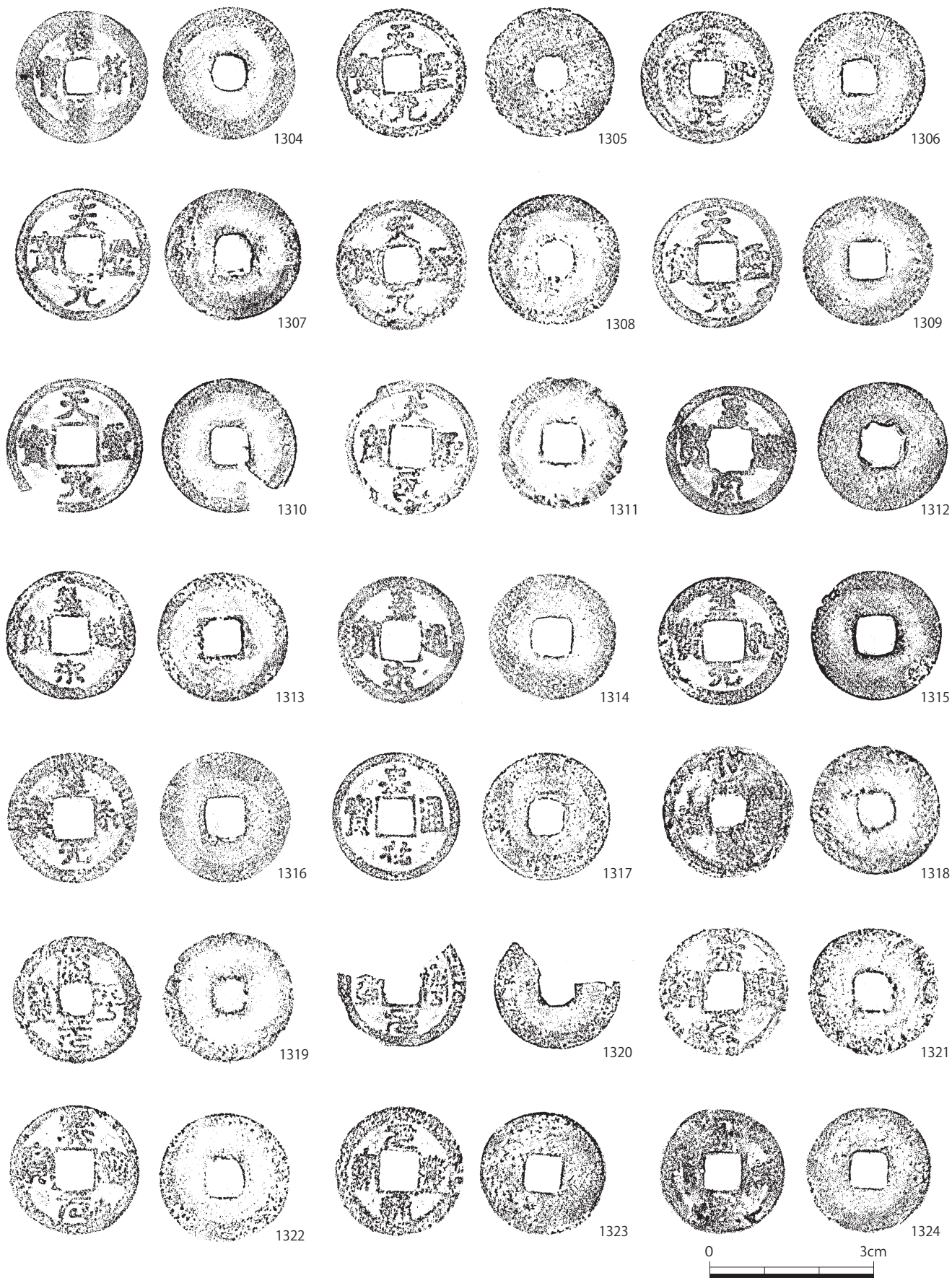
第182図 区域2・遺構に伴わない遺物(第1南北街路より西②)(1/3)



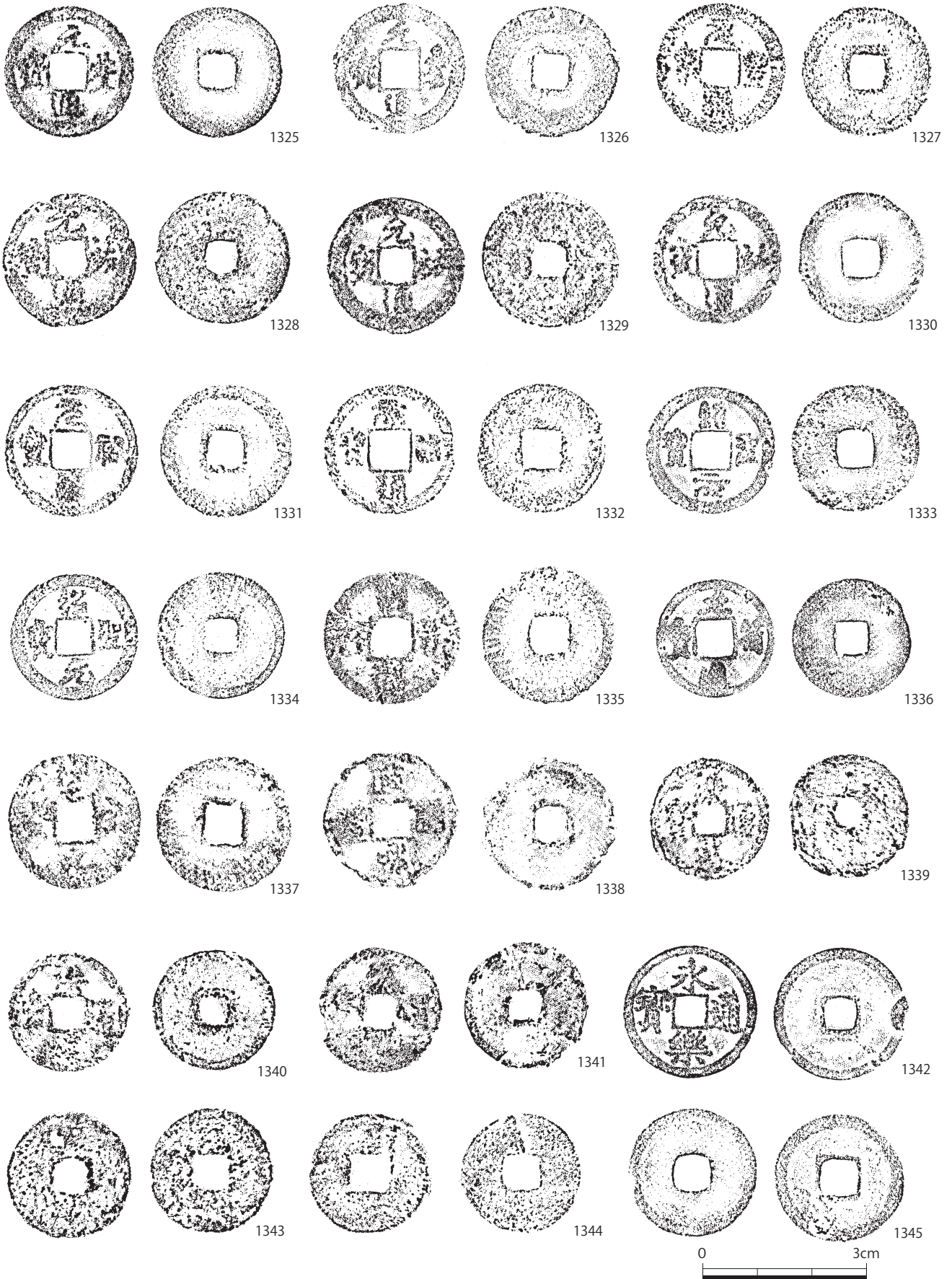


第183図 区域2・遺構に伴わない遺物(第1南北街路より西③)(1/3、1/1)



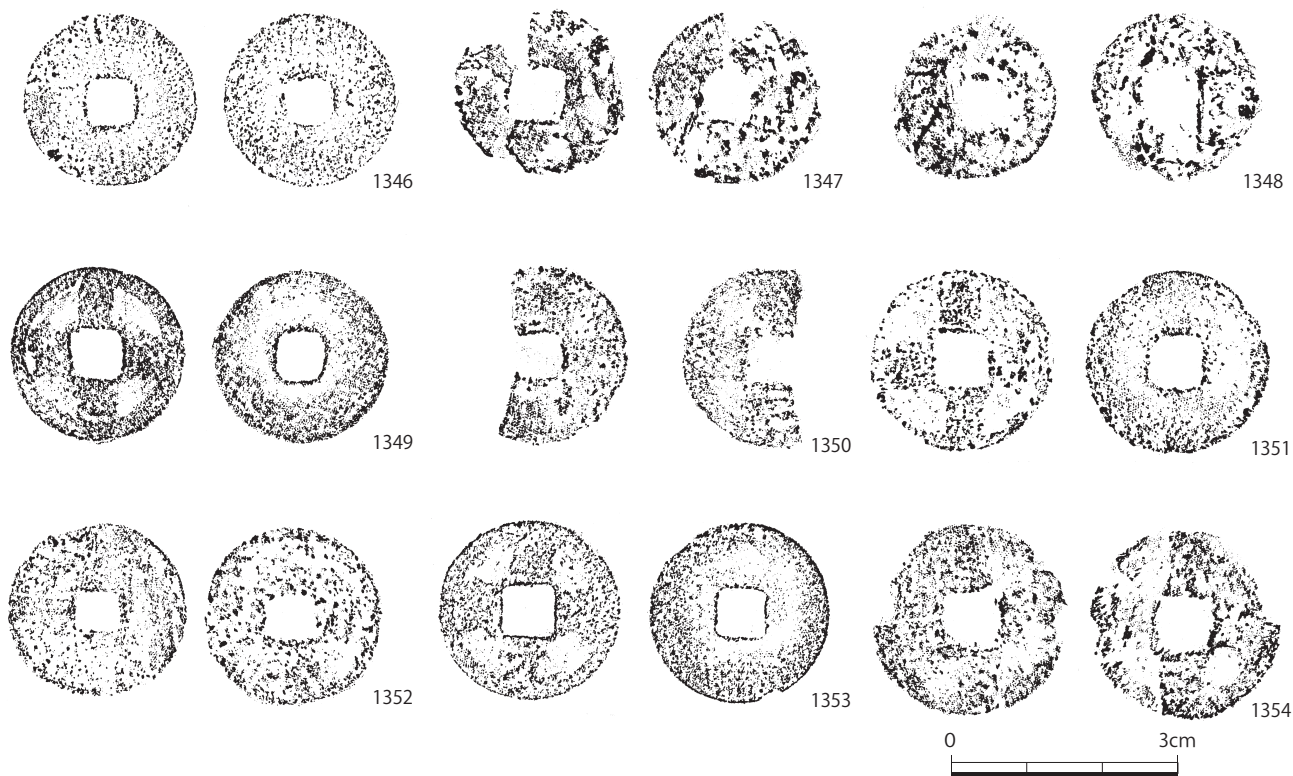


第184図 区域2・遺構に伴わない遺物(第1南北街路より西④)(1/1)



第185図 区域2・遺構に伴わない遺物(第1南北街路より西⑤)(1/1)





第186図 区域2・遺構に伴わない遺物(第1南北街路より西㊦)(1/1)

1278も土師質土器であるが、外面に特殊な叩き文様が認められる製品である。産地不明であるが、外国産のものである可能性も考慮しておきたい。1279は瓦質土器の箱火鉢で、上からみた平面形態が長方形を呈する製品である。1280・1281は東播系須恵器の鉢で、1281の底部には糸切り痕が認められる。1288は赤間石を使用した硯、1289は茶白下白の鏝部、1290・1291は砂岩系の石材を使用した砥石である。1282は土師質土器の灯芯押え、1285は土鈴の完存品、1284～1287は土鍾である。1292は水晶玉で、T字形の貫通孔を有する。数珠玉のうち、「親玉」あるいは「母珠」とされる部位で使用されたものである。K42区整地層の下位から出土したが、廃棄された時期を特定できる共伴遺物は認められなかった。1293～1297は金属製品で、1293が筭である他は用途不明である。1298～1354は銅銭で、この地区でも1343～1346のような無文銭銭が出土している。

水晶玉  
「親玉」  
または  
「母珠」

御所小路  
付近で出土  
した遺物

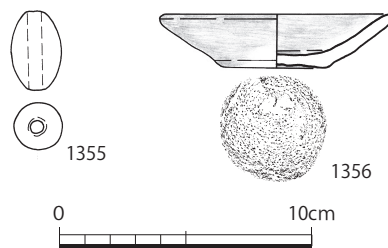
出土地点が  
特定できない  
遺物

第187図は、御所小路付近に相当するJ36・J37で出土した遺物である。

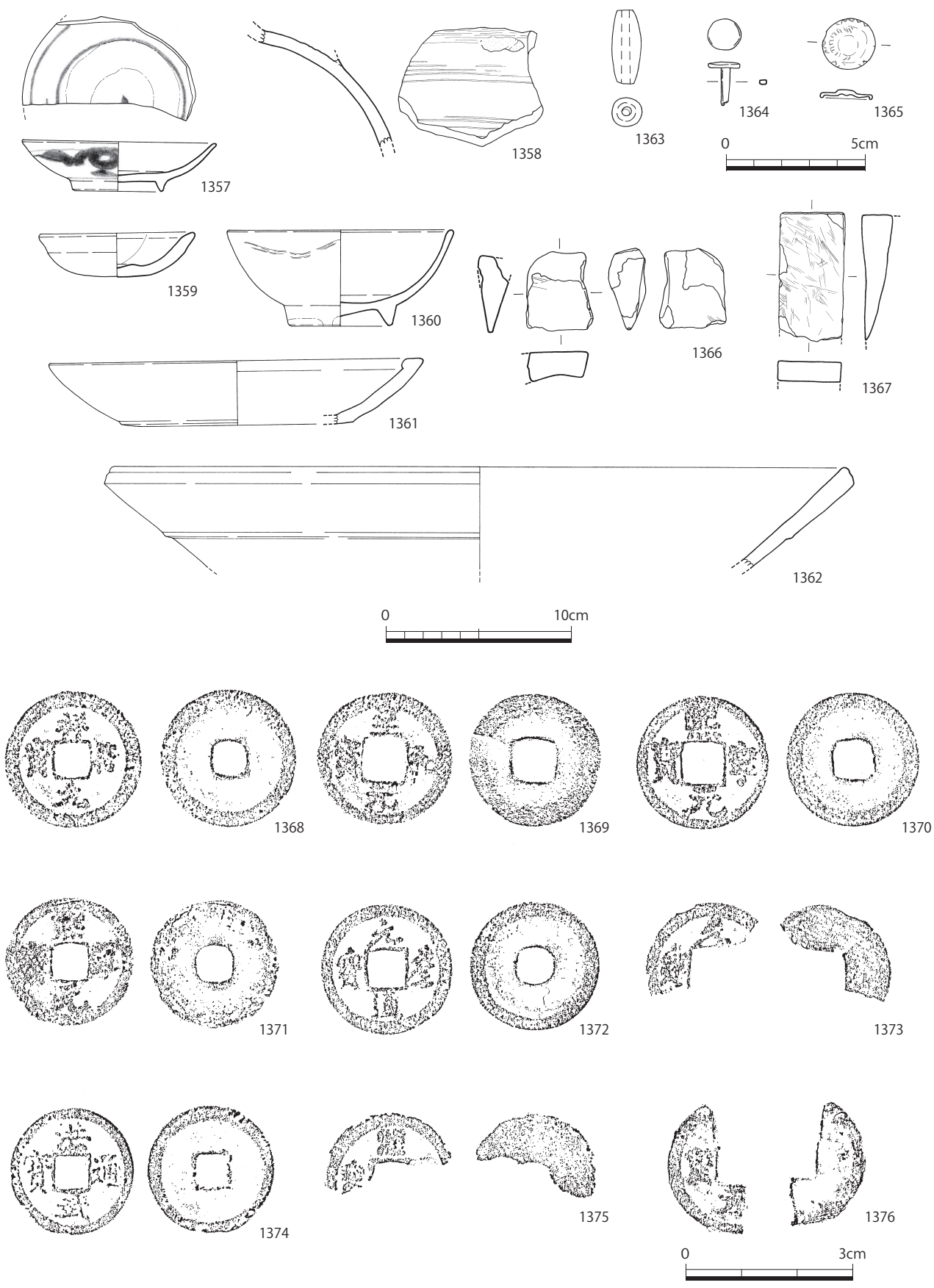
1355は管状土鍾、1356は在地系土師質土器の皿で、内外面にススの付着が認められる。

第188図は、廃土中や壁面などから出土したことから、出土地点が特定できない遺物である。

1357は漳州窯系青花皿で、見込みは蛇の目状に釉剥ぎとなる。1358はタイ産陶器の四耳壺で、肩部の破片である。残存部の上端に把手が剥落した痕跡がある。1359は京都系土師器の皿で、器壁が厚いことから、新しい様相をもつ資料である。1360～1362は瓦質土器で、1360は碗、1361・1362は鉢である。1363は管状土鍾の完存品。1364・1365は青銅製品で、1364は鉾であるが、1365は用途不明で、表面に文様が認められる。1366・1367は砂岩系の石材を使用した砥石である。1368～1376は銅銭で、個々の遺物の銭種などについては、遺物一覧表を参照されたい。



第187図 区域2・遺構に伴わない遺物(御所小路付近)(1/3)



第188図 区域2・遺構に伴わない遺物(その他) (1/3、1/2、1/1)

### 第3節 小結

#### (1) 区域1（御所小路・御所小路町）の遺構変遷

第189図は区域1（御所小路・御所小路町）における、時期ごとの遺構変遷図である。

15世紀後葉に比定できるものとしては、SD372A・SD372Bがある。両者はT字状をなす溝で、その遺構のあり方から屋敷地（武家屋敷？）の区画遺構であろう。特にSD372Bの土層観察からは、南側に土塁状の積土が存在した可能性が高く、当該時期の遺構群が武家地の関連遺構であると判断できる。

15世紀末葉から16世紀前葉の遺構としては、土坑・井戸・溝・不明遺構などがある。土坑とした遺構群のいくつかは墓である可能性がある。また、SK290・SK300は埋土に炭化物・灰が帯状に堆積する廃棄土坑で、出土したロクロ目土師器の大半が食器として使用されたものであった。また、埋土中からは少数ではあるが、被熱した魚類の骨（マダイ・タイ科）なども出土した。宴会片付け後の「カワラケ廃棄遺構」と解釈することができる。以上の、当該時期の遺構群のあり方は、町屋関連遺構のそれでは決してなく、武家地の遺構群とみなすのが妥当であろう。

16世紀前葉から中葉では、京都系土師器を大量廃棄した大型落ち込み遺構SX310とともに断面が「V」字状を呈する区画溝SD360の存在が注目される。これらも武家地に特徴的な遺構と考えるが、これについてはさらに後段で触れる予定である。

16世紀後葉から末葉にかけては、大きな変化が認められる。まず、調査区の北東隅付近に幅員約6m（3間）の東西道路「御所小路（SF400）」が構築される。そして、道路の南側には、道路と直行する方向で柱穴列が検出される。これらの柱穴列は、最近の発掘調査（例えば、大分市教委実施の第97次調査）の成果によると、建物敷地の区画遺構というよりは掘立柱建物そのものと解釈する見解が有力である。この見解が正しいかどうかはさらに検討が必要と考えるが、当面これらの柱穴列を「建物跡」を構成する遺構と考えておこう。建物跡の背後には、方形竪穴遺構が1基・井戸が3基・廃棄土坑が2基存在する。井戸はほぼ等間隔で配置されており、複数棟の建物跡に1基が対応する共同井戸である。以上の遺構の配置は、典型的な「町屋」としての遺構群のあり方を示している。つまり、15世紀後葉以降、武家地もしくは屋敷地として使用されていた空間に、当該時期に東西道路（御所小路）が新設され、「町屋」として使用されるといった大きな変化が起こっているのだ。この町屋は「府内古図」に見られる「御所小路町」に相当するものであろう。この町屋に居住する人々の生業までは明らかにしえなかったが、柱穴や整地層から、分銅が出土していることが注目される。この遺物も当該地点が町屋であったことを考古学的に傍証する遺物のひとつと考える。I34～I35区には天正14年（1586）の火災層や火災処理遺構もあり、島津侵攻時に一定の被害を受けていることもわかる。御所小路は島津侵攻後も再生され、江戸時代初期から前期頃まで継続使用されているようであるが、当該時期に相当する町屋遺構については、遺構面が削平されているためか、明確ではない。御所小路を形成する土層は他の道路遺構と比較して厚みが薄く、硬化面についてもその数が少ない。そのため、御所小路自体の形成時期が、他の道路遺構と比較して新しく、存続時期幅も短いものと考えられる。

なお、蛇足ではあるが、今回の調査ではI34～I35区を中心に管状土錘が一定量出土した。町屋の住民の中に投網を所有していたものがいたことを示している。

#### (2) 中世大友府内町跡第96次調査区と周辺の既調査区

第190～193図は、第96次調査区を中心に、その周辺の調査区を600分の1のスケールで提示したものである。これに拠って、前項でも触れた区域1（御所小路・御所小路町）の遺構群の展開をさらに詳しく追跡するとともに、区域2（第1南北街路・上市町ほか）の遺構の時期的な変遷

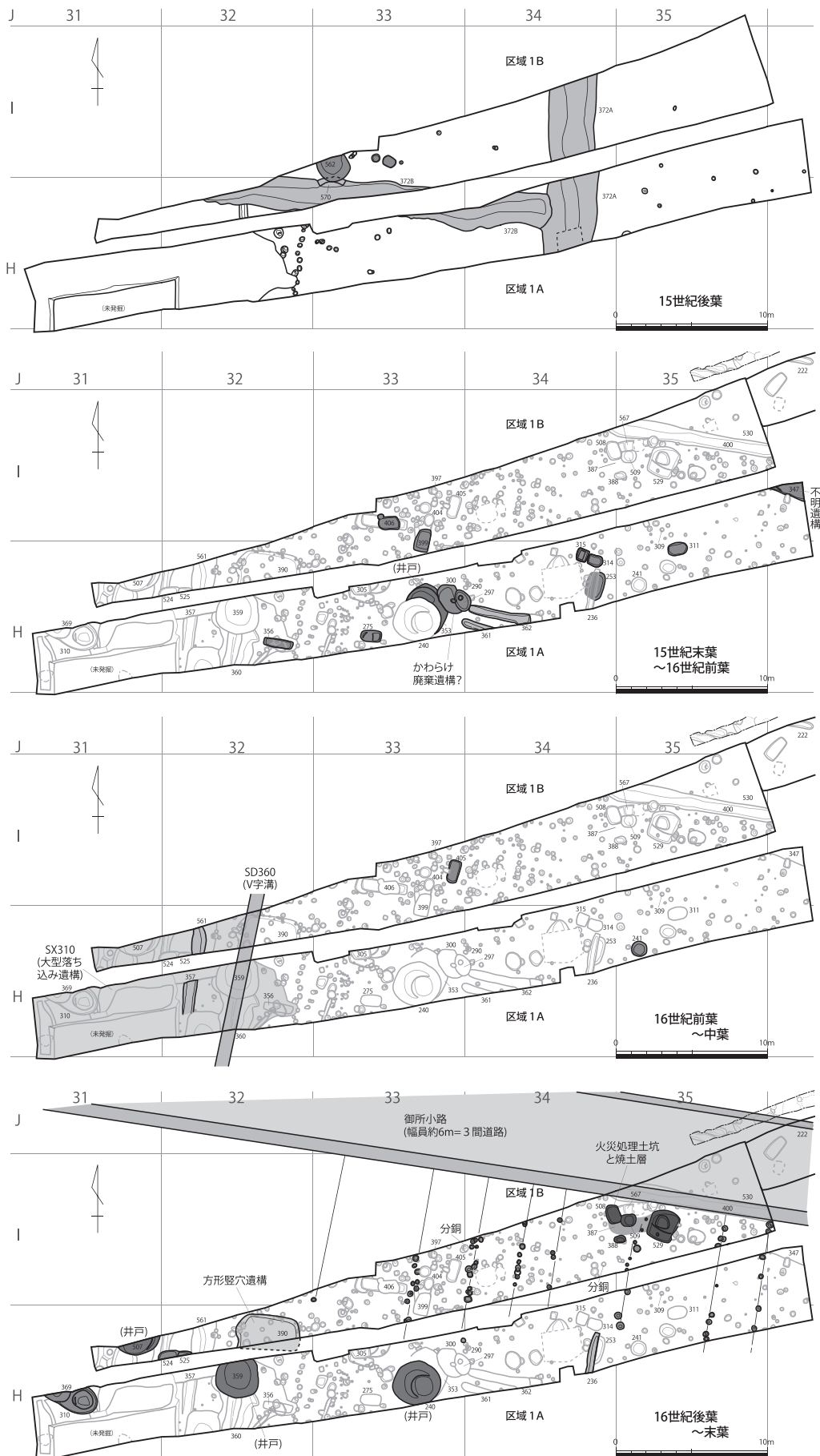
「御所小路」  
の構築

武家地から  
町屋へ

管状土錘



第3章 中世大友府内町跡第96次調査



第189図 区域1(御所小路町)の遺構変遷(1/400)

についても併せて検討してみたい。

**14・15世紀**（第190図） 区域2には吉備系土師器塚と在地系の土師質土器塚が共伴して出土する土坑SK233が検出されており、14世紀初頭から前葉に遡る遺構も存在するが、数量的には少数に留まる。調査区東側では14世紀後葉に比定される溝2条が併走するかたちで構築される。また、15世紀後葉には4条の溝が掘削され、そのうちの1基（SD590）は上面幅が4.8m深さが1.4mを測り、「空堀」といってよいほどの規模となる。ただし、SD590の東側はその約20mの地点に河岸段丘に伴う自然地形の大規模な落ちがあり、居住空間を広く取ることができないため、その性格については今後の課題となる。さらに、区域2の西側でも東西方向の堀（SD220）が検出されている。

連立する  
方形区画

15世紀後葉の溝や堀は第96次調査のほかにも、第7次・第13次の各調査区で検出されており、これらの溝の全体像はなお不明であるものの、それぞれの溝で囲まれた空間が屋敷地（武家地）である可能性が高い。第190図右上の「大友館」との関係で見ると、大友館の東側に「連立する方形区画」が存在し、それぞれが屋敷地（武家地）として使用されていた可能性が考えられよう。また、第96次調査区東側で検出されたSD590など、南北方向の溝や堀の方向は、後に構築される第1南北街路の主軸方位と一致していることも指摘しておきたい。

墓

**15世紀末葉から16世紀前葉**（第191図） 区域1で検出された土坑の一部に、墓である可能性が高いものが存在することについては、すでに記した。このことと関連して、第96次調査区の約20m南側に位置する第17次調査で、明確な墓が2基検出されている。17次ST135は円形の堀形、ST478は長方形の堀形をもつ土坑で、いずれも人骨が遺存しており、後者からはロクロ目土師器も出土した。特に、ST478は屋敷墓の性格を有する遺構との評価がなされている。

この時期、溝や堀などの区画遺構の存在は不明瞭であるが、第96次調査区域1や第7次調査西側地点については、前段階に引き続いて、この付近が武家地もしくは屋敷地として使用されたと解釈したい。なお、この時期には版築状の積土工法による第1南北街路が構築されていた可能性が高く、道路の周辺には町屋関連の遺構が存在した可能性が考えられる。今回の調査では明確にできなかったが、今後の課題としておきたい。

L字形の  
堀に囲まれ  
た屋敷地

京都系  
土師器の  
廃棄空間

**16世紀前葉から中葉**（第192図） 区域1で検出された京都系土師器の大量廃棄遺構SX310が構築された時期である。これらの京都系土師器は大型の落ち込み遺構に廃棄されていたが、このような廃棄空間は周辺の第79次・第67次・第40次でも確認されている。また、第13次調査では堀の北側の整地層から大量の京都系土師器が検出されている。

さらに、同時期の遺構として注目しておきたいものに、第9次・第16次調査で検出されたL字形の堀がある。これら2つのL字形の堀に囲まれた空間は南北約42m、東西約30mで、この範囲が屋敷地（武家地）として使用されていたことは間違いないであろう。京都系土師器の廃棄空間は、この堀に囲まれた空間の内部に位置することになる。当該地点は大友館に隣接する地点に位置していることから、屋敷の主は大友家の有力家臣であったと考えたいところである。

第96次・第17次調査で検出された断面「V」字形の溝は同一遺構で、L字形の堀とも同時期であるため、両者とも屋敷の区画遺構として、セットで機能したものを考えられる。

紙幅の関係で詳述する余裕がないが、屋敷内部またはその周辺と考えられる第67次・第78次調査では、京都系土師器数枚を壁際に貼り付けるように廃棄または安置した土坑や小鍛冶関連の遺構、建造物の垂木先に用いたと思われる鍍金された装飾金具などもあり、町屋とは異なる遺構・遺物の状況を示している。

**16世紀後葉から末葉**（第193図） 区域1（御所小路町）については、御所小路が新たに構築され、その南側に町屋関連の遺構が展開していることをすでに記した。区域2（上市町）の第2～3面で

も、第1南北街路と町屋に関連する遺構群が検出されている。

第1南北街路  
先ず、第1南北街路は幅員8～9m前後で、版築状の積土工法によって構築されている。第1南北街路がこのような工法によって造られた初源の時期は、今回の調査では明確にできなかったが、街路周辺の遺構の状況などから判断して、15世紀末葉頃まで遡る可能性が高い。道路を形成する堆積層は厚く、10数面にわたる硬化面が確認できる。

第1南北街路の東西約15～20mの範囲には列状に並ぶ柱穴群が検出される。これについては、区域1で述べたように、建物敷地の区画遺構または掘立柱建物そのものと考えられる。また、礎石や建物遺構に伴う掘り込み(SX033)もある。

廃棄土坑  
建物跡の背後には、廃棄土坑が存在する。この中で特にSK145が注目され、内部からキサゴ類を主体とする大量の貝類とともに、魚骨などが出土した。上市町の住民が、穴を掘って廃棄した食物残滓であると断定できる。また、井戸は今のところ検出できていないが、未調査の地点に存在するのであろう。第96次調査区の南側約35mの地点に位置する第7次調査(清忠寺町)では、96次調査と同様な建物跡遺構の背後から凝灰岩の板石で構築した井戸が検出されている。

町屋の裏手の状況  
第96次および第16次調査の中央部付近では、検出される遺構数が極端に少なくなる傾向が認められる。これは当該地点が上市町や御所小路町の裏手に位置することから生じた現象であろう。

土鈴  
なお、上市町の町屋関連遺構が集中する地点からは、「土鈴」の出土が注意される。土鈴は第96次調査のほか、北側に隣接する調査区である第16次調査でも出土事例が認められる。「土鈴」には様々な用途が想定されようが、例えば家屋の入口の柱などに付設したり、吊したりして、「魔除け」の用具として使用された民俗事例があることに着目したい。第96次調査の出土品の中には完存品(第183図1285)もある。

さて、この16世紀後葉から末葉にかけての状況が、まさに「府内古図」に描かれた世界に相当し、豊後府内の最盛期に位置づけられる段階である。図示した範囲で見ると、当該時期には家臣団の集住はなく、武家地と思われる空間も存在しないといつてよい。大友館の門前に展開するのは、前段階までの有力家臣の屋敷ではなく、商工業者の居住地である「町屋」なのである。

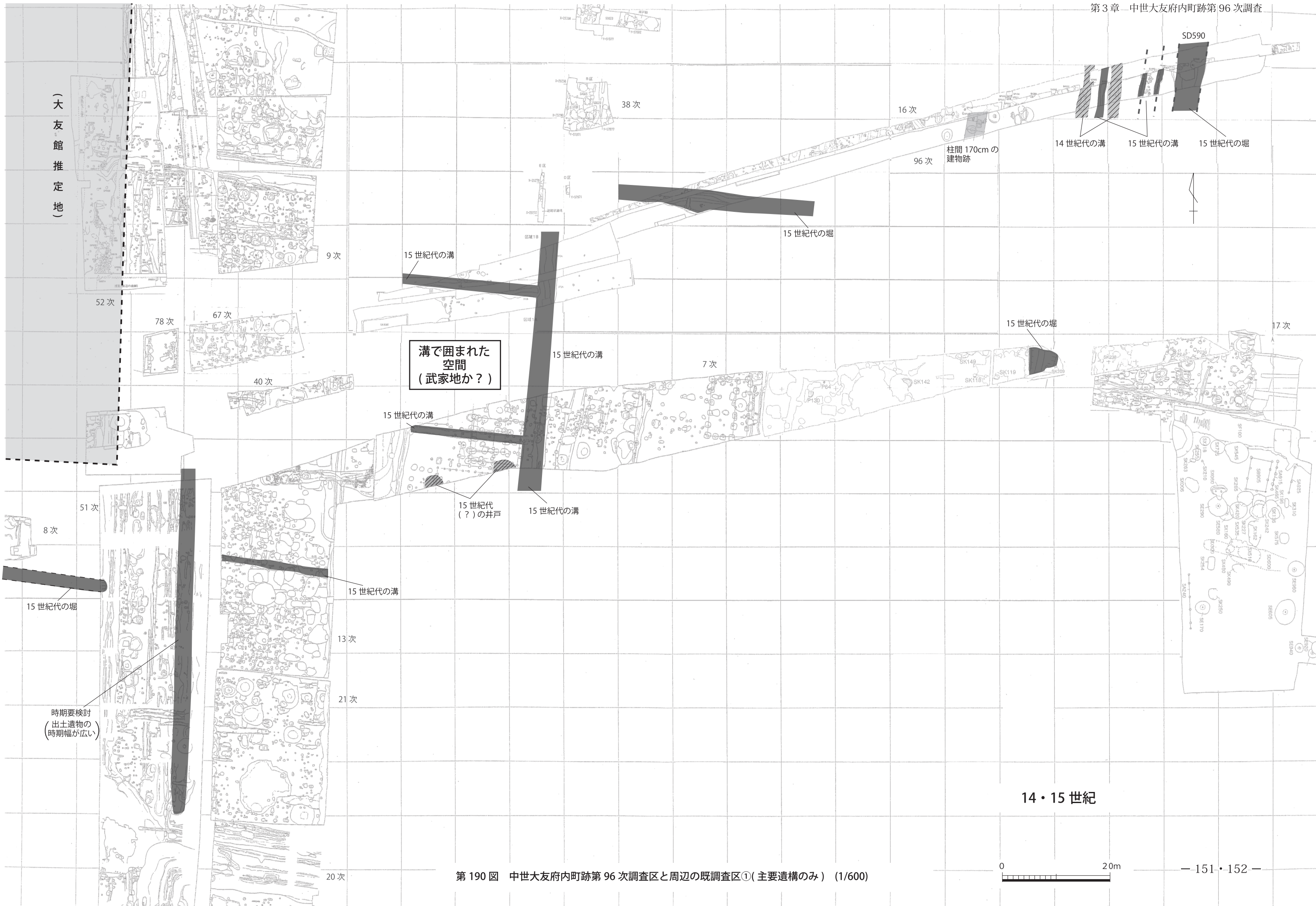
近年の研究<sup>(註)</sup>では、大友宗麟・義統は家臣団の反乱を契機に、弘治2年(1573)以降、政治拠点を府内から臼杵に遷移させ、宗麟・義統とも主に臼杵を居所としていることが指摘されている。ただ、耳川敗戦後の天正7年(1579)に勃発した田原親貫の乱に対応するため、大友義統が政治的な拠点を再び臼杵から府内に戻していたことも確認されている。しかしながら、義統が居所を府内に戻した時期は、結果的には天正6年(1579)から天正11・12年(1582・1583)の短期間に留まっている。豊後府内で発見される遺構・遺物の大半はこの時期に属し、この義統の府内帰遷を契機に豊後府内の再整備が行われた状況が、第193図の遺構群に相当するのであろう。第96次調査との関連でいえば、御所小路が新たに構築され、それまで武家地であった領域が町屋として再編成される直接の契機がここにあったと考えられる。

以上のような状況は、これまでに蓄積された調査成果により、豊後府内の都市計画の規格やグラウンドプランにまで言及できる可能性が考えられる。しかしながら、それを行うためには公表された報告書などの調査データの読み込みがさらに必要となるため、これらの課題については他日を期したいと思う。

大友義統の府内帰遷

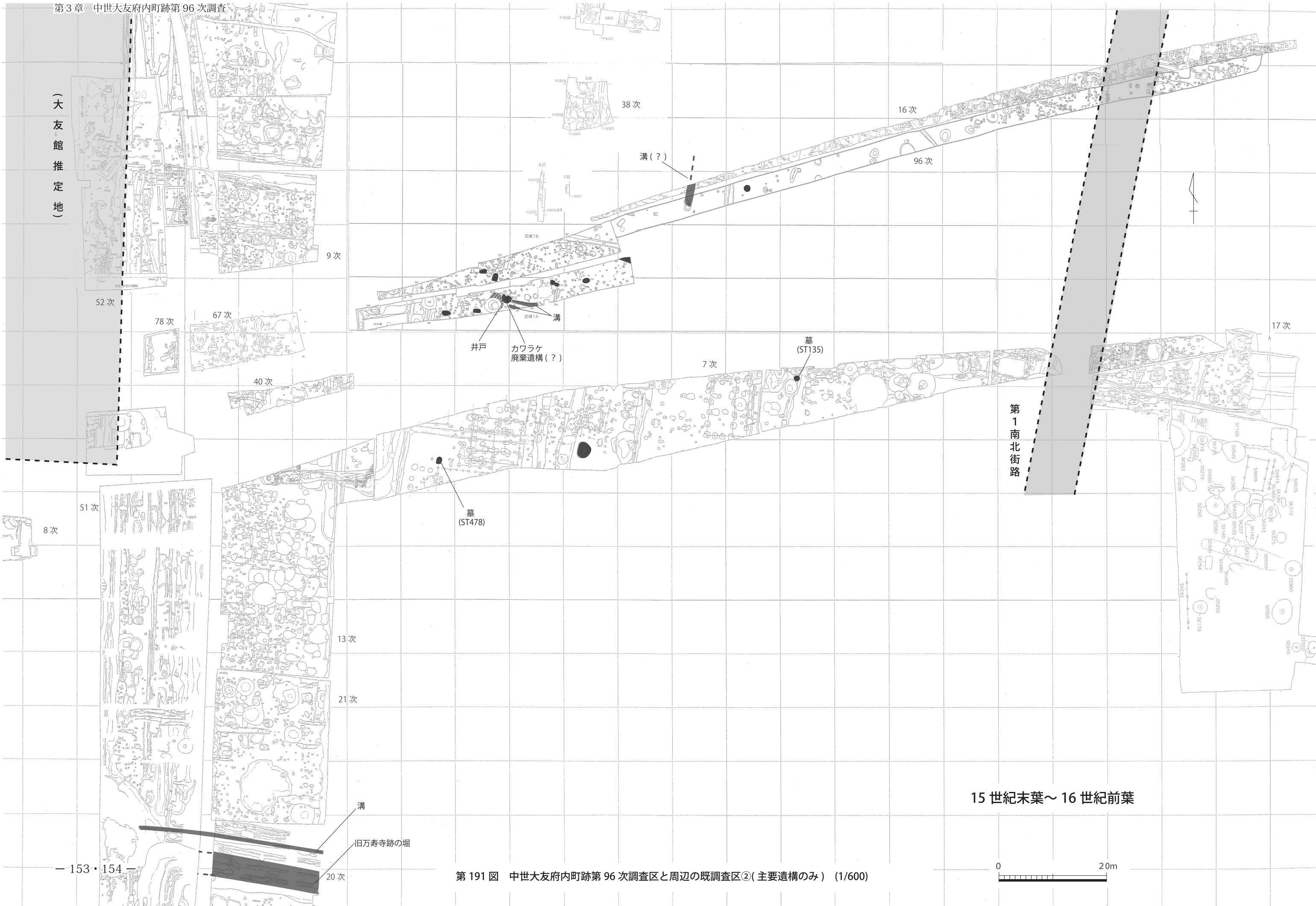
(註) 八木直樹「十六世紀後半における豊後府内・臼杵と大友氏一城下町移転に関する再検討」(『ヒストリア』204 2007年)  
八木直樹「戦国大名城下町の移転と大名権力—豊後大友氏を事例として—」(『大分大学教育福祉科学部研究紀要』34(1))  
玉永光洋「戦国都市豊後府内—空間構造と府内再移転を中心にして—」(『臼杵史談』第103号 2013年)





第190図 中世大友府内町跡第96次調査区と周辺の既調査区①(主要遺構のみ) (1/600)



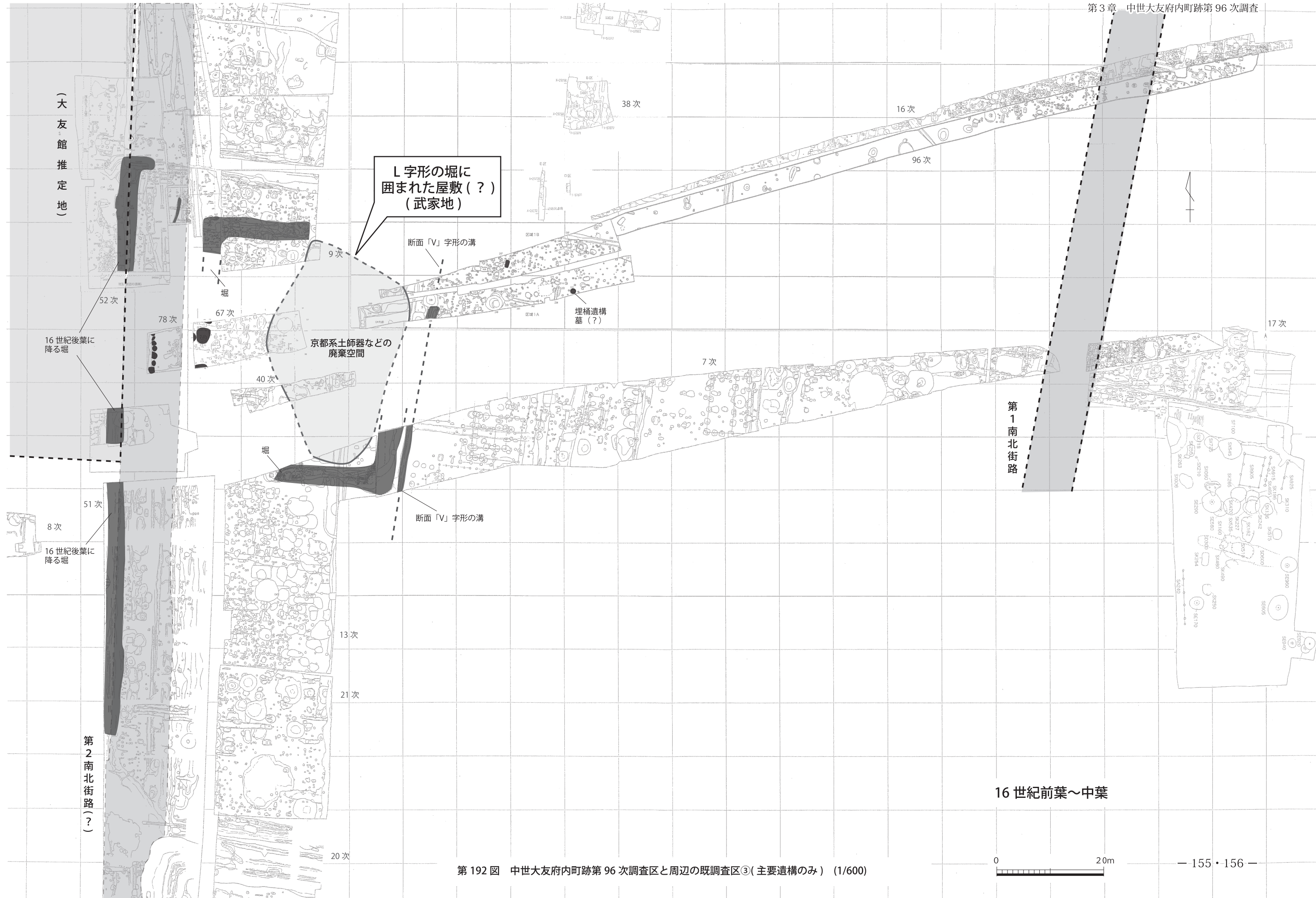


第191図 中世大友府内町跡第96次調査区と周辺の既調査区②(主要遺構のみ) (1/600)

15世紀末葉～16世紀前葉

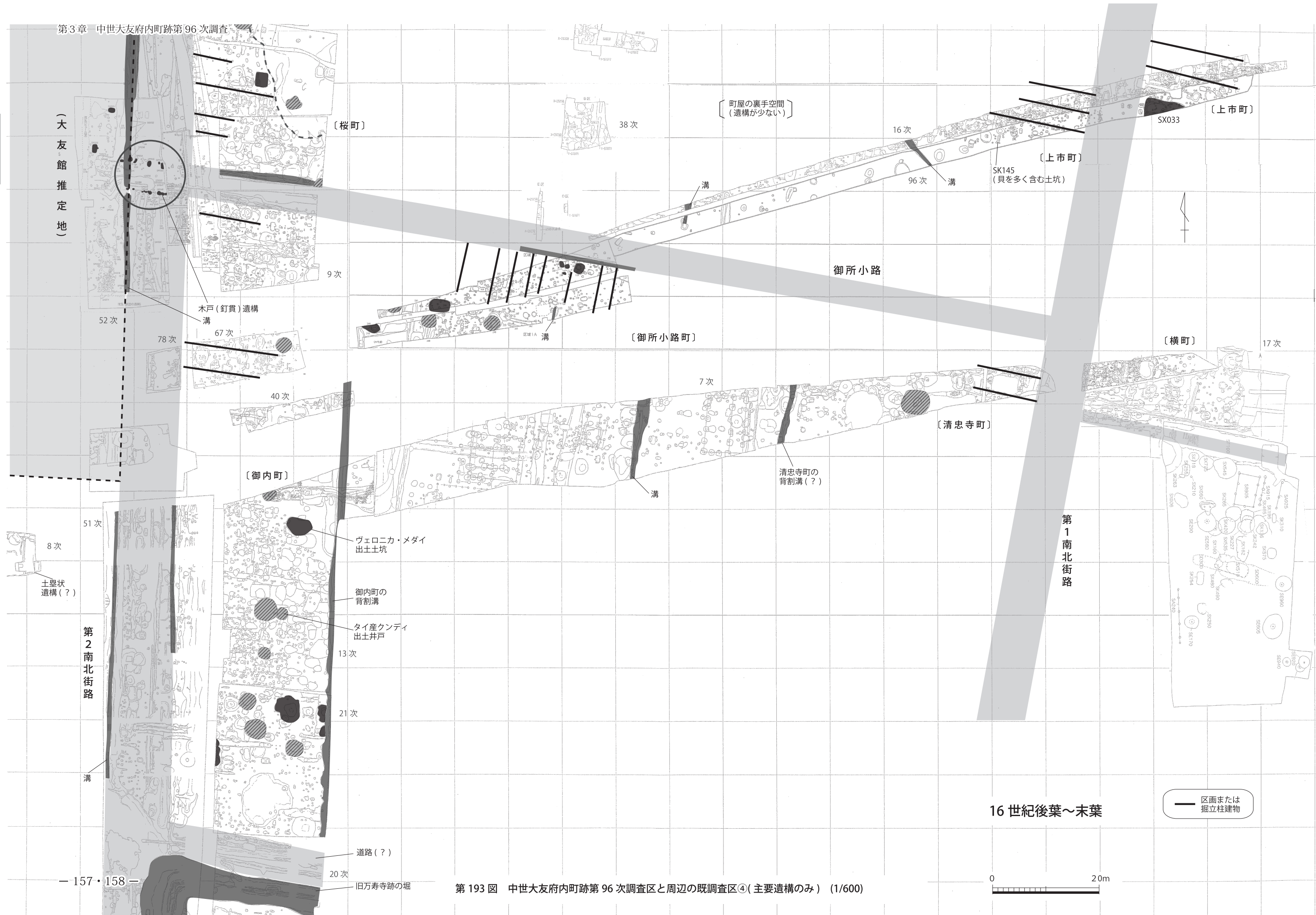






第192図 中世大友府内町跡第96次調査区と周辺の既調査区③(主要遺構のみ) (1/600)





第193図 中世大友府内町跡第96次調査区と周辺の既調査区④(主要遺構のみ) (1/600)